

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第742集

ちからもち

力持遺跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路(普代～久慈)建設事業関連遺跡発掘調査

2024

(公財)岩手県文化振興事業団

力持遺跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路(普代～久慈)建設事業関連遺跡発掘調査



調査区(高架橋下)とその周辺(東から)



D1～D2区全景(南から)



SID4土器取り上げ状況(南から)



D区作業風景(北から)

序

岩手県では旧石器時代をはじめとする一万箇所以上の遺跡の所在が知られ、地中には貴重な埋蔵文化財が豊富にのこされています。地域の風土が生み出したこれらの遺産は、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料であるとともに、岩手県民のみならず国民的な財産といえます。現代に生きる私たちが、これらの埋蔵文化財を将来にわたって大切に保存し、その活用に力を注ぐべきであることは言うまでもありません。

一方、豊かな地域づくりのためには社会資本の整備・充実が必要不可欠であることもまた事実です。故郷の大地と共にある埋蔵文化財の保護と開発行為との調和は、現代社会に暮らしを営む私たちに与えられた大きな課題といえましょう。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導のもとに、開発事業によってやむを得ず破壊・消滅の難を受ける遺跡の緊急発掘調査を実施し、調査成果を記録化して保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、三陸沿岸道路建設に伴い実施した、普代村力持遺跡の発掘調査成果を収録したものです。このたびの調査では、縄文時代を通して数千年の長きにわたり、当地が繰り返し集落を営む場とされてきたことが改めて確認されました。

本書が学術研究や教育活動などに広く活用されることにより、埋蔵文化財への理解と関心が一層深められ、ひいては埋蔵文化財保護思想の涵養に資するものとなれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました普代村をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

令和6年3月

公益財団法人岩手県文化振興事業団
理事長 石田 知子

例 言

- 1 本書は岩手県下閉伊郡普代村第16地割天押坂地内に所在する力持遺跡の発掘調査成果を収録したものである。
- 2 収録遺跡の発掘調査は、三陸沿岸道路(普代～久慈)建設事業に伴い、岩手県教育委員会の調整を経て、三陸国道事務所の委託を受けた公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが、記録保存を目的として実施したものである。
- 3 岩手県遺跡台帳における遺跡の登録番号はJG92-0137、調査略号はTM-21である。
- 4 野外調査期間・調査面積・担当者は次のとおりである
調査期間：令和3年4月6日～8月3日 調査面積：178㎡
担当者：村上 拓・川又 晋
- 5 室内整理期間・担当者は次のとおりである。
整理期間：令和3年5月1日～令和4年3月31日
担当者：村上 拓・川又 晋
- 6 本文の執筆は、Ⅰを三陸国道事務所、Ⅱ-3・Ⅳ-3-(2)を川又、その他を村上が担当した。
- 7 本書中の座標値には、平面直角座標第X系(世界測地系)を用いた。
- 8 各種委託業務は次の機関等に依頼した(順不同)。
基準点測量：株式会社ダイヤ
石質鑑定：花崗岩研究会
放射性炭素年代測定：株式会社加速器分析研究所
火山灰分析：バリノ・サーヴェイ株式会社
- 9 野外調査では、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課、普代村教育委員会の協力を得た。
- 10 出土土器の分類及び観察表作成に際しては、高木 晃氏(岩手県立博物館)の全面的な協力を得た。
- 11 本遺跡の出土遺物及び諸記録類は、岩手県立埋蔵文化財センターで保管している。
- 12 これまでに、調査成果の一部を現地説明会資料、調査概報等において公表しているが、本書の記載内容を正式なものとする。

目 次

I	調査に至る経緯	1
II	立地と環境	1
	1 遺跡の位置と地形的環境	1
	2 基本層序	1
	3 周辺の遺跡	4
III	野外調査と室内整理	9
	1 野外調査	9
	2 室内整理	14
IV	調査成果	15
	1 概要	15
	2 遺構	46
	(1) 竪穴住居跡	46
	(2) 炉跡	72
	(3) 竪穴住居周溝	78
	(4) 土坑	80
	(5) 配石遺構	90
	(6) その他	92
	3 遺物	93
	(1) 土器	93
	(2) 土製品	93
	(3) 石器・石製品	94
V	総括	150
附編	自然科学分析	155
	1 放射性炭素年代測定(AMS測定)	155
	2 火山灰分析	163
	報告書抄録	245

表 目 次

第1表	普代村の遺跡一覧	5	第4表	出土土器重量表	93
第2表	力持遺跡2021 遺構一覧	16	第5表	土器観察表	97
第3表	柱穴一覧	17	第6表	土製品観察表	108
			第7表	石器・石製品観察表	109

図 版 目 次

第1図	遺跡の位置	2	第32図	S I D 4 (2)	65
第2図	周辺の地形	3	第33図	S I D 6 竪穴住居跡	66
第3図	周辺の遺跡	6	第34図	S I D 7・D14・D19竪穴住居跡(1)	67
第4図	調査区位置図	10	第35図	S I D 7・D14・D19竪穴住居跡(2)	68
第5図	調査区割図	11	第36図	S I D 8・D 9 竪穴住居跡	69
第6図	遺構配置全体図(A区・B区)	21	第37図	S I D 8～D10竪穴住居跡	70
第7図	遺構配置全体図(C区・D区)	22	第38図	S I D 11～D13竪穴住居跡	71
第8図	A区分割図(1)	23	第39図	S L D 1・D 2 炉跡	74
第9図	A区分割図(2)	24	第40図	S L D 3・D 4 炉跡	75
第10図	A区分割図(3)	25	第41図	S L D 5・D 6 炉跡	76
第11図	B区	26	第42図	S L D 7・D 8 炉跡	77
第12図	C区西壁断面全体図	28	第43図	S K D 1・D 2 土坑	85
第13図	C区分割図(1)	29	第44図	S K D 3・D 4 土坑	86
第14図	C区分割図(2)	30	第45図	S K D 5・D 7 土坑(1)	87
第15図	C区分割図(3)	31	第46図	S K D 5・D 7 土坑(2)、S K D 6 土坑	88
第16図	C区分割図(4)	32	第47図	S K D 8～D10土坑	89
第17図	D区西壁断面全体図	33	第48図	配石D 1・D 2	91
第18図	D区東壁断面全体図	34	第49図	土器(1)	115
第19図	D区分割図(1)	35	第50図	土器(2)	116
第20図	D区分割図(2)	36	第51図	土器(3)	117
第21図	D区分割図(3)	37	第52図	土器(4)	118
第22図	D区分割図(4)	38	第53図	土器(5)	119
第23図	D区分割図(5)	41	第54図	土器(6)	120
第24図	D区分割図(6)	42	第55図	土器(7)	121
第25図	D区分割図(7)	43	第56図	土器(8)	122
第26図	S I A 1 竪穴住居跡・S L A 1 炉跡	59	第57図	土器(9)	123
第27図	S I B 1 竪穴住居跡	60	第58図	土器(10)	124
第28図	S I C 1 竪穴住居跡・配石C 1	61	第59図	土器(11)	125
第29図	S I D 1・D18竪穴住居跡	62	第60図	土器(12)	126
第30図	S I D 2・D 3・D 5・D16竪穴住居跡	63	第61図	土器(13)	127
第31図	S I D 4 (1)・D17竪穴住居跡	64	第62図	土器(14)	128

第63図 土器(15).....	129	第75図 土器(27).....	141
第64図 土器(16).....	130	第76図 土製品.....	142
第65図 土器(17).....	131	第77図 石器・石製品(1).....	143
第66図 土器(18).....	132	第78図 石器・石製品(2).....	144
第67図 土器(19).....	133	第79図 石器・石製品(3).....	145
第68図 土器(20).....	134	第80図 石器・石製品(4).....	146
第69図 土器(21).....	135	第81図 石器・石製品(5).....	147
第70図 土器(22).....	136	第82図 石器・石製品(6).....	148
第71図 土器(23).....	137	第83図 石器・石製品(7).....	149
第72図 土器(24).....	138	第84図 力持遺跡D区遺構先後関係図.....	151
第73図 土器(25).....	139	第85図 力持遺跡D区遺構変遷図(1).....	152
第74図 土器(26).....	140	第86図 力持遺跡D区遺構変遷図(2).....	153

写真図版目次

写真図版1 空撮写真(1).....	173	写真図版24 S I D 3・D 5 堅穴住居跡.....	196
写真図版2 空撮写真(2).....	174	写真図版25 S I D 4・D 17 堅穴住居跡.....	197
写真図版3 空撮写真(3).....	175	写真図版26 S I D 6 堅穴住居跡.....	198
写真図版4 空撮写真(4).....	176	写真図版27 S I D 7 堅穴住居跡(1).....	199
写真図版5 空撮写真(5).....	177	写真図版28 S I D 7 堅穴住居跡(2).....	200
写真図版6 空撮写真(6).....	178	写真図版29 S I D 8・D 9 堅穴住居跡.....	201
写真図版7 調査前現況.....	179	写真図版30 S I D 10～D 13 堅穴住居跡.....	202
写真図版8 A区.....	180	写真図版31 S I D 14・D 18 堅穴住居跡.....	203
写真図版9 B区.....	181	写真図版32 S I D 15 堅穴住居跡(配石 D 2).....	204
写真図版10 C区.....	182	写真図版33 S I D 16 堅穴住居跡.....	205
写真図版11 D区(西壁断面1).....	183	写真図版34 S I D 19 堅穴住居跡.....	206
写真図版12 D区(西壁断面2).....	184	写真図版35 S L D 2～D 4 炉跡.....	207
写真図版13 D区(西壁断面3).....	185	写真図版36 S L D 5～D 8 炉跡.....	208
写真図版14 D区(西壁断面4).....	186	写真図版37 周溝 D 1～D 3.....	209
写真図版15 D区(東壁断面1).....	187	写真図版38 S K D 1～D 4 土坑.....	210
写真図版16 D区(東壁断面2).....	188	写真図版39 S K D 5～D 8 土坑.....	211
写真図版17 D区(東壁断面3).....	189	写真図版40 S K D 9・D 10 土坑、 配石 C 1・D 1.....	212
写真図版18 D区(横断面1).....	190	写真図版41 D区柱穴断面(1).....	213
写真図版19 D区(横断面2).....	191	写真図版42 D区柱穴断面(2).....	214
写真図版20 D区(横断面3).....	192	写真図版43 D区柱穴断面(3).....	215
写真図版21 S I A 1 (S L A 1) ・C 1 堅穴住居跡.....	193	写真図版44 遺構外遺物出土状況ほか(1).....	216
写真図版22 S I D 1 堅穴住居跡.....	194	写真図版45 遺構外遺物出土状況ほか(2).....	217
写真図版23 S I D 2 堅穴住居跡.....	195	写真図版46 遺物出土状況ほか(3)・S X D 1.....	218

写真図版47	土器(1)	219	写真図版60	土器(14)	232
写真図版48	土器(2)	220	写真図版61	土器(15)	233
写真図版49	土器(3)	221	写真図版62	土器(16)	234
写真図版50	土器(4)	222	写真図版63	土器(17)	235
写真図版51	土器(5)	223	写真図版64	土器(18)	236
写真図版52	土器(6)	224	写真図版65	土器(19)・土製品	237
写真図版53	土器(7)	225	写真図版66	石器(1)	238
写真図版54	土器(8)	226	写真図版67	石器(2)	239
写真図版55	土器(9)	227	写真図版68	石器(3)	240
写真図版56	土器(10)	228	写真図版69	石器(4)	241
写真図版57	土器(11)	229	写真図版70	石器(5)・石製品	242
写真図版58	土器(12)	230	写真図版71	SXD1出土剥片	243
写真図版59	土器(13)	231			

I 調査に至る経緯

力持遺跡は、一般国道45号三陸沿岸道路事業(普代～久慈)の事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。今回の調査範囲においては立入防止柵・境界杭・側溝の設置に伴い、調査を実施することとなった。

三陸沿岸道路は、宮城、岩手、青森の各県の太平洋沿岸を結ぶ延長359kmの自動車専用道路で、東日本大震災からの早期復興に向けたリーディングプロジェクトとして、平成23年度にこれまで事業化されていた区間も含め、全線事業化された復興道路である。

当該遺跡に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、令和3年1月25日付け国東整陸一調第34号により、三陸国道事務所長から岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課総括課長あてに試掘調査を依頼し、令和3年2月2日に試掘調査を行い、令和3年2月4日付け教生第1562号により、工事に先立って発掘調査が必要と回答がなされたものである。

その結果を踏まえて、岩手県教育委員会と協議を行い、公益財団法人岩手県文化振興事業団と委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

(国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所)

II 立地と環境

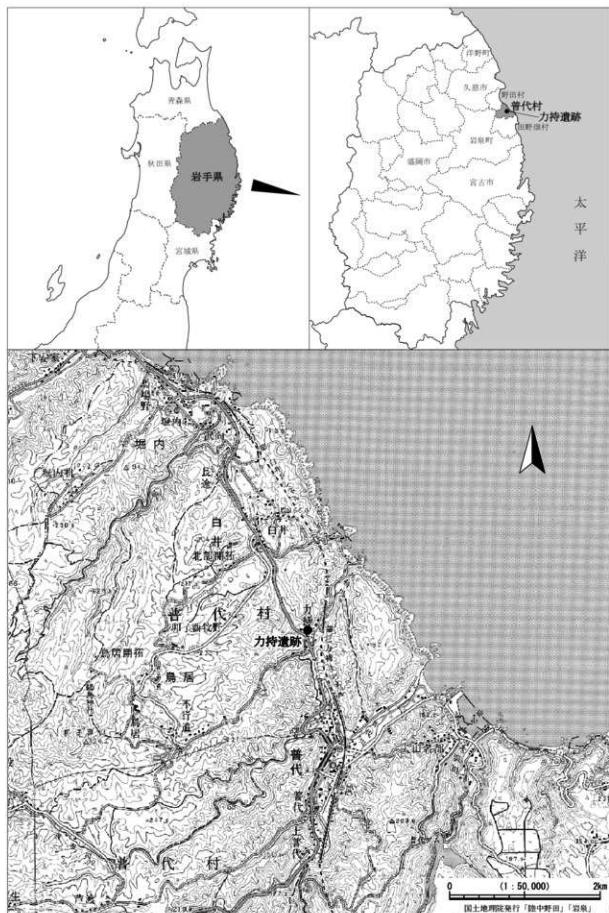
1 遺跡の位置と地形的環境(第1・2図)

力持遺跡の所在する普代村は、岩手県の沿岸北部、下閉伊郡の最北に位置する人口 2506人(令和3年10月末日現在)の農山漁村である。村域は国土地理院発行の5万分の1地形図「陸中野田」・同「岩泉」の図幅にあり、東経141° 47' 49" ~ 141° 57' 08"、北緯 39° 57' 31" ~ 40° 03' 10"、東西 8953m、南北 12487m、面積 69.69 k m²の広がりを持つ。北緯40度線上における世界最東端の地として太平洋に面し、北は野田村、南は田野畑村、西は岩泉町に接する。

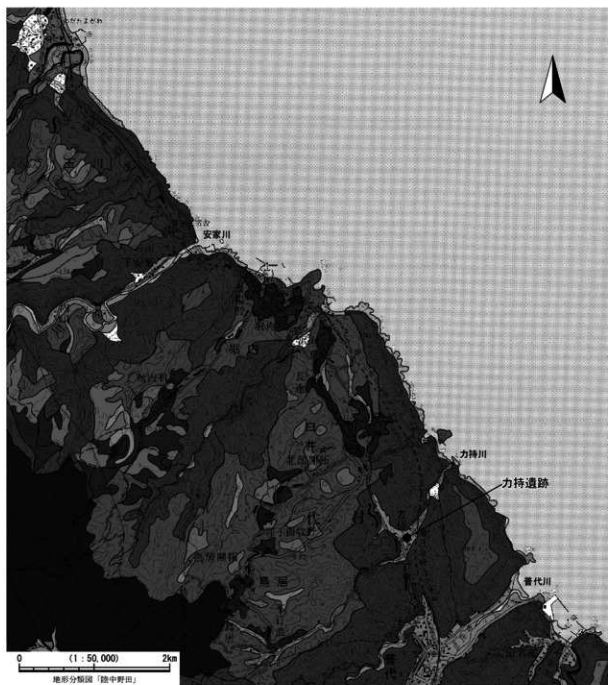
遺跡は、普代村第16地割天拝坂の東端部、第17地割野胡桃との境界付近に位置する。三陸鉄道北リアス線普代駅から北北西に約2.1km、力持川河口からは南南西約1.2kmの距離にある。南西から北東に向かって流れる力持川に、これと並行して流れる支流刺畑沢が屈曲して合流する付近には、谷底平野がわずかな広がりを見せている。二つの流れに挟まれた細長い尾根の東端は急崖となるが、その下方に生じた崖錐性の斜面は徐々に傾斜を緩めてこの低地に連続し、四方を囲む丘陵縁部の断崖の狭間に、限定的な好適地を形成している。本遺跡は隣接する力持II遺跡とともに、概ねこの全面に展開している。

2 基本層序

今次調査区内においては、ほぼ全面的に遺構が重複することから、二次的な堆積層が主体であった。このため本来の基本土層を通覧できる地点は見出せなかったが、部分的に観察できた個別の土層の相対的な先後関係を組み合わせると、以下のように整理される。



第1図 遺跡の位置



第2図 周辺の地形

〔力持遺跡 令和3年度調査 基本土層〕

- 客土層 既往の発掘調査・工事等に伴う。
- I 暗褐色土 マサ土(風化花崗岩粒)含む。ビニール片等を含む現代表土・耕作土。
- II 黒色土 マサ土含む。旧表土・耕作土。
- III 黒色土 マサ土ほぼ含まない。下面に大形礫点在。縄文時代中期後葉～後期か。
- IV 暗褐色土 白色～淡黄色の粉状(火山灰様)土塊を斑状に含む。当該粉状土の混入により本層以上の土層は乾きやすい。
- V 暗褐色土 マサ土含む。縄文時代中期遺構埋土主体土。
- VI 暗褐色～褐色土 マサ土混入するが微量。淡黄色火山灰ブロック(十和田中振テフラ)が挟在する。古段階遺構(縄文時代前期か)の埋土主体土。下部は地山へと漸移的に連続。
- VII 黄褐色土 地山土層。

既往調査における隣接地点の基本土層との対応関係を下表に示す。

今次調査 令和3年度	性状・備考	既往調査※	
		平成13～15年度	平成26・28年度
0・I	近現代	I	
II		II	
III	黒色土	III	III
IV	火山灰様の粉状土塊含む層	III a	
V	縄文時代中期相当か	IV	IV
Ⅰ・Ⅵ	十和田中振火山灰	V	V a
			V b
			V c
		VI	
VII	地山土層	VII	
		VIII	

(※既往調査の概要は次章)

3 周辺の遺跡 (第1表・第3図)

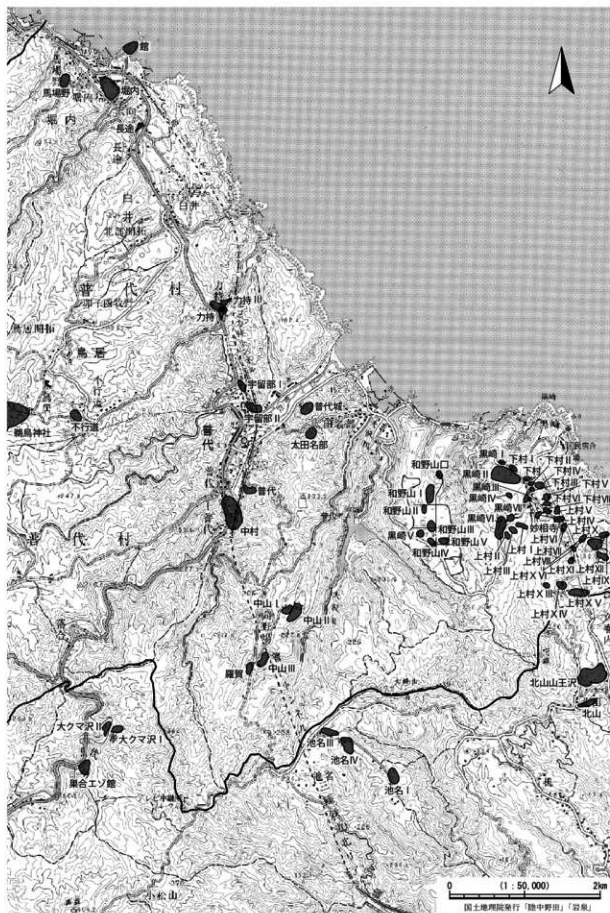
岩手県遺跡情報検索システム(岩手県教育委員会2021)に登録されている普代村管内に所在する遺跡は30か所である。普代村における過去の調査事例としては、太田名部遺跡(普代村教育委員会:1998)、堀内机遺跡(岩手県教育委員会:1998)、下村・下村I遺跡(岩手県教育委員会:2001)、力持遺跡(当埋蔵文化財センター:2008)、割沢鉄山跡(当埋蔵文化財センター:2009)、力持遺跡(当埋蔵文化財センター:2019)、長途遺跡(当埋蔵文化財センター:2019)、下村遺跡(当埋蔵文化財センター:2020)が挙げられる。

また、平成12年度に岩手県教育委員会文化課により、村内に所在する8遺跡(下村・下村1、下村II、下村III、下村VIII、下村IX、黒崎I、力持)の試掘調査が実施されている。第3図には、本遺跡を中心に普代村に所在する主な遺跡の位置を示した。

旧石器時代については、太田名部遺跡で生活痕跡が確認されているが、旧石器時代の石器自体は

第1表 普代村の遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	時代	内容	報告書
1	馬場野	散布地	縄文	縄文土器	
2	机	集落跡	縄文	縄文土器(前・中・後期初頭)、石皿、石斧、石鏃、石匙	
3	船	散布地	縄文	縄文土器	
4	堀内	集落跡	縄文	縄文土器(前・中・後期)	
5	蝦夷森	集落跡・鉄 山跡	縄文	縄文土器	
6	鶴島神社	神社跡	平安		
7	不行道	散布地	縄文	縄文土器(中期)、石鏃	
8	力持Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	
9	力持	集落跡	縄文	縄文土器(前～後期)壺形土器(後期)石斧、環状耳飾、石匙	第694集・第510集
10	字留部Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	
11	字留部Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	
12	普代城	城館跡	中世	空堀、帯郭	
13	太田名部	散布地	縄文	縄文土器(中期)、石器	
14	普代	集落跡	縄文	注口土器、釣り付壺、小形壺、縄文土器(後期)、石器	
15	和野山Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器(中期)、壺	
16	黒崎Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器(前・中期)	
17	下村Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器(前・中期)、コア	
18	黒崎Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器(前・中期)	
19	下村	集落跡	縄文	縄文土器(晩期)、石鏃、石匙、石斧、石槍、石鏟	第720集
20	下村Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	
21	下村Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器	
22	黒崎Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器(前期)、円筒	
23	妙相寺	寺院跡	縄文・中世	縄文土器	
24	黒崎Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器	
25	下村Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器	
26	下村Ⅴ	散布地	縄文	縄文土器(後期)	
27	下村Ⅵ	散布地	縄文	縄文土器(後期)、土師器	
28	萩牛Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器、石器	
29	瀬沢	鉄山跡	縄文		第533集
30	中村	散布地	縄文	縄文土器	
31	中山Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器(中・後期)	
32	中山Ⅱ	散布地	中世	縄文土器、石鏃	
33	羅寶	散布地	縄文	縄文土器(前期)	
34	中山Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器、石器	
35	和野山Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器(後期)	
36	和野山Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器(前期)	
37	和野山Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器(前期)	
38	黒崎Ⅴ	散布地	縄文	縄文土器(中・後期)	
39	和野山Ⅴ	散布地	縄文	縄文土器(前・中期)	
40	和野山Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器(前・中期)	
41	黒崎Ⅵ	散布地	縄文	縄文土器(中・後期)	
42	黒崎Ⅶ	散布地	縄文	縄文土器	
43	上村Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	
44	上村Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	
45	上村Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器	
46	上村Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器(前・中・後期)	
47	下村Ⅳ	散布地	縄文・弥生	縄文土器、弥生土器?	
48	上村Ⅴ	散布地	縄文	縄文土器	
49	上村Ⅵ	散布地	縄文	縄文土器(早期)	
50	上村Ⅶ	散布地	縄文	縄文土器	
51	上村Ⅷ	散布地	縄文	縄文土器(早期)、貝殻文	
52	上村Ⅷ	散布地	縄文	縄文土器(前期)、フレーク	
53	上村Ⅷ	散布地	縄文	縄文土器	
54	上村ⅧⅠ	散布地	縄文	縄文土器(前・中期)	
55	上村ⅧⅠ	散布地	縄文	縄文土器(前期)	
56	上村ⅧⅡ	散布地	縄文	縄文土器	
57	上村ⅧⅢ	散布地	縄文	縄文土器(前期)	
58	上村ⅧⅣ	散布地	縄文	縄文土器(早・前期)	
59	上村ⅧⅤ	散布地	縄文	縄文土器(前・中期)	
60	長途	散布地	縄文	土坑2基、縄文土器数十片、石鉄1片	第700集



第3図 周辺の遺跡

出土していない。また、遺跡台帳を見ると、黒崎地区には旧石器時代とされている遺跡がいくつかある。その中の一つである黒崎1遺跡では試掘調査が実施されているが、旧石器の出土は確認されていない。なお、力持遺跡では旧石器は出土していないが、平成13～15年の調査区内には八戸火山灰が断片的に確認されている。また、太田名部遺跡では、岩手山系の分火山灰～洗民火山灰が検出されているらしい。これらのことから、普代村自体には、後期旧石器時代の指標テフラが広く分布している可能性が窺え、今後の調査次第では旧石器が発見される可能性がある。

縄文時代については、57か所の遺跡が村内で確認されており、周知遺跡の大部分を占める。出土土器の時期が記載されている遺跡を時期別にみると、早期と晩期は少なく、前期と中期が多い。また、太田名部遺跡より草創期とされるポイント1点が出土していることから、草創期から晩期まで全ての時期が網羅される。ただ、調査事例が希少であることから、その実態は明確ではない。太田名部遺跡、下村遺跡、力持遺跡、堀内机遺跡、長途遺跡の調査成果からは、前期～中期の遺跡の分布が中心であり、円筒式と大木式の両者が出土するといった特徴がある。加えて、力持遺跡や長途遺跡では前期の指標テフラである十和田中振テフラ(To-Cu)が良好に堆積し、テフラ層下位から大木2a式を中心とする土器が出土している。十和田中振テフラの堆積様相からは、初生堆積ではなく再堆積の可能性が高いものの、同テフラと土器の新旧関係解明の手掛かりになるものと思われる。なお、貝塚については、堀内机遺跡で断片的資料が確認されている以外は分かっていない。三陸沿岸宮古以北は貝の生育条件を満たす遠浅な環境にないことと、切り立った断崖の連続で貝の採取場所が制限されることも要因として考えられるが、分布調査の精度に関係する可能性もある。

弥生時代については、太田名部遺跡、力持遺跡、下村Ⅶ遺跡、長途遺跡で土器の出土が確認されている。長途遺跡で後期赤穴式の土器が出土していることは特筆されるが、現時点では希少な状況にあることを指摘するに留める。

古代については、鶴鳥神社と太田名部遺跡が登録されている。鶴鳥神社は神社跡とされている。太田名部遺跡では、平安時代と考えられる住居跡と土器器が出土しているが、報告書には掲載されていない。現時点で普代村においての土器器の発見例はこの太田名部遺跡のみである。

中近世については、実態がほとんど不明である。普代城跡は伝承としては知られているが、その内容は不明な点が多い。なお、製鉄関連の遺跡については、村の南西部に所在する割沢鉄山跡(近世)以外はほとんど不明である。本地域は花崗岩地帯にあり、砂鉄の供給には事欠かない。今後の分布調査次第では、製鉄関連遺跡の発見は増加する可能性もある。

(参考文献)

- 岩手県企画開発室(北上開発山系) 1973「北上山系開発地域土地分類基本調査 岩泉」
 岩手県企画開発室(北上開発山系) 1975「北上山系開発地域土地分類基本調査 陸中野田」
 普代村教育委員会 1998「太田名部遺跡—平成9年度緊急発掘調査報告書—」普代村埋蔵文化財調査報告書第1集
 岩手県教育委員会 1998「岩手の貝塚」岩手県文化財調査報告書第102集
 岩手県教育委員会 2001「岩手県内発掘調査報告書」岩手県文化財調査報告書第112集
 星 雅之・須原 拓 2004「岩手県内の発掘調査事例からみた十和田中振テフラ」
 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』X X II

- (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2008「力持遺跡発掘調査報告書」
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書第510集
- (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2009「新沢遺跡発掘調査報告書」
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書第533集
- (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2019「力持遺跡発掘調査報告書」
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書第694集
- (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2019「長途遺跡発掘調査報告書」
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書第700集
- (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2020「下村遺跡発掘調査報告書」
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書第720集
- 岩手県教育委員会 2021「岩手県遺跡台帳検索システム」

Ⅲ 野外調査と室内整理

1 野外調査

(1) 既往調査と今次調査区(第4図)

登録されている力持遺跡の範囲は、東西約240m・南北約250m、面積にして約25,000㎡で、現況は山林・畑地・宅地等となっている。平成13～15年度及び同26・28年度に当埋蔵文化財センターが実施した本発掘調査では、縄文時代前期前葉～後期前葉の大規模な集落跡であることが確認されている(岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第510集、同第694集)。

これらの既往調査は、今次と同様、三陸沿岸道路建設事業に伴い実施されたものである。本遺跡の所在する普代村第16地割付近は「普代道路」の終点と以北「野田久慈道路」の起点の接続部に相当する。普代道路北端の「新普代第2トンネル」と野田久慈道路南端の「白井トンネル」との間が、本遺跡の立地する低地となっている。

今次調査区はこの谷あいの低地に架かる「力持高架橋」の真下に位置する。高架橋の側縁に沿って地上に設置するフェンス及び排水設備の施工に伴う調査であり、フェンスのみを設置する西側は幅1.0m、排水設備を併設する東側が幅3.0mと、極めて狭隘な範囲が対象となった。

高架橋を支える橋脚部については、平成26年度調査の「北(北側・北部)調査区」として調査・記録が済んでおり、今次調査区はこれを跨いで設定された。ほぼ正方形の平成26年度「北調査区」の四隅付近から南北にそれぞれ延びる計4本のトレンチが今次調査区である。北西部トレンチをA区、北東部をB区、南西部をC区、南東部をD区とした。なお、C区・D区の南端は、平成26年度「南(南側・南部)調査区」に接している。

(2) 調査区画と基準点

(作業区画)(第5図)

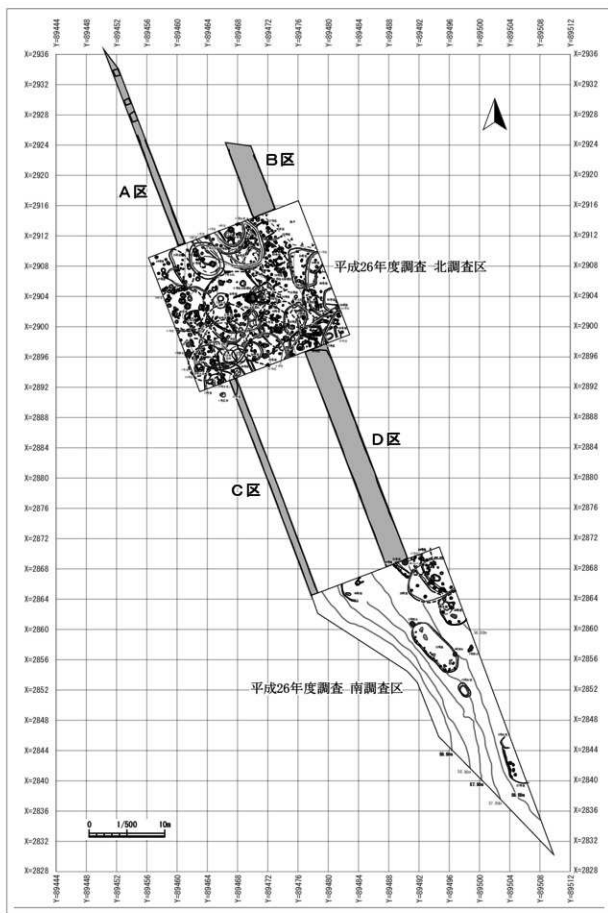
平成13～15年度調査では日本測地系、同26・28年度調査では世界測地系の平面直角座標第X系に則したグリッド網がそれぞれ設定されたが、測地系が異なるため両者のグリッド網は連続しない。また今次調査の対象範囲は大変細長くかつ南北軸に対し20度前後西偏していることから、調査での利便性を考慮し既存のグリッド網は用いないこととした。

グリッド網に代わるものとして、今次調査ではA～D区の各区を北端から概ね5mごとに分割し、D1・D2・D3…のような作業区画を独自に設定した。現況が急斜度の法面となっていたA区の北端部(A1のさらに北側)については、大きな改変(切土)を受けた地点であることを試掘坑で確認し、これをもって調査終了とした。当該区間にのみ「O」を用い「A0」区としている。

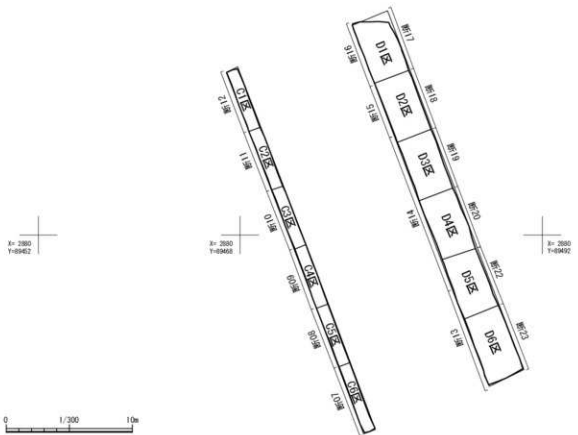
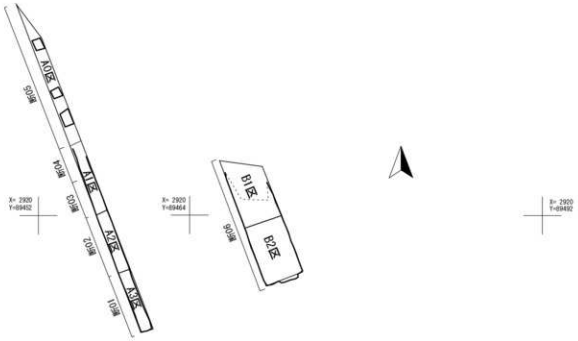
本報告書においても、遺構・遺物の地点表記には、上記の作業区画名を用いた。全体の遺構配置図等、既往調査区との位置関係を合成して示す場合は、平成26・28年度調査のグリッド網上に配置して図示する。

(基準点)

検出した遺構・遺物等の空間的な位置情報を記録するため、平面直角座標第X系に基づく基準点・区画付杭を設置した。調査区の真上を覆う高架橋がGPS測量の支障となったことから、まず調査区を見通せる近傍の高台に基-1・基-2を設置し、これをもとに調査区の周縁に実測基準点となる区



第4図 調査区位置図



第5図 調査区割図

画付杭K1～4を打設した。基準点と区画付杭の比高が10m以上に及ぶのはこのことによる。

各点の座標・標高値は下記の通り。

点名	X座標	Y座標	標高	種別	点名	X座標	Y座標	標高	種別
基-1	2871.778	89.436584	70648	3級基準点	K2	2.905.396	89.483.078	57.243	区画付杭
基-2	2.907.522	89.382.884	73.153	3級基準点	K3	2.872.080	89.473.902	59.504	区画付杭
K1	2.897.500	89.461.645	59.456	区画付杭	K4	2.919.388	89.465.190	58.745	区画付杭

(世界測地系)

(3) 試掘・表土除去

発掘調査はまず各区の端部に設けた試掘坑の人力掘削から開始した。各区とも最上部は攪乱層、その下が旧表土(耕作土)であったが、地表下30cm前後を境に遺物量が急増し、精査を要する土層に到達することが分かった。このため幅3mのB区・D区で攪乱層の除去に重機を用いたほかは、全て人力による掘削を行なった。A0区については、先述の通り3か所の試掘坑を設け、近現代の造成法面であることを確認し調査を終えている。

(4) 遺構の検出と精査

細長い調査区内に全面的に重複する遺構群を分解し、個別のプランを把握することは非常に難しい状況であった。このため、区画ごとに段階的に掘り下げを進め、その過程で散発的に出土した遺物については、区名に続けて現地表面からの深度を記録(「A1区・30cm」のように表記)し、採集した。量的に明らかな集中が認められた箇所や、層界に面的な広がりをもって出土した場合は、遺構に伴う可能性が高いものと判断し、当該遺構群の空間的位置を測量し記録した。

各区とも概ね100cm前後まで掘り下げが進んだところで、部分的に地山土層が見え始め、この深度以下に底面が及んでいる深い遺構については、比較的明瞭にそのプランを認識できるようになった。大半の住居跡や土坑は、内部堆積土の多くの部分が調査区外に延びていたことから、堆積状況の観察と図化・写真等の記録は、調査区壁面の土層断面を対象とした。土坑・炉跡等の小規模な遺構で、全体形状が区内に完結する場合は、通常どおり個別に断面・平面の図化・写真記録を行った。

なお、極めて狭隘なA区・C区の調査方法については、作業場の安全確保と原因工事による影響深度を勘案し、県教育委員会生涯学習文化財課の指導を得て、現地表下100cm付近までの確認にとどめ、以下を現状保存することとなった。

(5) 遺構名

検出した遺構に対してはその都度固有の名称を与えた。住居跡にSI、土坑にSK、炉跡にSL等、種別を示すSで始まる略号に続けて、区名を示すアルファベットと遺構番号(数字)を付し、「SIA1」のように命名し、本書中でもそのまま用いた。

なお「配石」・「周溝」としたものについては、本来は堅穴住居に付属する可能性が高いと判断し、帰属先の判明後に統合するつもりであった。そのため調査中は便宜的に「配石D1」・「周溝D2」のように命名していた。しかしながら、検討を加えたのちも帰属先は推定の域を出ず、記述上の利便性からも、本書中においてもそのまま用いることとした。

柱穴状ピットにはPPを冠し、続けて区名+番号を付して、「PPD1」のように命名した。本文中では同様に表記し、平面図においてはPP及び区名を省略し番号のみを表記した。

(6) 実測

野外調査における図面作成には、主に株式会社CUBICの遺構実測支援システムを使用し、3次元デジタルデータとして記録した。遺構プランの平面図、土層断面図、遺物出土状況記録等に積極的に利用している。一部、断面図については、従来通り方眼紙への作図を併用し前者を補充した。

(7) 土層断面の分層と注記

土層断面は慎重に観察し堆積状況を把握するよう努めた。分層は堆積過程を表現するのに必要と思われた場合は細部にも配慮したが、薄層が連続的に互層をなす部分や、偶然の結果と思われる混入物の偏りなどは徒らに細分せず、有意と思われるまとまりの境界を表現した。

この分層の根拠を示すため、各層の性状を記録した。土層は主体土と混入土(物)によって構成されると考えられることから、色調・土性・混入物・粘性・縮まりの程度等を記載した。また、解釈可能な場合は、その層の持つ性格を想定し付記した。

遺構埋土等、堆積層の「主体土」には、認識可能な場合、その層が堆積した時点において周辺の表土を形成していたと思われる土(埋没開始時点における最新期の土)を充てた。例えば地山土のブロックが大半を占める遺構の壁の崩落層であっても、当時の表土と思われる土壌が含まれている場合は、後者を主体土とし、「地山土が大量に混入している状態」と解釈した。主体土と基本土層の対比により、当該土層の堆積時期を推定することが可能と考えるからである。しかしながら今次調査における遺構内の堆積状況は、より古段階の遺構埋土が二次・三次的に崩落・流入することを繰り返した結果とみられることから、今次調査においてはこの観点から有用な情報を得ることは難しかった。

土色の表記は新版標準土色帖(農林省農林水産技術会議事務局)に準じたが、調査員が受ける層間の印象の差が土色名の違いに反映されない場合も多くあった。このため、各層の記録には調査員個人の主観による相対的な層全体の印象(明暗や色味の差)も併記した。例えば、「○層よりも明るい」・「焼土含み全体に赤味」・「炭化物多く黒味強い」・「地山土含み黄味がかかる」などの表現がこれにあたる。また混入物の量について「極微」・「やや多」等の表記を行っているが、調査員の主観的基準を土色帖に示されている百分率表記に置き換えれば、概ね、極微(1～2%)・微(3～5%)・少(5～10%)・やや多(15～20%)・多(30～50%)・大量(50%以上)に相当する。

(8) 写真撮影

各種遺構の全景・土層断面・遺物出土状況等の撮影には、6×9cm判カメラ(モノクロ)及びデジタル一眼レフを用いた。撮影に際しては対象の状況を記したカードをその都度写し込み、これを元に整理した。なお、銀塩写真の衰退に伴い、従前が増えて機材の保守やフィルムの入手が難しい環境となってきている。このため6×9cm判による記録は撮影対象を厳選しカット数の節約に努めた。調査終盤にはドローンによる調査区全景等の空中写真撮影を行った。

2 室内整理

(1) 作業手順

出土遺物の洗浄と地点別の仕分けは、雨天時等の作業として調査現場で随時行った。出土量の増加後は埋蔵文化財センター本部(盛岡市下飯岡)に移送し、洗浄・仕分け・計量を野外調査と並行して進めた。野外調査終了ののち、室内において土器の接合・復元作業を開始し、掲載資料の選別・登録を行った。その後、実測図作成・拓影作成・トレース・図版作成の順に作業を進めた。調査員はこれらの作業を統括し、並行して遺構図面の整理合成・遺物観察表作成・原稿執筆を行った。

(2) 遺 構

デジタルデータ・手描き図面の必要な整理を行ったのち、Adobe社Illustratorを用いてトレース・編集を行った。図中には縮尺を示すスケールを付し、方位マークで座標北を示した。写真はデジタル一眼レフで撮影したRAWデータをJPEG形式に変換し、パソコン上でレイアウトした。

(3) 遺 物

出土土器は、出土地点・遺構別に分けた後、掲載に適した個体を選抜き図化等作業の対象資料として登録した。石器類は器種ごとに仕分けし、いわゆる定形石器は全点を登録して個別番号を与えた。各器種は属性観察をもとに細分し、各類を代表する個体を選抜き図化した。

これらの遺物について、掲載番号・仮(整理用)番号・出土地点・層位・計測値・その他観察事項等を記載した一覧表を作成した。実測図から読みとれる属性については、本文・表ともに記載を省略したものがある。各図版には掲載縮尺を示すスケールを付した。写真は、デジタル一眼レフで撮影した個別のJPEGデータをパソコン上でレイアウトし、図版を作成した。

IV 調査成果

1 概 要

検出遺構は縄文時代竪穴住居跡21棟、炉跡9基、住居跡周溝11条、土坑10基、配石遺構3基、剥片貯蔵遺構1基、柱穴状土坑128個である。出土遺物は縄文時代土器大コンテナ40箱(434.125g)、縄文時代石器類大コンテナ1箱、琥珀細片少量である。

[A区]

平成26年度北調査区の北西隅付近に連続する地点である。1.0m幅で、面積は26㎡。土層断面は当区西面に相当する「断01～05」である。狹隘な調査区のため、現地表面下100cm前後のところで掘削・精査を終了した。竪穴住居跡1棟、炉跡1基を検出、出土土器の重量は23,379gである。

[B区]

平成26年度北調査区の北東隅付近に連続する地点である。3.0m幅で、面積は29㎡。土層断面は当区西面に相当する「断06」である。既往調査では、当該範囲は削平による遺構等の空白地点として記録されている。今回、この削平面において竪穴住居跡1棟の残欠を確認した。出土土器の重量は計9,517gである。

[C区]

平成26年度北調査区の南西隅付近に連続する地点である。1.0m幅で、面積は31㎡。土層断面は当区の西面に相当する「断07～12」である。狹隘な調査区のため、現地表面下100cm前後のところで掘削・精査を終了とした。竪穴住居跡1棟、配石遺構1基を検出、出土土器の重量は計74,773gである。

[D区]

平成26年度北調査区の南東隅付近に連続する地点である。3.0m幅で、面積は92㎡。土層断面は当区の西面「断13～16」及び東面「断17～20・22・23」である。遺構は竪穴住居跡19棟、炉跡(焼土)8基、住居跡周溝11条、土坑10基、配石遺構2基、剥片貯蔵遺構1基。出土土器の重量は計321,850gである。

以下では、まず検出遺構の一覧(第2・3表)を示し、続いて全体の遺構配置図(第6・7図)、各区の遺構配置図および分割図(第8～25図)を掲載する。分割図には各区を細分した作業区画(A1区・B2区など)ごとに、平面・断面図を並べて示した。調査区の西壁断面は平面図の上に、東壁断面は下に配置している。このため東壁断面は天地逆転した掲載となることを御了解いただきたい。また、主に作業区画をまたぐ断面については、レイアウトの都合上、土層注記を別ページにまとめて掲載した。図中には該当するページを示している。分割図以降は、遺構種別ごとに所見と個別図を掲載した。個々の遺構でも、調査区東西壁面に観察された断面を記録したものについては、先掲の分割図と土層注記が共通することから、同じく図中に該当ページを記載した。その他、図中表示の詳細については凡例(p.20)を参照されたい。

第2表 遺構一覧

種別	遺構名	地点 (区名)	想定埋没時期 (縄文時代-)	14C 試料No.	年代測定値	備考	図	写真
住居跡	SLA1	A3	中期中葉以前	7	4410 ± 30yrBP			
炉跡・焼土	SLA1	A3	中期中葉以前			SLA1の炉。		
住居跡	SLB1	B2	不明			前平により痕跡的な残存。		
住居跡	SIC1	C2	中期後葉	4	4260 ± 30yrBP			
没	SIC2	C3						
没	SIC3	C6						
配石遺構	配石 C1	C1 - C2	中期後葉			SIC1に伴う複式炉か。		
住居跡	SID1	D6	前期前葉～中葉			H26 調査「63号住」と同一。		
住居跡	SID2	D1	中期中葉～後葉					
住居跡	SID3	D1	中期中葉					
住居跡	SID4	D2・D3	中期中葉	15	4550 ± 30yrBP			
住居跡	SID5	D1・D2	中期前葉～中葉	16	4540 ± 30yrBP			
住居跡	SID6	D5	前期前葉	20	6180 ± 30yrBP			
住居跡	SID7	D4	中期中葉～後葉	11	4440 ± 30yrBP			
住居跡	SID8	D6	中期後葉	19	4730 ± 30yrBP			
住居跡	SID9	D6	中期中葉～後葉					
住居跡	SID10	D1	中期後葉	17	4160 ± 30yrBP			
住居跡	SID11	D3	前期初葉～前葉					
住居跡	SID12	D3	中期前葉					
住居跡	SID13	D3	中期前葉～中葉					
住居跡	SID14	D4	中期中葉以前					
住居跡	SID15	D3	中期末葉	12 13	3940 ± 30yrBP 3990 ± 30yrBP	配石 D2 を伴う。		
住居跡	SID16	D1	中期末葉以降			SLD1 を伴う。		
住居跡	SID17	D3	中期中葉以前					
住居跡	SID18	D6	前期初葉～前葉					
住居跡	SID19	D4	中期中葉～後葉以降			周溝 D7 を伴う。		
炉跡・焼土	SLD1	D1	中期末葉以降			SID16の炉。		
炉跡・焼土	SLD2	D4	中期末葉以降					
炉跡・焼土	SLD3	D1	中期中葉～後葉			SID2の炉か。		
炉跡・焼土	SLD4	D3	前期後葉～中期前葉			SID12の炉。		
炉跡・焼土	SLD5	D3	前期後葉～中期前葉			SID12の炉。		
炉跡・焼土	SLD6	D2	中期前葉～中葉以前					
炉跡・焼土	SLD7	D2	中期中葉	5	4530 ± 30yrBP			
炉跡・焼土	SLD8	D1	中期前葉～中葉以前					
住居周溝	周溝 D1	D1						
住居周溝	周溝 D2	D1						
住居周溝	周溝 D3	D1						
住居周溝	周溝 D4	D5				SID7 (六角階か)に伴う。		
住居周溝	周溝 D5	D4	中期中葉～後葉			SID7に伴う。		
住居周溝	周溝 D6	D4	中期中葉～後葉			SID7に伴う。		
住居周溝	周溝 D7	D4	中期中葉～後葉以降			SID19に伴う。		
住居周溝	周溝 D8	D4	中期中葉以前			SID14に伴う。		
住居周溝	周溝 D9	D2	中期中葉			SID4に伴う。		
住居周溝	周溝 D10	D3	中期中葉			SID4に伴う。		
住居周溝	周溝 D11	D1	中期前葉～中葉			SID5に伴うか。		
土坑	SKD1	D2	前期中葉～中期前葉					
土坑	SKD2	D3	中期初葉～中葉	2 14	4570 ± 30yrBP 4560 ± 30yrBP			
土坑	SKD3	D4	中期初葉～中葉			SID7の柱穴か。		
土坑	SKD4	D3	中期中葉			SID4に伴うか。		
土坑	SKD5	D4	中期前葉	10	4680 ± 30yrBP			
土坑	SKD6	D2	前期中葉～中期前葉					
土坑	SKD7	D4	中期初葉～前葉	1 9	4640 ± 30yrBP 4700 ± 30yrBP			
土坑	SKD8	D1	前期中葉～中期中葉	18	4550 ± 30yrBP			
土坑	SKD9	D3	前期後葉～中期初葉					
土坑	SKD10	D3	中期初葉以前					
配石遺構	配石 D1	D1	中期中葉～後葉					
配石遺構	配石 D2	D3	中期末葉			SID15に伴う複式炉の一部か。		
剥片貯藏遺構	SXD1	D6						

第3表 柱穴一覧

No.	埋土	区域	開口部径 (cm)	底面高さ (m)	重積 (新>旧)	備考
PPB1	10YR2/3シルト 地山土塊やや多	B	33 × (37)	56.535		B区西壁断面に有
PPB2	10YR2/2シルト 地山土塊少	B	15 × (10)	56.630		B区西壁断面に有
PPB3	10YR3/3-4シルト 粘性弱 しまりやや多	B	23 × (13)	56.505		B区西壁断面に有
PPB4	10YR3/3シルト 10YR2/2シルト塊やや多	B	52 × (21)	56.624		B区西壁断面に有
PPB5	PPB1によく似る	B	28 × 22	56.385		
PPB6	根掘乱か	B	45 × 40	56.288		
PPB7	PPB3に似る	B	23 × (21)	56.351		
PPB8	10YR2/2シルト 表土塊含む 根掘乱か	B	58 × (44)	56.947		B区西壁断面に有
PPB9	PPB3-4に似る	B	23 × (44)	56.691		
PPD1	(=PPD10) + 黄褐色土大ブロック (5~20cm) 中位に多量、炭粒少量	D1	50 × (32)	56.004	PPD1・PPD16 新旧不明	
PPD2	(=PPD10) + 大礫 (5~20cm)	D1	52 × (30)	55.878		
PPD3	(=PPD10)	D1	53 × (61)	55.587	PPD3・PPD4・PPD53・PPD54 新旧不明	
PPD4	(=PPD10) + 黄褐色土ブロック (1~5cm) 中位に多量、白色粒やや多量	D1	48 × (21)	55.849	PPD3・PPD4・PPD53・PPD54 新旧不明	
PPD5	(=PPD10) + 黄褐色土粒 (5~10mm) やや多量、炭粒微量	D1	39 × 29	55.986		
PPD6	(=PPD10)	D1	27 × 24	56.043		
PPD7	(=PPD10) + 中位に黄褐色土ブロック (1~5cm)	D1	25 × 24	55.928	PPD7・PPD9 新旧不明	
PPD8	10YR2/2黒褐色シルト、粘性中、しまり中 黄褐色土粒 (5~10mm) 少量、白色粒少量	D1	30 × 25	55.835		
PPD9	(=PPD10)	D1	19 × (4)	56.148	PPD7・PPD9 新旧不明	
PPD10	10YR2/3黒褐色シルト、粘性中、しまり中 黄褐色土粒 (5~10mm) 少量、白色粒少量	D1	40 × 35	55.731		
PPD11	(=PPD10) + 炭粒微量	D1	19 × 18	56.097		
PPD12	(=PPD10) + 黄褐色土ブロック (1~5cm) 多量、炭粒微量	D1	24 × 18	56.060	PPD12>PPD24	
PPD13	(PPD8) + 炭粒微量	D1	24 × 24	55.907		
PPD14	(=PPD12)	D1	47 × 42	55.647		
PPD15	(=PPD10)	D1	22 × 22	56.166		
PPD16	(=PPD10)	D1	20 × 16	56.077	PPD1・PPD16 新旧不明	
PPD17	(=PPD10)	D1	17 × 16	56.100		
PPD18	(=PPD10) + 黄褐色土ブロック (1~5cm) 多量	D1	22 × (12)	56.118		
PPD19	(=PPD10) + 炭粒微量	D1	25 × 22	56.176		
PPD20	① (=PPD19) ② 埋土→10YR4/4褐色シルト、粘性中、しまり中、黄褐色土ブロック (1~5cm) 少量	D1	34 × (30)	55.912		
PPD21	(=PPD8)	D1	28 × 26	55.877	SKD1・PPD21 新旧不明	
PPD22	① 10YR4/6褐色シルト、粘性中、しまり中、暗褐色土ブロック (1~5cm) 上位に多量、白色粒少量 ② 10YR3/4暗褐色シルト、黄褐色土ブロック (1~5cm) 多量	D1	40 × (39)	55.530	PPD22>PD31>PPD91	
PPD23	(=PPD10)	D1	51 × (18)	56.000		
PPD24	① 上位→10YR5/8黄褐色シルト、粘性中、しまりやや多 ② 下位→10YR3/4暗褐色シルト、粘性中、しまりやや多、黄褐色土粒 (5~10mm) 多量、炭粒微量	D1	44 × 38	55.671	PPD12>PPD24	
PPD25	(=PPD18)	D1	33 × 25	55.880		
PPD26	(=PPD10) + 黄褐色土ブロック (1~5cm) やや多量、炭粒微量	D1	17 × 17	56.058		
PPD27	(=PPD8)	D2	17 × 17	56.058		
PPD28	① (=PPD10) ② 10YR4/4褐色シルト、粘性中、しまり中、暗褐色土ブロック多量	D1	65 × 46	55.737	SID10>PPD28	
PPD29	(=PPD10)	D1	41 × (21)	56.052	SID10>PPD29	
PPD30	(=PPD10)	D1	53 × (10)	55.980		
PPD31		D1	45 × (28)	55.356	PPD22>PD31>PPD91	
PPD32		D6	35 × 31	55.882		
PPD33		D6	57 × 47	56.271		
PPD34		D6	31 × 24	56.397		
PPD35		D6	35 × 26	56.305		

()は残存値

1 概要

No.	埋土	区域	開口部径 (cm)	底面標高 (m)	直径 (新・旧)	備考
PPD36		D6	77 × 67	56.271	PPD36・PPD41 新旧不明	
PPD37		D6	38 × 33	56.278		
PPD38		D6	21 × 21	56.367		
PPD39		D6	19 × (15)	56.249		
PPD40		D6	17 × 15	56.373		
PPD41		D6	18 × 14	56.189	PPD36・PPD41 新旧不明	
PPD42		D5	31 × (11)	56.004		
PPD43		D5	43 × 41	56.072		
PPD44		D5	33 × 25	55.749		
PPD45		D5	29 × 26	56.178		
PPD46		D5	32 × 13	55.999		
PPD47		D5	31 × 24	55.924		
PPD48		D5	39 × 23	55.964		
PPD49		D6	122 × (84)	56.314		
PPD50		D6	42 × 18	56.352		
PPD51		D6	29 × 26	56.209		
PPD52		D6	18 × 15	56.164		
PPD53		D1	38 × (19)	55.735	PPD3・PPD4・PPD53・ PPD54 新旧不明	
PPD54		D1	(27) × (25)	55.694	PPD3・PPD4・PPD53・ PPD54 新旧不明	
PPD55	(=PPD10) + 炭粒微量	D2	36 × 31	55.893		
PPD56	(=PPD10)	D3	22 × 20	56.018		
PPD57	(=PPD10) + 黄褐色土ブロック多量	D2	22 × 22	55.752		
PPD58	(=PPD10) + 下段に暗褐色土ブロック多量	D3	37 × (35)	55.510	PPD58・PPD76 新旧不明	
PPD59	(=PPD10) + 中段に黄褐色土ブロック層状にやや多量	D2	63 × (47)	55.669	SID4床 > PPD59	
PPD60	10YR2/2-2/3 黒褐色シルト、粘性中、しまりやや疎、混入物ほぼない黒土	D3	26 × (21)	55.618		
PPD61	(=PPD60)	D3	24 × 17	55.688		
PPD62	(=PPD60)	D3	23 × 19	55.655		
PPD63	10YR2/2-2/3 黒褐色シルト、地山ブロック(10～30mm) やや多量	D1	47 × 39	55.690	PPD63>PPD64	
PPD64	10YR2/2 黒褐色シルト、ブロック混入なし	D1	25 × 20	56.064	PPD63>PPD64	
PPD65	10YR2/2 黒褐色シルト、地山ブロック少量	D2	45 × 32	55.275	PPD67>PPD65>PPD66	
PPD66	(PPD68 に似る)	D2	46 × (51)	55.324	PPD67>PPD65>PPD66	
PPD67	10YR2/2-2/3 黒褐色シルト、地山ブロックやや多量、PPD65・66 より全体明るい	D2	31 × (18)	55.744	PPD67>PPD65>PPD66	
PPD68	10YR2/2-2/3 黒褐色シルト、地山ブロックなし	D2	40 × (12)	55.576	SID4床 > PPD68	
PPD69	10YR2/2-2/3 黒褐色シルト、風方埋土は地山土	D3	35 × 29	55.282	PPD69>PPD75 (重複ピットのうち最新)	
PPD70	10YR4/6 褐色シルト、粘性中、しまりやや弱、下段は暗褐色土ブロックやや多量	D1	33 × (39)	55.759		
PPD71		D1	22 × 21	56.065		
PPD72	10YR3/4 シルト、黄褐色土粒・土薄片多量、炭粒少量	D1	14 × 13	56.034		
PPD73	10YR3/3 シルト、黄褐色土粒少量	D3	32 × 26	55.518		
PPD74	10YR2/2 シルト	D3	24 × (9)	55.729		
PPD75	10YR2/3 シルト、黄褐色土ブロック多量	D3	81 × (35)	55.334	PPD69>PPD75	
PPD76	10YR2/3 シルト、黄褐色土ブロック多量	D3	50 × 46	55.514	PPD58・PPD76 新旧不明	
PPD77	10YR2/3 シルト、黄褐色土ブロック多量	D2	26 × 23	55.588		
PPD78	10YR2/3 シルト、黄褐色土ブロック多量	D2	47 × (48)	55.300		
PPD79	10YR2/3 シルト、黄褐色土ブロック少量	D2	20 × 19	55.736		
PPD80	10YR2/3 シルト、黄褐色土ブロック少量	D2	31 × 23	55.469		
PPD81	10YR2/2 シルト、混入物なし	D3	30 × (36)	55.667	PPD81>SKD2	
PPD82	10YR2/2 シルト、黄褐色土粒少量	D2	17 × (15)	56.072		
PPD83	10YR2/2 シルト、黄褐色土粒少量	D2	65 × 29	56.101		
PPD84	10YR2/3 シルト、黄褐色土塊少量	D2	30 × 29	55.709		
PPD85	10YR2/2 シルト、黄褐色土粒多量	D2	23 × 17	55.676		

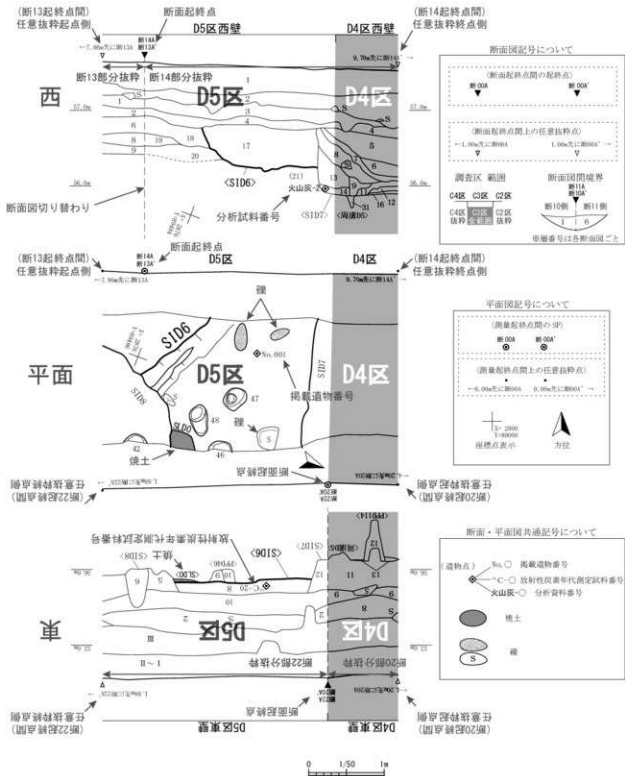
()は残存値

No.	埋土	区域	開口部径 (cm)	底面埋高 (m)	重複 (新>旧)	備考
PPD86	10YR2/2シルト、混入物なし	D3	22 × 19	55.469		
PPD87	10YR2/2シルト、混入物なし	D3	48 × 32	55.560		
PPD88	10YR2/3、黄褐色土粒微量	D3	18 × (14)	55.783		
PPD89		D2	35 × (25)	55.428	PPD89・PPD90新旧不明	
PPD90		D2	28 × 22	55.328	PPD89・PPD90新旧不明	
PPD91	10YR3/4シルト、黄褐色土粒多量	D2	66 × 56	55.606	PPD22>PD31>PPD91	
PPD92	(=PPD10)	D2	23 × 18	55.929		
PPD93	(=PPD10)、黄褐色土粒やや多	D2	19 × 19	56.038		
PPD94	(=PPD10)、黄褐色土粒やや多	D2	13 × 10	56.065		
PPD95	(=PPD10)	D2	15 × 13	56.019		
PPD96	(=PPD10)、黄褐色土粒多量	D2	41 × 38	55.440	SKD4>PPD96	
PPD97	(=PPD10)	D3	27 × (30)	55.308		
PPD98		D1	59 × 44	55.954		
PPD99		D3	38 × 31	55.651		
PPD100		D3	44 × (30)	55.652		
PPD101	(=PPD10)	D3	20 × 18	55.857		
PPD102	(=PPD10)	D3	26 × 21	55.917		
PPD103		D3	32 × (28)	55.737		
PPD104		D1	52 × (22)	55.946	SKD8・PPD104・115・116新旧不明	
PPD105	(=PPD10)	D3	28 × 24	55.438		
PPD106	(=PPD10)	D3				欠番 (→SKD9に登録変更)
PPD107	(=PPD10)、黄褐色土粒やや多	D4	32 × 34	55.303		
PPD108	(=PPD10)	D4	29 × (23)	55.651		
PPD109	(=PPD10)、黄褐色土粒多量	D4	18 × 17	55.358		
PPD110		D4	13 × 10	55.444		
PPD111		D4	28 × 22	55.270		
PPD112		D4	14 × 13	55.529		
PPD113		D4	37 × 24	55.636		
PPD114	(=PPD10)	D4	23 × (11)	55.339		
PPD115		D1	27 × 25	55.923	SKD8・PPD104・115・116新旧不明	
PPD116		D1	31 × (25)	55.975	SKD8・PPD104・115・116新旧不明	
PPD117		D3	26 × (22)	55.641		
PPD118	(=PPD10)、黄褐色土粒多	D3	26 × (30)	55.930		
PPD119	(=PPD10)	D3	29 × 14	55.796		
PPD120		D1	14 × (6)	56.230		
PPD121		D4	15 × 11	未掘削		
PPD122		D4	18 × 14	未掘削		
PPD123		D4	14 × 12	未掘削		
PPD124		D2	46 × 35	55.846		

()は残存値

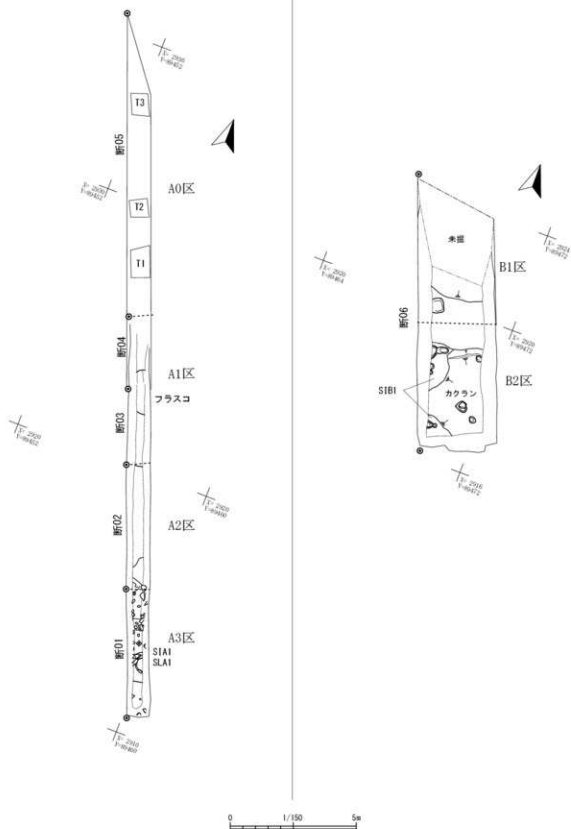
I 概要

平面・断面図 凡例見本



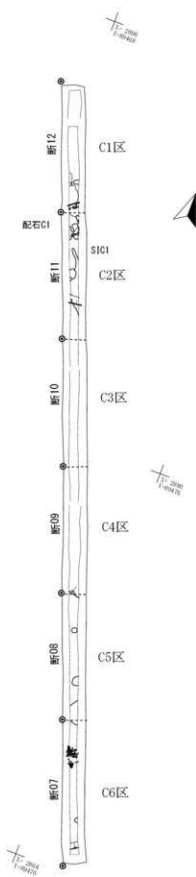
A区

B区

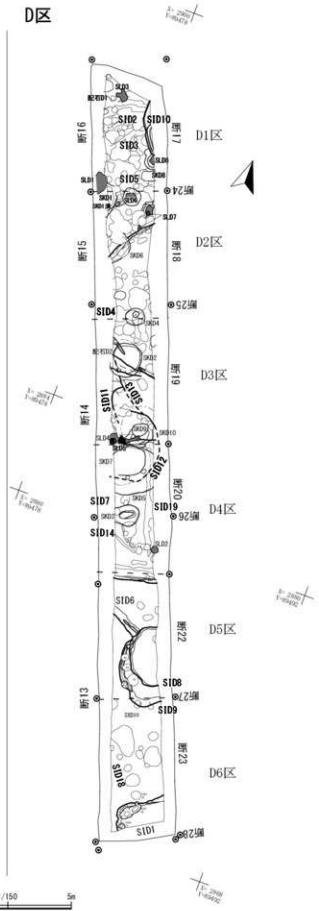


第6図 遺構配置全体図(A区・B区)

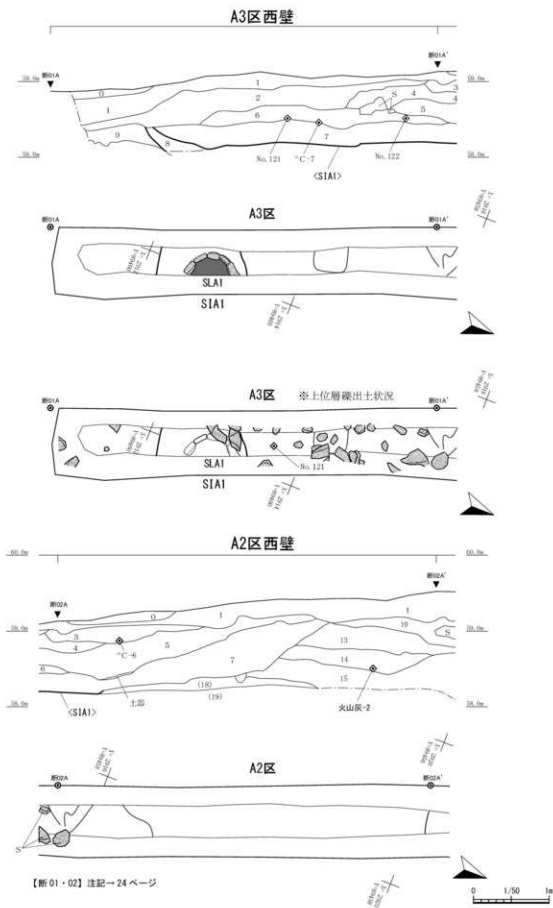
C区



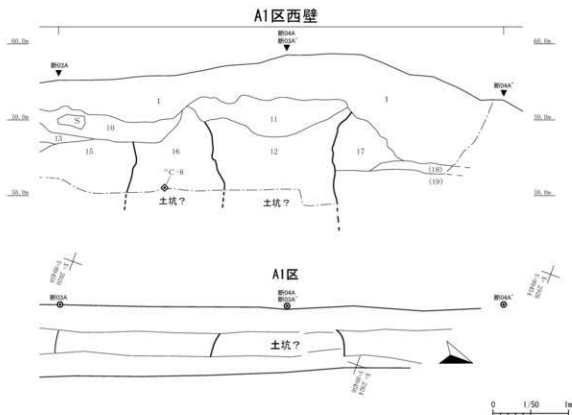
D区



第7図 遺構配置全体図(C区・D区)



第8図 A区分割図(1)

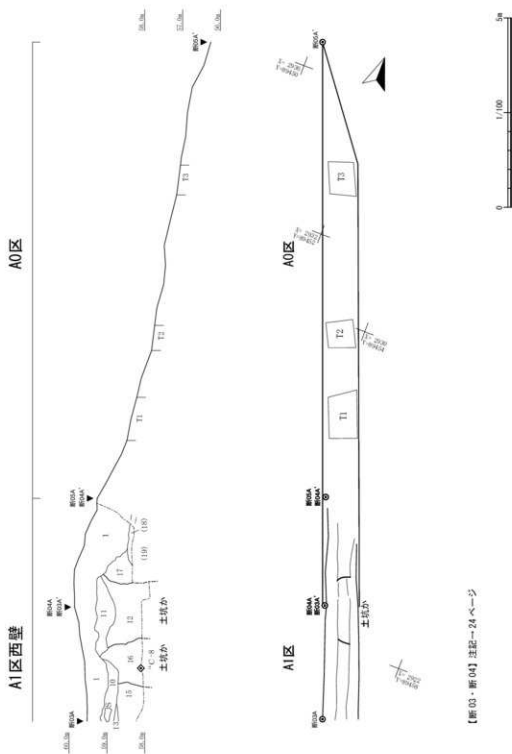


【断01～断04】

◆ A1・2・3区西壁

- 0 客土層
- 1 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、草根多、現露土。
- 2 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、マサ土（径2.5mm）微（自立つ）、風化花崗岩礫（径10cm）含む。炭粒（径5-10mm）微。1層と4層が混じったような層。
- 3 10YR2/1-2/2 黒・黒褐色 シルト 粘性やや強、しまり中、土器小片を多く含む黒味強い層。層相の可能性。
- 4 10YR3/2-2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまりやや密、地山～漸移層土の再堆積（人為か）とみられる。風化花崗岩細片をやや多く含む全体に明るい。
- 5 10YR2/2-2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまりやや密。4に似るが花崗岩片混入少なくやや暗い。下面に土器集中部あり。
- 6 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性やや強、しまり中、マサ土（花崗岩片）ほとんど含まない。下面に土器集中部あり。
- 7 10YR2/2-2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、マサ土（径2.5mm）微、炭粒（径2.5mm）微。V層相当か。
- 8 7層土に地山黄褐色土ブロック（径10-20cm）やや多く含む。
- 9 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、地山ブロック（径5-10mm）極微。下面に小凹部あり、別遺構の埋土か。
- 10 5層に良く似る。
- 11 10YR5/6 黄褐色 粘土質シルト 粘性中、しまりやや疎、地山ブロック層、フラスコ形土坑上部の人為（埋め戻し）土とみられる。
- 12 10YR3/2-2/2 黒褐色 シルト 粘性中、しまりやや疎、ボソボソした土層、フラスコ形土坑埋土（人為）か。
- 13 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性やや強、しまり密、マサ土含まない。
- 14 10YR6/6-6/8 明黄褐色 シルト（火山灰か）粘性弱、しまり中、一部薄層が重なるように見える。
- 15 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性中、しまり中。
- 16 10YR3/2-2/2 黒褐色 シルト 粘性中、しまりやや疎。12層に似るが地山大径ブロック（径10-20cm）を多く含む。12層遺構に先行する別遺構の埋土。
- 17 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性中、しまり中。
- (18) 10YR3/3-3/4 暗褐色 砂質シルト 粘性中、しまり中、漸移層。
- (19) 10YR5/6-4/6 黄褐・褐色 粘土質シルト 地山土層とみられる。

第9図 A区分割図(2)

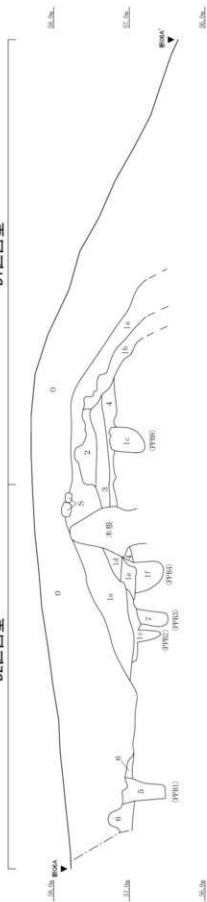


【新03・新04】埋記→24ページ

第10図 A区分割図(3)

B1区西壁

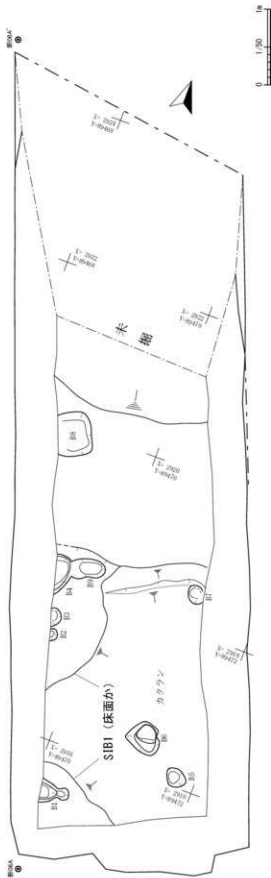
B2区西壁



【断 06】 注記-27 ページ

B1区

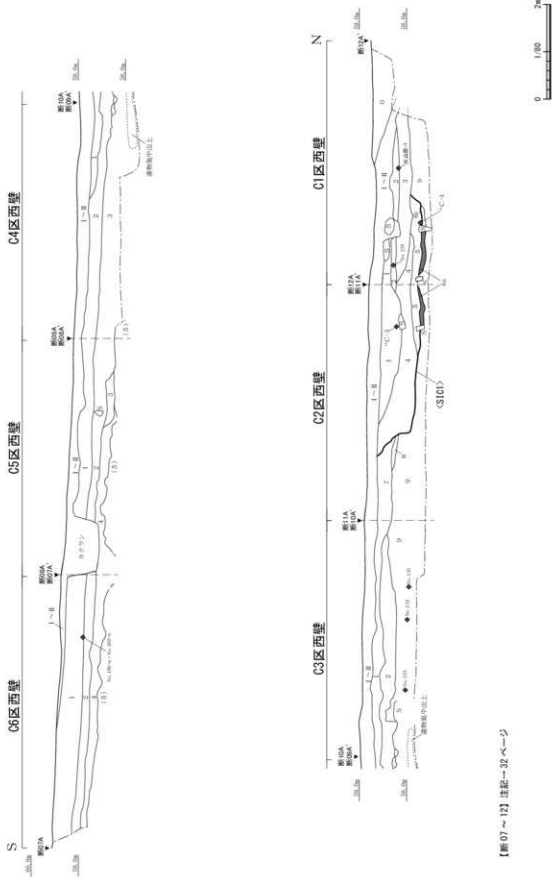
B2区



【附 06】

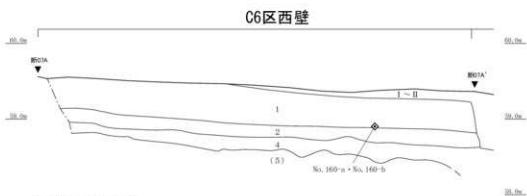
◆B区西壁

- 0 10YR3/2.2/3 黒褐色 シルト 粘性弱、しまり密、白色細礫（風化花崗岩粒、径5-15mm）やや多、南部（図左）では下部に大礫（径20-30cm）集中、土部小片・炭粒極微、〔旧地表層より現代客土層〕
- 1a 10YR3/2 黒褐色 シルト 粘性弱、しまり中、上部に森林腐植土層、〔旧表土層〕
- 1b 2層の崩落再堆積層、〔旧表土層下部〕
- 1c 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、1a層土ブロック・地山ブロック少、〔根拠乱〕
- 1d 10YR3/2.3/3 黒褐-暗褐色 シルト 粘性弱、しまり中、白色火山灰ブロック（径10-50mm）やや多、〔3層の被覆乱部〕
- 1e 10YR3/3 暗褐色 シルト 粘性弱、しまり中、地山ブロック・10YR2/2黒褐色シルトブロック（径20-30mm）少、〔根拠乱か〕
- 1f 10YR3/3 暗褐色 シルト 粘性中、しまり中、1eに似るが10YR2/2黒褐色シルトブロックやや多、7層（PPB3埋土）にも似る、〔根拠乱か〕
- 2 10YR3/3.2/3 暗褐-黒褐色 シルト 粘性弱、しまり中、〔自然堆積の旧表土層〕
- 3 10YR7/4 にぶい黄褐色 シルト（火山灰） 粘性やや弱、しまりやや密、層状に厚く堆積するが全体に根拠乱目立つ、
- 4 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性やや強、しまりやや密、
- 5 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、地山ブロック（径10-30mm）やや多、〔6層を切るビット（PPB1）埋土〕
- 6 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、下面に沿って水平方向につぶれた地山ブロックがみられる（住居跡床面か）
- 7 10YR3/3.3/4 暗褐色 シルト 粘性弱、しまりやや疎、〔PPB3埋土〕

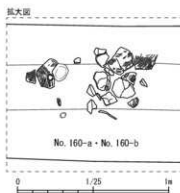
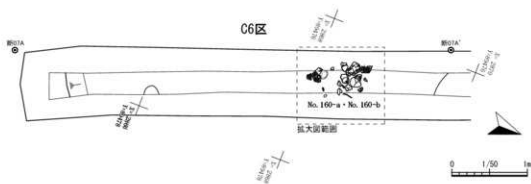


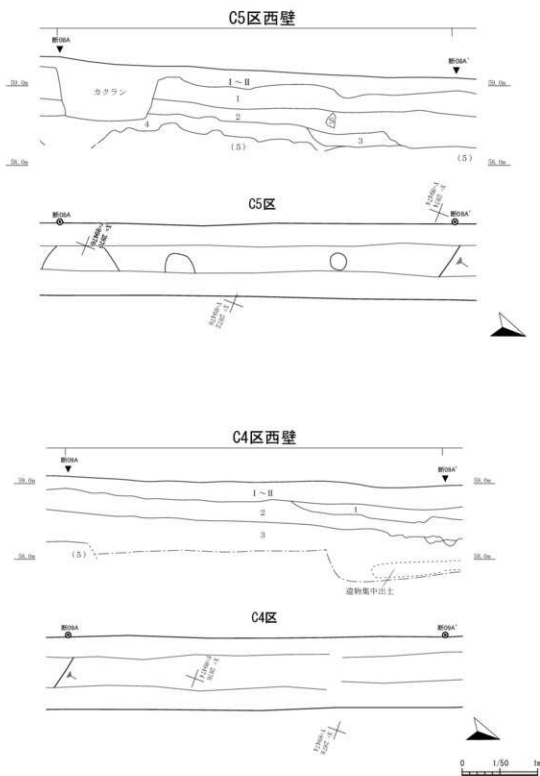
第12図 C区西壁断面全体図

【新07-12】 透視-32ページ



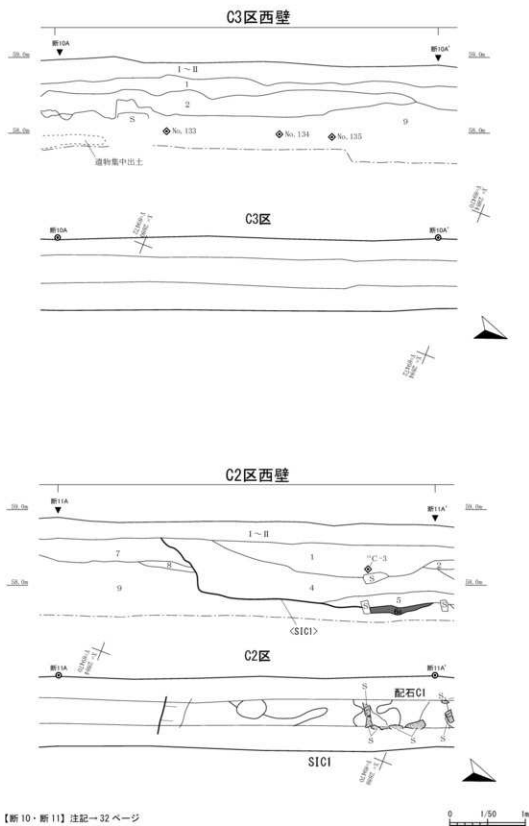
【新07】注記→32ページ



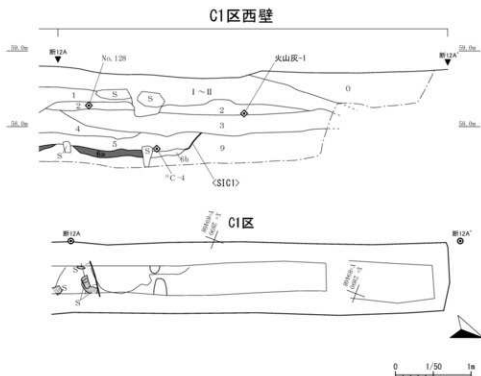


【断08・断09】 注記→32ページ

第14図 C区分割図(2)



第15図 C区分割図(3)



【断07・断08】

◆CS・6区西壁

- 1 断09・10・2層
- 2 断09・10・3層
- 3 10YR2/2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、地山土ブロック（径10-20mm）散。マサ土は含まずVより明るい土層。
- 4 10YR2/2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、マサ土含まない、3層のベースとなる土層。
- (5) 10YR4/6 粘土 粘性やや強、しまりやや密、花崗岩細片（径5-10mm）散、地山土層。

【断09・断10】

◆C3・4区西壁

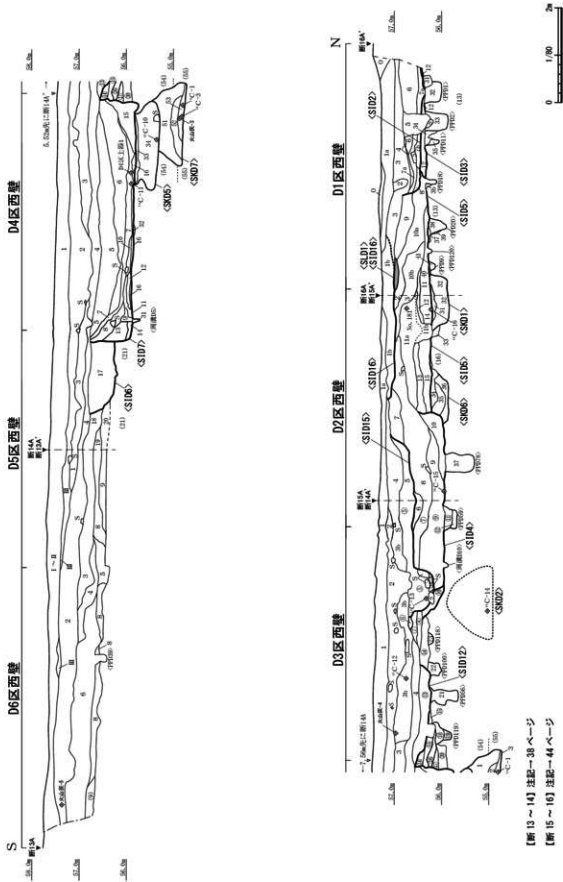
- 1 断11・12・7層
- 2 10YR2/1 黒色 シルト 粘性やや強、しまり中、下部～下面に角礫（花崗岩）点在、黒味強い層、Ⅲ相当か。
- 3 断11・12・9層

【断11・断12】

◆C1・2区西壁

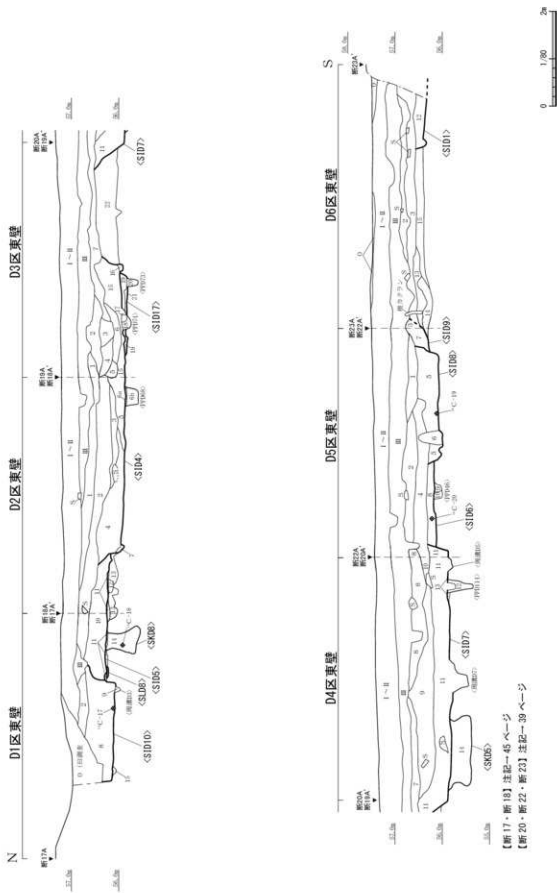
- 1 10YR2/1 黒色 シルト 粘性やや強、しまりやや密、炭小片（径5-10mm）散（目立つ）、土器片比較的多く含む。下部に角礫（花崗岩・径10-15cm）点在、Ⅲ相当か。
- 2 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性やや強、しまりやや密、炭粒（径5-10mm）散、下面に沿って火山灰様灰白色ブロック（径10-30mm）やや多。
- 3 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、マサ土（径2.5mm）極微、4層に比して黒味ありマサ土混入少ない。
- 4 10YR2/2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、マサ土（径2.5mm）散、V相当、住居跡埋土。
- 5 10YR2/2/3 黒褐色 粘土質シルト 粘性やや強、しまり中、が跡を直に覆う住居跡埋土。
- 6a 5YR5/6/4/6 明赤褐・赤褐色 シルト（焼土） 粘性やや強、しまりやや密、多跡焼土。（石囲いあり）。
- 6b 10YR4/6 褐色 シルト（地山土）ブロック層 人為層、住居床面またはが跡築土の一部か。
- 7 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、マサ土（径2.5mm）散、下部は地山土含む明るくなる、遺構埋土か。
- 8 10YR5/4/5/6 に近い黄褐・黄褐色 粘土質シルト（地山土）ブロック層 人為層、遺構に伴うか。
- 9 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性やや強、しまり中、マサ土極々微、V層土に比して少ない。

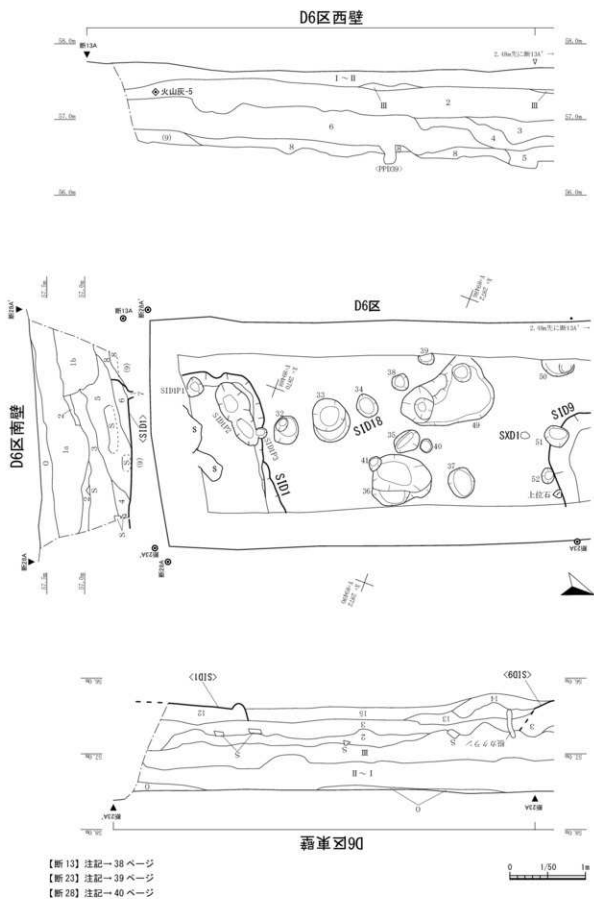
第16図 C区分割図(4)



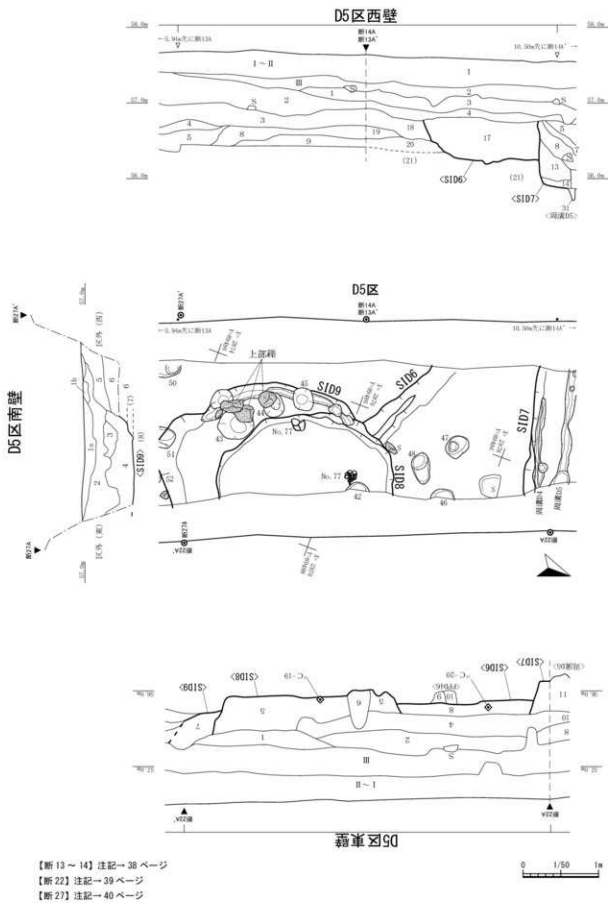
第17図 D区西壁断面全体図

【断13～14】注記→38ページ
 【断15～16】注記→44ページ

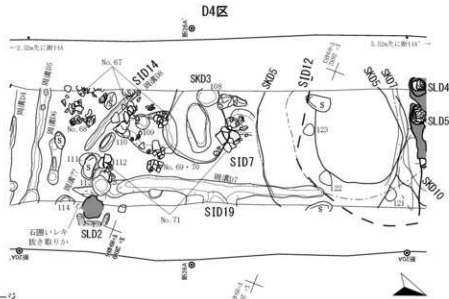
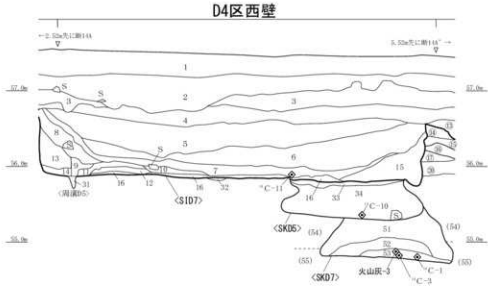




第19図 D区分割図(1)

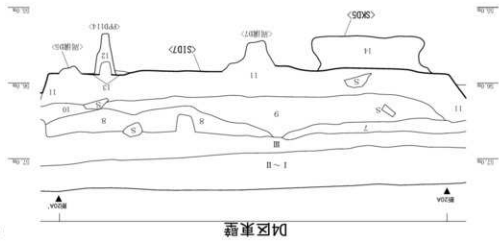


第20図 D区分割図(2)

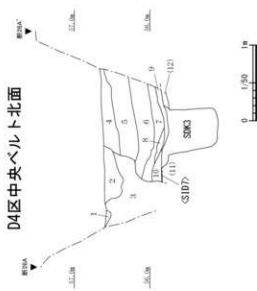


【断 14】注記→38 ページ

【断 20】注記→39 ページ



第21図 D区分割図(3)



【断13】

◆D5・6区西壁

- 1-Ⅱ 断14-1層
- Ⅲ 断14-2層
- 1 断14-3層
- 2 断14-4層
- 3 断14-18層
- 4 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、7.5YR3/2黒褐色シルトブロック（径30.50mm）やや多、全体に赤味帯びやや粉っぽい層。
- 5 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、地山土ブロック少、マサ土（径2.5mm）極々微。
- 6 10YR2/2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまりやや密、マサ土（径2.5mm）微量だが目立つ、V層相当。
- 7 (欠)
- 8 断14-16層 漸移層上位の暗褐色粘土質シルト層、マサ土をほとんど含まない。
- (9) 断14-20層 漸移層

【断14】

◆D3・4・5区西壁

- 1 I・Ⅱ相当
- 2 Ⅲ相当
- 30 断15-4層
- 4 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまりやや密、マサ土（径1.5mm）微、Ⅳ下部-V相当。
- 5 10YR2/2/3 黒褐色 シルト 粘性やや強、しまりやや密、マサ土（径1.5mm）極微、土器片・炭（径2.10mm）・礫（5-10cm）・焼土小塊含む、上下位層より黒味強。
- 6 10YR3/3/2/3 暗褐色-黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、土器片・炭（径5-10mm）・礫（径5-10cm）含む、地山土小塊（径20-30mm）全体に少量含む、5層土に地山土塊含む層、上下位層より明るい。
- 7 10YR2/2/3 黒褐色 シルト 粘性やや強、しまり中、5・6層に似るが炭混入多く黒味強い。
- 8 10YR3/3/2/3 暗褐色-黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、6に似るが土器・炭含まない。
- 9 10YR3/3/2/3 暗褐色-黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、8によく似るが炭粒極微含む、周溝D5から直立する土層。
- 10 8層によく似る（同層か）。
- 11 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、地山土小塊（径5-10mm）少。
- 12 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、地山土小塊（径5-20mm）やや多（11層に似るが地山土の混入がより多い）。
- 13 10YR2/2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、地山土小塊極々微、17層に似るが地山土含みや明るい、17層土の崩落土塊を含む。
- 14 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性やや強、しまり中、混入物なく黒味強い土層。
- 15 10YR2/2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、地山土小塊極々微、13層に似るがやや明るい（17層土を含まないため）。
- 16 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性中、しまり極密、地山土小塊が水平方向につぶれ薄層をなして挟在する、床面積層土。
- 17 10YR2/2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまりやや密、マサ土（径2.5mm）微、炭粒極微、19層土塊（径5-10cm）微、18層土に19層土塊の入る層。
- 18 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性中、しまりやや密、マサ土（径2.5mm）極微、V層の下部に想定される黒味強い自然堆積層か。
- 19 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、マサ土（径1.2mm）極々微、20層上部のやや暗い部分に相当。
- 20 10YR3/3 暗褐色 粘土質シルト 粘性やや強、しまりやや密、漸移層。
- (21) 10YR5.6/5.8 黄褐色 シルト 粘性やや強、しまりやや密、地山土層。
- 22-30 (欠番)
- 31 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまり密、地山土ブロック（径10.20mm）大量、住居跡周溝（周溝D5）埋土。
- 32 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまりやや密、地山土ブロック（径5-10mm）極微、SID7床面に切られる古期住居の掘方埋土。

第22図 D区分割図(4)

- 33 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまり極密、地山土ブロック (径5-20mm) 少、地山土ブロックは水平方向につぶれている、床面構築土だが下位土坑 (SKD5) の範囲が広く入っている。
- 34 土坑 SKD5 埋土
- 51 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、マサ土 (径1.5mm) 微、炭粒 (径5-10mm) 微
- 52 10YR2/2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、マサ土 (径1.2mm) 極微、白色火山灰ブロック (径20-50mm) 点在、中層か。
- 53 10YR2/2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、マサ土 (径1.2mm) 極微
- (54) 10YR4/6 褐色 砂 粘性弱、しまり中、地山砂層、全体に赤味、下位 (55層) より粗い。
- (55) 10YK5-6.6.6 黄褐、明黄褐色 粗砂 粘性弱、しまりやや密、地山砂層、白っぽく上位 (54層) より細粒。
- ⑤ 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、マサ土 (径1.2mm) 極微 (下位層に比してずっと少ない)、土器片・花崗岩 (径5-10cm)・炭 (径2.5mm) 各微量、住居跡 SID15 埋土。
- ⑥ 75YR4/4-6 褐色 シルト (硬土) 粘性やや強、しまり中、上面の硬化は見られない。
- ⑦ 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、マサ土 (径2.5mm) 極微、炭小片 (径10-15mm) 極微、4層に似るが炭含まわずかに黒味帯びる。
- ⑧ (土坑 SKD2 の上部に連続して進入する砂層)
- ⑨ (= 新15-9層に同じ)
- ⑩ 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまりやや密、地山土ブロック (径20-50mm) やや多、土坑 SKD2 の上部埋土の一部。
- ⑪ 10YR2/2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまりやや密、地山土ブロック (径10-20mm) 少、炭粒 (径2.5mm) 極微、PPD69 埋土上部。
- ⑫ 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性中、しまりやや密、PPD69 埋土。
- ⑬ 10YR2/2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまりやや密、マサ土 (径1.2mm) 微。
- ⑭ 55層土に地山土ブロック少、全体やや黄味。
- ⑮ 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘土質シルト 粘性やや強、しまり中、土器埋設印を覆う層。
- ⑯ 土器埋設印 SLD4 焼土層 (個別断面図あり)
- ⑰ 55層に良く似る
- ⑱ 55層に良く似る (阿層か)
- ⑲ 58層に似るがより黒味強い。
- ⑳ 10YR2/1 黒色 シルト 粘性やや強、しまりやや密、地山土ブロック (径10-20mm) やや多、認識できなかった土坑埋土か。
- ㉑ 10YR2/1 黒色 シルト 粘性中、しまりやや密、地山土ブロック (径10mm) やや多、PPD21 埋土。
- ㉒ 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまりやや密、地山土ブロック (径10-30mm) 多、PPD100 埋土。
- ㉓ 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性中、しまり密、PPD118 埋土。

【新19-新20】

◆D3-4区東面

- 1 新17-18-1層
- 2 10YR2/1 黒色 シルト 粘性やや強、しまりやや密、土器細片微、角礫 (径5-10cm) 微、層厚土主体。
- 3 10YR4/6 褐色 シルト (地山土) ブロック層、粘性中、しまり中、人為層。
- 4 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、炭粒 (径2.5mm) 極微。
- 5 10YR2/2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、マサ土 (径2.5mm) 極微。
- 6 10YR2/2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまりやや密、上面に焼土生成 (平面では未確認)。
- 7 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性中、しまりやや強、マサ土 (径2.5mm) 極微、角礫 (径5-10cm) 極微、全体黒っぽく粉っぽい、Ⅱ下部～Ⅳ相当。
- 8 7層に類似、阿層か。
- 9 10YR2/2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、マサ土微、角礫 (径5-20cm) 少 (7-8層より多)、炭粒 (径5-10mm) 極微、土器片多く含む、7-8層よりやや明るい。
- 10 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性やや強、しまりやや密、マサ土 (径1.2mm) 極微、土器小片極微、9に似るが粉っぽくない層。
- 11 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性やや強、しまりやや密、マサ土 (径2.5mm) 微 (目立つ)、炭粒 (径2.5mm) 微、土器片含む、Ⅴ相当土、住居跡 SID7 埋土。
- 12 10YR2/2/3 黒褐色 シルト 粘性やや強、しまりやや密、地山土ブロック (径20-30mm) やや多、PPD114 の掘方埋土。
- 13 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまり極密、地山土ブロック (径10-20mm) やや多、住居跡構築土。
- 14 土坑 SKD5 埋土 (個別断面図あり)、この上部を SID7 床面構築土が覆っている。
- 15 新17-18-5層 住居跡 SID4 埋土。
- 16 15層に地山土ブロック (径10mm) やや多。
- 17 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまりやや密、地山土ブロック (径5-10mm) 多、Pir 埋土。
- 18 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、Pir 埋土。
- 19 10YR2/3 黒褐色 粘土質シルト 粘性やや強、しまり密。
- 20 10YR2/3 黒褐色 粘土質シルト 粘性やや強、しまり密、地山土ブロック (径10-20mm) 少。
- 21 10YR2/3 黒褐色 粘土質シルト 粘性やや強、しまり極密、地山土ブロック (径10-20mm) 多、住居跡 SID17 床面構築土。

【新22-新23】

◆D5-6区東面

- 0
- I ~ II
- III
- 1 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、マサ土 (径2.5mm) 微、炭粒 (径2.5mm) 極微、2層に似るがやや黒味帯び層に近い、Ⅱ層下部～Ⅴ層相当。
- 2 新19-20-8層
- 3 1層に良く似る。阿層か。
- 4 新19-20-10層
- 5 10YR2/2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、地山土ブロック (径20-50mm) 全体に少量含む、炭粒 (径2.5mm) 極微、住居跡埋土 (個別断面図あり)、人為埋め戻し層。
- 6 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性やや強、しまり中、土器細片・炭粒 (径5mm) 極微、柱穴状の凹部から延びる柱根状。
- 7 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性やや強、しまりやや密、マサ土 (径2.5mm) 極微。
- 8 5層住居跡 SID8 に切られた別の住居跡の可能性あるが立ち上がり不明瞭。
- 9 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性中、しまりやや密、土器片含む、5層住居跡 SID8 及び11層住居跡 SID7 に切られる住居跡 SID6 埋土。
- 10 11層・5層に比して最も黒味強い。
- 11 10YR2/3 黒褐色 粘土質シルト 粘性やや強、しまりやや密。
- 12 10YR2/3 黒褐色 粘土質シルト 粘性やや強、しまりやや密、地山土ブロック (径5-10mm) やや多。
- 13 新19-20-11層

1 概要

- 12 S1D1埋土
13 10YR3/3 暗褐色 粘土質シルト 粘性やや強、しまり密、14層より弱い。
14 10YR3/3.3/4 暗褐色 粘土質シルト 粘性やや強、しまり密。
15 10YR2/1.2/2 黒・黒褐色 粘土質シルト 粘性やや強、しまりやや密、下部明るくなり地山に連続する。

【所 26】

◆D4区中央ベルト北面

- 1 10YR2/1 黒色 シルト 粘性中、しまりやや疎、Ⅲ相当。
2 10YR3/3.2/3 暗褐色 黒褐色 シルト 粘性中、しまりやや疎、マサ土（径1.5mm）微、10YR7/4.6/4にふい黄褐色火山灰ブロック（径10-30mm）少、Ⅳ相当か。
3 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性中、しまりやや密、マサ土（径1.5mm）極々微、土器大片・礫（径10-20cm）含む、4層土に土器・礫を含む前期遺構（土坑か）埋土。
3b 層15-4層
4 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性中、しまり密、マサ土（径1.5mm）微。
5 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性中、しまりやや密、マサ土（径1.5mm）微、土器小片・小礫極微、4・6層より黒味強。
6 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性やや弱、しまり中、マサ土（径1.5mm）極微、地山土塊（径5-20mm）微。
7 炭粒（径5-10mm）極微、粉っぽく7層に似るが地山土含み明い。
7 10YR2/2.2/3 黒褐色 シルト 粘性弱、しまりやや疎、炭粒（径10mm）少、取目立ち6・8層より黒味強い。
8 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性弱、しまりやや疎、6層に良く似るが地山土塊をより多く含み明い。
9 10YR2/2.2/3 黒褐色 シルト 粘性弱、しまり疎、7層に良く似るが灰含まない、下位のビット埋土か。
10 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまりやや密、7.5YR3/2黒褐色シルトブロック（焼土含むか）の混入により全体にやや赤味。
(11) 10YR5/6.5/8 黄褐色 シルト 粘性中、しまり密、地山黄褐色土層を切る床面。
(12) 10YR2/2 黒褐色シルトと11層（地山）土の混土層、住居床面構築土、上面硬化顕著。

【所 27】

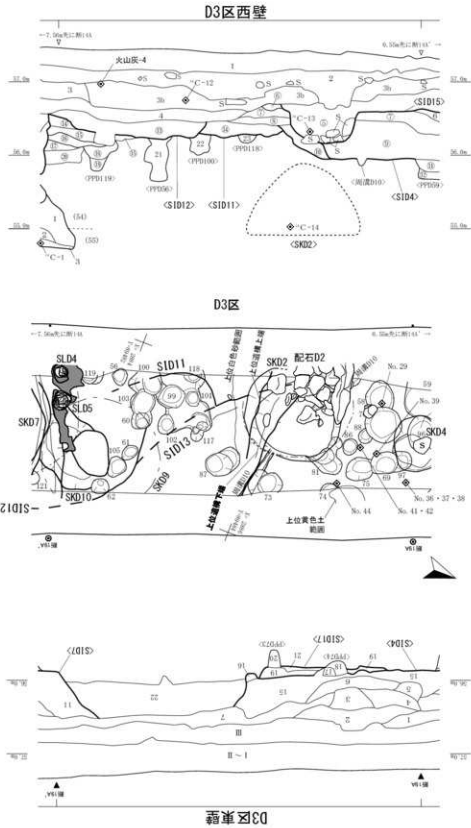
◆D5区南面

- 1a 10YR2/2.2/3 黒褐色 シルト 粘性やや弱、しまりやや疎、マサ土（径1.5mm）極微、粉っぽく乾きやすい、Ⅳ相当。
1b 10YR4/4.5/6 褐・黄褐色 シルトブロック層、粘性やや弱、しまりやや疎、Ⅴに含まれる黄褐色ブロック、火山灰か。
2 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、マサ土（径1.2mm）極々微、上下位層に比して黒味強い。
（面に似るがV下部に想定されるマサ土混入の少ない暗色土層に相当するか要検討）
3 10YR3/4.2/3 暗褐色 黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、マサ土混入目立つ、地山土を多く含む、S1D8内の人為層。
4 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性やや強、しまりやや密、マサ土（径1.5mm）極微、炭粒（径5mm）極微、土器小片微、5層土を主体とする、S1D8床直層。
5 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性やや強、しまりやや密、マサ土（径1.5mm）極微。
6 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまりやや密、マサ土（径1.2mm）極々微。
(7) 10YR5/4.4/6 におい黄褐・褐色 粘土 粘性やや強、しまりやや密、漸移層—地山上部相当。
(8) 地山黄褐色土。

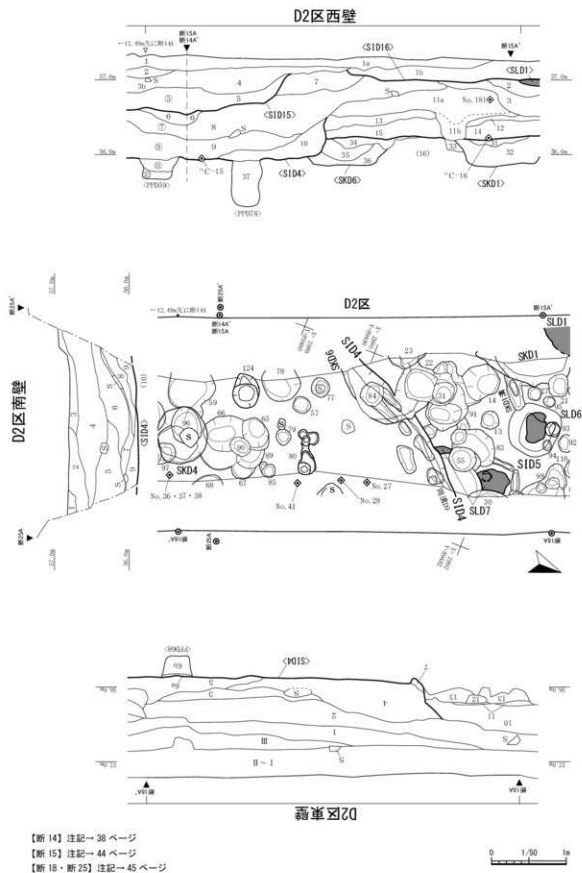
【所 28】

◆D6区南面

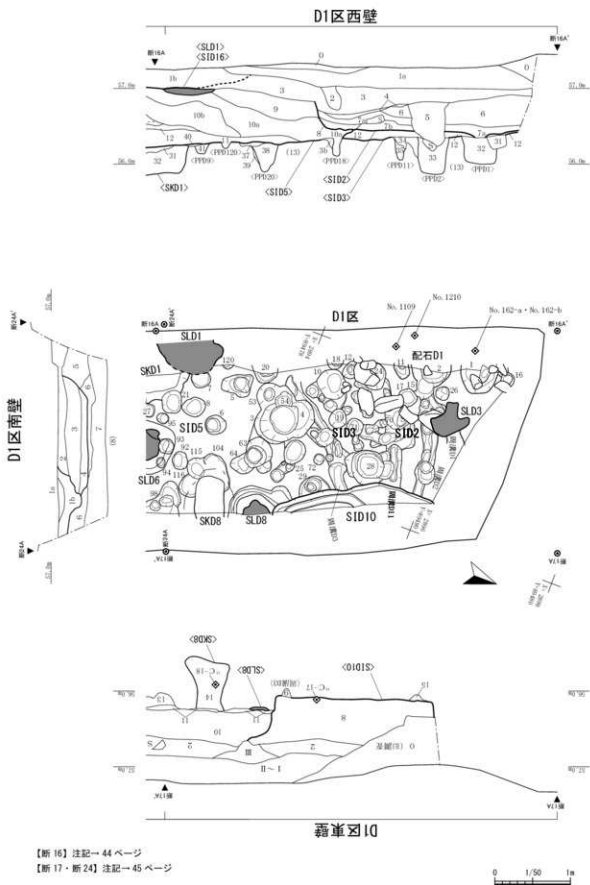
- 0 現代客土（盛土）
1a 10YR3/1.2/2 黒褐色 シルト 粘性中、しまり強、マサ土（径2-10mm）少、土器細片微、I・Ⅱ相当またはその再堆積層。
1b 10YR3/1.2/2 黒褐色 シルト 粘性中、しまり強、1a層に似るが2・3・5層土のブロックを含む、土坑状の擾乱。
2 10YR2/1.2/2 黒・黒褐色 シルト 粘性やや強、しまり中、土器小片含む、黒味強い層、Ⅲ相当か。
3 10YR3/2.2/2 黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、マサ土（径1.2mm）極々微、粉状の白色土を全体に含む（火山灰か）、Ⅳ相当。
4 7.5YR3/2.3/3 黒褐・暗褐色 粘土質シルト 粘性やや強、しまり中、マサ土（径1.5mm）極微、全体に赤味あり、炭粒微量含む、S1D1北側壁面からやや張り出す別の掘り込みか。
5 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性中、しまりやや密、マサ土（径2.5mm）極微、炭粒（径5-10mm）極々微、土器小片わずかに含む、下面に大型礫（径50cm前後）入る。
6 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、マサ土（径1.2mm）極々微（ほとんど含まない）、炭粒（径5-10mm）微、8層に似るが黒味強、S1D1床直層。
7 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、地山（9層）土塊やや多、S1D1柱穴面方埋土。
8 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、マサ土（径1.2mm）極々微（ほとんど含まない）、9層との層界は漸移的、V層下部に相当するマサ土含まない自然堆積層。
(9) 10YR4/6 褐色 粘土質シルト 粘性やや強、しまりやや密、地山土層。



第23図 D区分割図(5)



第24図 D区分割図(6)



第25図 D区分割図(7)

1 概要

【附 15】

◆D2区西壁

- 1a 断 16-1a 層
1b 断 16-1b 層
2 断 16-10a 層
3 断 16-10b 層
4 10YR2/2-3 黒褐色 シルト 粘性中、しまりやや密、マサ土 (径 1-5mm) 微、炭細片 (径 5-10mm) 微、土器細片・角礫 (径 5-15cm) 目立つ。
黒色土ブロック少量含み全体に黒味帯び粉っぽい印象。IV層下部相当か。
5 10YR2/2-3 黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、マサ土 (径 1-2mm) 極微、炭粒 (径 2-5mm) 極微。
土器細片・角礫 (径 5-20cm) 極微。4によく似るが黒色土ブロック含まずやや明るい。
6 10YR4/4-4 褐・暗褐色 粘土質シルト 粘性やや強、しまり中、地山土塊 (径 10-50mm) やや多、SID4の上部に入る人為層。
下面に土器集中。
7 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性やや弱、しまりやや密、マサ土 (径 1-5mm) 微。
8 10YR2/2-3 黒褐色 シルト 粘性中、しまりやや密、マサ土 (径 1-10mm) 微。7によく似るがやや暗い。
下部、特に床面付近 (D2区南西側) では木炭小片多く土器等の遺物が集中。
9 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまりやや密、マサ土 (径 1-5mm) 微。地山土を全体に含み上下位層に比し明るい。
住居中付近では床面を主に覆う。
10 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性中、しまりやや密、マサ土 (径 1-5mm) 極微、炭粒 (径 1-5mm) 極微。壁際に厚く堆積する床直層。
11a 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性中、しまりやや密、マサ土 (径 1-2mm) 極々微、10層に似る (本層の崩落土が10層か)。
11b 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、マサ土 (径 1-2mm) 極々微、11a層に木炭小片 (径 10-20mm) を含む層。
12 10YR4/3-4 に近い黄褐・暗褐色 砂質シルト 粘性弱、しまり中、火山灰様の砂質土層、マサ土含まない。
13 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、褐色砂質土塊 (12層由来か) を全体に小量含む。
14 断 16-11層
15 14によく似るが北側ほどマサ土 (径 2-10mm) を多く含む。
(16) 地山黄褐色土
17~30 (欠番)
31 10YR2/2-3 黒褐色 シルト 粘性中、しまりやや密、地山土ブロック (径 5-30cm) やや多、炭小片 (径 20-30mm) 少 (目立つ)。
上面が住居床面。
32 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、マサ土 (径 2-5mm) 微、地山土小ブロック (径 10mm) 極々微、土塊埋土。
33 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまり密、地山土小ブロック (径 10mm) 微、32層より地山土ブロック多いが、同一土塊埋土とみられる。
34 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまりやや密、全体に地山土少量含みやや黄味帯びる。住居床面構築土か。
35 地山土ブロック層、粘性やや強、しまりやや密、土塊上部の人為埋め戻し土。
36 10YR2/3-3 黒褐・暗褐色 シルト 地山土ブロック (径 10-20mm) 底面付近に微量、土塊埋土。
37 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまりやや密、地山土ブロック (径 10-30) 多、ビット埋方埋土 (柱痕は見えない)。

【附 16】

◆D1区西壁

- 0 現代客土 (造成盛土)
1a 10YR2/2-3 黒褐色 シルト 粘性中、しまり密、花崗岩粒 (径 2-10mm) 少、花崗岩 (径 5-10cm) 極微、炭細片 (径 2-10mm) 極微、土器細片極微。【I-II相当】
1b 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性やや弱、しまり密、1aに小礫やや多、(SLD1の上面に接するが被覆するか本層下面が切れるか不明)
2 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、花崗岩粒 (径 1-2mm) 極微、土器小片含む。(Pit埋土)
3 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまりやや密、花崗岩粒 (径 1-10mm) 少、炭粒極微、1・9に比し明るい。
4 10YR2/2 子褐色 シルト 粘性中、しまり中、花崗岩粒 (径 1-10mm) 極微、白色火山灰ブロック少。
5 10YR2/2-3 黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、花崗岩粒 (径 1-10mm) 微、土器小片・礫 (径 5-10cm) 少、Pit埋土。
6 10YR2/2-3 黒褐色 シルト 粘性中、しまりやや密、花崗岩粒 (径 1-5mm) 極微、炭粒 (径 5-10mm) 極微。
7a 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性やや強、しまり中、花崗岩粒 (径 1-5mm) 極微、炭小片・炭粒 (径 5-20mm) 少 (目立つ)。
7b 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性やや強、しまり中、花崗岩粒 (径 1-2mm) 極々微、7a層に比して炭の入らぬ部分。
8 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性やや強、しまり中、花崗岩粒 (径 1-2mm) 極々微、炭細片 (径 5-15mm) 微 (7aに似るが炭少ない)。
焼土ブロック (径 5-10mm) 極微、炭片・土器片は下面に集中。
9 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性中、しまりやや密、花崗岩粒 (径 2-20mm) 少 (3より少ない)、炭小片含む。
10a 10YR3/2-3 黒褐色 シルト 粘性中、しまりやや密、花崗岩粒 (径 1-5mm) 微。
10b 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性やや強、しまり中、10aに似るが全体に地山土ブロックを含み明るい、10aとの層界は不明瞭。
古い根拠等の可能性。
11 10YR2/2-2 黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、花崗岩粒 (径 1-5mm) やや多、炭細片 (径 5-20mm) 微 (目立つ)、SID6床直層。
12 10YR3/3-2 暗褐・黒褐色 シルト 粘性中、しまりやや密、花崗岩粒 (径 1-5mm) 極微、地山土ブロック (径 5-30mm) やや多、SID3床直層。
(13) 10YR5/6-5 黄褐色 シルト粘性やや強、しまりやや密、地山土層。
14~30 (欠番)
31 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまりやや密、地山土ブロック大量、ほぼ同ブロック層。
32 10YR2/2-3 黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、地山土ブロック下半部に多量、上半部に炭小片 (径 5-10mm) 微。
33 10YR2/2-3 黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、地山土ブロック (径 10-20mm) 微。
5層より明るいが一連のビット埋土の可能性高い (掘方埋土)。
34 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまりやや密、地山土ブロック (径 10-20mm) 少、全体に黄味、人為層。
35 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまり中。
36 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまりやや密、全体に地山土少量含み黄味帯びる、人為層。
37 10YR3/3 暗褐色 シルト 粘性中、しまり密、地山土全体に多量含み黄味、床面構築土。
38 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、Pit埋土。
39 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまりやや密、地山土ブロックやや多、Pit掘方埋土。
40 10YR3/3 暗褐色 シルト 粘性中、しまり密、床面構築土。
41 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性中、しまりやや密、Pit埋土。

SLD1印跡 5YR6/8-5 橙・明赤褐色 シルト (焼土) 粘性中、しまりやや密、上部ほど赤味強い。

【断17・断18】

◆D1・2区東面

- 1 10YR2/1 黒色 シルト 粘性やや強、しまりやや密、角礫（径5-10mm）少、Ⅲ層下部相当（Ⅲより僅かに明るい）。
- 2 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、土器片・角礫（径10-20mm）多く含む、炭小片（径10-20mm）微（下部に多）、Ⅲ～Ⅳ相当か。
- 3 10YR3/2.3/3 黒褐-暗褐色 シルト 粘性中、しまりやや強、全体に地山小ブロックを少量含む2層より明るい。
- 4 10YR2/2.3 黒褐色 シルト 粘性中、しまり密、マサ土（径2.5mm）微、土器片・炭粒（径2.5mm）極微、V層土主体。
- 6 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまり密、地山土少量含む明るい、V層土主体。
- 6a 10YR3/2 黒褐色 シルト 粘性中、しまり密。
- 6b 10YR2/2.3 黒褐色 シルト 粘性中、しまり密、炭粒（径5mm）極微、住居床面構築土に被覆されたFit埋土。
- 7 10YR2/2.2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、住居北壁側壁面構築物（壁溝等）の埋土か、地山土ブロック（径10-20mm）少。
- 8 10YR2/2.2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまり密、マサ土（径2.5mm）微（下部に多）、土器小片を中～上部に含む、V層土主体。
- 9 10YR2/2.2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまりやや密、8層上に地山土ブロック少量含む、壁溝状の小溝埋土。
- 10 10YR2/2.2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまり密、マサ土（径2.5mm）微、4・10層に良く似る（重複部はマサ土混入量比で分離）。
- 11 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性やや弱、しまり極密、地山土ブロック（径5-10mm）少、床面構築土とみられる。
- 12 10YR3/2.3/4 暗褐色 シルト 粘性中、しまり中、11層に被覆される形跡の中石痕跡。
- 13 10YR3/2.3/3 暗褐色-黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、地山土を全体に含む明るい、先行住居跡の掘方埋土等か。
- 14 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性やや強、しまり中、地山土ブロック（径10-50mm）極々微、フラスコ土坑埋土。
- 15 10YR3/4 暗褐色 シルト 粘性やや強、しまり中、地山土ブロック層、8層住居に先行する住居の周溝埋土。

SLD8 5YR4/6 赤褐色 シルト（焼土）粘性やや強、しまり極密、がっちりとした焼き締まった焼土。

【断24】

◆D1区南面

- 1a 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性やや弱、しまり中、火山灰ブロック多、Ⅲ・Ⅳ相当か。
- 1b 10YR2/1.2/2 黒-黒褐色 シルト 粘性やや強、しまり中、花崗岩粒ほとんど含まない、Ⅲ層相当土主体。
- 2 断16-10a層
- 3 10YR2/2.2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまりやや密、花崗岩粒（径2.5mm）微、土器細片・炭粒（径2.5mm）極微。
- 4 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、花崗岩粒極々微、炭小片（径2-10mm）少（目立つ）。
- 5 断16-10b層
- 6 断16-10a層下部に似る。
- 7 断16-11層（SID6床直層）
- 8 断16-13層（地山）

【断25】

◆D2区南面

- 1 断15-1a層、Ⅰ・Ⅱ相当。
- 2 10YR2/1.2/2 黒-黒褐色 シルト 粘性中、しまりやや強、マサ土（径1-2mm）極々微、土器片含む、Ⅲ相当か。
- 3 断15-4層、Ⅲ相当か。
- 4 断15-5層
- 5 10YR2/2.2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまりやや密、マサ土（径2.5mm）微、4層に似るが6層に含まれる地山土を微量含むやや明るい。
- 6 断15-6層
- 7 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性やや強、しまりやや強、炭小片（径5-10mm）少、8層に似るが炭より多く暗い、遺物集中面。
- 8 断15-8層
- 9 断15-9層、SID4床直層、炭小片（径5-10mm）微（目立つ）。
- (10) 地山黄褐色土

2 遺 構

(1) 竪穴住居跡

〔A区〕

SIA1住居跡 (第26図、写真図版21)

〔位置・検出状況〕 A3区に位置する。同区の掘り下げを進める過程で、土器の大形破片等が面的に集中する地点として認識した。その後、現地表下100cm付近に到達したところで、地山Ⅶ層土からなる平坦面が表れ、同面で石囲炉(SLA1)を確認したことから、竪穴住居跡と判断した。

〔形状・規模〕 同区は下幅が極めて狭小(30～40cm)のため情報は限定的で、平面形状は不明となっている。西側断面、断01-7層下面には420cm前後続く平坦面が観察される。

〔堆積状況〕(断01) 上記の通り、A3区北半～A2区南端部の平坦面を床面とすれば、これを被覆する断01-7層が住居跡埋土となる。本層はⅤ層相当の黒褐色土で、本層と同5・6層との層界には土器の集中がみられた。個体ごとに潰れたような出土状況を呈するが、床相当面からは30cm近く上位となる。同5・6層下面が本住居跡埋土を切るようにも解釈できることから、後続遺構の埋土である可能性がある。

〔壁・床面・柱穴など〕 極々緩く立ち上がる断01-7層南端が壁のようにも見えるが、その直下に石囲炉(後掲SLA1炉跡)があり、平面的な位置関係を考慮すると、壁面はさらに外側(南側)に想定せざるを得ない。床面はSLA1の北側に展開する平坦面がこれに相当するとみられ、当該炉跡から北に180cm程までの範囲には明らかな上面硬化が認められる。平坦面はさらに北に連続するが、この先に硬化範囲は広がらない。なお、精査範囲において柱穴その他の痕跡は検出できていない。

〔炉跡〕 住居跡想定の本拠としたSLA1炉跡が相当する。角礫(レンガ大の花崗岩)を円形に配した石囲炉であり、内部全面に赤褐色の焼土の生成が認められる。

〔重複〕 断01-5・6層(後続住居跡か)の下面に切られている。SLA1の構築面の下位には、先行遺構とみられる掘り込み(土坑か)を確認している。

〔放射性炭素年代測定〕 14C-7: 4410±30yrBP (埋土上部を切る遺物集中面、断01-6層下面)。

〔遺構の時期〕 出土遺物の年代観及び年代測定結果は縄文時代中期中葉を示している。層的事実から、これに先行する時期に帰属する可能性が高い。

〔出土遺物〕 第56図(以下、図版名を省略し掲載遺物番号のみ記載する)1～4は、上記5・6層下面の出土土器である。また遺構外出土扱いとしている121・122もまた同面の出土である。6層相当層からは、石鏃(1015・1019・1057・1064・1067)、石匙(1100)が出土している。

〔B区〕

SIB1住居跡 (第27図、写真図版9)

〔位置・検出状況〕 B2区に位置する。当区は厚い客土層に覆われており、その下位は被削平面に攪乱層が堆積する状態となっていた。これらの除去後に残存状況を精査したところ、わずかな範囲に平坦面と柱穴状ピット等が確認されたことから、住居跡の一部と判断したものである。

〔形状・規模〕 B2区西半部の南北両端付近に、床面らしい平坦面がわずかに残存するが、全体形状を推量することは難しい。よって形状・規模は不明である。

〔堆積状況〕(断06) 断06-2～4層は、改変(造成)以前の堆積状況をのこしている。旧表土(2層)の下

には、十和田中振テフラ(3層)の厚い堆積がみられる。この下位の黒色土(4層)はマサ土粒を含まず粘性の強い土層であり、層序的にはV層とVI層の間に位置づけられる可能性が高い。2～4層による土手状の高まりを境に、北側は切土で大きく失われ、南側は耕作関連と思われる面的な削削を受けている。このため本遺構の埋土はほぼ失われている。断片的に残存するのが5～7層で、6層が掘方埋土(床面構築土か)、5・7層が住居跡に伴う可能性のあるビット埋土である。

〔壁・床面・柱穴など〕 上記の通り、後世の改変により残存状況は極めて悪い。断06-6層には下面に沿ってつぶれた地山土ブロックが観察されることから、床面構築土の可能性が高い。またこれを切って上方から掘り込まれた柱穴状ビットPPB1・PPB3が本遺構に伴う可能性がある。床面の広がりやを考慮に入れば、北側の壁の立ち上がりは断面06中央の木根より手前に取まるはずだが、木根付近は攪乱が著しく、壁面の立ち上がりは確認できなかった。

〔炉跡〕 区内からは検出されなかった。

〔重複〕 なし(他の遺構の存否不明)。

〔遺構の時期〕 不明である。

〔出土遺物〕 出土遺物はない。

(C区)

SIC1住居跡 (第28図、写真図版21)

〔位置・検出状況〕 C1・2区に位置する。同区の掘り下げを進める過程で、遺物の出土がやや多い堆積層の落ち込みがみられる地点として認識した。その後、現地表下100cm付近に到達したところで、炉跡の可能性を持つ配石遺構(配石C1)を検出したことから、土層断面を精査し、住居跡の存在を確認したものである。

〔形状・規模〕 同区は下幅が極めて狭小(30～40cm)のため情報は限定的で、平面形状は不明となっている。西側断面、断11・12には490cm前後続く平坦面(4・5層下面)が観察される。

〔堆積状況〕(断11・12) 上記の平坦面及び配石D1を被覆する断11・12-4・5層が埋土と考えられる。本層はV層主体の黒褐色土で、自然堆積によるものとみられる。

〔壁・床面・柱穴など〕 断11-4層南端が南側壁面の立ち上がりである。下部はほぼ直立し、上部は崩落のため外反する。一方、北側壁面は断12-5層北端の立ち上がりが相当する。これらの層の下面が接する水平面が床面とみられ、同面には配石D2が構築されている。床面は、下位の堆積層である黒褐色土(断11・12-9層)面に設けられている。おそらく先行遺構の埋土であろう。このため地山土面を床面に持つ他の住居跡のそれに比して硬度は劣るものの、緻密で平滑な面が形成されている。柱穴等は区内では検出されなかった。

〔炉跡〕 配石C1とした礎配置を伴う構造物が、本住居跡の炉跡と考えられる。当初、焼土の生成を確認できなかったことから、炉機能を持つか否かの判断を留保していたが、断面等の再検討により燃焼行為の痕跡(弱い被熱変化)を見出した。後段「配石遺構」で別途記載する。

〔重複〕 断11-7・8層が先行遺構の埋土の可能性があり、これを切る状況を確認している。

〔放射性炭素年代測定〕 14C-3: 4.210±30yrBP (埋土中部、断11-1層下面)。14C-4: 4.260±30yrBP (埋土最下部、断12-5層下面、配石C1直上)。

〔遺構の時期〕 層位的事実や炉跡の形態、年代測定結果等から、縄文時代中期後葉と考えられる。

〔出土遺物〕 5・6は本遺構の所在する地点から出土した土器であるが、出土深度が遺構底面より下に相当することから、先行層位(断11-9層)に帰属するものと考えられる。すなわち縄文時代中

期前葉の土器を含む土層より本遺構が新しいことを示している。一方、本遺構埋土の上位を切る断12-2層からは128（縄文中期後葉）が出土している。このほかミニチュア土器(252)や、石斧及び未成品(1111・1117・1118・1123)、円礫片素材搔器(1139・1145)、敲磨器類(1181・1187・1194・1198)等の石器が出土した。

(D区)

SID1住居跡（第29図、写真図版22）

〔位置・検出状況〕 D 6区南端、平成26年度調査「南調査区」の北東部に接する地点に位置する。Ⅵ層下部～Ⅶ層面において、土器片・礫を含む黒褐色土範囲として検出した。

〔形状・規模〕 南側および東側が区外に延びているが、北西部にはほぼ直角のコーナーを有することから方形基調の平面形が想定できる。区内に表れたプランの規模は東西長190cm、南北長90cmで、検出面からの残存深度は25cm前後である。上記既往調査における「63号住」と連続するプランを有し、同一の遺構であることが明らかである。図上合成による南北壁間長は390cm前後となる。

〔堆積状況〕(断23・28) 断28-6・7層が本遺構の埋土で、5層以東は既往調査で重複が確認されている「51号住」の埋土の可能性が高い(断23-12層も同様)。北壁東部には壁面の乱れ(張り出し)が観察され、これが「51号住」の壁面の一部かもしれない。ただし底面は段差を持たずに連続して平坦に整っており、今次調査部分の観察では両者を区別するのは困難だった。5層は黒褐色土による自然堆積で、大形のものを含む花崗岩が点在する。6層も同じく自然流入土による堆積と判断したが、本層は既往調査では「人為堆積の可能性が高い」とされている。同一遺構内においても堆積状況に差異があった可能性がある。

〔壁・床面・柱穴など〕 床面は平坦に整い、壁際を除き上面には弱い硬化が広く認められる。壁面は削平により下部のみ残存し、わずかに外傾して直線的に立ち上がっている。北西隅付近の壁際には3個の小ピットが付属する(SID1-P1～3)。SID1-P1はしっかりとした掘方を持つ柱穴であるのに対し、他の2つは浅い掘り込みでプランが不明瞭な落ち込みであった。「63号住」では「壁際に列をなして12個」の柱穴が確認されており、今次検出の小ピットもこれに連続するものである。

〔炉跡〕 既往調査「63号住」床面では径80cm程の地床炉が確認されていた。今次、北側壁の検出により、当該炉跡が南北壁間の中央部に位置することが判明した。

〔重複〕 既往調査「63号住」と同一遺構。同「51号住」に切られているものとみられる。

〔遺構の時期〕 既報では縄文時代前期初頭～中葉の土器が出土し、「前期前葉～中葉大木2b式期」かつ「To-Cuより古い」とされている。今次調査の所見はこれと矛盾しない。

〔出土遺物〕 7は断28-5層から出土した土器で、縄文時代前期初頭に位置付けられる。このほか石鏃(1010・1017)円礫片素材搔器(1129)等が出土している。

SID2住居跡（第30図、写真図版23）

〔位置・検出状況〕 D 1区北部に位置する。同区掘り下げの過程で遺物・礫の集中面として認識したものである。この時点では平面プランを把握できず、さらに掘り下げを進めた段階で土層断面を検討し、堅穴住居跡であると判断した。

〔形状・規模〕 遺物等の分布面(床面相当)及び各方向の断面を検討したが、平面形状は把握できなかった。断16には南側壁の立ち上がりが認められ、水平な床面が北側に270cm延び、その先が区外へと続く。

〔堆積状況〕〔断16〕 上記、南側壁の立ち上がりは断16-8層下面で、同7b層は床面構築土あるいはその下面が床面に相当すると考えられる。土器片・炭化物・礫が集中するのは7b層直上を被覆する7a層である。全体に黒褐色土を主体とした自然堆積により埋没している。

〔壁・床面・柱穴など〕 壁は断面に観察されるのみである。わずかに外傾するが概ね直立に近い。遺物等の分布状況と土層断面から、床面は断16-7a・7b層の下面と推定した。下位遺構の埋土中に構築されたものであり、上面の硬化範囲は認められない。同面では柱穴・周溝等も認識できなかった。下位遺構(SID3住居跡等)の底面で検出した多数の柱穴等には、本遺構に帰属するものが含まれると考えられるが、特定できていない。

〔炉跡〕 床面に相当するとみられる断16-7a層下面において、SLD3炉跡を確認した。全体に根攪乱に乱され詳細不明だが、同面・同地点の配石D1(後掲)とともに炉跡を形成する可能性が高い。

〔重複〕 SID3住居跡・SID5住居跡に重複しこれを切っている。また層位的事実から、SKD1土坑・SKD6土坑より新しく、SLD1炉跡より古い。

〔遺構の時期〕 出土遺物の年代観と層位的事実から、縄文時代中期中葉～後葉と推定される。

〔出土遺物〕 8～17は床面上から一括で出土した土器である。このほか石斧の破片(1110)が出土した。

SID3住居跡 (第30図、写真図版24)

〔位置・検出状況〕 D1区に位置する。同区の掘り下げがⅤ層土(地山)に到達した時点で、水平に広がる平坦面として認識したものである。同区内には全面にわたってこの平坦面が広がっていたが、柱穴状ビット等の濃密な分布状況と、わずかな高低差が観察されたことから、複数住居跡(後掲SID5住居跡ほか)の重複と判断した。その後土層断面の観察所見をもとに検討し、一個の堅穴住居跡として分離したものである。

〔形状・規模〕 断16には南北230cmにわたって水平に延びる床面が観察され(後述)、同区北端部にはこれに連続する面に広がりが見られる。しかしながら壁の立ち上がりは断面・平面ともに見出すことができず、平面的な形状・規模は不明となっている。土層断面にみる残存深度(埋土層厚)は12cm前後である。

〔堆積状況〕〔断16〕 断16-12層が本遺構の埋土である。床面を直接覆う暗褐色土で地山土ブロックを含む。上位、SID2住居跡床面の直下にあるためか、全体に締まった土層である。SID2の床面構築土である可能性も考慮したが、本層下面が接する平坦面には明瞭な硬化が認められ、また同面に散見された被熱赤変部を明らかに被覆することなどから、上位SID2に先行する別個の遺構埋土と判断した。なおSID5との重複部は不明瞭であり、図示した先後関係とは異なる可能性がある。このことについては後述する。

〔壁・床面・柱穴など〕 上記の通り壁は残存せず、床面全体に明瞭な硬化が認められる。平成26年度「北調査区」との境界付近には被熱による不整形の赤変範囲が点在している。図示の通り、柱穴状ビット・周溝等を複数検出しており、これらのいずれかが本遺構に帰属する可能性があるが、特定はできていない。

〔炉跡〕 検出されなかった。

〔重複〕 SID2住居跡に切られている。また層位的事実からSLD1炉跡より古い。なお、断16において本遺構埋土12層がSID5埋土10a層に切られるように図示しているが、層界が不明瞭であり先後逆転または両者が一連の堆積層であった可能性がある。すなわち同9～10a・10b層が本遺構埋土の可能性

があることを付記しておきたい。

〔遺構の時期〕 出土遺物の年代観及び層位的事実から、縄文時代中期中葉と推定される。

〔出土遺物〕 埋土から出土した土器は18(a・b)～26である。このほか石鏃(1050)、石斧未成品(1113)、敲磨器類(1175・1193)等が出土した。

SID4住居跡 (第31・32図、写真図版25)

〔位置・検出状況〕 D2・D3区に位置する。当該区の掘り下げを進める過程で、堆積層が皿状に落ち込む範囲として認識した。その後地表下100cm前後まで進んだところで、遺物・炭化物等の混入が顕著な範囲が現れ、その南北端が凡そ把握されたことから、やや大形の住居跡の可能性があると判断し精査着手した。

〔形状・規模〕 当該区東側断面(断18・19)にみる南北壁間長は650cm、開口部からの残存深度は60cm前後である。全体形状は550×550cm前後の隅丸方形に近いものと推測され、上記の東側断面は遺構の四隅付近を摺掛けに通っているとみられる。

〔堆積状況〕(断14・15・18・19・25) 東側・西側断面の観察によれば、V層相当の黒褐色土(断15-10層等)が流入堆積したのち、地山土を含む明るい土(断14-⑨層・断18-5層等、人為か)が堆積、再び黒褐色土(断18-4層)の流入によって下半部が埋没した過程が理解できる。断25は遺構中心付近の東西横断面であり、遺構内の堆積土は概ね西側、すなわち斜面上方からの供給によることを示している。断25-7層には遺物・礫・炭化物の集中がみられた。本層は床面に直接接する範囲が一部あるものの、層位的観点からこれらの遺物は住居の廃絶後に投入・残置されたものと理解される。

〔壁・床面・柱穴など〕 壁面は、先行遺構の埋土が露出する上部においては崩落による外反がみられるが、概ね垂直に立ち上がっていたものとみられる。床面は水平で滑らかに整えられ、全体に硬化が認められる。床面には重複遺構に伴うらしい柱穴が混在して分布するが、配置や規模からPPD76(同58?)・同PPD78等が本遺構に伴う可能性が高いと考えている。壁際に断続的に連なる小溝と小ピット(周溝D9・同10)は、壁面構造物の痕跡であろう。

〔炉跡〕 精査範囲からは検出されなかった。東側区外に存する可能性が高い。

〔重複〕 SID5住居跡・SID13住居跡・SID17住居跡・SKD2土坑・SKD6土坑・SLD7炉跡を切っている。また層位的観点からSID15住居跡(配石D2)より古い。

〔放射性炭素年代測定〕 14C-15:4,550±30yrBP、床面直上層(断15-9層)。

〔遺構の時期〕 縄文時代中期中葉(大木8b式期)と考えられる。

〔出土遺物〕 土器(27～58)は大木8b式期が主体である。このほか石鏃(1011・1040・1043・1048・1078)、円礫片素材搔器(1130)、敲磨器類(1171・1203)、石錘(1212)が出土した。

SID5住居跡 (第30図、写真図版24)

〔位置・検出状況〕 D1・D2区に位置する。先掲SID3住居跡と同様、同区の掘り下げがⅤ層土(地山)に到達した時点で、水平に広がる平坦面として認識したものである。この平坦面は同区内のほぼ全面にわたる広がりを持つが、柱穴状ピット等の濃密な分布状況や、わずかな高低差が観察されたことから、複数住居跡の重複と判断した。その後土層断面の観察と併せて検討し、一つの竪穴住居跡として分離、把握に至ったものである。

〔形状・規模〕 断15北部～断16南部にかけて約480cm連続する平坦面を床面、断16-10a層北端を壁の立ち上がりとして想定した。ただし北側壁の立ち上がりは層界が不明瞭であり、暫定的な解釈である。

南側はSID4住居跡に切られている。平面形状・規模は不明である。

〔堆積状況〕(断15・16・17・18) 断15-14・15層、断16-11層、断17・18-10層が、床相当面直上を被覆する埋土である。自然堆積の黒褐色土を主体とする。下位遺構の埋土上部に沈み込んでいる地山土ブロック層(断15-31・34層、断16-37・40、断17・18-11層)は、本遺構構築時に敷き均されたものか、あるいは本遺構底面に切られた、より古段階の住居跡に伴うものとみられる。

〔壁・床面・柱穴など〕 断面16-10a層の立ち上がりが可能を持つのみで、明らかな壁面は認識できていない。床相当面には多数の柱穴状ビットが分布するが、複数の住居跡の重複による結果とみられ、個々の帰属は特定できない。床相当面はこれらの小ビットの間隙に連続する平坦面であり、上面に若干の硬化が認められる。

〔炉跡〕 床相当面において3基の炉跡(SLD6炉跡・同7・同8)を検出した。SLD6は地床炉で、皿状の凹みの中に焼土が生成している。上部を床面構築土に覆われているので、本住居跡より古い可能性が高い。SLD7は埋設土器を伴い、周囲に板状礫を配したらしい設置痕(炉石掘方)が方形に巡る。SLD8は石囲炉とみられ、焼土の周縁に環状の掘方を持つが礫は全く遺存しない。柱穴状ビット類と同様に、これらの炉跡の帰属は特定に至らず、よって本住居跡に付属する炉跡は不明となっている。

〔重複〕 SKD1土坑・SKD6土坑を切り、SID2住居跡・SID4住居跡・SID10住居跡に切られている。また層位的事実からSLD1炉跡より古く、SLD6炉跡より新しいとみられる。なお、断16において本遺構埋土10a層がSID3埋土12層を切るように図示しているが、層界が不明瞭であり先後逆転または両者一連の堆積層であった可能性がある。同9～10a・10b層が本来はSID3の埋土かもしれない。

〔放射性炭素年代測定〕 14C-16: 4,540±30yrBP、床相当面直上(断15-14層下面)。

〔遺構の時期〕 出土遺物の年代観及び年代測定結果から、縄文時代中期前葉～中葉と推定される。

〔出土遺物〕 埋土から土器(59～61)が出土している。

SID6住居跡 (第33図、写真図版26)

〔位置・検出状況〕 D5区に位置する。SID7住居跡とSID8住居跡の間に残った黒褐色土範囲として認識し、直線的なプランの一部が検出されたことから住居跡の可能性のあるものと判断した。

〔形状・規模〕 南東側をSID8住居跡、北側をSID7住居跡に切られているうえ、多くの部分が区外に延びているとみられる。このため全体形状は不明である。壁の上端として認識できるのは、D5区西縁とSID8の間に残存する約120cmの直線的なラインのみである。残存深度は西側(断14)で55cm、東側(断22)で20cmである。

〔堆積状況〕(断14・22) 断14-17層、断22-8層が埋土に相当する。黒褐色土を主体とし、自然堆積により埋没している。今次調査において他の遺構の多くがV層相当の黒褐色土を埋土の主体土とするのに対し、本遺構埋土の黒褐色土はむしろⅢ層に近いほどに黒味が強い。今次調査では基本土層として確認できていないが、V層の下位に位置付けられるより古段階の黒色土層(既往H26調査のVc層相当)を由来とする堆積土の可能性はある。

〔壁・床面・柱穴など〕 壁は床面外縁から連続し内湾しながら立ち上がる。完掘状態では東側にステップ状の段がみられるが、これは壁面を構成する自然土層の境界で生じた崩落の結果と考えている。床面には構築時の掘削痕とみられる細かな凹部が散在する。この小凹部を埋めて平滑面が形成されており、上面に弱い硬化が認められる。プラン内に存する柱穴状ビットは3個(PPD46～48)で、このうちPPD46は本住居跡の埋土に覆われていることから、付属する可能性が高い。他の帰属は不明である。

〔炉跡〕 精査範囲内からは検出されなかった。

〔重複〕 SID7住居跡・SID8住居跡に切られている。

〔放射性炭素年代測定〕 14C-20: 6.180±30yrBP、埋土下部(断22-8層)。

〔遺構の時期〕 出土遺物の年代観及び年代測定結果から、縄文時代前期前葉と見られる。

〔出土遺物〕 縄文時代前期初頭～前葉に相当する土器片(62～64)が出土している。

SID7住居跡 (第34・35図、写真図版27・28)

〔位置・検出状況〕 D4区に位置する。当該区の掘り下げを進める過程で、堆積層が皿状に落ち込む範囲として認識した。その後地表下80cm前後まで進んだところで、遺物・炭化物等の混入が顕著な範囲が現れ、その南北端が凡そ把握されたことから、やや大形の住居跡の可能性のあるものと判断し精査着手した。

〔形状・規模〕 ちょうどD4区全体にわたる大きさを持つ本住居跡の南北壁間長は550cmで、当区東西断面にみる壁上端～床面の残存深度は80～90cmほどを測る。区内に表れた南・北の壁はそれぞれ直線的で、これが互いに平行して向き合うことから、全体形状は概ね方形基調と推測される。

〔堆積状況〕(断14・19～22・26) 西側断面(断14)では、本住居跡の内部が自然堆積により漸次埋没した過程が観察できる。全体にV層相当の黒褐色土を主体としており、地山黄色土ブロックの混入は限定的である。これは、本住居跡の構築時点において、周囲に先行遺構の埋土がすでに厚く堆積していたためと考えられる。流入土も崩落する壁自体も、黒褐色土を主体とする先行遺構の埋土からなるものであった結果であろう。

断14～16層は床面構築土で、層中の地山土ブロックが締め固めにより水平方向に引き伸ばされてラミナ状を呈している。同33層も同様の特徴を持つことから一連の土層とみられ、先行遺構SKD5土坑のプラン内においては床面構築土が一段低く沈み込む様子が観察された。断14～9層は周溝D15から立ち上がる壁面構造の痕跡であり、同8層に続き7層が堆積している。同7層には土器・木炭細片・拳大礫が集中する。住居中央部では床面に直接接する本層だが、断面に見て取れるとおり上部構造の倒壊後に流入したものであり、集中出土した遺物群もまた然りである。

周溝D5付近すなわち断14～9層と南側壁面までの空間には同13・14層を挟んでおり、南側壁内側は北側のそれに比しやや複雑な堆積状況がみられる。13・14層はその性状から自然堆積であることが明らかで、床面構築土層(断14～16層)や遺物集中範囲が周溝D5を境に南壁側に延びないこと、南壁直下には14層下面に周溝D5を伴うことなどから、廃絶時点における南側壁面は断14～8・9層付近に想定され、断14～13・14層は古段階(改築・改修)の住居跡埋土が一部残存したものと考えられる。

断26は遺構中央付近を東西方向に切った断面である。同11・12層上面が本遺構の床面で、直上に堆積する9層がSKD3土坑の内部に連続して落ち込む様子が観察できる。この上位は7層(断14～7層相当)に覆われていることから、SKD3は本住居に伴うものであり、また住居廃絶と同時に埋まったことを示している。土坑の一つとして扱っているが、本住居の主柱穴の一つである可能性が高い。

また断26には、本住居床面を南北方向に走る周溝D7の埋土が、東側の埋土を大きく切って立ち上がる様子が観察された(断26～3層)。掘り下げの過程で認識できなかった後続の住居跡である(SID19住居跡)。当区東側断面(主に断20)には、本住居跡と後続SID19の重複状況が確認できるはずであるが、時間的制約から現地での検討を尽くせなかった。

〔壁・床面・柱穴など〕 南・北側ともに壁はほぼ垂直な立ち上がりを見せ、床面は水平で滑らかに整っている。床上面は全体にやや強い硬化が認められる。床面では先述の周溝状小溝のほか、複数のビツ

ト類を検出した。周溝D4～D6は南側壁下に並行しており本住居に伴う可能性が高い。周溝D4が古段階、周溝D5が新段階に位置づけられよう。柱穴はSKD3が主柱穴の一つか。他のピットは帰属不明とせざるを得ない。

〔炉跡〕 精査範囲からは検出されなかった。

〔重複〕 SID6住居跡・SID12住居跡(SLD5炉跡・SLD9炉跡)・SID14住居跡(周溝D8)・SKD5土坑を切り、SID19住居跡(周溝D7)に切られる。SKD3土坑は本住居に伴うもの(同時)と判断した。また層位的観点からSLD2炉跡より古い。

〔放射性炭素年代測定〕 14C-11:4,440±30yrBP。埋土最下層(断14-7層)。

〔遺構の時期〕 出土遺物の年代観及び年代測定結果から、縄文時代中期中葉～後葉と推定される。

〔出土遺物〕 上述の通り遺物は断14-7層に集中する。同層はおそらく遺構の廃絶直後に流入したものであり、出土土器(65～76)の主体は榎林式に相当する。石器は石鏃(1012・1044・1054・1055・1068)、石錐(1083)、円礫片素材搔器(1131)、敲磨器(1182)が出土している。

SID8住居跡 (第36・37図、写真図版29)

〔位置・検出状況〕 D5区に位置する。同区の掘り下げを進めていたところ、大形の花崗岩による弧状の礫列が検出され、この内側に広がる半月形の黒褐～暗褐色土範囲として認識した。当初、礫列と一体の遺構として精査着手したが、精査ののち後掲SID9住居跡と分離し、一個の竪穴住居跡としたものである。

〔形状・規模〕 東側が区外に延び全体形は不明だが、半円状をなすプランから、円～楕円形あるいは隅丸方形の平面形が想定される。断22にみる壁間長は240cmほど、残存深度は50cm前後である。

〔堆積状況〕(断22・30) 断22-5層、断30-1・2層が本遺構の埋土である。床面直上に自然流入による黒色土が堆積したのち、その上位を人為的に埋め戻されている。

〔壁・床面・柱穴など〕 壁はわずかに外傾しつつ床面外縁から直線的に約50cm立ち上がっている。床面は水平に整っており上面に若干の硬化が認められる。なお北壁近くのPPD42は、本遺構埋土を上方から掘り込んだ柱穴状ピットであり、本遺構には帰属しない。

〔炉跡〕 精査範囲内からは検出されなかった。

〔重複〕 層位的な観点からはSID9を切るかと解釈できるが、両者が複合し、同時あるいは短期間の推移の過程を表している可能性があり、時間的な先後関係は明確に示し難い。後掲SID9の記載をあわせて参照されたい。

〔放射性炭素年代測定〕 14C-19:4,730±30yrBP、床面直上(断22-5層下面)。

〔遺構の時期〕 出土遺物の年代観から、縄文時代中期後葉と推定される。

〔出土遺物〕 土器(77～79)のうち77は床面直上からの出土で、大木8b式に相当する。このほか円礫片素材搔器(1140)が出土している。

SID9住居跡 (第36・37図、写真図版29)

〔位置・検出状況〕 D5区に位置する。同区の掘り下げを進めていたところ、大形の花崗岩による弧状の礫列が検出され、この内側に広がる半月形の黒褐～暗褐色土範囲として認識した。当初、前掲SID8住居跡と一体の遺構と捉えて着手したが、精査ののち分離し一個の竪穴住居跡としたものである。SID8の南側にわずかにずれて重複している。

〔形状・規模〕 東側が区外に延び、中央部から北東側にかけてはSID8と大きく重複するため、全体

形状は明らかでない。残存する壁外周のプランから円～楕円形あるいは隅丸方形の平面形が想定される。平面における壁間長は260cm、断22にみる残存深度は40cm前後である。

〔堆積状況〕(断22・23・27・30) 断22・23は7層、断27は3・4層、断30は3・4層が本遺構の埋土である。断30はSID8との重複部を横断する断面である。断30は2層はSID8の底部直上を覆う自然堆積の黒味の強い黒褐色土だが、同1層は地山土ブロックを含む人為的な黒褐色土層で、本遺構に伴う不整ピットの埋土である3・4層に良く似ている。本遺構の埋土は人為層が主体で、壁面や底面が不明瞭であることから、構築後に機能した面を想定しづらい。いわゆる居住を目的とした構造物ではなく、掘削→礎設置→埋め戻しが短期間のうちに行われた可能性があると思われる。

〔壁・床面・柱穴など〕 壁面の立ち上がりは不明瞭で、底面は安定した平面を成さず不整の凹凸を持ち、外周沿いはこれらが連続して溝状の掘り込みとなっている。また、プラン外周に沿って壁上部に径20～30cmの花崗岩が配されており、礎の下位には埋置のための掘方と思われる不整形なピットを伴っている。

〔炉跡〕 精査範囲内からは検出されなかった。

〔重複〕 層位的な観点からはSID8に切られると解釈できるが、両者が複合し、同時あるいは短期間の推移の過程を表している可能性があり、時間的な先後関係は明確には示し難い。前掲SID8の記載をあわせて参照されたい。

〔遺構の時期〕 SID8との関係から、縄文時代中期中葉～後葉を想定したい。

〔出土遺物〕 なし。

SID10住居跡 (第37図、写真図版30)

〔位置・検出状況〕 D1区に位置する。同区の掘り下げがSID3・SID5住居跡の床面(Ⅶ層土面)に到達した時点で、調査区東壁際に延びる黒褐色土の広がりとして認識したものである。

〔形状・規模〕 弧状をなすプランから、円～楕円形の平面形が想定される。断17にみる壁間長は220cmほどで、これが最小値となる。残存深度は60cm前後である。

〔堆積状況〕(断17) 断17は8層が本遺構の埋土である。黒褐色土主体。全体に一様であり、自然堆積とみられる。レンズ状の堆積によって8層上面は凹地となり、土器片・礫の混入が目立つ同2層がこれを覆っている。

〔壁・床面・柱穴など〕 壁はわずかに外傾しつつ床面から直線的に約50cm立ち上がっている。床面は水平に整っており、上面に若干の硬化が認められる。南西部の壁直下には地山土ブロックの入る小規模な落ち込みが連なり、精査の結果周溝様の小溝となったが、北側には連続しなかった。床面には同様の小凹部が点在することから、これらは構築段階の掘方の痕跡と判断した。柱穴は検出されなかった。

〔炉跡〕 検出されなかった。

〔重複〕 SID5住居跡・SLD8炉跡を切っている。また層的事実からSID2住居跡・SKD1土坑・SKD6土坑・SKD8土坑・SLD6炉跡より新しいと考えられる。

〔放射性炭素年代測定〕 14C-17: 4,160±30yrBP、床面直上(断17-8層下面)。

〔遺構の時期〕 層的事実、遺物の年代観及び年代測定結果から、縄文時代中期後葉と推定される。

〔出土遺物〕 土器(80・81)、石錐(1079)が出土している。

SID11住居跡 (第38図、写真図版30)

〔位置・検出状況〕 D3区に位置する。SID4住居跡とSID7住居跡の間に広がる不整形の黒褐色土範囲として認識し、掘り下げを進めた結果、残存形状と柱穴配置等からプランを把握したものである。

〔形状・規模〕 PPD117・同118北側の東西方向に延びる壁と、PPD99周辺の構築時の掘方らしい不整形凹部が認められ、この凹部が角を成すようにみられることから、平面形が隅丸方形を呈する住居跡と推定した。

〔堆積状況〕(断14) 断14-⑬層が埋土に相当する。地山土ブロックを僅かに含むが、黒褐色土主体の自然堆積である。マサ土粒が少なく全体にやや黄味を帯びる点は、V層土主体の周辺遺構よりも古い様相といえる。

〔壁・床面・柱穴など〕 PPD101・同117付近では、壁面が内湾外傾して立ち上がる様子が観察できる。床面は、重複するSID13住居跡のそれと比高なく一連の平坦面を成しており、両者の境界は判然としない。明瞭な硬化範囲も認められない。柱穴は、PPD87・同99～101・117・118等が本住居跡に帰属する可能性があるが、特定には至っていない。

〔炉跡〕 検出されなかった。

〔重複〕 SID12住居跡、SKD2土坑に切られている。層的事実から周辺の重複・近接する他遺構に比し最も古段階に位置づけられる。

〔遺構の時期〕 層位的観点及び出土土器の年代観を勘案し、縄文時代前期初頭～前葉を想定したい。

〔出土遺物〕 82・83はSID12との重複部から出土した土器である。同じく重複部から石鏃(1013)、円礫片素材搔器(1132)が出土している。

SID12住居跡(第38図、写真図版30)

〔位置・検出状況〕 D3区に位置する。SID4住居跡とSID7住居跡の間に広がる不整形の黒褐色土範囲として認識し、掘り下げを進めた結果、残存形状と柱穴配置等からプランを把握したものである。

〔形状・規模〕 後述の土層断面及び柱穴配置から、楕円～隅丸方形の平面形を想定できる。西側が区外に延び、全体形状は明らかでないが、南北壁間は270cm前後と推定される。断14にみる埋土層厚は20～40cmである。

〔堆積状況〕(断14・32) 断14-⑬～⑮層が本遺構の埋土と考えられる。

〔壁・床面・柱穴など〕 発掘状態では壁面は残存しないが、断14-⑬層北端を壁とすれば、内湾しつつ外傾して立ち上がる様子が観察できる。床面もまた、重複する多くのピット類の間隙に残存するのみであるが、⑬～⑮層の下面を床面と想定すれば概ね平坦に整えられ、中央側に向かってごく緩く傾斜する状況を見ることができる。柱穴は、壁際を巡るPPD60～62及び後続遺構の底面で検出した同121～123が本住居跡に伴うものとみられる。

〔炉跡〕 断14-⑮層下面に接するSLD4炉跡が伴うものとみられ、想定される遺構プランのほぼ中央に位置する。またSLD4に接するSLD5炉跡もまた、同一の軸線上に位置しており、両者が一体で本遺構に伴う可能性がある。なお、個々の炉跡の詳細は別途後段の記載を参照されたい。

〔重複〕 SID11住居跡・SKD7土坑を切り、SID7に切られている。また層的事実から、SID15住居跡より古く、SID13住居跡より新しいと考えられる。

〔遺構の時期〕 重複遺構との先後関係及びSLD4・SLD5に伴う土器の年代観等を勘案し、中期前葉を想定したい。

〔出土遺物〕 82・83はSID11との重複部から、84・85は埋土から出土した土器である。また87・88は、

本遺構に伴うとみられる炉跡SLD4・同SLD5に埋設されていた土器である。このほか石鏃(1014・1056・)、石斧未成品(1115)、敲磨器(1184)等が出土している。

SID13住居跡 (第38図、写真図版30)

〔位置・検出状況〕 D3区に位置する。SID4住居跡とSID7住居跡の間に広がる不整形の黒褐色土範囲として認識し、掘り下げを進めた結果、残存形状から存在を把握したものである。

〔形状・規模〕 SID4住居跡とSID11住居跡の間に残存するわずかな壁面とこれに連続する床面を観察できるが、全体形状は推定できない。

〔堆積状況〕(断29) 断29-2層が本遺構の埋土である。自然堆積とみられる黒褐色土を主体とする。SID11と壁面が交差する部分においては、平面的には両者の境界を判別できなかった。

〔壁・床面・柱穴など〕 SID4とSID11の間を連絡する40cm足らずのプランが残存するのみである。ここに観察される壁面はほぼ直立し、壁下端から水平に延びる床面が断29にも見て取れる。床面は重複するSID11住居跡のそれと比高なく一連の平坦面を成している。明瞭な硬化範囲は見られない。

〔炉跡〕 残存範囲が限られ、存否不明である。

〔重複〕 SKD2土坑を切り、SID4に切られている。なおSID11との先後関係は重複部での確認ができなかったが、層的事実(SID11を切るSKD2を本遺構が切ること)から本遺構が新しいといえる。

〔遺構の時期〕 重複遺構の年代観を勘案し、縄文時代中期前葉～中葉を想定しておきたい。

〔出土遺物〕 なし。

SID14住居跡 (第34・35図、写真図版31)

〔位置・検出状況〕 D4区に位置する。SID7住居跡床面上で検出した周溝D8を伴う別個の住居跡として想定したものである。

〔形状・規模〕 周溝D8及び関連の可能性を持つビット類の分布状況から、円～楕円形の平面形が想定されるが、残存状況は痕跡的であり不明とせざるを得ない。

〔堆積状況〕 床面以下まで削平を受けており、残存するのは下部構造(周溝・掘方・ビット類)のみである。周溝及び不整形な落ち込みとして認識できる掘方の痕跡には黒褐色土と地山土ブロックの混土が堆積している。

〔壁・床面・柱穴など〕 上記の通り、壁・床面は残存しない。周溝D8及び柱穴状ビットPPD109～114のいずれかが本住居跡に伴うと考えられる。PPD109付近の不整落ち込みは、本遺構の掘方痕跡であろう。

〔炉跡〕 残存しない。

〔重複〕 SID7住居跡、SID19住居跡に切られている。

〔遺構の時期〕 重複遺構との先後関係から縄文時代中期中葉以前を想定しておきたい。

〔出土遺物〕 なし。

SID15住居跡 (第23・24図、写真図版32)

〔位置・検出状況〕 D2～D3区に位置する。断14～15において、配石D2上端から水平に延びる層界を床面とする住居跡を想定したものである。当該区の掘り下げの過程では、平面的に認識することができなかった。

〔形状・規模〕 概ね円形基調の平面形が推測されるが、断面でのみ確認・観察したものであり不明

とせざるを得ない。断15-5層の北端の立ち上がりが北側壁面、断14-3b層南端が南側壁面とみられ、南-北の壁間長は630cmを測る。残存深度は30cm前後である。

〔堆積状況〕(断14・15・18・19) 当該区西側断面の断14-3b層、断15-5層を埋土とする。IV層相当の黒褐色土を主体とし、さらに上位を土器片・拳大礫の目立つIII層相当の黒色土が覆っている。当該区東側断面においても、これに対応する土層が観察できる。壁面の立ち上がりこそ見出だせないが、断18-1層下面および断19-7層下面は、西側断面で想定した床面とほぼ同標高に広がる水平な面であり、本住居跡の床面の続きとみてよからう。さらに配石D2と対向する位置には、被熱痕跡を伴う落ち込み(断19-6層上面が赤変)が確認できる。

〔壁・床面・柱穴など〕 当該区西側断面にみられる北側壁面の立ち上がりは、緩く内湾しつつ、やや大きく外傾している。一方、南側壁面の立ち上がりは不明瞭で識別が難しい。漸移的な差異の境界をあえて図示している。断面には床面が概ね水平に延びる状況が認められるが、遺物・炭化物・小礫等の水平分布や、床面上面の硬化・踏み締めの痕跡等は認められない。柱穴は検出できていない。〔炉跡〕 配石D2が住居床面に設置された炉跡の一部である可能性が高い。断14-⑥層の焼土もまたこれに関連すると考えられる。平成26年度調査「5号住」炉跡(複式炉)に類似する、大形の炉である可能性がある。

〔重複〕 SID4住居跡の埋土上部を切っている。

〔放射性炭素年代測定〕 14C-12: 3,940±30yrBP、埋土上部を切る土層(断14-3b層下部)。

14C-13: 3,990±30yrBP、配石D2内埋土(断14-⑤層)。

〔遺構の時期〕 平成26年度調査「5号住」は縄文時代中期末葉(大木10式新段階期)との年代観が示されている。本住居跡に対しても、層位的観点及び年代測定値等から同時期が想定される

〔出土遺物〕 配石D2より上位の土層から縄文時代中期後葉の土器片が出土している(111～113)。

SID16住居跡 (第30図、写真図版33)

〔位置・検出状況〕 D1区に位置する。SLD1炉跡を伴う住居跡を想定したものである。当該区の掘り下げの過程では、遺物や礫の平面的な分布が観察されたが、遺構プランを把握することはできなかった。

〔形状・規模〕 概ね円形基調の平面形が想定されるが、断面でのみ確認・観察したものであり、全体形状は不明とせざるを得ない。SLD1の生成面は水平を保ちつつ南側に約250cm延びており、これが床面に相当すると考えられる。この床面を覆う断15-1b層は、南端でごく緩やかに立ち上がるものの明確な壁面は認められない。全体に浅皿状の断面形を成すものとみられる。北側は、床面・壁面ともにさらに不明瞭で判然としにくい。埋土となる1b層の層厚は20cm前後で、これが本住居跡の残存深度となる。

〔堆積状況〕(断15・16) 本遺構埋土、断15(16)-1b層は、Ⅲ～Ⅳ層相当の黒褐色土を主体とする自然堆積層である。土器小片や木炭細片、小礫(花崗岩)を多く含む。付近の堆積層の中ではほぼ最上位に位置し、現表土と直接接するため上部は攪乱の影響も受けているとみられる。当初は本層下面がSLD1上部を切っている可能性も考慮に入れていたが、精査によりSLD1上面を被覆することが確認されたことから、本遺構の埋土と認めるに至ったものである。

〔壁・床面・柱穴など〕 上述の通り、浅皿形の断面形を呈する本住居跡には、壁面の明確な立ち上がりは認められない。床面は炉上面から水平な広がりを持つが、硬化面は認められず、また炉の北側になると床面そのものの広がりが判然としなくなっている。柱穴は検出できなかった。

〔炉跡〕 SLD1炉跡が付属する。地床炉である。個別の炉跡については後掲を参照されたい。

〔重複〕 層位的にSID3住居跡・同4・同5より上位に位置することから、これらより新しい。SID15住居跡はⅢ～Ⅳ層を埋土主体土とする点で、層位的には近い時期に属する可能性が高い。

〔遺構の時期〕 周辺の出土土器の年代観及び層位的観点から、縄文時代中期末葉以降を想定しておきたい。

〔出土遺物〕 本遺構の埋土に属する遺物はない。

SID17住居跡（第31図、写真図版5）

〔位置・検出状況〕 D3区に位置する。SID4住居跡の南東部床面において、地山土ブロック層による不整形な広がりとして認識し、精査の結果SID4に先行する別個の住居跡と判明したものである。

〔形状・規模〕 SID4に切られ大半を失っているものとみられる。このため全体の形状・規模は不明と言わざるを得ない。断面19～19層が残存する範囲、南北190cmが最小値となる。

〔堆積状況〕〔断19〕 断19～19層が残存する埋土である。21層は床面構築土、これを19層の黒褐色土が被覆している。20層は柱穴PPD73埋土である。いずれも粘土質を帯びる土層であり、V層よりも下位の堆積層を主体とするものとみられる。

〔壁・床面・柱穴など〕 上述の断19～21層上面が床面となるが、限定的な残存であり面的な広がり把握できていない。同19層の南端部には直立する壁面がわずかに認められる。柱穴はPPD73のほか、SID4床面に複数検出された柱穴群の一部が属するものとみられる。

〔炉跡〕 残存しない。

〔重複〕 SID4に切られている。

〔遺構の時期〕 SID4との先後関係から、縄文時代中期中葉以前に位置付けられる。

〔出土遺物〕 なし。

SID18住居跡（第29図、写真図版31）

〔位置・検出状況〕 D6区に位置する。同区の掘り下げが地山Ⅶ層面に到達した段階で検出した柱穴列である。壁際に柱穴が並ぶ竪穴住居の痕跡と判断した。

〔形状・規模〕 PPD32・33・34・38・39からなる柱穴列で、一部SID1住居跡の北西隅の柱穴を含む可能性がある。南北250cm前後の範囲がプラン内側に相当するものと考えている。

〔堆積状況〕 D6区西側断面、断13～8層南部が埋土に相当するとみられる。Ⅵ層上部相当の土層で、V層以上にみられるマサ土をほぼ含まない。柱穴埋土も同層を主体としている。

〔壁・床面・柱穴など〕 壁・床面ともに認識できなかった。

〔炉跡〕 検出されなかった。

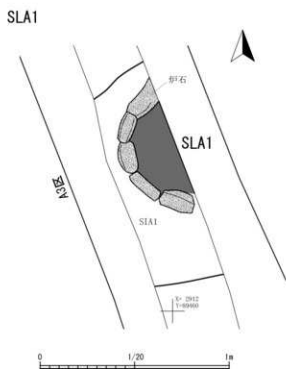
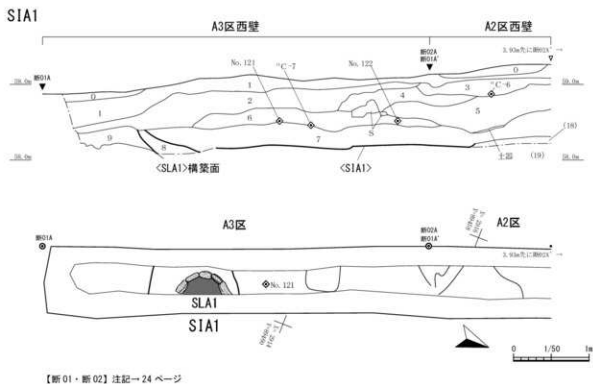
〔重複〕 SID1と重複するが、先後関係は不明である。

〔遺構の時期〕 埋土の性状と層位的観点（既往調査の基本土層との対比）から、前期初頭～前葉に位置付けておきたい。

〔出土遺物〕 本遺構に伴う状況を呈する出土遺物はなかった。

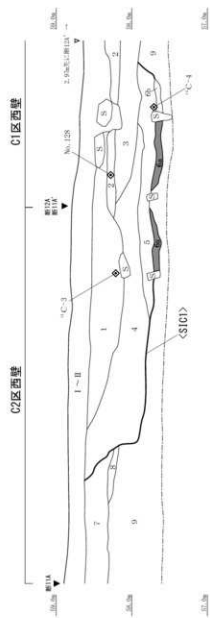
SID19住居跡（第34・35図、写真図版34）

〔位置・検出状況〕 D4区に位置する。SID7住居跡床面で検出の周溝D7が、断面観察の結果、SID7を切る別個の竪穴住居跡であることが判明した。

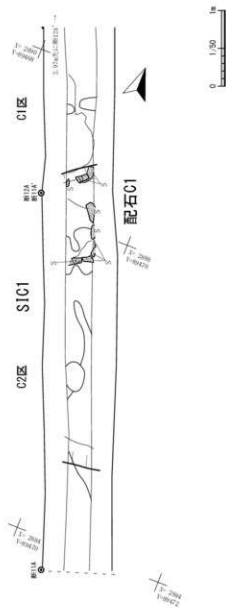


第26図 SIA1竪穴住居跡・SLA1炉跡

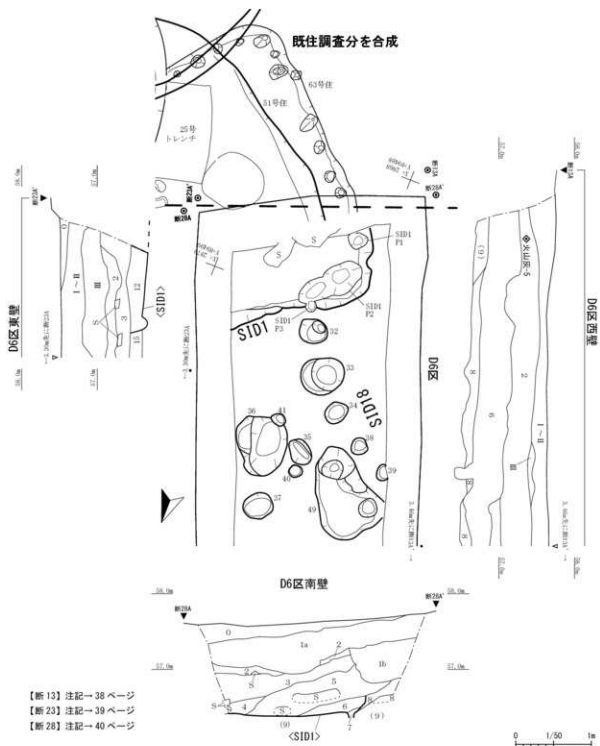
SIC1 (配石 C1)



【断 11・断 12】注記→32ページ

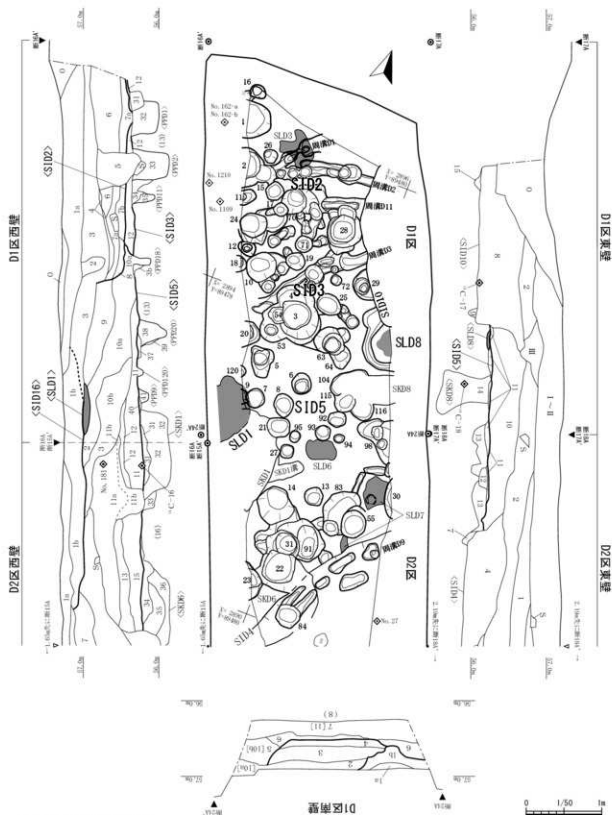


SID1・SID18



第29図 SID1・D18竪穴住居跡

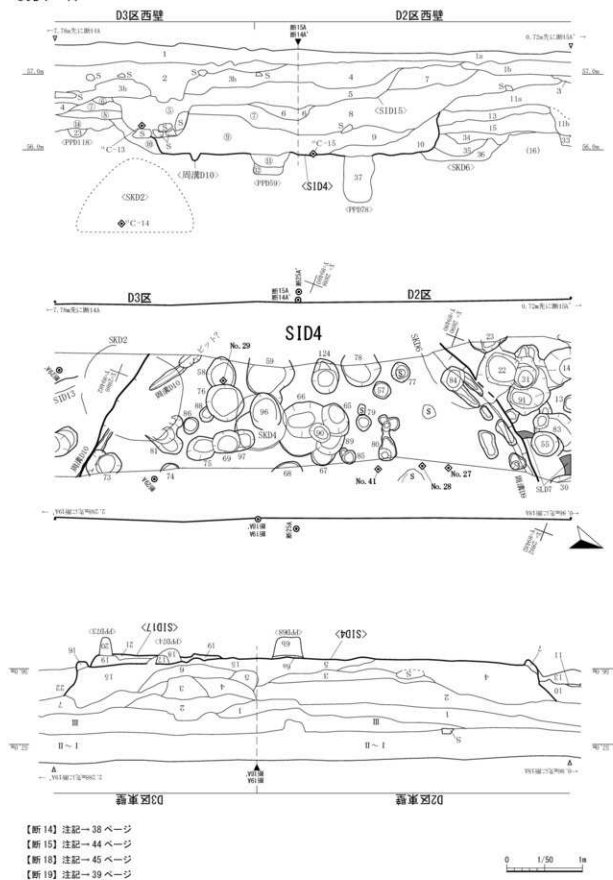
SID2・3・5・16



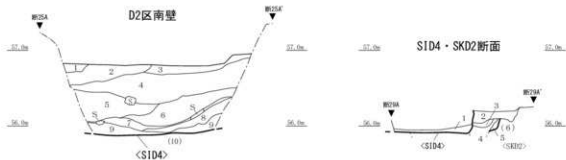
【断15・断16】注記→44ページ
 【断17・断18・断24】注記→45ページ

第30図 SID2・D3・D5・D16壁穴住居跡

SID4・17



第31図 SID4 (1)・D17竪穴住居跡

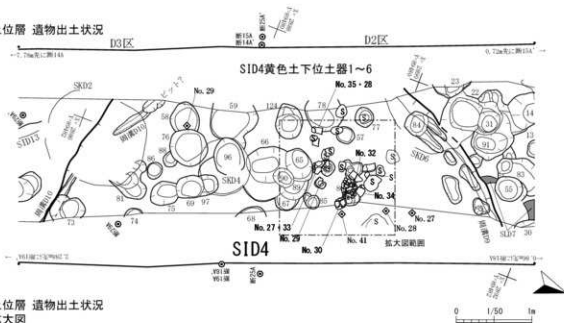
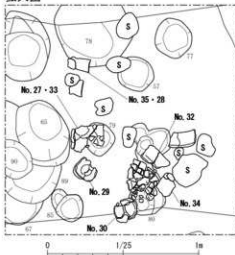


【断25】注記→45ページ

断29 SID4・SKD2

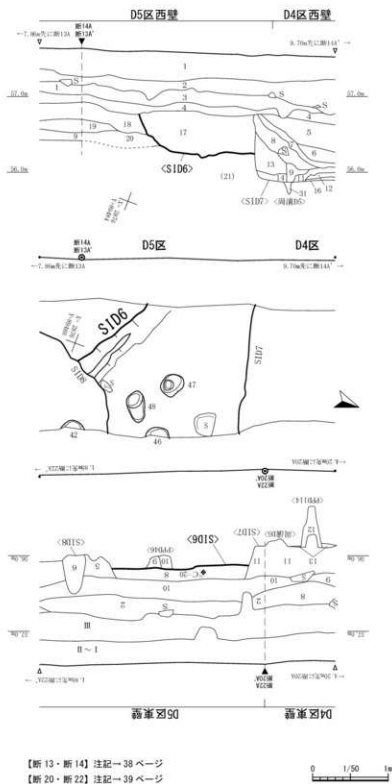
- 1 10YR2/3 黒褐色 砂質シルト 粘性やや強。しまり中。
- SKD2埋土の一部である砂礫のブロックを多く含む。
- 2 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性中。しまりやや強。マサ土 (径2-5mm) 礫間。
- 3 7.5YR3/2-3/3 黒褐色-暗褐色 シルト 粘性やや強。しまり中。粘土を多く含む。土器片微量含む。
- 4 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性中。しまりやや強。
- 5 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性中。しまりやや強。地山土塊 (径10-20mm) 少。
- 6 10YR6/8-5/6 明黄褐色-黄褐色 粘土質シルト 粘性やや強。しまりやや強。地山片。

上位層 遺物出土状況

上位層 遺物出土状況
拡大図

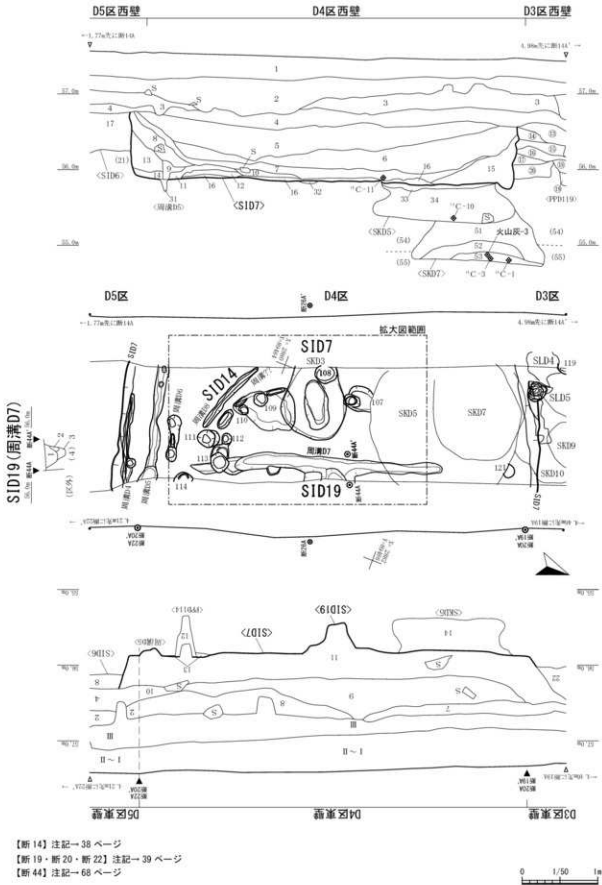
第32図 SID4竪穴住居跡(2)

SID6



第33図 SID6竈穴住居跡

SID7・14・19



【新14】注記→38ページ

【新19・新20・新22】注記→39ページ

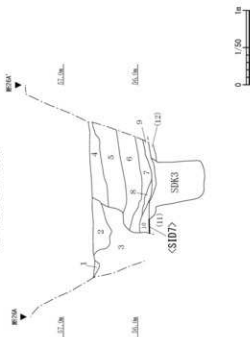
【新44】注記→68ページ

第34図 SID7・D14・D19壁穴住居跡(1)

【断面44】

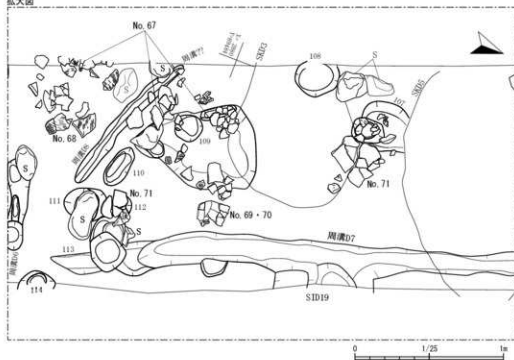
- ◆SID19(遺構D7)
 1 101E2/2・2/3 黒褐色、シルト・粘性や心強、しまり中、腐敗(径2・5cm)極微、マサ土灰層×微、重層するセプト層5A、
 2 101E2/2 黒褐色、シルト 粘り中、しまり中、
 3 101E3/2 黒褐色・2層褐色、シルト・粘性中、しまり中、全体に黒山土少 黒含みや不明る1、
 (4) 101B6/6 明黄褐色 5層黄褐色、砂質シルト 粘性弱、しまり中、礫山砂質土、層下部に相当。

D4区中央ベルト北面



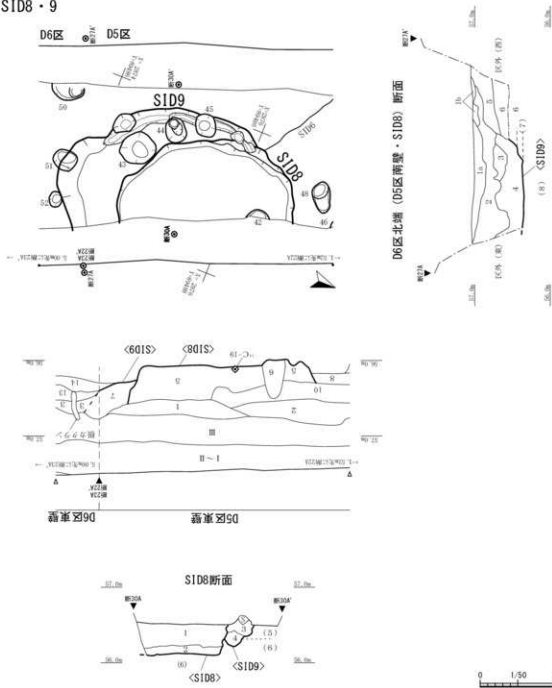
【断面】注記→40ページ

拡大図



第35図 SID7・D14・D19竪穴住居跡(2)

SID8・9



【断面30】

◆SID8・SID9

- 1 10YR2/2-2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまり中、地山黄褐色土塊（径10-30mm）少、花崗岩塊（径5-10cm）稀散、人為層。
- 2 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性やや強、しまりやや密、1層より薄い、床直層。
- 3 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性やや強、しまり中、5層土塊（径50mm）少、配石層方埋土か。
- 4 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまりやや密、1層に似るが地山土の混入多い、不整ビット埋土。
- (5) 10YR3/3-3/4 暗褐色 シルト 粘性中、しまりやや密、漸移層。
- (6) 地山黄褐色土。

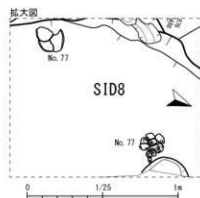
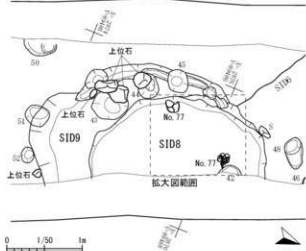
【新22・新23】注記→39ページ

【新27】注記→40ページ

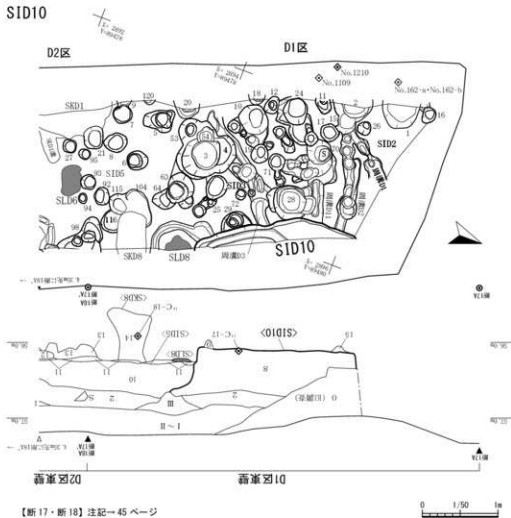
第36図 SID8・D9竈穴住居跡

遺物出土状況

D5区 D6区

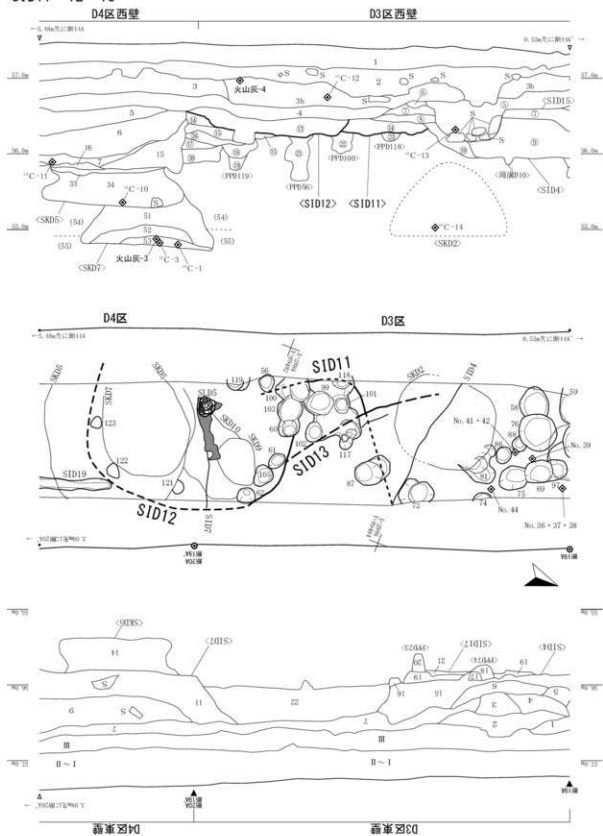


SID10



第37図 SID8～D10竪穴住居跡

SID11・12・13



【断14】注記→38ページ

【断19・断20】注記→39ページ

0 1/50 1m

第38図 SID11～D13壁穴住居跡

〔形状・規模〕 周溝D7は南北方向に320cm走行することから、これが本住居跡の計測可能な最小値となる。ただしSID7のプランを壊している部分が見当たらないことから、この内に収まる規模が想定される。壁際を走行する同周溝は直線的であることから、方形基調の平面形と推測される。

〔堆積状況〕(断20・26) 断26には周溝D7から連続して立ち上がる3層が、SID7の埋土を切る状況が観察できる。同4層土をベースとし土器・礫を含む土層が埋土であることから、遺構の掘り込み面には同層上面が想定される。断20にも本遺構埋土とSID7埋土との重複関係が観察できるはずだが、明確な境界を見出すことができず、同11層として一括している。

〔壁・床面・柱穴など〕 断26には、周溝D7から連続してほぼ垂直に立ち上がる壁が観察できる。上部は崩落により広がったらしい。断20にみられる床面はほぼ水平で平滑である。SID7床面との高低差がなく、あたかも連続するかのようであった。

〔炉跡〕 精査範囲では検出されなかった。東側区外に存する可能性がある。

〔重複〕 SID7を切っている。

〔遺構の時期〕 SID7の想定時期である縄文時代中期中葉～後葉以降に位置付けておきたい。

〔出土遺物〕 周溝D7埋土から縄文時代中期初頭の土器片(91)が出土している。

(2) 炉跡

複数遺構が重層的に重複する調査区内において、個々の炉跡の帰属をその都度確定させることは困難であった。そのため調査時には住居跡とは切り離し個別遺構として精査・記録を進めた。その後の検討により帰属遺構を特定(推定)したものについては、前掲、住居跡の記載に反映させている。ここに改めて個別の所見を記載する。

〈A区〉

SLA1炉跡 (第26図、写真図版21)

〔位置〕A 3区。〔帰属〕SIA1住居跡。〔形態〕石囲炉。〔平面規模〕80cm (炉石外周径)〔焼土層厚〕不明(下位の精査を断念)。〔時期〕中期中葉以前。

〔所見〕 長径20cm前後の角礫(花崗岩)を、外径80cm程の環状に配し、その内部を燃焼部としている。焼土の生成は良好で(5YR6/8橙色)、後世の根攪乱により小斑状に乱されているが、上面全体に硬化が認められる。本炉跡は先行遺構(土坑か)のプラン内に重複している。当該区については調査深度を概ね100cmに設定しており、炉焼土の断面記録を含め、下位の精査は行わなかった。

〈D区〉

SLD1炉跡 (第39図、写真図版33)

〔位置〕D 1区。〔帰属〕SID16住居跡。〔形態〕地床炉。〔平面規模〕70cm (焼土範囲外径)。〔焼土層厚〕10cm。〔想定時期〕中期末葉以降(層位的観点から)。

〔所見〕 上部ほど赤変強いが、目立った上面硬化は認められない。後世の草木根等により、上方からの小斑状の攪乱に乱されている。

SLD2炉跡 (第39図、写真図版35)

[位置] D 4区。[帰属]不明。[形態]石囲炉。[平面規模]45cm(炉石外周径)。[焼土層厚]5cm。[時期]中期末葉以降。

[所見] 長径20cm前後の板状礫(花崗岩)を環状に配している。西半は炉石が失われ埋設痕跡の小穴のみ。上面硬化は認められない。後世の草木根等により上方から小斑状の攪乱に乱されている。

SLD3炉跡 (第40図、写真図版35)

[位置] D 1区。[帰属]SID2住居跡の可能性。[形態]不整形。地床炉残欠か。[平面規模]50×40cm(焼土範囲外径)。[焼土層厚]5cm。[時期]中期中葉～後葉。

[所見] V層相当層の途中で検出。燃焼面と同標高で土器片・礫・炭化物の面的な分布がみられた。SID2床面に相当するが、炉以外の被熱赤変である可能性を留保したい。

SLD4炉跡 (第40図、写真図版35)

[位置] D 3区。[帰属]SID12住居跡。[形態]土器埋設炉。[平面規模]55×45cm(焼土範囲外径)。[焼土層厚]8cm。[時期]前期後葉～中期前葉。

[所見] 深鉢(第68図87)の胴～底部を正位で埋設している。土器内部にはその下半部を「落とし蓋」様に塞ぐ板状礫が設置されている。この礫の下位には締まりを欠いた灰のような土が堆積する(断39-1b層)。礫は外面の被熱が顕著で、また土器内面の二次被熱が礫設置面に境に上位に集中することから、この礫は炉の機能段階にすでに設置されていた可能性が高い。後掲SLD5とともに、SID12住居跡の長軸上に位置しており、SLD5と連結して一つの大型の炉を構成する可能性がある。あるいは同住居内への造り替えによる先後の関係にあるかもしれない。南側をSID7住居跡に切られている。

SLD5炉跡 (第41図、写真図版36)

[位置] D 3区。[帰属]SID12住居跡。[形態]土器埋設炉。[平面規模]88×60cm(焼土範囲外径)。[焼土層厚]8cm。[時期]前期後葉～中期前葉。

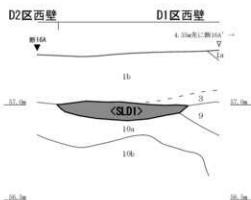
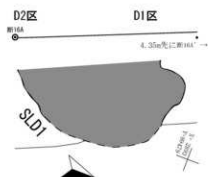
[所見] 深鉢(第68図88)の胴下部(底部欠く)を正位に埋設している。土器内の下部には板状礫が水平に設置され、2つの拳大礫がこれを支えている。礫はいずれも外面の被熱が顕著である。SLD4と同様、炉の機能段階に内部に設置されていた礫である可能性が高い。前掲SLD4とともに、SID12住居跡の長軸上に位置し、SLD4と連結して一つの大型の炉を構成する可能性がある。あるいは同住居内への造り替えによる先後の関係にあるかもしれない。南側をSID7住居跡に切れ、同地点のフラスコ形土坑(SKD5・7・9)より新しい。

SLD6炉跡 (第41図、写真図版36)

[位置] D 2区。[帰属]不明。[形態]地床炉。[平面規模]65cm(皿状掘込み部外径)。[焼土層厚]3cm。[時期]中期中葉～中葉以前。

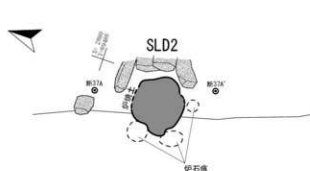
[所見] SID5住居跡床相当面で検出した炉跡の一つである。浅皿状の掘り込みの内部に40×25cmの焼土が生成している。上面には若干の硬化がみられる。炉石及びその痕跡は認められない。燃焼面は自然堆積の黒褐色シルトに覆われ、その上位に生じた浅い凹部はSID5床相当面に断片的に分布する床面構築土層によって埋められている。したがってSID5床相当面における最新段階よりも古期に位置づけられる。

SLD1



【断16】注記→44ページ

SLD2

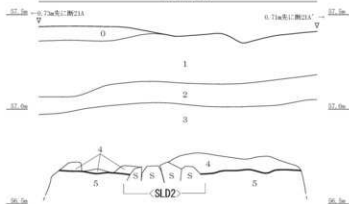


【断17】

◆SLD2 (個別断面)

- 10YR2/1-2/2 黒-黒褐色 シルト 粘性やや強、しまり中。上位層からの小穴(根椋乱れ)
- 5YR4/4-4/6 に近い赤褐-赤褐色 シルト(焼土) 粘性やや強、しまり中。
- 10YR2/2-2/3 黒褐色 シルト 粘性やや強、しまり中。IV下部相当か。

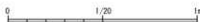
D4区東壁



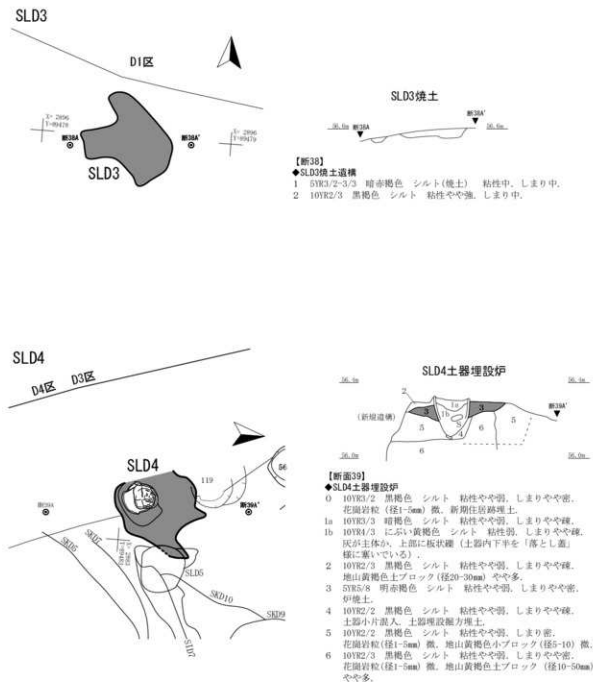
【断21】

◆SLD2 (調査区東壁)

- 0 現代露土(客土)
- 10YR2/2-2/3 黒褐色 砂質シルト 粘性やや弱、しまり強。花崗岩粒(径2-5mm)少(相対的に多い)。2層に比し明るい。I-II相当。
- 10YR2/1 黒色 シルト 粘性中、しまりやや強。花崗岩粒(径1-2mm)微。II-III相当か。
- 10YR2/1 黒色 シルト 粘性やや強、しまり中。花崗岩粒は含まず、やや粉っぽい。(IV層由来の火山灰混入によるか)。III相当か。
- 10YR2/1-1.7/1 黒色 シルト 粘性やや強、しまり中。3に似るがより粉っぽくやや明るい。IV上部か。本層下面にSLD2。
- 10YR2/2-2/3 黒褐色 シルト 粘性やや強、しまり中。IV下部か。

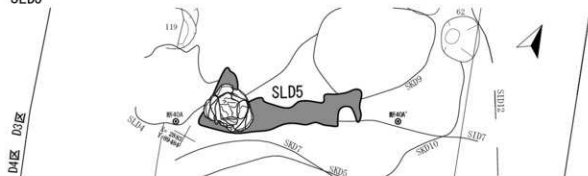


第39図 SLD1・2炉跡



第40図 SLD3・4炉跡

SLD5



SLD5 土器埋設炉

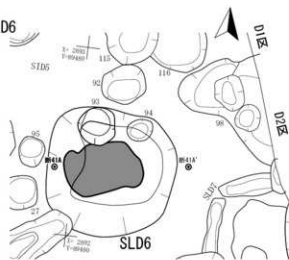


【新40】

◆SLD5土器埋設炉

- 1 10YR3/3-7, 5YR3/3 暗褐色 シルト 粘性中、しまり中、焼土を全体に含みやや密み、粉っぽい。
- 2 10YR3/3-7, 5YR3/3 暗褐色 シルト 粘性中、しまり中、1に良く似る。花崗岩小礫（径20-30mm）少、埋設土器内部の埋土。
- 3 7, 5YR5/6 明褐色 シルト（焼土） 粘性中、しまりやや密、上面赤味強く硬化。
- (4) 10YR3/3 暗褐色 シルト 粘性中、しまり中、白色粉状ブロック（火山灰）大量に含む。SLD5に先行する土坑の埋土。
- (5) 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性中、しまりやや密、地山ブロック（径10-20mm）やや多、4層（土坑）に切られる別遺構の埋土。

SLD6



SLD6炉跡



【新41】

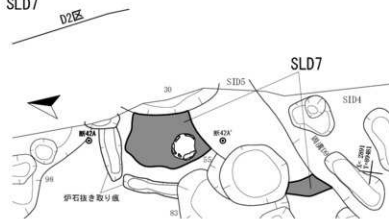
◆SLD6炉跡

- 1 5YR4/4-4/6 にぶい赤褐色～赤褐色 シルト（焼土）粘性やや強、しまりやや密、上面ほど赤味顕著、下部漸移的、上面に若干の硬化みられる。

0 1/20 1m

第41図 SLD5・6炉跡

SLD7



SLD7土器埋設炉

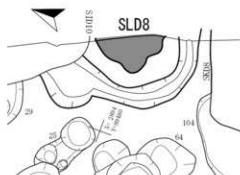
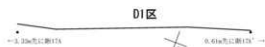


【新42】

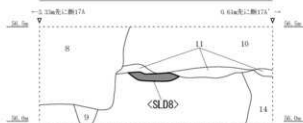
SLD7土器埋設炉

- 1 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性やや強、しまり中、埋設土器内堆積土。
- 2 5YR4/4 にぶい赤褐色 粘土(焼土) 粘性やや強、しまり中、上面やや硬化し赤味強い、砂焼土。
- (3) 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性中、しまりやや密、歩跡に切られる先行PIT埋土。

SLD8



D1区東壁(部分抜粋)



【新17】注記→45 ページ



SLD7炉跡 (第42図、写真図版36)

[位置] D 2 区。[帰属] 不明。[形態] 土器埋設石囲炉(または複式炉か)。[平面規模] 125×50cm (残存範囲外径)。[焼土層厚] 3cm。[放射性炭素年代測定] 14C-5: 4,530±30yrBP、埋設土器内(断42-1層下部)。[時期] 中期中葉か(年代測定値から)。

[所見] SID5住居跡床相当面で検出した炉跡の一つである。深鉢(第68図89)の胴下部(底部欠く)を正位に埋設している。土器埋設部の北辺・西辺を方形に区画する小溝を伴う。炉石設置の痕跡であろう。土器埋設部の南側には、ピット(PPD55)や不整凹部(後続遺構の掘方か)等を挟んで、小さな焼土生成箇所を検出した。不整凹部の底面には焼土の下部が残存したものとみられる弱い赤変が認められたことから、土器埋設部と小範囲の焼土は本来一連のものであると判断した。

SLD8炉跡 (第42図、写真図版36)

[位置] D 1 区。[帰属] 不明。[形態] 石囲炉。[平面規模] 60cm (炉石痕外周径)。[焼土層厚] 4cm。[時期] 中期前葉～中葉以前か。

[所見] SID5住居跡床相当面で検出した炉跡の一つである。炉石設置痕とみられる小溝が概ね円形に巡り、その内部に固く焼き締まった焼土が生成している。断18-11層は地山土ブロックからなる堅緻な薄層で、本炉跡は新时期住居の床面構築土とみられるこの層に被覆されている。したがってSID5床相当面における最新段階よりも古期に位置づけられる。

(3) 堅穴住居周溝

調査区内では住居跡が過密に重複し、複数の周溝が同一面で同時に検出された。このため、上掲の炉跡と同様、個々の周溝の帰属をその都度確定させることは困難であり、調査時には住居跡とは切り離して個別に精査・記録を進めた。その後の検討で帰属遺構を特定(推定)したものについては、先掲住居跡の記載に反映させたが、個別の所見を改めて記述する。

周溝D1 (写真図版37)

[位置] D 1 区。[帰属] 不明。[所見] SID2住居跡床相当面で検出した。D 1 区北端から北東-南西方向に約80cm走行したのち、南東方向に向けほぼ直角に屈曲する。埋土は地山土ブロック層である。溝状を呈するのはPPD15・17付近までだが、その延長上にある小規模柱穴のいずれかがこれに連続するものとみられる。後掲周溝D2と重複するが、先後関係は不明である。

周溝D2 (写真図版37)

[位置] D 1 区。[帰属] 不明。[所見] SID2住居跡床相当面で検出した。D 1 区北部を東西方向に横断する小溝である。弦側を南に向けごく緩い弧を描いて走行する。埋土は地山土ブロック層である。確認できる長さは180cm。両端がそれぞれ区外に延びる。前掲周溝D1と重複するが、先後関係は不明である。柱穴PPD2に切られている。

周溝D3 (写真図版37)

[位置] D 1 区。[帰属] 不明。[所見] SID5住居跡床相当面で検出した。D 1 区中央を北東-南西方向

に横断する小溝である。直線的ではあるが僅かにうねりがみられる。埋土は地山土ブロックと木炭粒を含む。両端はそれぞれ区外に延びる。

周溝D4

〔位置〕D 5 区。〔帰属〕SID7住居跡(古段階か)。〔所見〕SID7南側壁直下を東西に走行する、断続的かつ痕跡的な小溝である。両端はそれぞれ区外に延びる。幅10cm弱、深さは3～5cm程である。住居内側の側縁に接する杭穴状小穴はこれに伴う可能性がある。壁面構造物の痕跡であろう。

周溝D5

〔位置〕D 4 区。〔帰属〕SID7住居跡。〔所見〕SID7南側壁直下から約35cm内側を平行する小溝である。東西両端はそれぞれ区外に延びる。幅15cm前後、深さ10cm前後。壁が直立するしっかりとした掘り込みで、底面に杭穴状の小穴を伴う。埋土は地山土ブロックを多く含む。上掲周溝D4に後続する、新段階の壁面構造物の痕跡であると考えている。

周溝D6

〔位置〕D 4 区。〔帰属〕SID7住居跡。〔所見〕SID7南側壁直下から65cm、上掲周溝D5から25cm内側を平行する小溝である。全長65cm、幅及び深さは10cm前後で両端に柱穴状の小穴を伴う。SID7の南壁付近に設置された何らかの内部構造物の痕跡と考えられる。

周溝D7

〔位置〕D 4 区。〔帰属〕SID19住居跡。〔所見〕検出面はSID7床面だが、本来はSID7埋土を切るSID19の西側壁直下に伴うものである。南北方向に直線的に270cm走行し、そのほぼ中央で東側に直角に分岐してその先は区外へ延びている。埋土はSID19床面上に連続する自然堆積の黒褐色土であり、地山土ブロックをほぼ含まない点は、何らかの材の設置痕とするには違和感がある。またSID7床面からの深さが30cm前後、幅は20cm強と、他の住居跡周溝に比して非常にしっかりとした掘り込みであることなどから、堅穴住居の周溝とは異なる性格・機能を想定すべきであろう。

周溝D8

〔位置〕D 4 区。〔帰属〕SID14住居跡。〔所見〕SID7床面下位で検出した。全長110cm、幅10cm前後、深さ5cm前後。埋土は地山土ブロック層である。北東側にわずかに反ってごく緩い弧状を呈することから、円～楕円形の住居跡の壁際に伴う周溝の一部と推測したものである。壁面構造物の痕跡であろう。

周溝D9

〔位置〕D 2 区。〔帰属〕SID4住居跡。〔所見〕SID4北側壁直下に連続する幅10～15cmの小溝である。底面には不整凹部が断続し一部に杭穴状小ピットを含む。埋土は地山土ブロックを多く含む黒褐色土層である。壁面構造物の痕跡であろう。SKD6土坑を切っている。

周溝D10

〔位置〕D 3 区。〔帰属〕SID4住居跡。〔所見〕SID4南側壁直下に連続する幅10～15cmの小溝である。

底面には不整凹部が断続し一部に杭穴状小ピットを含む。埋土は地山土ブロックを多く含む黒褐色土層である。壁面構造物の痕跡であろう。SKD2土坑を切っている。

周溝D11

〔位置〕D1区。〔帰属〕SID5住居跡の可能性。〔所見〕SID2住居跡及びSID5住居跡床相当面の境界で検出した。D1区中央を概ね東西方向に横断している。弦側を南に向け極々緩い弧を描いて走行し、両端が区外に延びている。この周溝を境にSID5側の床相当面がごく僅かに(2～3cm程度)低くなっている。

(4) 土坑

(D区)

SKD1土坑 (第43図、写真図版38)

〔位置・検出状況〕D2区に位置する。SID5住居跡の床面において、環状の黒褐色土範囲として認識した。SID5の床面構築土がプラン中央を被覆する様子が観察されたことから、下位に存する古段階遺構と判断し精査着手したものである。

〔形状・規模〕西側が区外に延び全体形状は不明。上端・下端ともに弧状を呈するため、平面形は概ね円形基調と推測される。土層断面における開口部幅は116cm、底面幅85cm、開口部以下の残存深度は36cmで、いずれも最小値となる。底面は水平で平滑に整っている。底面には複数の小ピットが重複するが、本遺構に付属するピットの存否は確認できていない。壁面は底面外周から直立あるいはごく弱く外傾して立ち上がっている。削平により壁面上部の様相は不明となっているが、近傍の他の土坑と同様、フラスコ形の可能性を留保しておきたい。

〔堆積状況〕(断15・断16) 断15-31～32層、断16-31～32層が埋土に相当する。最下部に崩落土とみられる地山土ブロックが観察されるほかは、自然堆積の黒褐色土で埋没している。上位遺構(SID5ほか)の構築時に現開口部まで埋土ごと削平を受け、その上位をSID5の床面構築土に覆われたものと理解される。SKD6土坑によく似た堆積状況である。

〔重複・関連遺構〕SID5に直接切られている。

〔遺構の時期〕SID5との先後関係及び出土土器の年代観から、前期中葉～中期前葉を想定したい。

〔出土遺物〕前期中葉とみられる土器片(90)、石鏃(1081)が出土している。

SKD2土坑 (第43図、写真図版38)

〔位置・検出状況〕D3区に位置する。SID4住居跡の南側壁面～底面において、円形の黒褐色土範囲として認識した。

〔形状・規模〕フラスコ形土坑である。開口部径110cm、底面径140cmで、検出面(SID4床面)からの残存深度は90cmである。底面は水平で平滑に整っており、壁は最下部が短く直立したのち内傾し、底面から70cm付近で再び直立、開口部付近でわずかに外反している。

〔堆積状況〕(断29・31・43) 検出面以下の埋土は大きく3層に分層できる(断31)。底面直上から中部付近にかけては、壁面崩落土と流入土が互層を成し、内傾する壁の内側をほぼ埋め尽くしている。その後椀形の凹地となった上半部には自然流入による堆積が進む。この層は焼土・炭化物を多く含んでいる。さらに上位の開口部付近は、多量の砂で人為的に埋め戻されている。D3区西壁の断14-

⑧層に連続する砂層である。よって本遺構の本来の開口部(掘り込み面)は本層下面と考えられる。断29・断43においても、本土坑とSID4住居跡・配石D2の重複状況が観察できる。

〔重複・関連遺構〕 SID4住居跡に直接切られている。

〔放射性炭素年代測定〕 14C-2: 4570±30yrBP、埋土上部(断31-1層下部)。14C-14: 4560±30yrBP、底面直上(断14-SKD2埋土)。

〔遺構の時期〕 SID4との先後関係、土器の年代観、年代測定値を勘案し、中期初頭～中葉を想定したい。

〔出土遺物〕 埋土から縄文時代前期末葉～中期初頭に位置付けられる土器が出土している(91～93)。

SKD3土坑 (第44図、写真図版38)

〔位置・検出状況〕 D4区に位置する。SID7住居跡の床面上において、不整形円形の黒褐色土範囲として認識した。

〔形状・規模〕 平面形が60×30cmの長楕円形を呈する。検出面であるSID7床面からの深度は75cmである。底面は概ね平坦だが、長軸上の両端がやや低くなっている。長軸端(東-西)の壁面は直立するが、南側壁面の中部はやや大きく抉れている。また、開口部の周囲には同心円状に浅い段状の掘り込み(深さ8cm前後)を伴っており、短軸84cm、長軸は100cm以上で西端が区外に延びる。

〔堆積状況〕(断32) 断32-3層は地山土ブロックを含む黒褐色土で、底面から開口部付近まで堆積する。この上位には、締りを欠いたSID7床面直上層が連続して流入している(1・2層)。1層は焼土と遺物を多く含んでいる。4層はSID7の床面構築土の一部とみられ、1・2層はこれを切る。以上の堆積状況を整理すると、①1・2層はSID7廃絶後に流れ込んだものであり、その時点では本土坑の上部は凹地となっていた(埋まり切っていないかった)ことや、②埋土中～下部の3層は、SID7の床面構築土(4層)良く似ており、3層は4層を切るか同時のものと考えられることから、本土坑がSID7に伴うものである蓋然性が高いといえる。底面の沈み込みや壁面の不自然な抉れ等を勘案し、SID7に伴う柱穴(柱材は抜き取りまたは転倒)であった可能性を付記しておきたい。

〔重複・関連遺構〕 上述のとおりSID7に伴う可能性が高い。

〔遺構の時期〕 SID7と同じく、縄文時代中期中葉～後葉と考えられる。

〔出土遺物〕 埋土から縄文時代中期中葉とみられる土器片(94)、土偶脚部様の土製品(251)が出土している。

SKD4土坑 (第44図、写真図版38)

〔位置・検出状況〕 D3区に位置する。SID4住居跡南部の床面上において、黒褐色土及び地山土ブロックからなる不整形の広がりを検出した。この精査の過程で把握した複数のビット類のうちの一つである。

〔形状・規模〕 開口部は150×130cmのやや歪んだ楕円形を呈する。東側壁がほぼ垂直に立ち上がり、その直下に100×75cm程の楕円形の平坦な底面を持つ。西側壁は下部が短く直立したのちに外傾しSID4床面へと連続している。

〔堆積状況〕(断33) 内部は自然堆積の黒褐色土により満たされている。最上部はSID4床面構築土とみられる褐色砂質土ブロック層に部分的に被覆されている。遺構中央の埋土上部から深鉢(95)の胴下部が倒立状態で出土した。当該土器は底部外面がSID4床面と同レベルに揃うように埋置されてお

り、本来はSID4床面に伴う可能性が高いと考えられる。

〔重複・関連遺構〕 SID4の床面構築土が部分的に覆っているが、倒立させた埋設土器の底面が床面レベルと一致することから、SID4と同時(付属)の可能性が高いと考える。またPPD96を切っている。

〔遺構の時期〕 SID4と同じく、縄文時代中期中葉と考えられる。

〔出土遺物〕 上記の通り、深鉢(95)の胴下部が倒立状態で出土した。

SKD5土坑 (第45・46図、写真図版39)

〔位置・検出状況〕 D4区に位置する。SID7住居跡の北壁際において、調査区を横断する幅広の黒褐色土範囲として認識した。SID7床面構築土がこれを被覆する状況を確認したことから、下位に存する先行遺構と判断し精査着手したものである。

〔形状・規模〕 フラスコ形土坑である。開口部径184cm、底面径190cmで、検出面(SID7床面)からの残存深度は45cm前後。底面は水平で平滑に整っている。壁は底面外縁から滑らかに連続して短く直立したのちに、やや急激に内湾を強め、壁下端から30cm程のところで最も窄まる。開口部付近は弱く外反しているが、あくまで崩落埋没・削平を経た残存形態であり、これより上位の状況は不明である。

〔堆積状況〕(断14・34) 断34-5層は底面・壁面に露出した地山砂層の再堆積土で、底面直上を薄く覆っている。構築直後の堆積であろう。SKD7(後掲)と重複する範囲では、この薄層が下方に沈み込んでいる。この上に堆積するのは、北側上方から流入した白色火山灰ブロック層(4層)である。北側壁の上には同様の火山灰ブロック層である7層が露出しており、これが崩落したものであろう。なお7層は本来の堆積範囲の大半を後続遺構の削平により失っているものとみられる。その後4層の上位は自然流入土による堆積が漸次進んでいる(2・3層)。SID7の構築に伴って本遺構の上部は失われ、削平面に床面構築土である1b層が敷き均されている。断14にもSKD7土坑及びSID7住居跡との重複状況を見ることができる。

〔重複・関連遺構〕 SKD7土坑を切り、SID7住居跡に切られる。北側に近接するSID12・SKD9・SKD10とは直接の重複関係にないが、SKD7土坑はSKD9を切っており、間接的に本遺構の方が新しいといえる。

〔放射性炭素年代測定〕 14C-10:4680±30yrBP。埋土最下部(断14-34層最下部)。

〔遺構の時期〕 重複遺構との先後関係、出土遺物の年代観及び年代測定結果から、縄文時代中期前葉を想定したい。

〔出土遺物〕 縄文時代中期初頭～前葉に相当する土器(96～98)のほか、土器片加工土製品(261)、石鏃(1045)、石錐(1084)、磨製石斧(1107)、円礫片素材搔器(1142)、敲磨器(1199)等が出土している。

SKD6土坑 (第46図、写真図版39)

〔位置・検出状況〕 D2区に位置する。SID4住居跡の北側壁面～SID5住居跡床相当面において地山土ブロックを含む黒褐色土範囲として認識したものである。

〔形状・規模〕 平面形は概ね円形基調と推測できるが、西側が区外に延び不明である。開口部径は110前後。検出面からの残存深度は35cm前後である。底面は水平で平滑に整い、壁は底面外周から直線的あるいはごく弱く内湾して立ち上がる。上部がSID5床相当面に切られており現開口部より上位の状況は不明だが、壁面下端がやや外側に張り出すことから、フラスコ形土坑の可能性が高い。

〔堆積状況〕(断15) 断15-34～36層が本遺構の埋土である。下部には自然堆積の黒褐色土がレンズ

状に堆積し、その上面の凹地は人為的に埋め戻されている(同35層)。その後SID5床相当面の構築で敷き均された36層の下面により上部を切られている。SKD1土坑によく似た堆積状況である。

〔重複・関連遺構〕 南側をSID4に切られる。またSID5床相当面構築土に覆われている。

〔遺構の時期〕 重複遺構との先後関係及び埋土の性状等から、縄文時代前期中葉～中期前葉を想定したい。

〔出土遺物〕 なし。

SKD7土坑 (第45・46図、写真図版39)

〔位置・検出状況〕 D4区に位置する。SKD5土坑底面の北半部において、概ね円形を呈する黒褐色土範囲として認識したものである。SKD5の底面は地山土再堆積の薄層に覆われており、当初、下位にある本遺構を認識できなかった。この薄層が下方に沈み込む範囲を掘り下げたところ、本遺構の存在を確認した。

〔形状・規模〕 フラスコ形土坑である。開口部径120cm、底面径190cmで、断面にみる残存深度は70cm前後。底面は水平で平滑に整っており、壁は底面外縁から急激に内傾して立ち上がる。他と同様、あくまで崩落埋没・削平を経た残存形態であり、より上位の状況は不明となっている。

〔堆積状況〕(断14・34・35) 底面中央には、開口部からの流入土が盛り上がるように堆積しており(断14-52・53層、断34-②層)、フラスコ形土坑の典型的な堆積パターンが観察される。この上位もまた自然流入土及び壁崩落土で埋積が進んでいるが、黒褐色土主体の埋土には白色火山灰ブロックの混入が目立つ部分が認められる。SKD5と同様、壁面に表れた先行遺構の埋土から二次的に崩落・流入したものである可能性が高い。

〔重複・関連遺構〕 SKD5に切られている。したがってSID7住居跡より古い。また本遺構の北側壁面がSKD9土坑の南側底部付近と重複しこれを切っている。

〔放射性炭素年代測定〕 14C-1:4640±30yrBP。埋土最下部(断14-53層下部)。14C-9:4700±30yrBP、埋土最下部(底面直上)。

〔遺構の時期〕 重複遺構との先後関係、出土遺物の年代観及び年代測定結果から、縄文時代中期初頭～前葉を想定したい。

〔出土遺物〕 縄文時代前期後葉～中期初頭の土器片(99・100)、石鏃(1069)、円礫片素材搔器(1133)が出土している。

SKD8土坑 (第47図、写真図版39)

〔位置・検出状況〕 D1区に位置する。SID5住居跡床面相当面の精査段階において、柱穴状小ピット(PPD104・115・116)の完掘後にこれらの内壁に表れた黒褐色土範囲として認識した。

床面構築土とみられる人為薄層の下位の黒褐色土範囲として認識したものである。

〔形状・規模〕 断面形はフラスコ形土坑であることを示しているが、東側が区外に延び全体形状は不明となっている。開口部は長方形長楕円形を呈するらしい。短軸方向40cm、長軸方向は60cm以上である。断面にみる底面幅は短軸方向60cm、長軸方向は60cm以上。開口部からの残存深度は70cmを測る。底面は中央がやや高く、外縁に向かってごく緩く傾斜している。壁は内傾し開口部へ向かって概ね直線的に立ち上がっている。なお後述するが、本遺構は完掘に至っていない可能性がある。したがって上記計測値はいずれも最小の値としておきたい。

〔堆積状況〕(断17) 埋土の主体は自然堆積の黒褐色土で、小径の地山土ブロックを微量含む(断17-

14層)。なお、上述の中央が盛り上がる「底面」は、壁面から崩落した地山土層の上面の可能性もある。壁面を構成する地山土層と「底面」のそれとの差異は認め難いが、「底面」には極々微量の黒褐色土粒と大径の風化花崗岩の混入がみられた。本来であればさらに下位の精査を進めるべきであったが、安全管理上の制約により以下の掘削は断念している。

〔重複・関連遺構〕 SID5床相当面に切られている。隣接する柱穴状小ピットとの個別の先後関係は不明である。

〔放射性炭素年代測定〕 14C-18:4,550±30yrBP、埋土中部(断17-14層)。

〔遺構の時期〕 重複遺構との先後関係、出土遺物の年代観及び年代測定結果を勘案し、縄文時代前期中葉～中期中葉を想定したい。

〔出土遺物〕 縄文時代前期初頭～中葉の土器(101～104)、敲磨器破片(1176)が出土している。

SKD9土坑 (第47図、写真図版40)

〔位置・検出状況〕 D3区に位置する。SKD10土坑の精査過程において、その壁面～底面に表れた黒褐色土範囲として認識したものである。当初、SKD10埋土を切って重複する本遺構のプランを識別できず、SKD10埋土とともに上部を掘り上げてしまった結果である。

〔形状・規模〕 フラスコ形土坑である。開口部は66×50cmの不整楕円形、底面は径160cmの円形を呈する。下部東側は区外に延びる。開口部からの残存深度は55cm前後である。底面は水平で平滑に整っている。壁は底面外縁から強く内傾して直線的に立ち上がり、底面から50cm強のところでも最も窄まる。これより上位の部分がSKD10と重複しており、掘りすぎにより不明となっている。

〔堆積状況〕(断36) 埋土はほぼ一様の黒褐色土である。壁崩落土塊や人為による埋め戻し土は見られない。自然流入土により漸次埋没が進んだものと理解される。

〔重複・関連遺構〕 SKD10を切り、SKD7に切られている。

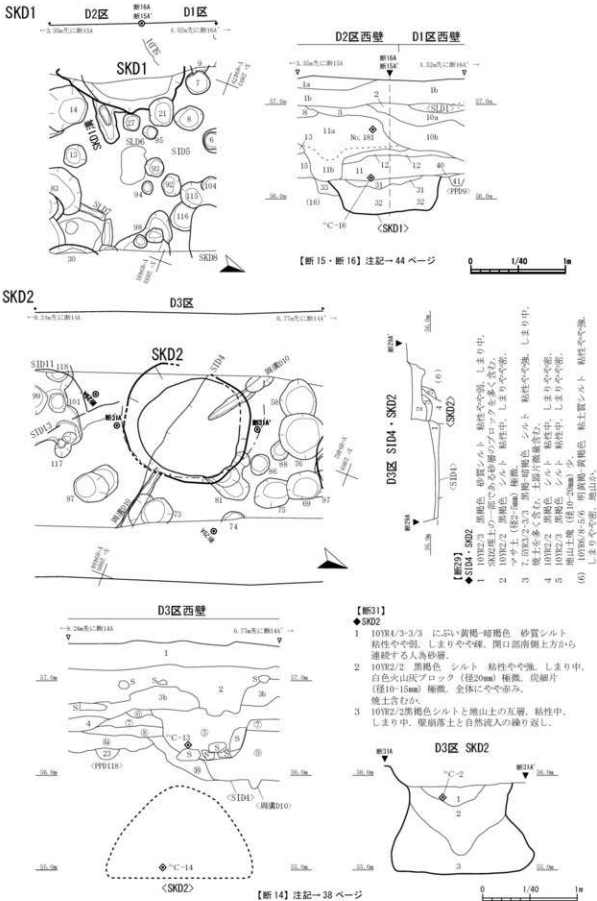
〔遺構の時期〕 出土遺物の年代観及び重複遺構との先後関係等から、縄文時代前期後葉～中期初頭を想定したい。

〔出土遺物〕 縄文時代前期後葉～中期初頭に相当する土器片(105・106)、敲磨器破片(1172)が出土している。

SKD10土坑 (第47図、写真図版40)

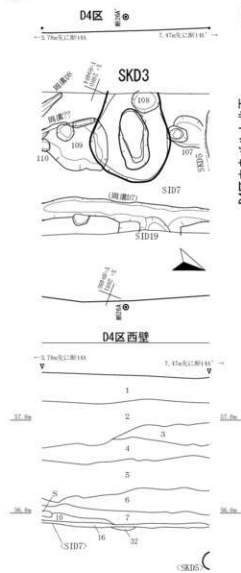
〔位置・検出状況〕 D3区に位置する。SID4住居跡とSID7住居跡とに挟まれた地点は、全体に複数の遺構が密に重複する地点であることが推測できたが、個々のプランは平面的に識別できなかった。このため、全体を徐々に掘り下げ、地山土層の上面が部分的に表れた面において再度プランの検討を行った。この際、地山土ブロックを多く含む不整楕円形の暗褐色土範囲として認識された。この時点では重複するSKD9土坑の存在を把握できていなかった。本遺構(SKD10)埋土とSKD9の埋土上部を同時に掘り上げ、その結果として両者が別遺構であることが判明した。

〔形状・規模〕 100×80cm程の不整楕円形の広がりを持つが、南側がSID7に切れ、また北側から中央部にかけてはSKD9土坑に切られているため、本来の形状は不明となっている。検出面からの残存深度は30cm前後。底面は丸みを帯びてそのまま壁に連続し、内湾外傾して立ち上がる。



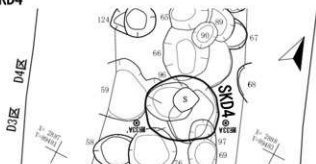
第43図 SKD1・2土坑

SKD3



【断14】注記→38ページ

SKD4



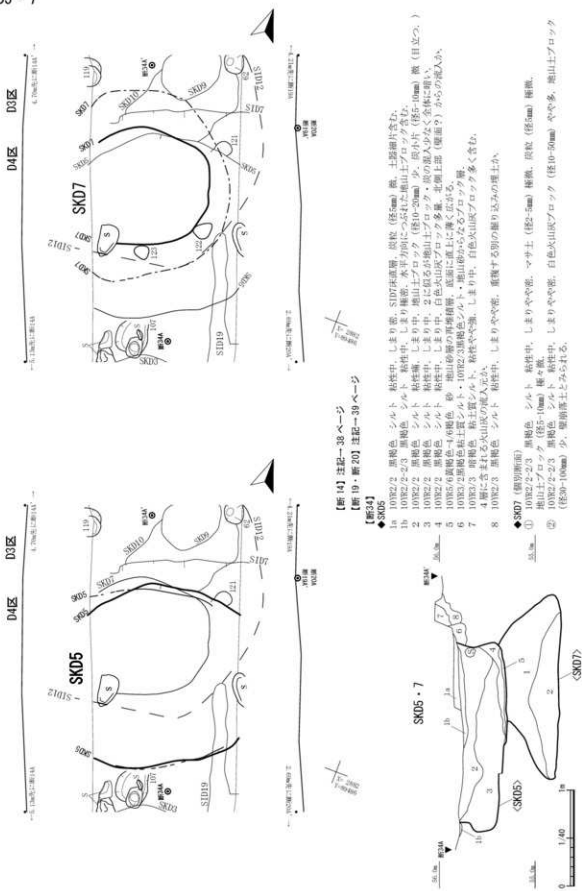
【断33】

●SKD4

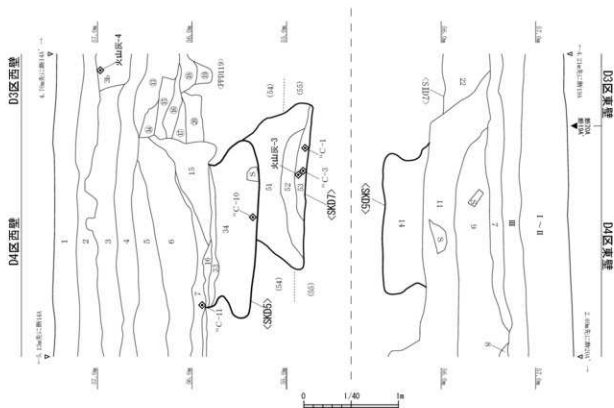
- 1 1018/4褐色 やや砂質シルト 粘性やや弱 締まり中 褐色土上プロット少量含む
- 2 1018/2/2黒褐色 シルト 粘性中 締まりやや弱
- 3 7.0183/3暗褐色 砂質シルト 粘性弱 締まりやや弱 (縦りすぎ?)

- ◆断58・断52
- SKD3
- 1 7.5183/3-3.4 暗褐色 シルト 粘性中、しまり疎、全体に粘土含まず、灰 (径5-10mm) 散 (目立つ)、全体約つばき。
 - 2 10182/2 黒褐色 シルト 粘性中、しまりやや疎、灰 (径5-10mm) 稀散。
 - 3 10182/2 黒褐色 シルト 粘性やや疎、しまりやや密、灰 (径5-10mm) 少、全体にやや粘土質で1・2に比して締まっている。
 - 4 10182/3 黒褐色 シルト 粘性中、粘性中、しまり密、灰土上プロット (径10-20mm) 少 (目立つ)、SID7の床面構築基に連続。

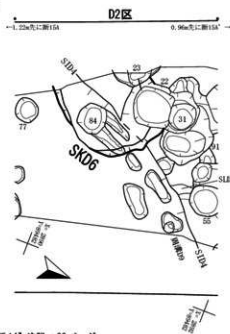
SKD5・7



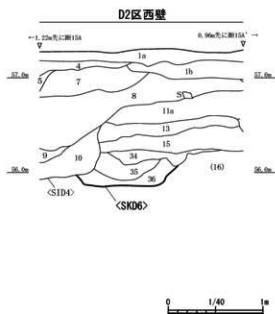
第 45 図 SKD5・7 土坑 (1)



SKD6



【断 14】注記→38 ページ
 【断 15】注記→44 ページ
 【断 19・断 20】注記→39 ページ



第46図 SKD5・7土坑(2)、SKD6土坑

〔堆積状況〕 埋土のうち地山土ブロックが卓越する部分と黒褐色土主体の部分があることは認識していたが、平面プランが不鮮明かつ不整形であったことから、範囲内全体の掘り下げを進めることとした。結果的に、黒褐色土主体の埋土はSKD9、地山土ブロックを多く含む暗褐色土が本遺構の埋土であることが判明した。地山土ブロック層は、掘削箇所を埋め戻す人為層とみられる。堅穴住居の下部構造等に伴う埋土である可能性を指摘しておきたい。また、主体土である暗褐色土は、隣接の遺構群の埋土(V層相当土)に比較して古い可能性が高い。なお、上述の経過により、本遺構個別の土層断面記録は作成できなかった。SKD9断面(断36)を参照されたい。

〔重複・関連遺構〕 SID7・SKD9に切られる。SID11住居跡・SID12住居跡はじめ、近接するSLD4炉跡・SLD5炉跡、柱穴状ピット類との先後は不明であるが、併存(付属)の可能性を留保しておきたい。

〔遺構の時期〕 重複遺構との先後関係等から、縄文時代中期初頭以前を想定したい。

〔出土遺物〕 なし。

(5) 配石遺構

以下に示す3基は、いずれも堅穴住居付属の炉跡の一部である可能性が高い。しかしながら、精査では明瞭な焼土の生成がみられず、形態・構造も不明確であることなどから、便宜上、礎配置を伴う遺構として扱った。

(C区)

配石C1 (第28図・写真図版40)

〔位置・検出状況〕 C1・2区に位置する。同区の掘り下げを進める過程で、遺物の出土がやや多く堆積層の落ち込みがみられる地点として認識した。その後、現地地表下100cm付近に到達したところで、黒色土面上に列状に配した礫と地山黄褐色土の敷き均しによる構築物として検出したものである。

〔構造・規模・所見〕 SIC1住居跡に伴う炉跡(複式炉か)であろう。板状礫(花崗岩)を連鎖状に配して方形に巡らせ、その内部に地山黄褐色土を敷き均した区画(南側)と、黄褐色土の敷き均しのみで配石を伴わない区画(北側)が連結し、全体が「日」字状の平面形を成すものと推測される。調査区内にはこの東半部が斜交して表れた状態となっている。配石が残存しない北側区画でも、周縁に礫の設置痕とみられる斑状痕跡が連続するので、本来は両区画ともに配石を伴っていた可能性が高い。配石の残存する主軸方向の長さは南側区画では100cm、北側区画が110cm前後で、全長は210cmほどである。西側が区外に隠れ、幅長は計測できない。焼土の生成範囲は限定的で、それぞれ区画の中央部に集中する(断11・12-6a層の上面)。なお同6b層は住居跡北側壁まで延びる人為薄層であり、本遺構(炉跡)の敷き均し土の延長部か、あるいは住居床面構築土の一部とみられる。

〔重複・関連遺構〕 SIC1住居跡に伴う。

〔遺構の時期〕 SIC1住居跡の想定年代と同様、縄文時代中期後葉と見られる。

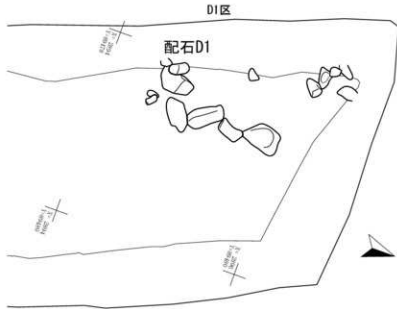
〔出土遺物〕 本遺構に伴う出土状況を呈する遺物はなかった。

(D区)

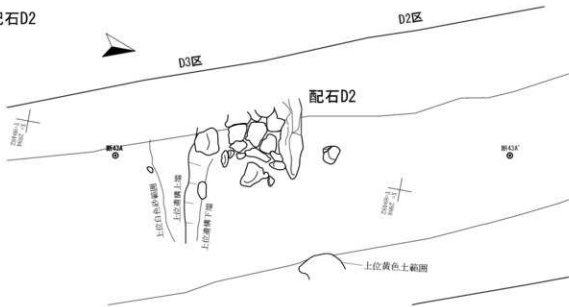
配石D1 (第48図・写真図版40)

〔位置・検出状況〕 D1区に位置する。同区の掘り下げを進める過程で、土器等の遺物とともに出土した礫の一部が列状に配置を見せる箇所として認識した。検出面は断16-7b層下面である。前掲SLD3炉跡と同面、SID2住居跡床面に相当する。

配石D1



配石D2



配石D2断面



【断面43】

◆配石D2

- 1 10YR2/1-2/2 黒-黒褐色 シルト 粘性やや強。しまりやや強。木炭片やや多。土器片集中。上面に礫(径20-30cm)点在。
- 2 10YR2/2-2/3 黒褐色 シルト 粘性中。しまりやや密。マサ土(径2-5mm)微(目立つ)。炭粒(径5mm)稀散。土器小片稀散。住居跡床面層(帰属住居跡要検討)。
- 3 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性やや弱。しまり中。4層砂地多く含む。
- 4 10YR4/2-6/3 灰黄褐色にぶい黄褐色 細砂 粘性弱。しまりやや密。花崗岩細片及びマサ土(径5-10mm)全体に少量含む。人為層か。
- 5 10YR2/2-2/3 黒褐色 シルト 粘性やや強。しまりやや密。マサ土混入他層より少ない。
- 6 10YR2/2-2/3 黒褐色 シルト 粘性中。しまりやや密。地山土塊(径10-20mm)多。住居床面施設または掘方理土か。
- 7 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性やや強。しまり中。マサ土(径2-5mm)微。南隣住居跡の埋土の可能性。
- (8) 地山黄褐色土。

第48図 配石D1・2

〔構造・規模・所見〕 SID2 住居跡に伴う炉跡の一部か。SLD3 炉跡の南側に近接して、長径 30～40cmの角礫（花崗岩）を連鎖状に L 字形に配している。東辺は 140cm、南辺は 60cmで西側が区外に延びている。また D1 区北西隅では、方形の隅または円形の一部に見える配置を持った石列がみられる。こちらは径 20cm前後で前者より小形の礫が用いられている。これらの配石と SLD3 が組み合わされ、やや大形の炉（複式炉か）を形成していた可能性を考慮に入れておきたい。

〔重複・関連遺構〕 SID2 住居跡に伴う（SLD3 炉跡と同時）か。

〔遺構の時期〕 SID2 住居跡の想定年代と同様、縄文時代中期中葉～後葉と見られる。

〔出土遺物〕 本遺構に伴う出土状況を呈する遺物はなかった。

配石 D2（第 48 図・写真図版 32）

〔位置・検出状況〕 D 3 区に位置する。同区の掘り下げを進める過程において、大形の板状礫が直立し並んだ状態で出土したことから、配石を伴う遺構と認識したものである。精査が進み、土層断面と併せて検討した結果、箱形を呈する掘り込みの内壁に石組を行ったものであることが判明した。掘り込み面は断 14-⑤層下面である。前掲 SID15 住居跡床面に相当する。

〔構造・規模・所見〕 SID15 住居跡に伴う炉跡の一部か。大形の板状礫（100×35×15cm程）を方形の掘り込みの北壁に貼り付けるように立てて設置し、底面には径 20～30cmの角礫を上面が揃うように敷き詰めている。西側は区外にあって不明だが、東・南側には面を形成する石組みは見られない。礫表面は全体に赤い変色が認められるが、被熱変化か風化に伴うものかは区別がつかない（当地の花崗岩は風化により表面がピンク色に変色する）。この掘り込み内部を埋める埋土は SID15 の堆積層と全く一様であり、焼土や炭化物等、燃焼行為に伴う痕跡が底面に集中する様子は見られなかった。

〔重複・関連遺構〕 SID15 住居跡に伴う（同時）か。その他の重複遺構をすべて切っている。

〔遺構の時期〕 SID15 住居跡と同様、縄文時代中期末葉を想定したい。

〔出土遺物〕 本遺構の被覆層から縄文時代中期後葉の土器（111～113）、石鏃（1018）や二次加工ある剥片が出土している。

(6) その他

SXD1 剥片貯蔵遺構（第 19 図、写真図版 46・71）

〔位置・検出状況〕 D 6 区に位置する。同区において V 層相当士の掘り下げを行う過程で、V 層相当層中で検出した剥片集中である。

〔所見〕 径約 10cmの円形の小凹部に、剥片が隙間なく詰め込まれたような状態で出土した。埋納の際の掘方は認識できない。塊としての外面が滑らかで全体が球状を呈することから、消滅性の袋状容器に入った姿を想像させる出土状況である。剥片は 38 点、計 141.1 g である。いずれも頁岩で、5～6 点の異なる母岩が想定できる。石核は含まれない。剥離面の観察からは、定型的技法による規格性のある剥片の産量を企図したようには思われない。粗雑な剥離によってヒンジが多発し、また潜在割れや節理の影響による破砕が頻発して、不整形な石片が多く生じたとみられる。この中から 5.0～1.5cmの有用な剥片が選択的に集められたものとみられる。

全点表裏の集合写真を掲載した（写真図版 71 - 1216）。

3 遺物（第56～82図、写真図版47～65）

(1) 土器

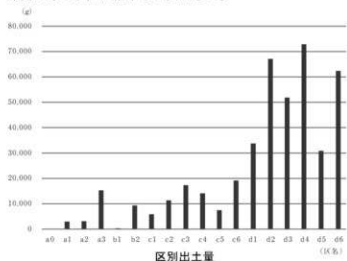
今回の調査では総重量約434kgの土器が出土し(第3表)、このうち249点を地点別に掲載した。個別資料の諸属性と所見については、後掲「第4表 土器一覧」を参照されたい。

帰属時期は縄文時代早期から後期にわたり、既往調査の成果と同じく当遺跡の時間幅の広さを反映している。調査面積が狭小であることを考えれば、遺構と同様、高密度の包含状況であったといえる。既述の通り、先後関係にある遺構が上下左右に隙間なく重複していたことから、各遺構の内部から先行段階の遺物が多く混入して出土する状況がまま見られた。

第4表 出土土器重量表

区名	出土量(g)	地点別計(g)
A0	0	23,379
A1	2,933	
A2	4,254	
A3	16,193	9,517
B1	316	
B2	9,202	321,850
C1	5,931	
C2	11,271	
C3	17,275	
C4	14,034	
C5	7,208	
C6	19,054	74,773
D1	33,736	
D2	67,223	
D3	52,023	
D4	74,398	
D5	32,108	
D6	62,362	
その他		4,607
合計		434,125

最も古い段階のものは、沈線文と貝殻縁圧痕をもつ資料(150)である。小片のため詳細不明だが早期中葉に位置付けられる。前期になると量的な増加が認められる。前期初頭の資料としては、繊維を含む胎土に羽状縄文を施文した、上川名Ⅱ式及び長七谷地Ⅲ群等に相当する一群がみられる。前期中葉以降はいわゆる「大木式と円筒式」の併存が認められるようになる。量的なピークは中期中葉にあり、引き続き両者が併存する。ただし既往調査のように主体・客体の別を考察できる出土状況は観察されなかった。中期後半には大木系の榎林式・最花式土器が含まれる。中期に続く後期初頭・前葉の資料は、斜面下部側であるD区に集中して出土した。



(2) 土製品（第5表、第83図、写真図版65）

250は、小型の土偶である。頭部と両肩が欠損し磨滅しているが、それ以外の胴体部分はおおむね残存している。下部に向かってスカートのように広がる形状であり、底面は円形で中央が浅く凹み、

内側には円形の沈線が施される。腰部部分の側面には穿孔があり、左側面から右側面まで貫通している。また、両肩は端部を欠損しているものの、縦に細い貫通孔の痕跡がある。おそらく、腰と肩の貫通孔に紐を通し、ペンダント状のアクセサリーとして使用されたものと考えられる。正面側は、胸部に逆アーチ状の沈線が横方向に2条平行し、沈線の間には細かい刺突が沈線と並行する。下の沈線からは、さらに2条の沈線が斜め下方に伸びて交わり、逆三角形の区画をなす。三角形区画の内部には5個の刺突があり、目・鼻・口のある顔面を表現しているようにも見える。背面側も2条の沈線が施されるが、三角形の区画は無く、下側の沈線は「V」字状となり、正中線上に刺突が施される。腰部と脚部の境界となる屈曲部分には刺突が一周している。色調は全体的に赤みをおびている。

251は、土偶の片足の一部とみられる。下面は平坦であり、自立する。上部の割れ口を観察すると、板状の粘土を巻いて棒状に成形した痕跡が窺える。太さは一定ではなく、下部が僅かにくびれている。底面は内側がやや凹んでおり、円形の沈線が施される。湾曲の具合から、右足と推定される。

252～255は、ミニチュア土器である。252と253はほぼ完成品である。

256は、有孔土製品である。小さな円盤状土製品のほぼ中央に貫通孔がある。角を面取りするなど丁寧な加工が施されている。

257は、土器の口縁部突起の破片とみられる。上面は円形のクレーター状に窪んでおり、下部へ行くと扁平になる。外面には縦方向の太い隆帯が貼り付けられ、その表面が2箇所押し窪められている。

258～267は、土器片加工土製品である。形態は、円形(258・261)、半円形(259・260)、六角形(262・263)、五角形(265)、四角形(264・266・267)など多種多様である。土器片の隅縁を研磨して形状を加工している。用途は定かではない。

(3) 石器・石製品(第84図、写真図版66～71)

①石鏃(1001～1078)

78点出土し、33点を掲載している。茎の有無および基部の形状で細分した。

無茎鏃は42点。二等辺三角形を成すもの(平基)が多く、基部が弧状に挟れる凹基を一部含む。

有茎鏃は33点。脚部(返し)が明瞭なものと、菱形の一端に茎部を作出したものとみられる。菱形基調のものは茎部が不明瞭な個体も含む。やや大形のものには尖頭器に分類すべきかもしれない。

なお、矢柄への装着痕とみられる、付着物を伴う個体が複数認められた。無茎鏃では長軸上に黒色付着物、有茎鏃では茎部を含む基部に暗褐色付着物がそれぞれ観察されている。既往調査で「アスファルト」付着例として報告されたものに相当する。また欠損部位は、無茎鏃では先端と脚部(返し)に、有茎鏃では先端と茎部下端に集中する傾向が認められる。

②石錐(1079～1086)

8点出土し、4点を掲載した。以下の通り細分した。

I 棒状に突出する刃部の一端に握み部を持つもの(1079～1082)。

II 全体が棒状に加工されたもの(1083～1086)。刃部のみ残存したものを含む可能性あり。

③石匙(1087～1103)

17点出土し、8点を掲載した。以下の通り細分した。

1a 縦型。両面加工により槍形の体部を持つもの。

1b 縦型。成形は1aと同様だが、1aに比して小型のもの。

1c 縦型。片面加工で短冊形の体部形状を成すもの。

刃部形成の細部加工が側縁辺に集中し、素材剥片の表表面を大きく残している。

1d 縦型。短冊形基調の素材剥片の縁辺をそのまま刃部として用いたもの。

加工は柄み部の形成に限定される。

2 横型。極小型。非実用の異形石器の類か。出土は1点のみ。

④異形石器(1104・1105)

2点出土し、いずれも掲載した。

⑤石斧(1106～1112)

7点出土し、4点を掲載した。

⑥石斧未成品(1113～1128)

16点出土し、10点掲載した。

a 剥離による成形段階のもの。

b 剥離面の稜を敲打している段階のもの。

c 敲打による成形がほぼ全面に及んだ段階のもの。

d 石斧未成品の可能性あるが不明のもの。

⑦円礫片素材搔器(1129～1158)

30点出土し、10点を掲載した。既往調査で「力持型スクレイパー」とされた器種に相当・類似するものである。

円礫の外皮面(自然面)と打撃による剥離面がなす鈍角の稜を刃部とする。後掲の礫器と同様、円礫の滑らかな外皮面を利用する石器群の一形態と考えられる。やや粗雑ながら両側縁を概ね平行するように成形しており、隅丸方形基調の形態を志向する意図をくみ取ることができ、礫器としたものに比してより強い定型性が認められる。

概ね小・中・大の三群に分けられ、指先で保持して使用するのに適した大きさのもの、掌中に握り込める程度のもの、掌中に収まらず握むとはみ出すものがある。

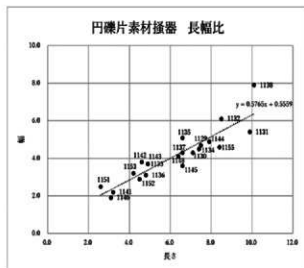
右図は長幅比の分布図である。小型のもの

のは長幅ともに3.0cm前後で、比較的明確に独立する。これより大きいものには、長さ5.0cm前後、7.0cm前後に集中がみられるが、全体的に漸移的なばらつきを見せている。小型から大型まで、概ね一定の長幅比を保っており、再整形・再調整を施しながら使用されたものである可能性が高い。

⑧礫器(1159～1166)

8点出土し、5点を掲載した。

やや扁平な楕円形の礫を素材とする。滑らかな外皮面と剥離面が成す鈍角の刃部が形成されている。整った楕円形の礫を選ぶ傾向が顕著だが、不整形な礫を素材としたものも含まれる。また破損後の個体に対し、同様の加工を施して刃部を再生し、再利用していた可能性が高いものと考えられる。



⑨ 敲磨器類(1167～1206)

40点出土し、14点を掲載した。以下の通り分類した。

1 擦石。細分は以下の通り。

1a 側縁に細長い擦面が形成されているもの。

片側縁の使用により全体形状が半月形を呈するものが主体。

1b 1aと同様だが、小形の礫を用いたもの。

1c 円礫の端部に複数の擦面が稜をなして重複するもの。

2 敲石。

3 凹石。同一箇所への反復的な敲打による凹部が認められるもの。

⑩ 石皿・台石類(1207～1209)

3点出土し、2点掲載した。

⑪ その他の石製品(1210～1212)

1210は有孔の石製垂飾具である。長楕円形的一端を水平に断ち切ったような形状に成形されている。表裏面は平滑でやや透明感のある青緑色を呈し、白色部が雲状に入る(緑色片岩か)。側面には母材本来の層状の縞に加え、加工痕とみられる擦痕が認められる。表裏からの穿孔により、ほぼ中央に貫通孔を持つ。開口部5mmの孔は楕円状に窄まり、表裏の穿孔が接する部分では3mm弱の径となる。

1211は有孔礫である。自然礫であり孔周辺に加工の痕は認められない。選択的に採取し、遺跡内に持ち込んだものであろう。

1212は石錘である。中心線上に敲打による溝を持つ。溝は平坦な面(図正面)を縦断し、上端に設けられた袂りに連続する。下面にも続くが途切れ、裏面は無加工となっている。図左側縁にも敲打面を持つが、右側は欠損面となっており、石錘としての成形痕か、転用前(敲磨器等)の使用痕跡かについては判別できない。

1213～1215は軽石である。意図的に遺跡内に持ち込まれたものであり、人為的な擦り減りが部分的に観察できる。写真のみ掲載した。

第5表 土器観察表

標本番号	埋蔵層	出土層No.	土質・形状・重量	所在地紹介	所見	寸方×(cm)	形状	備考	写真掲載
003	1	SI41	硬土	A2区: ~ 65cm	器体、口縁→胴上部、平縁、口唇部より立ち上がり、蓋文LR (横) 帯内、口唇内側面北縁、内面十字 (横)	口径 25.2	40%	中筒中盤	49
009	2	SI41	硬土	A2区: ~ 65cm	器体、口縁→胴上部、傾、蓋文LR、口唇部より立ち上がり、蓋文LR (横) 帯内、口唇内側面北縁、内面十字 (横)		20%	大木80式	49
008	3	SI41	硬土		器体、胴部、口縁部、平縁、口縁部、蓋文LR (横) 帯内、口唇内側面北縁、内面十字 (横)		20%	大木80式	49
001	4	SI41	硬土		器体、口縁→胴部、平縁、口縁部、蓋文LR (横) 帯内、口唇内側面北縁、内面十字 (横)	口径 26.1 底径 10.6 高 31	100%	中筒中盤	49
030	5	C2区	硬土	~ 120cm (調査区)	器体、口縁→胴上部、平縁、口縁→胴部、蓋文LR (横) 帯内、口唇内側面北縁、内面十字 (横)		10%	大木70式*	49
031	6	C2区	硬土	80 ~ 110cm	器体、口縁→胴上部、平縁、口縁→胴部、蓋文LR (横) 帯内、口唇内側面北縁、内面十字 (横)		10%	大木3式*	49
232	7	SD1	硬土	D6区 (南側): ~ 65 ~ 115cm D6区 (北側): ~ 70cm / D1区: ~ 70cm / D1区: ~ 65 ~ 70cm	器体、口縁→胴上部、平縁、口縁→胴部、蓋文LR (横) 帯内、口唇内側面北縁、内面十字 (横)		20%	大木80式	49
006	8	SD2	硬土	D6区 (北側): ~ 65 ~ 70cm / D1区: ~ 65 ~ 70cm / D1区: ~ 65 ~ 70cm	器体、口縁→胴上部、平縁、口縁→胴部、蓋文LR (横) 帯内、口唇内側面北縁、内面十字 (横)		40%	口唇上盤+式	50
058	9	SD2	硬土	D1区: ~ 85 ~ 95cm	器体、口縁→胴上部、平縁、口縁→胴部、蓋文LR (横) 帯内、口唇内側面北縁、内面十字 (横)	口径 14.1	100%	大木80式	50
055	10	SD2	硬土	D1区 (北側): ~ 70cm / D1区: ~ 70cm / D1区: ~ 70cm	器体、口縁→胴上部、平縁、口縁→胴部、蓋文LR (横) 帯内、口唇内側面北縁、内面十字 (横)	口径 35.4	90%	大木80式	50
064	11	SD2	硬土		器体、口縁→胴上部、平縁、口縁→胴部、蓋文LR (横) 帯内、口唇内側面北縁、内面十字 (横)		20%	大木80式	50
068	12	SD2	硬土		器体、口縁→胴上部、平縁、口縁→胴部、蓋文LR (横) 帯内、口唇内側面北縁、内面十字 (横)		20%	大木80式	50
000	13	SD2	硬土	D1区: ~ 40 ~ 70cm	器体、口縁→胴上部、平縁、口縁→胴部、蓋文LR (横) 帯内、口唇内側面北縁、内面十字 (横)	口径 13.3	40%	口唇上盤+式	51
005	14	SD2	硬土		器体、口縁→胴上部、平縁、口縁→胴部、蓋文LR (横) 帯内、口唇内側面北縁、内面十字 (横)	口径 18.3	40%	中筒中盤	51
009	15	SD2	硬土		器体、口縁→胴上部、平縁、口縁→胴部、蓋文LR (横) 帯内、口唇内側面北縁、内面十字 (横)	底径 10.6	40%	中筒中盤	51
007	16	SD2	硬土		器体、口縁→胴上部、平縁、口縁→胴部、蓋文LR (横) 帯内、口唇内側面北縁、内面十字 (横)	口径 16.7	100%	大木80式	51
000	17	SD2	硬土		器体、口縁→胴上部、平縁、口縁→胴部、蓋文LR (横) 帯内、口唇内側面北縁、内面十字 (横)		15%	大木80式	51
067-a	18-a	SD3	硬土	D1区: ~ 85 ~ 95cm	器体、口縁→胴上部、平縁、突起小2単位、キリノハ一帯、口唇部、蓋文LR (横) 帯内、口唇内側面北縁、内面十字 (横)		70%	大木80式	51
067-b	18-b	SD3	硬土	SD3: 硬土	器体、口縁→胴上部、平縁、突起小2単位、キリノハ一帯、口唇部、蓋文LR (横) 帯内、口唇内側面北縁、内面十字 (横)			18-aと同一器体	51
061	19	SD3	硬土	SD3: 硬土	器体、口縁→胴上部、平縁、突起小2単位、キリノハ一帯、口唇部、蓋文LR (横) 帯内、口唇内側面北縁、内面十字 (横)	底径 3.7	100%	中筒	51
006	20	SD3	硬土	SD2: 硬土 / 土器 1の SD2: 硬土 / 土器 2の SD2: 硬土 / 土器 3の 土上層 / D1区: ~ 40 ~ 70cm	器体、口縁→胴上部、平縁、突起小2単位、キリノハ一帯、口唇部、蓋文LR (横) 帯内、口唇内側面北縁、内面十字 (横)	口径 32.2 底径 10.6 高 32.6	80%	大木70 ~ 80式	52
002	21	SD3	硬土		器体、口縁→胴上部、平縁、突起小2単位、キリノハ一帯、口唇部、蓋文LR (横) 帯内、口唇内側面北縁、内面十字 (横)	口径 13.5	90%	大木7式	51
070	22	SD3	硬土		器体、口縁→胴上部、平縁、突起小2単位、キリノハ一帯、口唇部、蓋文LR (横) 帯内、口唇内側面北縁、内面十字 (横)		15%	口唇上盤+式*	51
071	23	SD3	硬土		器体、口縁→胴上部、平縁、突起小2単位、キリノハ一帯、口唇部、蓋文LR (横) 帯内、口唇内側面北縁、内面十字 (横)		10%	口唇上盤+式*	51

*想定器式名

坑号	埋藏 番号	出土地点	形状・ 出土寸法No.	所在地名	所在	寸法 (cm)	形状	形式	備考	图版 图号
072	24	SD3	埋土	弥生地跡合	西縁、割部S字状跡文、内面刻い文字(横)・縦線合		不明	大木29式		52・49
073	25	SD3	埋土		西縁、口縁一割上部、平縁、口縁一底縁、溝文(横)・内面十字(横)→一底縁跡文、割部・溝文(横)・内面十字(横)→一底縁跡文、内面十字(横)・外縁刻印(横)		10%	大木86式		52・49
074	26	SD3	埋土		西縁、口縁一割上部、平縁、口縁外縁刻印(横)・内面十字(横)→一底縁跡文、割部・溝文(横)・内面十字(横)・外縁刻印(横)		25%	中期中小		52・49
094	27	SD4	灰層・土跡2		西縁、口縁一底縁、底縁合、平縁、割部・溝文(横)→一底縁跡文、内面十字(横)	底径8.0、底高(20.95)	100%	大木89式		52・49
096	28	SD4	灰層・土跡1		小型深鉢、割中部一底縁、上縁刻印(水平・高)→一部深縁部あり、割部・溝文(横)→一底縁跡文、内面十字(横)	底径6.1	100%	大木89式		52・49
097	29	SD4	埋土・土跡3		小型深鉢、割下部一底縁、割部・溝文(横)→一底縁跡文、内面十字(横)・一部底縁跡文、外縁刻印(横)	底径3.0	100%	大木89式		52・49
098	30	SD4	黄色土下位・土跡4		付存深鉢、割下部一底縁、右部刻印(平縁)・外縁、割部・溝文(横)→一底縁跡文、内面十字(横)	底径11.0	100%	大木89式		52・49
108	31	SD4	黄色土下位・土跡5	DE区南端下層/DE区C～ D層/V層/SD4 検出部 ～30cm・埋土	西縁、口縁一割上部、平縁、下縁刻印(平縁)・外縁、割部・溝文(横)→一底縁跡文、内面十字(横)		20%	大木89式		52・49
109	32	SD4	黄色土下位・土跡6		西縁、口縁一割上部、平縁、下縁刻印(平縁)・外縁、割部・溝文(横)→一底縁跡文、内面十字(横)		40%	大木89式		53・49
107	33	SD4	土跡2		西縁、口縁一割下部、平縁小、割部・溝文(横)・内面十字(横)		15%	中期中小		53・30
095	34	SD4	黄色土下位・土跡3		西縁、口縁一底縁、平縁、口縁一割部・溝文(横)・内面十字(横)・外面上部刻印(横)	口径(14.7)、底径7.5、底高3.01	100%	中期中		53・50
093	35	SD4	黄色土下位・土跡1		西縁、口縁一底縁、平縁、口縁一底縁、溝文(横)・内面十字(上部)下部刻印、外面上部刻印(横)	口径13.0、底径6.0、底高3.0	100%	中期中		54・50
138	36	DE区北	土跡4		西縁、割部・溝文(横)・上縁刻印(平縁)・外縁、割部・溝文(横)→一底縁跡文、内面十字(横)	底径9.0	80%	大木89式		52・50
139	37	DE区北	土跡4	SD4南側(103区北側)埋土(高1.02より下層)	西縁、口縁一割下部、底縁跡3単位あり、口縁一割部・溝文(横)→一底縁跡文、内面十字(上部)下部刻印、外面上部刻印(横)	口径19.0	50%	大木89式		54・50
147	38	DE区北	土跡4		西縁、口縁一割下部、底縁跡、割部・溝文(横)→一底縁跡文、内面十字(上部)下部刻印、外面上部刻印(横)		20%	大木89式		53・50
137	39	DE区北	土跡3		西縁、割中部一底縁、上縁刻印(水平・高)→一部深縁部あり、割部・溝文(横)→一底縁跡文、内面十字(横)	底径8.0	100%	大木89式		53・50
142	40	DE区北	土跡2①	SD4南側(103区北側)埋土(高1.02より下層)	西縁、口縁一割下部、底縁跡3単位あり、口縁一割部・溝文(横)→一底縁跡文、内面十字(横)	口径12.4	50%	大木89式		54・50
145	41	DE区北	土跡2①	SD4・埋土・土跡1	西縁、口縁一割下部、底縁跡、割部・溝文(横)→一底縁跡文、内面十字(横)		30%	大木89式		54・51
146	42	DE区北	土跡2①		西縁、口縁一割下部、底縁跡、割部・溝文(横)→一底縁跡文、内面十字(横)		15%	大木89式		55・51
136	43	DE区北	土跡1		西縁、口縁一割下部、底縁跡3単位あり、割部・溝文(横)→一底縁跡文、内面十字(横)・外面上部刻印(横)	口径20.0	100%	大木89式		55・51
144	44	DE区北	土跡1(底高)・DE区C～D層		西縁、口縁一割下部、平縁、口縁外縁刻印(平縁)・外縁、割部・溝文(横)→一底縁跡文、内面十字(横)		30%	後期初小		55・51
116	45	DE区南東	7層		西縁、口縁外縁刻印、底縁跡、割部・溝文(横)・外縁刻印(横)		15%	大木89式		55・51
117	46	DE区南東	7層		西縁、口縁一割上部、平縁、割部・溝文(横)→一底縁跡文、内面十字(横)		20%	大木89式		55・51
118	47	DE区南東	7層		西縁、口縁一割上部、平縁小、割部・溝文(横)→一底縁跡文、内面十字(横)		15%	大木89式		55・51

採集 番号	出土地点	層位・ 出土層No.	出土品組合	所見	寸長さ (cm)	規格	形式	備考	図版 掲載	
152	92	SKD2	埋土	漆鉢、口縁部、平縁小、口縁部、唇状口縁L&R、胴部、腰帯+斜交肩、胴部、施文L&R (横・内面)ナナ字 (横)、縹色帯 埋土ナナ字 (横)、縹色帯		5%	円筒下腹6式*		61	55
153	93	SKD2	埋土	漆鉢、口縁部、平縁小、口縁部、唇状口縁L&R、胴部、腰帯+斜交肩、胴部、施文L&R (横・内面)ナナ字 (横)、縹色帯 埋土ナナ字 (横)、縹色帯		10%	大木6式*		61	55
185	94	SKD3	埋土	漆鉢、胴部、施文L&R (横)、内面ナナ字 (横)		10%	中腹中腰小		61	55
206	95	SKD4	埋土土層	漆鉢、胴下部、胴部、施文L&R (横)、内面ナナ字 (横)、灰部欠損 (滑面)		100%	中腹小	埋設 (倒立) 小	61	55
171	96	SKD5	埋土	漆鉢、胴下部、胴部、施文L&R (横)、内面ナナ字 (横)	直径77	100%	中腹小		61	55
186	97	SKD5	埋土一拵	漆鉢、口縁部、平縁小、口縁部、唇状口縁L&R、胴部、腰帯、唇状口縁L&R、内面ナナ字 (横)		5%	円筒上腹6式*		61	55
187	98	SKD5	埋土一拵	漆鉢、口縁部、平縁小、口縁部、唇状口縁L&R、胴部、腰帯、唇状口縁L&R、内面ナナ字 (横)、縹色帯 埋土ナナ字 (横)、縹色帯		10%	円筒上腹6式*		61	55
188	99	SKD7	埋土	漆鉢、口縁部、平縁小、口縁部、唇状口縁L&R、胴部、腰帯、唇状口縁L&R、内面ナナ字 (横)、縹色帯 埋土ナナ字 (横)、縹色帯		10%	円筒下腹4式*		61	56
189	100	SKD7	埋土	漆鉢、口縁部、平縁小、口縁部、唇状口縁L&R、胴部、腰帯、唇状口縁L&R、内面ナナ字 (横)		10%	大木7a式		61	56
190	101	SKD8	埋土	漆鉢、口縁部、唇状口縁L&R、内面ナナ字 (横)、縹色帯		5%	胴腹中腰小		62	56
191	102	SKD8	埋土	漆鉢、胴部S字状連続紋 (横)、内面ナナ字 (横)、縹色帯		5%	胴腹中腰小		62	56
192	103	SKD8	埋土	漆鉢、胴部、粘土層状連続紋L&R (横)、内面ナナ字 (横)		10%	円筒下腹4式*		62	56
193	104	SKD8	埋土	漆鉢、口縁部、平縁小、口縁部、唇状口縁L&R、胴部、腰帯、唇状口縁L&R、内面ナナ字 (横)		5%	上川名7a式*		62	56
194	105	SKD9	埋土	漆鉢、口縁部、平縁小、口縁部、唇状口縁L&R、胴部、腰帯、唇状口縁L&R、内面ナナ字 (横)、縹色帯 埋土ナナ字 (横)、縹色帯		15%	大木7a式*		62	56
195	106	SKD9	埋土	漆鉢、口縁部、平縁小、口縁部、唇状口縁L&R、胴部、腰帯、唇状口縁L&R、内面ナナ字 (横)、縹色帯 埋土ナナ字 (横)、縹色帯		10%	円筒下腹6式		62	56
196	107	PPD4	埋土	漆鉢、胴上部 (口縁部以下)、縹色帯+唇状口縁L&R、内面ナナ字 (横)、縹色帯 埋土ナナ字 (横)、縹色帯		10%	円筒上腹6式*		62	56
198	108	PPD4	埋土	漆鉢、口縁部、唇状口縁L&R、胴部、腰帯、唇状口縁L&R、内面ナナ字 (横)、縹色帯 埋土ナナ字 (横)、縹色帯		10%	円筒上腹6式*		62	56
196	109	PPD58	埋土	漆鉢、胴部、施文L&R (横) → 縹色帯、内面ナナ字 (横)		10%	大木8b式		62	56
197	110	PPD81	埋土	漆鉢、口縁部、平縁小、外唇口縁L&R、胴部、腰帯、唇状口縁L&R、内面ナナ字 (横)		5%	上川名7a式		62	56
198	111	配石 D2	土砂層	漆鉢、口縁部、唇状口縁L&R、胴部、腰帯、唇状口縁L&R、内面ナナ字 (横)		10%	大木8b式		62	56
199	112	配石 D2	土砂層	漆鉢、口縁部、平縁小、胴部、施文L&R (横) → 縹色帯、内面ナナ字 (横)		10%	大木8b式		62	56
199	113	配石 D2	土砂層	漆鉢、口縁部、平縁小、口縁部、唇状口縁L&R、胴部、腰帯、唇状口縁L&R、内面ナナ字 (横)		10%	大木8b式*		62	56
012	114	A2/F	.50 ~ .75cm	漆鉢、口縁部、唇状口縁L&R、胴部、腰帯、唇状口縁L&R、内面ナナ字 (横)	小片		大木加式		62	56
004	115	A2/F	.70 ~ .75cm	漆鉢、口縁部、唇状口縁L&R、胴部、腰帯、唇状口縁L&R、内面ナナ字 (横)	口縁 (20%)	40%	円筒上腹6式*		62	56
011	116	A2/F	~ .95cm	漆鉢、口縁部、唇状口縁L&R、胴部、腰帯、唇状口縁L&R、内面ナナ字 (横)		15%	大木8b式		62	56

*型定形式名

地区	国庫番号	出土地点	副坑・掘上層No.	所在地統合	所属	尺寸等 (cm)	構成	形式	備考	図版	写真
013	117	A2区・A3区	30 ~ 25cm		西側・口縁部、平縁・口縁内側、単文書面東部北端文書区(北辺段3条・横)、横線含	小片	長七角型並斜			62	56
014	118	A2区・A3区	~ 25cm		西側・口縁部、横・縦文様、頭部(平縁部突出部)、横文区(横)、内側面中央文字(横)、内側面中央部(横)	15%	扁平式*			62	56
006a	119-a	A3区	35 ~ 40cm		小型型鉢、口縁部、胴下部~底部、腹平縁、口縁部(十字状頭部・横文区(横)、内側面十字)、内側面上部(横)付着	40%	中筒中腹	6bと同一体		62	56
006b	119-b	A3区	35 ~ 40cm		*			6aと同一体		62	56
007	120	A3区	45 ~ 60cm	A3区：35 ~ 40cm	西側・口縁~胴上部、横・縦線・キエリバー形・口縁部(横)、通気取付文・横文区(口縁部、胴部)、内側十字(一部短い十字)	30%	大木8b式			62	56
008	121	A3区	土器1, 3	A3区(土器1) : 45 ~ 65cm A3区(土器3) : 55 ~ 65cm A3区(土器4) : 40cm (厚底部分) / SA1 横上	西側・口縁~胴下部、平縁・口縁内側、横文区(横)、内側十字(上下横、下平縁)	口縁(27.0)	中筒中腹			63	57
009	122	A3区	土器2	A3区(土器2) : 55 ~ 65cm	小型型鉢、口縁~胴上部、横・縦線・単位単位不明、横文区(横)、内側面上部(横)付着	器高 16.5, 底径 5.6	中筒中腹			63	56
010	123	A3区	土器1と同一体	A3区：45 ~ 60cm	西側・口縁~胴上部、横・縦線・外側面(横)、横文区(横)、内側十字(横)、横溝	20%	中腹小			63	56
016	124	B2区	~ 60cm		西側・胴部(内反十字形源部)、横文区(横)、横文区(横)、内側十字(横)	15%	大木8b式			63	57
017	125	B2区	~ 60cm		西側・口縁部、横・縦線・頭部(平縁部)と通気取付文、口縁部(横)、横文区(横)、内側十字(横)	15%	大木8b式			63	57
018	126	B2区	~ 60cm		西側・口縁部、横・縦線・平縁部・胴口、内側十字		小片	中筒中腹		63	57
015	127	B2区	60 ~ 100cm(横)		西側・口縁部、横・縦線(横小・横文区(横)、内側十字(横)、外側面(横)付着	10%	中筒中腹			63	57
027	130	C1区(SB1)	60 ~ 70cm(横)	C1区：土器1(点未打)	西側・口縁部~胴下部、横・縦線・外反口縁部(横)、内側面上部(横)、腹位平縁・横文区(横)、内側十字(横)	30%	扁平式・			64	57
029	129	C1区	~ 130cm		西側・口縁部、横・縦線・変形部単位、横線文・外側面(横)、内側十字(横)	10%	中腹上腹8a式*			63	57
031	130	C1区	50 ~ 60cm		西側・胴部、横文区(横) → 区画区画内側変形部・横文部(横)、内側面(十字(横))	10%	大木8b式			63	57
032	131	C3区	50 ~ 60cm		西側・口縁部、横・縦線・突起部取付文(人間状表面小・横文区(横)、内側十字(横))	15%	大木7式*			63	57
028	132	C3区(SB2)	60 ~ 70cm(横)		西側・口縁部、平縁・口縁外側部(高し型厚・横文区(横)、内側十字(横))、内側面(横)付着	10%	中腹面窄小			63	57
019	133	C3区	土器1	C3区：~ 110cm(横区画)	西側・口縁~胴下部、横・縦線・存部突起、口唇(平縁付縁部・胴部・腹部・胴口)胴部・横文区(横) → 横文区(横)、内側十字(横)	口縁(24.4)	50%	筒型土器式*		64	57
021	134	C3区	土器2, 3	C3区：土器2	西側・胴上部~下部、横・縦線・横文区(横)、胴中心・腹部・突起部記4単位、胴下部(横文区(横)、内側十字(横)) → 横文区(横)、内側十字(横)	胴部最大径(20.8)	50%	大木8a*		65	58
020	135	C3区	土器4		西側・胴下部~底部、横文区(横)、内側十字(突部付)、外側面(横)付着	底径12.2	100%	中筒中腹		64	58
022	136	C3区	80 ~ 110cm		西側・口縁~胴上部、横・縦線・口縁部(横文区(横)・腹部・突起部(横)、横文区(横) → 横文区(横)、内側十字(横))、口縁外側部(高し型厚・横文区(横)、内側十字(横)) → 横文区(横)、内側十字(横)	20%	大木8b式			63	58
023	137	C3区	80 ~ 110cm		西側・口縁部~胴上部、横・縦線・突起部(横)、口縁部(横文区(横)、内側十字(上下横、下平縁))、胴部、横文区(横)、内側十字(上下横、下平縁)	20%	大木8b式	117と同一体		64	58
022	138	C3区	~ 110cm	C3区：~ 110cm(横区画)	西側・口縁~胴上部、平縁・口縁部(腹部・胴口)胴部、横文区(横) → 横文区(横)、内側十字(横)	胴部最大径(23.0)	40%	大木8a*		65	58
010	139	C4区	60 ~ 100cm		西側・口縁~胴上部、横・縦線・突起部記5単位(突付、口縁~胴部、横文区(横) → 平縁・横文区(横)、内側十字(横))	20%	大木8b式*			65	58

*想定形式名

探検 番号	出土地点	層位、 出土層 No.	測地座標値	発見 品名	寸長さ (cm)	構成	形式	備考	写真 掲載
008	C1区	90 ~ 100cm		漆鉢、銅部(内底、外底裏、底文右側)・錫・出流口・蓋文上段L.R.(横) → 有部瓦器・平流口部以下之平流口部、内面ナナ字(横)	10%	水木7a式*	水木7a式*	65	58
006	C1区	~100cm(調査区)		漆鉢、口縁部(外縁、内縁)、口縁部(内底裏、外底裏)・蓋文(横) → 彫文・内面付文・内面裏	不明	水木7式*	水木7式*	66	58
007	C1区	~100cm(調査区)		漆鉢、口縁部、小流口縁、蓋文L.R.(横) → 彫文・底文右側、内面ナナ字(横)・銅鑿合	10%	内閣上層b式*	内閣上層b式*	65	58
002	C1区(北側)	90 ~ 100cm		漆鉢、口縁部、小流口縁、口縁部(外縁、内縁)、彫文・底文右側、内面ナナ字(横)	10%	内閣上層b式*	内閣上層b式*	66	58
004	C1区(北側)	90 ~ 100cm		漆鉢、口縁部、蓋文L.R.(横) → 彫文・底文右側、内面ナナ字(横)	10%	内閣上層b式*	内閣上層b式*	66	58
009	C1区(北側)	90 ~ 100cm		漆鉢、口縁部、蓋文L.R.(横) → 彫文・底文右側、内面ナナ字(横)	10%	水木7b式*	水木7b式*	66	58
011	C1区(北側)	90 ~ 100cm		漆鉢、口縁部、平流口、ナナ文字・口内面銅鑿合の字状に彫文・口縁部、蓋文L.R.(横) → 彫文・底文右側、内面ナナ字(横)	15%	水木8a式*	水木8a式*	66	59
043	C1区(北側)	~100cm		漆鉢、口縁部、平流口、ナナ文字・口内面銅鑿合の字状に彫文・口縁部、蓋文L.R.(横) → 彫文・底文右側、内面ナナ字(横)	10%	水木8a式*	水木8a式*	66	59
017	C5区	50 ~ 60cm		漆鉢、銅部、蓋文系彫文・北側、口内面銅鑿合、内面ナナ字(横)	10%	内閣上層a式	内閣上層a式	66	59
006	C5区	~70cm	C5区: 40 ~ 70cm	漆鉢、口縁部、平流口、銅部、彫文L.R.平行・銅部、蓋文・銅鑿合・銅部、銅部1層出流口蓋文L.R.-L.R.(横)・内面ナナ字(横)・銅鑿合	10%	内閣上層d1式	内閣上層d1式	66	59
005	C3区	80 ~ 90cm		漆鉢、銅部、蓋文系彫文・北側、口内面銅鑿合、内面ナナ字(横)	不明		彫見台心式*	66	59
004	C5区	~15cm	C5区: 20 ~ 30cm	漆鉢、口縁部、平流口、銅部、彫文L.R.平行・銅部、蓋文L.R.(横) → 彫文・底文右側、内面ナナ字(横)	25%	水木8a式	水木8a式	66	59
025	C6区	15 ~ 30cm	C6区: 20 ~ 30cm	漆鉢、口縁部、平流口、銅部、彫文L.R.平行・銅部、蓋文L.R.(横) → 彫文・底文右側、内面ナナ字(横)	80%	内閣下層b式	内閣下層b式	66	59
009	C6区	30 ~ 30cm		漆鉢、口縁部、平流口、銅部、彫文L.R.平行・銅部、蓋文L.R.(横) → 彫文・底文右側、内面ナナ字(横)	15%	水木7b式	水木7b式	66	59
023	C6区	30 ~ 40cm		漆鉢、口縁部、平流口、銅部、彫文L.R.平行・銅部、蓋文L.R.(横) → 彫文・底文右側、内面ナナ字(横)	100%	水木5式	水木5式	67	59
006	C6区	30 ~ 40cm		漆鉢、口縁部、平流口、銅部、彫文L.R.平行・銅部、蓋文L.R.(横) → 彫文・底文右側、内面ナナ字(横)	25%	水木8a式	水木8a式	66	59
009	C6区	30 ~ 40cm		漆鉢、口縁部、平流口、銅部、彫文L.R.平行・銅部、蓋文L.R.(横) → 彫文・底文右側、内面ナナ字(横)	15%	水木7式*	水木7式*	66	59
009	C6区	40 ~ 50cm		漆鉢、口縁部、平流口、銅部、彫文L.R.平行・銅部、蓋文L.R.(横) → 彫文・底文右側、内面ナナ字(横)	30%	水木6a式	水木6a式	68	59
001	C6区	~50cm		漆鉢、口縁部、平流口、銅部、彫文L.R.平行・銅部、蓋文L.R.(横) → 彫文・底文右側、内面ナナ字(横)	10%	水木8a式	水木8a式	67	59
002	C6区	~50cm		漆鉢、口縁部、平流口、銅部、彫文L.R.平行・銅部、蓋文L.R.(横) → 彫文・底文右側、内面ナナ字(横)	10%	水木8a式	水木8a式	67	59
003a	C6区	50cm・土器1		漆鉢、大器、口縁部、平流口、銅部、彫文L.R.平行・銅部、蓋文L.R.(横) → 彫文・底文右側、内面ナナ字(横)	30%	上川各形式	100aと同一・銅部	67	60
003b	C6区	50cm・土器1		漆鉢、大器、口縁部、平流口、銅部、彫文L.R.平行・銅部、蓋文L.R.(横) → 彫文・底文右側、内面ナナ字(横)			100aと同一・銅部	68	60
003	C1区	表土		漆鉢、口縁部、平流口、銅部、彫文L.R.平行・銅部、蓋文L.R.(横) → 彫文・底文右側、内面ナナ字(横)	15%	水木8a式	水木8a式	68	59
003a	D1区	土器1(点外)		漆鉢、口縁部、平流口、銅部、彫文L.R.平行・銅部、蓋文L.R.(横) → 彫文・底文右側、内面ナナ字(横)	30%	内閣上層d式*	100aと同一・銅部	68	61
003b	D1区	30 ~ 30cm		漆鉢、口縁部、平流口、銅部、彫文L.R.平行・銅部、蓋文L.R.(横) → 彫文・底文右側、内面ナナ字(横)			100aと同一・銅部	68	61

*彫文形式名

発掘 番号	所在地点	層位・ 出土層 No.	発掘・ 調査方法	発掘の経緯	所在	中心寸 (cm)	形状	備考	図版 掲載	写真 掲載
002	163 D1区	30 ~ 30a		遺跡、口縁→胴下部、平縁、突起(内縁)、胴部、股帯・高1段帯2条、胴部上縁(履)、内 部十字(履)、外周底化付着	遺跡、口縁→胴下部、平縁、突起(内縁)、胴部、股帯・高1段帯2条、胴部上縁(履)、内 部十字(履)、外周底化付着		25% 太水7a式*		60	61
009	164 D1区	30 ~ 40a		遺跡、口縁→胴上部、平縁、突起(内縁)、胴部、股帯2条、胴部上縁(履)、内 部十字(履)、外周底化付着	遺跡、口縁→胴上部、平縁、突起(内縁)、胴部、股帯2条、胴部上縁(履)、内 部十字(履)、外周底化付着		15% 太水8a式		60	61
000	165 D1区	30 ~ 40a		遺跡、口縁→胴上部、平縁、突起(内縁)、胴部、股帯2条、胴部上縁(履)、内 部十字(履)、外周底化付着	遺跡、口縁→胴上部、平縁、突起(内縁)、胴部、股帯2条、胴部上縁(履)、内 部十字(履)、外周底化付着		10% 太水8a式		60	61
001	166 D1区	30 ~ 40a		遺跡、口縁→胴上部、平縁、突起(内縁)、胴部、股帯2条、胴部上縁(履)、内 部十字(履)、外周底化付着	遺跡、口縁→胴上部、平縁、突起(内縁)、胴部、股帯2条、胴部上縁(履)、内 部十字(履)、外周底化付着		10% 太水8a式		60	61
088a	167a D1区	30 ~ 40a		遺跡、口縁→胴上部、平縁、突起(内縁)、胴部、股帯2条、胴部上縁(履)、内 部十字(履)、外周底化付着	遺跡、口縁→胴上部、平縁、突起(内縁)、胴部、股帯2条、胴部上縁(履)、内 部十字(履)、外周底化付着		20% 太水8a式	1段帯と同一体	60	61
088b	167b D1区	40 ~ 50a		*	*		107aと同一体		60	61
006	168 D1区	40 ~ 55a		遺跡、口縁→胴上部、平縁、突起(内縁)、胴部、股帯2条、胴部上縁(履)、内 部十字(履)	遺跡、口縁→胴上部、平縁、突起(内縁)、胴部、股帯2条、胴部上縁(履)、内 部十字(履)		10% 太水8a式*		60	61
007	169 D1区	40 ~ 55a		遺跡、口縁→胴上部、平縁、突起(内縁)、胴部、股帯2条、胴部上縁(履)、内 部十字(履)	遺跡、口縁→胴上部、平縁、突起(内縁)、胴部、股帯2条、胴部上縁(履)、内 部十字(履)		10% 太水8a式		60	61
084	170 D1区	55 ~ 60a		遺跡、口縁→胴上部、平縁、突起(内縁)、胴部、股帯2条、胴部上縁(履)、内 部十字(履)	遺跡、口縁→胴上部、平縁、突起(内縁)、胴部、股帯2条、胴部上縁(履)、内 部十字(履)		10% 内周下縁a式		60	61
085	171 D1区	55 ~ 60a		遺跡、口縁→胴上部、平縁、突起(内縁)、胴部、股帯2条、胴部上縁(履)、内 部十字(履)	遺跡、口縁→胴上部、平縁、突起(内縁)、胴部、股帯2条、胴部上縁(履)、内 部十字(履)		15% 太水7a式*		60	61
082	172 D1区	60 ~ 70a		遺跡、口縁→胴上部、平縁、突起(内縁)、胴部、股帯2条、胴部上縁(履)、内 部十字(履)	遺跡、口縁→胴上部、平縁、突起(内縁)、胴部、股帯2条、胴部上縁(履)、内 部十字(履)		15% 太水8a式*		60	61
082	173 D1区 (南側)	70 ~ 75a		遺跡、口縁→胴上部、平縁、突起(内縁)、胴部、股帯2条、胴部上縁(履)、内 部十字(履)	遺跡、口縁→胴上部、平縁、突起(内縁)、胴部、股帯2条、胴部上縁(履)、内 部十字(履)		20% 太水7式*		60	61
081	174 D1区 (南側)	70 ~ 85a		遺跡、口縁→胴上部、平縁、突起(内縁)、胴部、股帯2条、胴部上縁(履)、内 部十字(履)	遺跡、口縁→胴上部、平縁、突起(内縁)、胴部、股帯2条、胴部上縁(履)、内 部十字(履)		20% 太水8a式*		60	61
078	175 D1区	80 ~ 95a		遺跡、口縁→胴上部、平縁、突起(内縁)、胴部、股帯2条、胴部上縁(履)、内 部十字(履)	遺跡、口縁→胴上部、平縁、突起(内縁)、胴部、股帯2条、胴部上縁(履)、内 部十字(履)		10% 内周短縮小		60	61
077	176 D1区	80 ~ 95a		遺跡、口縁→胴上部、平縁、突起(内縁)、胴部、股帯2条、胴部上縁(履)、内 部十字(履)	遺跡、口縁→胴上部、平縁、突起(内縁)、胴部、股帯2条、胴部上縁(履)、内 部十字(履)		不明	内周上縁c式*	60	61
078	177 D1区	80 ~ 95a		遺跡、口縁→胴上部、平縁、突起(内縁)、胴部、股帯2条、胴部上縁(履)、内 部十字(履)	遺跡、口縁→胴上部、平縁、突起(内縁)、胴部、股帯2条、胴部上縁(履)、内 部十字(履)		25% 中間中腰		60	61
079	178 D1区	80 ~ 95a		遺跡、口縁→胴上部、平縁、突起(内縁)、胴部、股帯2条、胴部上縁(履)、内 部十字(履)	遺跡、口縁→胴上部、平縁、突起(内縁)、胴部、股帯2条、胴部上縁(履)、内 部十字(履)		10% 内周下縁b式		60	61
080	179 D1区	80 ~ 95a		遺跡、口縁→胴上部、平縁、突起(内縁)、胴部、股帯2条、胴部上縁(履)、内 部十字(履)	遺跡、口縁→胴上部、平縁、突起(内縁)、胴部、股帯2条、胴部上縁(履)、内 部十字(履)		10% 内周下縁d式		60	61
139	180 D2区 南側c c上	40 ~ 70a		遺跡、口縁→胴上部、平縁、突起(内縁)、胴部、股帯2条、胴部上縁(履)、内 部十字(履)	遺跡、口縁→胴上部、平縁、突起(内縁)、胴部、股帯2条、胴部上縁(履)、内 部十字(履)		15% 太水39式		70	61
103	181 D2区 (北東c c上)	土器2 土器3		D2区(北東c上)土器2 D2区(北東c上)土器3 50a	遺跡、口縁→胴上部、平縁、突起(内縁)、胴部、股帯2条、胴部上縁(履)、内 部十字(履)		100% 太水8a式		70	62
131	182 D2区 北東c c上	70 ~ 80a		D2区(北東c上)土器2 D2区(北東c上)土器3 50a	遺跡、口縁→胴上部、平縁、突起(内縁)、胴部、股帯2条、胴部上縁(履)、内 部十字(履)		15% 太水7a式		70	61
121	183 D2区 北東c c上	80 ~ 90a		D2区(北東c上)土器2 D2区(北東c上)土器3 50a	遺跡、口縁→胴上部、平縁、突起(内縁)、胴部、股帯2条、胴部上縁(履)、内 部十字(履)		10% 内周上縁b式		70	61
105	184 D2区	~ 75a・V層 土器		D2区(北東c上)土器2 D2区(北東c上)土器3 50a	遺跡、口縁→胴上部、平縁、突起(内縁)、胴部、股帯2条、胴部上縁(履)、内 部十字(履)		100% 中間中腰*		70	61
128	185 D2区	~ 75a・V層 土器		D2区(北東c上)土器2 D2区(北東c上)土器3 50a	遺跡、口縁→胴上部、平縁、突起(内縁)、胴部、股帯2条、胴部上縁(履)、内 部十字(履)		10% 中間内式		70	61
129	186 D2区	~ 75a・V層 土器		D2区(北東c上)土器2 D2区(北東c上)土器3 50a	遺跡、口縁→胴上部、平縁、突起(内縁)、胴部、股帯2条、胴部上縁(履)、内 部十字(履)		15% 太水7a式		70	62

現地 標識 番号	出土地点	標尺の 置き方No.	所在地域名	所見	寸方寸 (cm)	材質	型式	備考	回収 回数	
130	187	102区 上層		青鉄、口縁上・胴上部、口縁中(中間部、造りかきリヤ一帯、口縁・胴部、施文LR(飾) →1層高に出る土肌(内面寸方寸(飾))		10%	大木79式	70	62	
125	188	102区		青鉄、口縁上・胴上部、残灰鉄、口縁上・胴部、施文LR(飾)→腹中(腹中線、内面寸方寸(飾))		10%	大木99式		70	62
136	189	102区		山田林跡出土物、土師・リリアク状陶器、内周丁型土器、土師赤彩磁器、赤彩磁器付心 土師、口縁上・胴上部、残灰鉄、口縁上・胴部、施文LR(飾)、内面寸方寸(飾)、縞縞磁器付 心土器		10%	内周上層99式*		70	62
124	191	102区		青鉄、口縁部、残灰鉄、口縁部、肥厚・施文鉄、胴部、施文LR(飾)、内面寸方寸(飾)		15%	大木86式		71	62
123	192	102区		青鉄、口縁上・胴上部、平底、口縁上・胴部、底付土器(LR)付施文鉄、胴部、施文LR(飾)、 内面寸方寸(上層出物)、縞縞磁器付心土器		15%	内周上層99式		71	62
122	193	102区		青鉄、口縁上・胴上部、残灰鉄、口縁部、施文LR(飾)、内面寸方寸(飾)		15%	大木79式		71	62
104	194	102区		上二ヶ所土器、赤・新土器、底土器、胴部、施文LR(飾)、底縁部(出し)、内面寸方寸(飾)		100%	中腹中層小		71	62
206	195	103区(前期)	D4区(前期):55~105cm	青鉄、口縁上・胴下部、平底、淡紫色区画内以紅褐色光澤、内面寸方寸(飾) 内周上層99式(飾)		25%	大木99式		71	62
140	196	103区		青鉄、口縁部、残灰鉄、口縁部付直上列種ノ、腹縁部、胴部、施文LR(飾) 内面寸方寸(飾)	口径(15.0)	35%	後腹相模		71	62
165	197	103区		青鉄、口縁部、平底小、口縁部付直上(七土器)、内面寸方寸(飾)		10%	後腹相模		71	62
166	198	103区		青鉄、口縁部、残灰鉄、口縁部付直上列種ノ、腹縁部、胴部、施文LR(飾)、縞縞磁 器付心土器		10%	内周上層99式		71	62
163	199	103区		青鉄、口縁部、平底小、口縁部付直上(七土器)、内面寸方寸(飾)		10%	大木99式		71	62
164	200	103区		青鉄、口縁部、残灰鉄、淡色肥厚付文、内面寸方寸(飾)		5%	大木86式*		71	62
140	201	103区		青鉄、口縁上部・胴部、胴部、施文LR(飾)→底縁部・縞縞磁器付心土器(施文鉄、 外周上層99式化付意)		100%	大木99式		71	62
141a	202a	103区		青鉄、口縁下部(底縁部以上)、胴上部(胴上層以上)、平底・旁袋1単位、口縁(内面) 部付直上(肥厚・施文LR(飾))	直径8.0 口径19.6	100%	後腹相模小	302aと同一断片	71	63
141b	202b	103区		青鉄、口縁部、平底小、口縁部付直上(七土器)、内面寸方寸(飾)		10%	後腹相模小	302aと同一断片	71	63
162	203	103区		青鉄、口縁部、淡口鉄、口縁部付直上(肥厚・旁袋1単位、胴部・淡紫区画→LR調 文肌、内面寸方寸(飾))		10%	後腹相模		72	62
132	204	103区		青鉄、口縁上・胴上部、(造りかき)部、口縁上・胴部、施文LR(飾)→縞縞磁器付心土器 →縞縞磁器付心土器		100%	大木79式		72	62
161	205	103区(前期)		青鉄、口縁部、平底小、口縁部付直上(七土器)、内面寸方寸(飾)		10%	大木86式		72	62
194	206	D4区SL02帯 周辺		青鉄、口縁部、淡口鉄、口縁部腹縁小外区、底付土器(LR)付、腹面施文、内面寸方寸(飾)、 縞縞磁器付心土器		5%	内周上層99式*		72	63
199	207	D4区中穴c 4層目(90 →105cm)	D4区(前期):115~130cm、 V層	青鉄、胴上部(腹面側面付)、平底付筒による縞縞文・花巻文、三内形別の筒文、内面寸方寸(飾)		10%	大木79式		72	63
210	208	D4区(前期)		青鉄、口縁上・胴上部、淡口鉄、胴部、施文LR(飾)→花巻文→縞縞筒文、内面寸方寸(飾)		25%	大木99式		72	63
211	209	D4区(前期)		青鉄、口縁上・胴上部、平底・腹縁部、底付土器(LR)付筒部、手袋竹筒による名刺(引き金)、 胴部、施文LR(飾)、内面寸方寸(飾)		10%	大木79式		72	63
209	210	D4区(前期)		青鉄、口縁上・胴上部、淡口鉄、胴部(腹面側面付)、内面縞縞筒文、口縁上・胴部、施文LR(飾)→花 巻文、内面寸方寸(飾)、内外縞縞化付意		10%	大木86式		72	63

*型定簡式名

坑名	埋藏番号	出土地点	層位・遺上寸法	現地座標	所見	寸方寸 (cm)	保存度	形式	備考	図版 図説
186	211	D4区 中欠V 土上	-100 ~ -133cm V層 D1区: 115 ~ 133cm	D4区中欠-V: 1 ~ 3層	器鉢, 口縁-胴上部, 底辺縁, 変形部がほぼ直線, 胴部: 花籠文, 内周子(下)へ, 足が短少, 縁縁, 口縁(帯)部: 裏面, 横文瓦 (縦) → 花籠文, 内周子(上)縁縁部は直線, 外周子: 変形部がほぼ直線		5%	大木5式	72, 63	
201	212	D4区 (南南)	-110 ~ -120cm V層		器鉢, 胴上部, 口縁(帯)下, 唇縁部, 胴部: 横文瓦 (縦), 内周縁部(縁)部: 縦線		10%	大木8b式	72, 63	
202	213	D4区 (南南)	-110 ~ -120cm V層		器鉢, 胴上部, 口縁(帯)下, 唇縁部, 胴部: 横文瓦 (縦), 外周縁部(縁)部: 縦線		10%	上川名目式	72, 63	
206	214	D4区 (南南)	-110 ~ -123cm V層	D5区: -115 ~ -125cm, V層 / D4区 (南南): -105 ~ -115cm	器鉢, 口縁-胴上部, 底辺縁, 口縁(帯)下, 縁部, 胴部: 横文瓦 (縦) → 花籠文, 内周子(下)へ, 外周子上半部は直線		30%	模範式	72, 63	
200	215	D4区 (南南)	-110 ~ -123cm V層		器鉢, 口縁部, 平縁, 口縁部, 変形部(底辺), 胴部: 横文瓦 (縦), 基礎同文, 内周子(下)へ (縦), 縦線等がほぼ直線		10%	前期II型小	72, 63	
200	216	D4区 中欠V 土上	-120 ~ -129cm V層		器鉢, 口縁部, 底辺縁, 口縁(帯)下, 唇部外縁, 変形部: 口縁(帯)部: 横文瓦, 胴部: 横文瓦 (縦) → 花籠文, 内周子(下)へ (縦)		10%	大木8b式	72, 63	
207	217	D4区 (南南)	-120 ~ -123cm V層	D4区 (南南): -105 ~ -115cm	器鉢, 口縁-胴上部, 底辺縁, 口縁(帯)下, 唇部, 変形部, 胴部: 横文瓦 (縦), 基礎同文, 内周子(下)へ (縦), 変形部(底辺)部: 縦線		25%	模範式	73, 63	
213	218	D4区 (南南)	-120 ~ -134cm V層		器鉢, 口縁-胴上部, 底辺縁, 口縁(帯)下, 唇部, 胴部: 横文瓦 (縦) → 花籠文, 内周子(下)へ (縦), 外周子(上)縁縁部がほぼ直線		15%	模範式*	73, 63	
204	219	D4区 (南南)	-120 ~ -125cm V層		器鉢, 口縁部, 平縁, 口縁(帯)部(外周縁)がほぼ直線, 口縁-胴部: 横文瓦, 内周子(下)へ (縦), 外周子(上)縁縁部がほぼ直線		5%	前期II型小	72, 63	
205	220	D4区 (南南)	-120 ~ -125cm V層		器鉢, 口縁-胴上部, 平縁小, 口縁(帯)部: 横文瓦 (縦), 胴部: 横文瓦 (縦) → 花籠文, 内周子(下)へ (縦), 縦線等がほぼ直線		10%	大木8b式	73, 63	
228	221	D5区	-50 ~ -70cm V層		器鉢, 口縁-胴上部, 平縁小, 口縁(帯)部: 横文瓦 (縦) → 花籠文, 内周子(下)へ (縦), 外周子(上)縁縁部がほぼ直線		15%	大木8b式	73, 63	
228	222	D5区	90 ~ -100cm V層		器鉢, 口縁部, 平縁小, 口縁(帯)部: 横文瓦 (縦), 基礎同文, 内周子(下)へ (縦), 縦線等がほぼ直線		10%	大木5式*	73, 63	
225	223	D5区 (北南)	~-105cm, V層	D5区: -100 ~ -110cm	器鉢, 口縁-胴上部, 底辺縁, 口縁(帯)部, 唇部: 横文瓦 (縦) → 花籠文, 内周子(下)へ (縦), 外周子(上)縁縁部がほぼ直線		15%	模範式	73, 63	
216	224	D5区	-100 ~ -110cm V層	D5区: -90 ~ -100cm	器鉢, 口縁部, 平縁, 唇部, 変形部, 外周子(下)へ, 口縁(帯)部: 横文瓦 (縦) → 花籠文, 一部分(底辺縁部)は直線, 胴部: 横文瓦 (縦), 外周子(上)縁縁部がほぼ直線	口径 13.0	30%	大木8b式 230土層一體	73, 63	
228	225	D5区	-100 ~ -110cm V層		器鉢, 胴部: 横文瓦 (縦), 基礎同文		10%	前期II型	73, 64	
227	226	D5区	-100 ~ -110cm V層		器鉢, 口縁部, 平縁小, 口縁(帯)部, 唇部: 横文瓦 (縦), 基礎同文		10%	上川名目式	73, 64	
215	227	D5区	-100 ~ -110cm V層	D5区: -80 ~ -90cm, V層 / D6区 (南南): -70 ~ -80cm (変形部) / D5区: -100 ~ -110cm	器鉢, 口縁部, 平縁, 口縁(帯)部, 唇部, 変形部, 外周子(下)へ, 口縁(帯)部: 横文瓦 (縦), 基礎同文, 胴部: 変形部がほぼ直線	口径 22.0	40%	後期I型	73, 64	
220	228	D5区 (南南)	~-115cm, V層		器鉢, 口縁-胴上部, 底辺縁, 口縁(帯)下, 唇部, 胴部: 横文瓦 (縦) → 花籠文, 内周子(下)へ (縦)		15%	模範式	73, 64	
223	229	D5区 (南南)	~-115cm, V層	D5区: -115 ~ 125cm, V層 / SD7: 縁部面 → 30cm - 横土	器鉢, 口縁部, 平縁, 口縁(帯)部: 横文瓦 (縦), 唇部, 変形部, 外周子(下)へ (縦), 外周子(上)縁縁部がほぼ直線		10%	前期I型 d式	73, 64	
224	230	D5区 (南南)	~-115cm, V層		器鉢, 口縁部, 変形部: 横文瓦 (縦), 胴部: 横文瓦 (縦), 基礎同文, 外周子(下)へ (縦), 縦線等がほぼ直線		15%	大木8b式 224土層一體	73, 64	
217	231	D6区	-30 ~ -50cm V層		器鉢, 口縁部, 平縁小, 口縁(帯)部: 横文瓦 (縦), 基礎同文, 内周子(下)へ (縦), 外周子(上)縁縁部がほぼ直線		10%	大木5式*	74, 64	
246	232	D6区	-60 ~ -70cm V層		器鉢, 口縁部, 平縁小, 口縁(帯)部: 横文瓦 (縦), 基礎同文, 内周子(下)へ (縦), 外周子(上)縁縁部がほぼ直線		5%	上川名目式	74, 64	
246	233	D6区	-60 ~ -70cm V層	D6区: 横土	器鉢, 口縁部, 平縁小, 口縁(帯)部: 横文瓦 (縦), 基礎同文, 内周子(下)へ (縦), 外周子(上)縁縁部がほぼ直線		20%	大木8b式	74, 64	
242	234	D6区	-70 ~ -80cm V層		器鉢, 口縁部, 平縁小, 口縁(帯)部: 横文瓦 (縦), 基礎同文, 内周子(下)へ (縦), 外周子(上)縁縁部がほぼ直線		15%	模範式*	74, 64	

* 想定形式名

図版番号	出土地点	単位・礎上寸法No.	規格と組合	発見	寸法 (cm)	構成	形式	備考	図版	写真 掲載
243	D6区	70 ~ 80cm	漆鉢、口縁-胴上部、平縁小、口縁部、底全体圧痕、胴部、投部、胴部、地文木口縁部、木文、内面十字 (横)、縦線各			10%	平縁下層4式		74	64
245	D6区	70 ~ 80cm	漆鉢、口縁部、底全体圧痕、胴部、投部、胴部、地文木口縁部、木文、内面十字 (横)、縦線各			10%	平縁下層4式		74	64
244	D6区	70 ~ 80cm	切跡塗土跡、蓋部、胴部、口縁部、底全体圧痕、花押文、折割面平肉、内面輪線直線各		口径68mm蓋部径24	100%	線刻直線		74	64
231	D6区	80 ~ 90cm	186区: 80 ~ 70cm / 186区: 100 ~ 105cm	漆鉢、胴部、地文LR (横) → 花押文、内面十字 (横)、外面近代物付着		40%	大木8式		74	64
237	D6区	80 ~ 90cm		漆鉢、口縁-胴上部、底全体圧痕、口縁部、地文LR (横) → 花押文、胴上部、内面十字 (横)		10%	大木8式		74	64
238	240 D6区	80 ~ 90cm		漆鉢、口縁部、底全体圧痕、口縁部、地文LR (横) → 花押文、内面十字 (横)		10%	大木8式		74	64
239	241 D6区	80 ~ 90cm		漆鉢、口縁部、平縁小、口縁部、地文LR (横) → 花押文、内面十字 (横)		10%	大木8式		74	64
240	242 D6区	80 ~ 90cm		漆鉢、口縁部、平縁小、口縁部、底全体圧痕、取体圧痕上、内面花丸、縦線各		5%	上川名瓦式		74	64
243	D6区	80 ~ 90cm		漆鉢、胴部、平縁竹管による花押文、花押文並列、三角印印面文、内面十字 (横)		10%	大木7a式		74	64
244	D6区	90 ~ 100cm		漆鉢、胴部、地文花結並列LR、LR口縁部多委 (横)、内面十字 (横)、縦線各		10%	此七谷道直新		74	64
246	D6区	60 ~ 100cm		漆鉢、口縁-胴上部、平縁小、口縁部、底全体圧痕、胴部、投部、地文木口縁部、木文、内面十字 (横)、縦線各		15%	平縁下層4式		75	64
246	D6区	100 ~ 105cm		漆鉢、口縁部、底全体圧痕小、口縁-胴部、地文LR (横) → 花押文、内面十字 (横)		10%	大木8b式		75	64
247	D6区 (南側)	105 ~ 115cm		漆鉢、口縁-胴上部、平縁小、口縁-胴部、投部、胴部、地文LR (横)、内面十字 (横)		15%	膠林式*		75	64
248	D6区 (南側)	105 ~ 115cm		漆鉢、口縁-胴下部、底全体圧痕4目形、委託部の痕、口縁部、外縁輪、取体圧痕斜線並列、胴部、地文LR (横) → 花押文、内面十字 (横)、平縁下層4式	口径: 80.0	40%	膠林式		75	65
249	D6区	溝口部上 (7/8) 牌上		漆鉢、口縁-胴上部、平縁、胴部、投部、胴部、地文LR (横) → 花押文、内面十字 (横)		15%	膠林式*		75	65

*型定形式名

第6表 土製品観察表

図No	採集番号	種類	出土地点	層位	所見	サイズ (cm)	図版	写真 図版
C02	250	土偶	D4区(北側)	地表面から、105～115cm		長(3.2)×幅(3.9)×厚(1.28)	76	65
C01	251	土偶?	SKD3	埋土		長(5.8)×幅(2.3)×厚(2.9)	76	65
C06	252	3ニオウ7土器	SIC1	埋土		口径27×器高21	76	65
C07	253	3ニオウ7土器	C3区	地表面から、40cm		口径33×器高49	76	65
C08	254	3ニオウ7土器	A2区・A3区	地表面から、20～25cm		器高(1.0)×底径4.2	76	65
C05	255	3ニオウ7土器	C5区	地表面から、60～70cm		長(2.9)×幅(2.2)×厚(0.7)	76	65
C04	256	有孔土製品	SD7	埋土		長24×幅24×厚0.75	76	65
C03	257	不明	D1区(南側)	地表面から、75～85cm	土器突起部?	長(3.4)×幅(2.9)×厚(2.4)	76	65
C09	258	土器片加工土製品	SD5	埋土(べらト部分)		長(4.0)×幅(3.8)×厚(0.9)	76	65
C16	259	土器片加工土製品	C2区	地表面から、60～70cm(SIC1埋土)		長7.4×幅(8.0)×厚(1.65)	76	65
C11	260	土器片加工土製品	D2区南側			長(6.4)×幅(6.0)×厚(1.2)	76	65
C10	261	土器片加工土製品	SKD5	埋土		長(6.7)×幅(6.5)×厚(1.2)	76	65
C12	262	土器片加工土製品	D3区	罎一層(110cm)		長(4.8)×幅(4.4)×厚(0.7)	76	65
C14	263	土器片加工土製品	D6区	地表面から、30～40cm		長(3.7)×幅(3.6)×厚(0.7)	76	65
C17	264	土器片加工土製品	D2区	表土		長(4.5)×幅(4.2)×厚(1.2)	76	65
C13	265	土器片加工土製品	D3区	罎一層上部(90cm)		長(3.6)×幅(3.4)×厚(1.0)	76	65
C15	266	土器片加工土製品	B2区	地表面から、30cm		長(3.7)×幅(3.5)×厚(0.6)	76	65
C18	267	土器片加工土製品	D3区	罎一V層上部(～100cm)		長(3.4)×幅(3.1)×厚(0.6)	76	65

第7表 石器・石製品観察表

調査 番号	器種	分類	出土地点	位置	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (mm)	重量 (g)	材質	年代	産地	所見等	回収 時期
a002-1001	石鏃	無茎 四角	D1区	30~40cm ~45cm・V層上部	2.3	1.6	0.4	1.03		中年代三世紀~ジュエラ紀	北上山塊		77-66
a003-1002	石鏃	無茎 四角	D2区	50~115cm	2.9	1.4	0.6	1.49		中年代三世紀~ジュエラ紀	北上山塊		77-66
a005-1003	石鏃	無茎 四角	D3区(南側)・ベルト	50~115cm	2.3	1.8	0.5	1.53		中年代三世紀~ジュエラ紀	北上山塊		77-66
a007-1004	石鏃	無茎 四角	D4区(北側)	75~85cm	1.7	1.3	0.2	0.35		中年代三世紀~ジュエラ紀	北上山塊		77-66
a008-1005	石鏃	無茎 四角	D4区(南側)	130~130cm・V層	1.9	1.2	0.3	0.49		中年代三世紀~ジュエラ紀	北上山塊		77-66
a009-1006	石鏃	無茎 四角	D4区(南側)	100~115cm	2.7	1.3	0.5	0.69		中年代三世紀~ジュエラ紀	北上山塊	黒色付着物。	77-66
a011-1007	石鏃	無茎 四角	A区	表土	2.0	1.8	0.4	1.10				黒色付着物。	
a014-1008	石鏃	無茎 四角	D2区	表土	2.1	1.1	0.3	0.43					
a016-1009	石鏃	無茎 四角	D4区(北側)	100~115cm	1.8	1.6	0.4	0.74					
a011-1010	石鏃	無茎 平茎	SD101	標土	2.9	2.0	0.5	2.43		中年代三世紀~ジュエラ紀	北上山塊		77-66
a012-1011	石鏃	無茎 平茎	SD104	標土 標高約60・30~30cm(崖面)・ 埋没直上	3.6	1.6	0.4	1.97		中年代三世紀~ジュエラ紀	北上山塊		77-66
a013-1012	石鏃	無茎 平茎	SD107 北側	埋没直上	2.7	2.0	0.6	2.82		中年代三世紀~ジュエラ紀	北上山塊		77-66
a014-1013	石鏃	無茎 平茎	SD101・SD112 東側部	標土	2.8	1.5	0.3	0.83		中年代三世紀~ジュエラ紀	北上山塊		77-66
a015-1014	石鏃	無茎 平茎	SD12	標土	2.7	1.7	0.4	1.67		中年代三世紀~ジュエラ紀	北上山塊		77-66
a017-1015	石鏃	無茎 平茎	A3区	土層1層(SIA01?)	2.1	1.8	0.3	0.70		中年代三世紀~ジュエラ紀	北上山塊		77-66
a022-1016	石鏃	無茎 平茎	C4区	90cm~100cm	2.2	1.6	0.3	0.76				先溝・埋没穴。	
a019-1017	石鏃	無茎 平茎	SD103	標土	0.8	1.4	0.3	0.56				埋没穴。	
a016-1018	石鏃	無茎 平茎	配石D2	当該遺構より上段の埋没層	2.4	1.6	0.4	1.33					
a018-1019	石鏃	無茎 平茎	A3区	45~50cm	2.2	1.8	0.4	1.40					
a019-1020	石鏃	無茎 平茎	B2区	~30cm	3.5	1.7	0.4	2.28					
a019-1021	石鏃	無茎 平茎	C1区	70~80cm	1.9	1.4	0.4	0.90					
a013-1022	石鏃	無茎 平茎	C4区	75~80cm	2.0	1.6	0.5	1.27				先溝穴。	
a021-1023	石鏃	無茎 平茎	C5区	55~60cm	2.0	1.7	0.3	0.78				埋没穴。	
a013-1024	石鏃	無茎 平茎	C6区	20~20cm	2.6	2.1	0.4	1.80					
a025-1025	石鏃	無茎 平茎	C6区	20~30cm	3.0	1.9	0.4	1.64					
a016-1026	石鏃	無茎 平茎	C6区	~15cm	1.5	1.7	0.2	0.69				先溝(上層)穴。	
a027-1027	石鏃	無茎 平茎	C区	表土	1.9	1.5	0.5	1.05				先溝穴。	
a016-1028	石鏃	無茎 平茎	C区	表土	2.9	1.7	0.6	2.11					
a019-1029	石鏃	無茎 平茎	C区	表土	2.4	1.6	0.5	1.49					
a013-1030	石鏃	無茎 平茎	D1区	50~30cm	2.5	2.0	0.6	2.14					
a021-1031	石鏃	無茎 平茎	D2区	~45cm・V層	2.6	1.5	0.4	1.24					
a021-1032	石鏃	無茎 平茎	D3区(北側)	~120cm・V層	1.7	1.8	0.4	1.04					
a013-1033	石鏃	無茎 平茎	D3区	115~130cm・V層	2.0	1.3	0.3	0.84					
a014-1034	石鏃	無茎 平茎	D3区	~110cm・Ⅲ~Ⅴ層	2.8	1.9	0.6	2.22					
a015-1035	石鏃	無茎 平茎	D3区	65~75cm	2.2	1.8	0.5	1.61					
a016-1036	石鏃	無茎 平茎	D4区(北側)	140~150cm	2.0	1.4	0.3	0.56				先溝穴。	

遺跡 番号	遺跡 名称	形状	分類	縄分	出土品点	構造	長 (m)	幅 (m)	厚 (cm)	材質	石質	年代	遺構	埋没等 状況	調査 年度
a02	1037	石積	無蓋	平基	D4区(南側)	115～120cm×V層	3.9	1.9	0.6	209					
a03	1038	石積	無蓋	平基	D6区	90～100cm	0.27	1.41	0.3	103				大石、 煎餅瓦。	
a09	1039	石積	無蓋	平基	D6区	表土	2.3	1.3	0.5	111					
a07	1040	石積	無蓋	平基	SD04	検出部～20cm×埋土	2.8	1.4	0.4	148				先頭瓦。	
b09	1041	石積	無蓋	平基	D3区(北側)	～115cm×V層 ～20cm	2.9	1.6	0.5	133					
a02	1042	石積	無蓋	平基	D4区	～120cm×埋土	0.67	1.7	0.7	248					
a03	1044	石積	有蓋	全平四基	SD04(D2区南側)	～120cm×埋土	4.3	1.5	0.6	155					
a04	1045	石積	有蓋	全平四基	SD07北端	埋土	3.5	1.4	0.5	180					
a05	1046	石積	有蓋	全平四基	SD06	埋土	3.6	1.6	0.8	148					
a07	1047	石積	有蓋	全平四基	D3区	80～90cm	4.0	1.3	0.5	150					
a08	1048	石積	有蓋	全平四基	SD01	100～110cm	2.5	1.2	0.4	183					
a08	1049	石積	有蓋	全平四基	D1区	検出部～30cm×埋土	2.5	1.2	0.6	202					
a01	1050	石積	有蓋	全平四基	SD03	85～95cm	0.24	1.3	0.7	185				煎餅瓦。	
a06	1051	石積	有蓋	全平四基	C4区	埋土	0.26	1.3	0.5	208				煎餅瓦。	
a08	1052	石積	有蓋	全平四基	D4区	～30cm(埋土部分)	0.49	1.4	0.5	154				煎餅瓦。	
a09	1053	石積	有蓋	全平四基	D6区	30～40cm	0.26	1.1	0.4	103				煎餅瓦。	
a02	1054	石積	有蓋	凸基	SD07	検出部～20cm×埋土	0.20	1.2	0.6	134				煎餅瓦。	
a03	1055	石積	有蓋	凸基	SD07	埋土	0.26	1.2	0.5	116				煎餅瓦。	
a05	1056	石積	有蓋	凸基	SD02	埋土	4.0	1.6	0.7	275				先頭瓦、煎餅瓦。	
a07	1057	石積	有蓋	凸基	A3区	45～50cm	0.11	1.4	0.5	188				先頭瓦、煎餅瓦。	
a09	1058	石積	有蓋	凸基	D1区	表土	3.0	1.2	0.5	126				煎餅瓦。	
a08	1059	石積	有蓋	凸基	D2区南側	7層	0.31	1.4	0.6	205				煎餅瓦。	
a08	1060	石積	有蓋	凸基	D2区南側	7層	0.26	1.3	0.5	135				煎餅瓦。	
a05	1061	石積	有蓋	凸基	D3区	55～65cm	0.22	1.4	0.5	096				煎餅瓦。	
a08	1062	石積	有蓋	凸基	D4区(北側)	75～85cm	0.31	1.2	0.5	137				煎餅瓦。	
a09	1063	石積	有蓋	凸基	D5区	90～100cm	0.33	1.2	0.4	150				煎餅瓦。	
a07	1064	石積	有蓋	凸基	A3区	45～50cm	5.2	1.3	0.8	206				大石、瓦頭部、 煎餅瓦。	
a01	1065	石積	有蓋?	凸基	D3区	～110cm×埋土	3.1	1.3	0.7	206				先頭瓦。	
a06	1066	石積	有蓋?	凸基	D4区(北側)	145～155cm	2.9	1.2	0.5	189				先頭瓦。	
a07	1067	石積	有蓋	-	A2区、A3区	埋土	0.29	1.3	0.5	188				先頭瓦。	
a04	1068	石積	有蓋	凸基	SD07	検出部～20cm	0.24	1.3	0.7	270				先頭瓦。	
a06	1069	石積	有蓋	凸基	SD07	埋土	0.31	1.2	0.7	227				先頭瓦。	
a02	1070	石積	有蓋	凸基	D3区	～100～110cm									
a01	1071	石積	有蓋	凸基	D2区	～75cm×V層上層	3.4	1.5	0.5	204					
a07	1072	石積	有蓋	凸基	D4区	80～90cm	0.26	1.4	0.6	182					

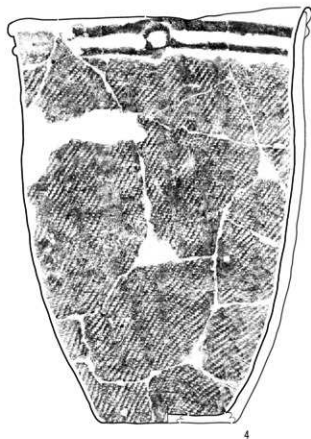
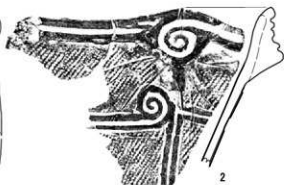
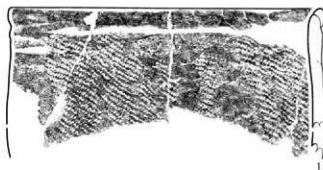
現地番号	面積 ㎡	地種	分類	細分	出土地点	位置	長 (m)	厚 (cm)	重量 (g)	材質	年代	産地	所見等	回収 番号
a001	1073	石鏡	有蓋	凸蓋	D5区	50～10cm	3.2	1.3	0.6	242			光澤・面欠。	
a071	1074	石鏡	有蓋	凸蓋	D6区	土層1	2.8	1.6	0.5	1.84			面欠・面欠。裏面に 黒色付着物。	
a066	1075	石鏡	有蓋	蓋・凸蓋	D1区	55～60cm	(23)	1.2	0.6	1.53				
a076	1076	石鏡	有蓋?	凸蓋	C2区	40～50cm	3.5	1.3	1.0	3.86				
a074	1077	石鏡	有蓋?	凸蓋	D6区	30～40cm	(27)	1.5	0.5	1.53				
a051	1078	石鏡	(不明)		SI004	梅田道～30m・埋土	2.7	1.3	0.5	1.08				
a001	1079	石鏡	I	SI010	埋土	2.9	1.0	0.5	1.09		中年代三世紀～ジュエ紀	北上山	面欠。	78
a003	1080	石鏡	I	D4区(北側)	100～115cm		3.5	1.6	0.7	2.48				78
a002	1081	石鏡	I	SK001	埋土	3.4	1.3	0.7	1.58					78
a004	1082	石鏡	I	D4区	80～90cm		2.2	1.3	0.5	0.93				
a005	1083	石鏡	II	SI007	梅田道～30m・埋土	3.1	0.7	0.4	0.82					78
a006	1084	石鏡	II	SK006	埋土	3.0	0.8	0.5	0.97					78
a007	1085	石鏡	II	D1区	5～20cm		3.0	0.8	0.6	1.02				78
a008	1086	石鏡	II	D4区(中央)	85～115cm		2.1	0.6	0.4	0.48				
a009	1087	石鏡	III	C6区	40～50cm		9.2	3.3	1.3	32.62				78
a016	1088	石鏡	III	C4区	～25cm		7.1	2.7	1.1	16.51				78
a013	1089	石鏡	III	D2区	～65cm・V層上部		6.7	4.0	1.3	25.57				78
a008	1090	石鏡	III	D3区	土層4と同地点		3.9	1.9	0.8	5.01				78
a009	1091	石鏡	III	D4区(北側)	70～85cm		5.1	2.0	0.7	5.53				78
a004	1092	石鏡	III	C4区	埋土	(4.0)	1.9	0.7	5.02					78
a002	1093	石鏡	III	D3区	～110cm・埋土層		6.4	1.8	0.9	10.94				
a002	1094	石鏡	III	C3区	～110cm(溝内側)		4.9	2.1	0.7	5.89				78
a010	1095	石鏡	III	D5区(北側)	～305cm・V層		(5.0)	1.4	0.7	4.93				78
a006	1096	石鏡	III	C6区	40～50cm		4.4	1.9	1.0	5.55				78
a011	1097	石鏡	III	D5区	70～85cm		(5.6)	(3.4)	(1.3)	10.84				
a012	1098	石鏡	III	D6区	100～105cm		(4.4)	(2.7)	0.8	8.62				
a017	1099	石鏡	III	D5区(北側)	～305cm・V層		5.0	1.6	0.7	5.29				
a001	1100	石鏡	III	A3区	45～50cm		4.9	1.6	0.5	2.91				78
a003	1101	石鏡	III	C4区	75～80cm		(3.3)	2.6	0.8	7.30				
a014	1102	石鏡	III	D4区	中央～6ト	4層以下	3.8	2.7	0.8	6.05				78
a015	1103	石鏡	III	D6区	土層1と同地点		1.5	2.9	0.5	1.04				78
a001	1104	裏面石鈿		D2区	溝内～6ト		4.3	2.3	0.8	6.89				78
a002	1105	裏面石鈿		D4区(北側)	70～80cm		2.6	5.0	0.8	7.71				78
a002	1106	裏面石鈿		埋土 D5	45～50cm		(1.3)	5.0	3.1	267.4			厚欠。裏面欠損。穴 埋削体の片状品等。	79
a001	1107	裏面石鈿		SK005	埋土一括		(3.3)	(1.9)	(1.2)	7.9				79
a001	1108	裏面石鈿		C3区	50～60cm		(4.9)	2.7	1.1	25.1				79

DBNo.	目録番号	部材	分類	出土地点	形状	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (mm)	重量 (g)	石質	年代	産地	所見号	図版番号
e001	1109	磨製石斧	D1区 磨製石斧1 (点本)			59	37	11	417	頁岩	中年代三世紀-ジュラ紀	北上山	交伝、小宮、	86
e007	1110	磨製石斧	S102		東面直上	46	23	0.9	9.1				磨製石斧の破片、	
e005	1111	磨製石斧	C2区		40~110cm	122	66	30	1702				基部及び刃部欠損、	
e006	1112	磨製石斧	D4区 (北側)		-145 ~ -155cm	32	19	0.4	1.8				磨製石斧の破片、	
e011	1113	石斧未成品	a	S103	直上	100	160	3.4	279.4		中年代石斧	北上山		79
e006	1114	石斧未成品	a	D3区	~40cm、東-V層上部	128	49	4.8	607.4		中年代三世紀-ジュラ紀	北上山		79
e012	1115	石斧未成品	b	S1012	直上	77	51	2.8	207.8		中年代石斧	北上山		79
e013	1116	石斧未成品	b	A1区	~330cm	92	77	3.6	375.5		中年代三世紀-ジュラ紀	北上山		79
e014	1117	石斧未成品	b	C1区	70~60cm	89	49	4.7	372.8		中年代石斧	北上山		79
e015	1118	石斧未成品	c	S1C1 (C2区)	55~60cm、直上	178	83	30	308.6		中年代石斧	北上山		79
e013	1119	石斧未成品	c	D2区	直上	103	51	2.4	266.0		中年代石斧	北上山		79
e014	1120	石斧未成品	c	D3区	45~75cm	73	3.2	27	128.9		中年代石斧	北上山		79
e019	1121	石斧未成品	c	D6区	70~80cm	63	63	1.5	1137		中年代石斧	北上山		80
e015	1122	石斧未成品	c	D6区	70~80cm	89	58	4.5	341.2		中年代石斧	北上山		82
e019	1123	石斧未成品	d	S1C1 (C2区)	40~70cm、直上	148	25	17	257					
e017	1124	石斧未成品	d	C3区	50~60cm	55	56	3.4	128.8					
e012	1125	石斧未成品	d	C4区	40~100cm	105	5.6	3.5	201.7					
e016	1126	石斧未成品	d	D1区	55~60cm	100	50	27	212.5					
e017	1127	石斧未成品	d	D3区 (南側) 東部へト	70~115cm、V層	94	7.5	3.6	401.3					
e018	1128	石斧未成品	d	D5区	60~60cm	57	5.4	3.9	174.8					
e018	1129	円筒片素材部	S1001	直上		7.5	4.7	1.4	20.15		中年代三世紀-ジュラ紀	北上山		80
e019	1130	円筒片素材部	S1004 (D3区) 北側	直上 (北石D2より下位の赤褐色)		7.1	4.3	1.9	65.08		中年代三世紀-ジュラ紀	北上山		80
e019	1131	円筒片素材部	S1007	直上		9.9	5.4	1.8	158.02		中年代三世紀-ジュラ紀	北上山		80
e011	1132	円筒片素材部	S1011、S1012重層部	直上		8.5	6.1	2.0	135.62		中年代石斧	北上山		80
e013	1133	円筒片素材部	S1007	直上		4.9	3.7	1.4	28.65		中年代三世紀	東上山		80
e019	1134	円筒片素材部	C6区	-20 ~ -30cm		7.4	4.5	1.5	68.80		中年代三世紀-ジュラ紀	北上山		80
e013	1135	円筒片素材部	C6区	~15cm		6.6	5.1	1.6	66.60		中年代三世紀-ジュラ紀	北上山		80
e015	1136	円筒片素材部	D5区	-100 ~ -110cm		4.8	3.1	1.3	27.40		中年代三世紀-ジュラ紀	北上山		81
e028	1137	円筒片素材部	D6区	40 ~ 70cm		6.6	4.3	1.5	62.30		中年代三世紀-ジュラ紀	北上山		81
e019	1138	円筒片素材部	D6区	50 ~ 60cm		10.1	7.9	1.5	341.00		中年代三世紀-ジュラ紀	北上山		81
e017	1139	円筒片素材部	S1011、C2区	40 ~ 70cm、直上		5.9	6.6	1.7	83.59		中年代三世紀-ジュラ紀	北上山		81
e012	1140	円筒片素材部	S1008	直上		7.3	5.0	1.7	75.98					
e014	1141	円筒片素材部	直上			13.0	5.4	1.9	183.87					
e011	1142	円筒片素材部	S1005	直上		3.2	2.2	0.9	4.99					
e015	1143	円筒片素材部	D2区	~20cm (埋込部分)		4.6	3.8	1.1	26.57					
e016	1144	円筒片素材部	D2区	~20cm (埋込部分)		4.9	3.7	1.3	25.06					

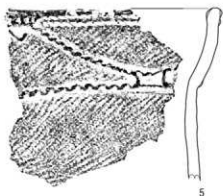
図号	百積 番号	砂積	細分	出土地点	層位	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	石瓦	年代	産地	所見号	図説 番号
e017	1145	円筒瓦葺材部	C1区	70～80cm	層位	79	49	25	130.28					
e018	1146	円筒瓦葺材部	C3区	50～60cm		66	26	1.2	52.44					
e019	1147	円筒瓦葺材部	C6区	15～30cm		53	53.1	2.2	80.29					
e021	1148	円筒瓦葺材部	D1区	20～30cm		31	19	0.8	4.44					
e022	1149	円筒瓦葺材部	D1区	30～40cm		61.1	5.5	2.4	111.20					
e005	1150	円筒瓦葺材部	D3区	-115～-130cm・V層		33.8	4.6	10.0	20.58					
e023	1151	円筒瓦葺材部	D3区	-115～-130cm・V層		6.4	4.1	1.2	49.43					
e003	1152	円筒瓦葺材部	D4区(南側)	-105～-115cm		2.6	2.5	0.9	4.53					
e004	1153	円筒瓦葺材部	D4区(北側)	-145～-150cm		4.5	2.9	1.0	10.00					
e024	1154	円筒瓦葺材部	D4区(北側)	85～95cm		53.8	3.1	1.3	34.10					
e006	1155	円筒瓦葺材部	D6区	30～40cm		4.2	3.2	1.2	11.39					
e008	1156	円筒瓦葺材部	D6区	40～60cm		8.4	4.6	2.2	96.62					
e007	1157	円筒瓦葺材部	D6区	-70～80cm		8.4	6.4	2.2	130.53					
e029	1158	円筒瓦葺材部	D6区	40～70cm		33.6	3.4	0.9	16.72					
e001	1159	礎石	PP021	層上		11.9	9.8	4.6	633.6	砂岩	中年代三世紀～ジュラ紀	北上山塊		81 08
e004	1160	礎石	D1区	-45～-55cm		12.6	9.6	4.2	633.9	砂岩	中年代三世紀～ジュラ紀	北上山塊		81 08
e005	1161	礎石	D2区	表土		8.9	6.9	3.2	300.6	ホルンフェルス	中年代(築設は中年代白 雲灰)	北上山塊	砥部品神利用片,	81 09
e007	1162	礎石	D6区	00～100cm		62.7	65.0	22.7	148.9	砂岩	中年代三世紀～ジュラ紀	北上山塊	砥部品神利用片,	81 09
e008	1163	礎石?	D6区	30～50cm		83.9	83.7	4.2	487.2	ホルンフェルス	中年代三世紀～ジュラ紀 (築設)	北上山塊		81 09
e002	1164	礎石?	SK05	層上		8.4	7.6	2.0	150.3					
e003	1165	礎石?	SK05	～-110cm		12.7	10.0	8.4	1109.9					
e005	1166	礎石?	D2区	-105cm・V層		9.2	7.2	4.1	304.1					
e001	1167	礎石	D1区	40～70cm		12.05	10.65	5.5	1433.4	砂岩	中年代三世紀～ジュラ紀	北上山塊		82 09
e003	1168	礎石	D6区	40～60cm		16.1	7.0	3.25	623.7	細粒花崗岩	中年代白雲灰	北上山塊		82 09
e029	1170	礎石	D6区	40～70cm		12.15	5.8	3.0	386.7	細粒花崗岩	中年代白雲灰	北上山塊		82 09
e004	1171	礎石	S04	～30cm		17.7	8.3	5.9	1333.3	砂岩	中年代三世紀～ジュラ紀	北上山塊		82 09
e005	1172	礎石	S04	層上		9.0	6.8	4.0	433.2					
e005	1173	礎石	S09	層上		63.3	66.0	5.1	384.9					
e006	1174	礎石	D6区	-70～80cm		6.0	6.6	4.9	236.6					
e005	1175	礎石	D6区	50～60cm		8.7	6.4	3.7	338.1					
e015	1176	礎石	S03	層上		17.0	5.9	4.0	228.0					
e016	1176	礎石	S08	層上		33.8	5.4	4.1	93.5					
e017	1177	礎石	土層1	土層1		53.3	5.4	3.2	114.8					
e018	1178	礎石	D6区	40～70cm		6.0	5.7	4.1	89.9					
e019	1179	礎石	D2区	～65cm・V層		17.0	5.2	4.8	347.9					
e008	1180	礎石	D1区	-75～85cm		53.4	55.1	33.1	94.5					

探検 番号	遺跡 番号	跡構	分類	細分	出土地点	形状	底 (m)	幅 (m)	厚 (cm)	重量 (g)	石質	年代	産地	所在等	図説 掲載
907	1181	磁管型	射石	1a	SIC1 (C2/F)	40~70cm・射土	9.1	0.87	3.7	2526	砂岩	中年代三世紀~ジュラ紀	北上山地	大畑	82
907	1182	磁管型	射石	1b	SUD7	桃畑田~30cm	9.0	5.9	2.26	1373	砂岩	中年代三世紀~ジュラ紀	北上山地	大畑	82
908	1183	磁管型	射石	1b	C3/F	~110cm (須石層)	9.25	5.2	2.0	166.6	砂岩	中年代三世紀~ジュラ紀	北上山地	大畑	82
910	1184	磁管型	射石	1c	SUD2	射土	8.0	8.0	4.5	802.1	砂岩	中年代三世紀~ジュラ紀	北上山地	大畑	82
912	1185	磁管型	射石	1c	PD905	—	9.45	6.4	5.0	440.0	砂岩	中年代三世紀~ジュラ紀	北上山地	大畑	82
913	1186	磁管型	射石	1c	D2/F	~65cm・V層上部	8.7	6.8	4.1	368.8	—	—	—	—	—
911	1187	磁管型	射石	1c	C2/F	80~110cm	7.9	5.8	3.6	211.8	—	—	—	—	—
921	1188	磁管型	射石	2	不明	不明	6.6	6.3	4.0	226.3	花崗岩	中年代白亜紀	北上山地	—	—
922	1189	磁管型	射石	2	D4/F (油桶)	105~115cm	9.8	3.7	2.8	160.4	花崗閃緑岩	中年代白亜紀	北上山地	—	—
923	1190	磁管型	射石	2	D2/F	~65cm・V層上部	10.95	6.3	3.4	335.2	花崗閃緑岩	中年代白亜紀	北上山地	—	—
920	1191	磁管型	射石	2	D2/F	~65cm・V層上部	7.9	7.7	6.6	347.0	—	—	—	—	—
924	1192	磁管型	射石	2	D4/F (油桶)	120~130cm・V層	6.1	1.09	1.42	196.6	—	—	—	—	—
925	1193	磁管型	射石	2	S103	床面直上	8.00	3.91	2.53	98.1	—	—	—	—	—
928	1194	磁管型	射石	3	SIC1 (C2/F)	40~70cm・射土	13.0	4.4	3.9	270.1	砂岩	中年代白亜紀	北上山地	—	—
931	1195	磁管型	射石	3	D3/F	115~130cm・V層	9.9	5.8	3.6	295.6	花崗閃緑岩	中年代白亜紀	北上山地	—	—
932	1196	磁管型	射石	3	D5/F	70~120cm	9.5	8.4	4.7	537.7	砂岩	中年代三世紀~ジュラ紀	北上山地	—	—
930	1197	磁管型	射石	3	C4/F	射土	10.6	8.3	5.0	697.5	—	—	—	—	—
933	1198	磁管型	射石	3	SIC1 (C2/F)	60~70cm・射土	13.60	6.3	4.9	380.1	—	—	—	—	—
935	1199	磁管型	射石	3	SUD5	射土・拵	17.7	7.0	4.7	192.0	—	—	—	—	—
937	1200	磁管型	射石	3	D1/F	~30~30cm	7.28	6.1	1.8	98.4	—	—	—	—	—
938	1201	磁管型	射石	3	D2/F	~85cm・V層	13.8	6.1	2.7	161.9	—	—	—	—	—
939	1202	磁管型	射石	3	D6/F	60~100cm	17.0	4.7	3.7	187.6	—	—	—	—	—
940	1203	磁管型	射石	3	SUD	南側 (D3/F北側) 射土 (底付D2より下段)	19.1	4.0	3.1	395.2	—	—	—	—	—
941	1204	磁管型	射石	3	C4/F (北側)	90~140cm・深掘り	12.4	4.9	2.8	315.2	—	—	—	—	—
936	1205	磁管型	射石	3	D4/F (北側)	115~125cm	14.5	11.6	16.1	34.4	—	—	—	—	—
937	1206	磁管型	射石	3	D4/F	80~90cm	16.7	14.7	13.0	114.5	—	—	—	—	—
942	1207	射石・石皿	射石	D3/F	(油桶) 境界ベルト	70~115cm・V層	23.9	21.1	5.7	3000.0	花崗岩	中年代白亜紀	北上山地	—	—
942	1208	石皿	射石	D4/F (北側)	105~115cm	28.0	16.9	5.7	282.6	69g	—	中年代白亜紀・新石器代古 銅三品	北上山地 入道野宮・ 野田宮	—	83
943	1209	石皿?	射石?	D3/F	55~65cm	15.0	10.0	12.1	44.6	—	—	—	—	—	
m001	1210	石皿・磁管具	射石	D1/F	—	5cm・射土	4.4	1.9	0.7	11.5	緑色片岩?	—	不明(近畿 地方) 西日本?)	—	83
m005	1211	石皿	射石	D1/F	60~70cm	6.2	4.05	1.8	56.0	頁岩	—	中年代三世紀~ジュラ紀 中年代 (底付中央代古 銅)	北上山地	—	83
m006	1212	石皿	射石	SUD	南側 (D3/F北側)	射土 (底付D2より下段)	4.7	13.3	2.6	64.8	ホルンフェルス	—	北上山地	—	83
m001	1213	射石	射石	D3/F (北側)	~120cm・V層	9.6	5.2	3.8	24.0	—	—	新石器代前期	千利田火山	—	70
m002	1214	射石	射石	D4/F	85~115cm	2.5	2.1	1.5	1.1	—	—	新石器代前期	千利田火山	—	70
m003	1215	射石	射石	D4/F	70~80cm	4.5	3.1	2.7	5.8	—	—	新石器代前期	千利田火山	—	70

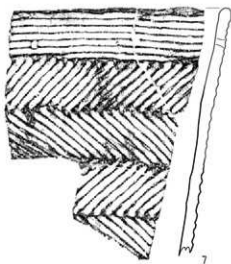
SIAI



SIC1



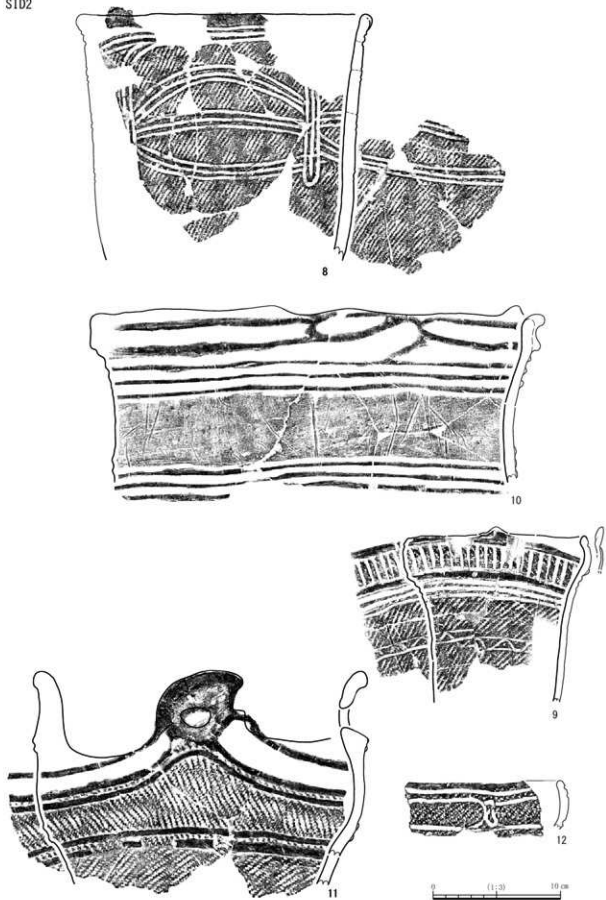
SID1



0 1(1:3) 10 cm

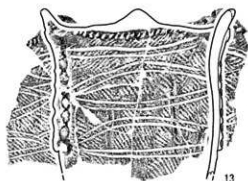
第49図 土器(1)

S102



第50図 土器(2)

SID2



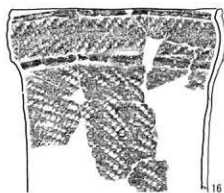
13



14



15

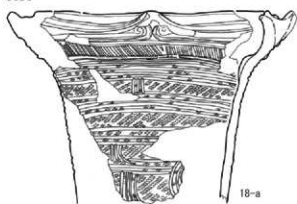


16

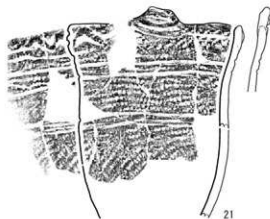


17

SID3



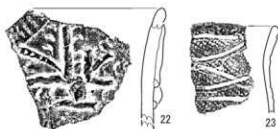
18-a



21



18-b



22

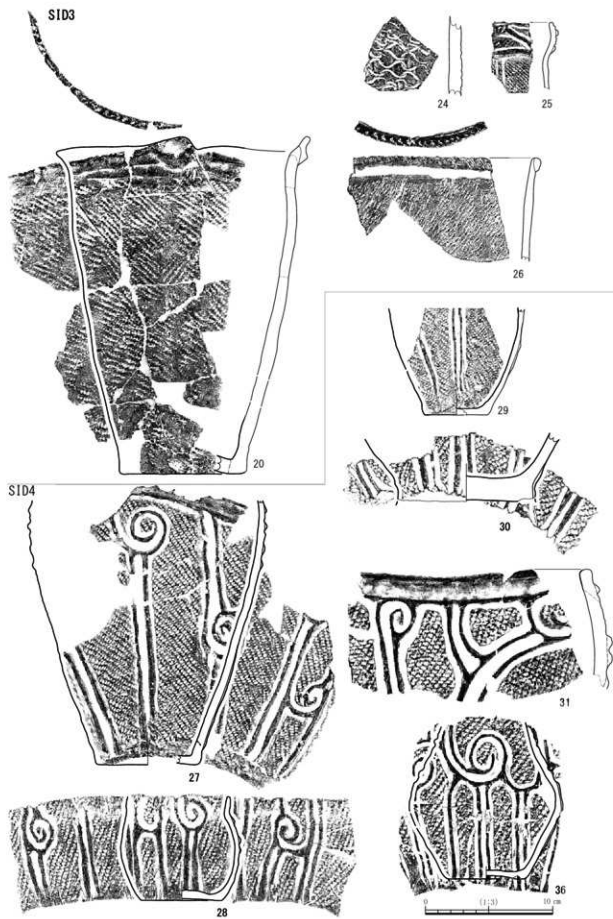
23



19

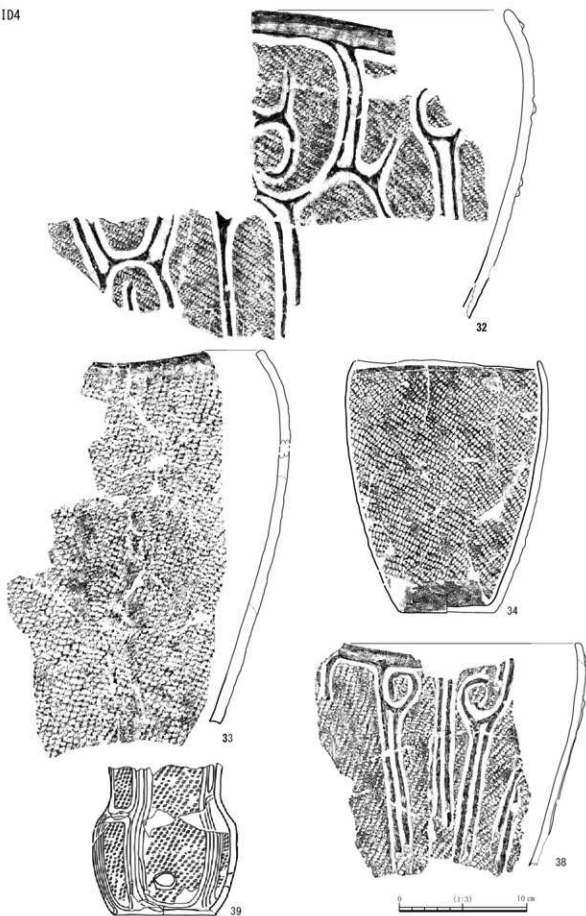
0 (1:3) 10 cm

第51図 土器(3)



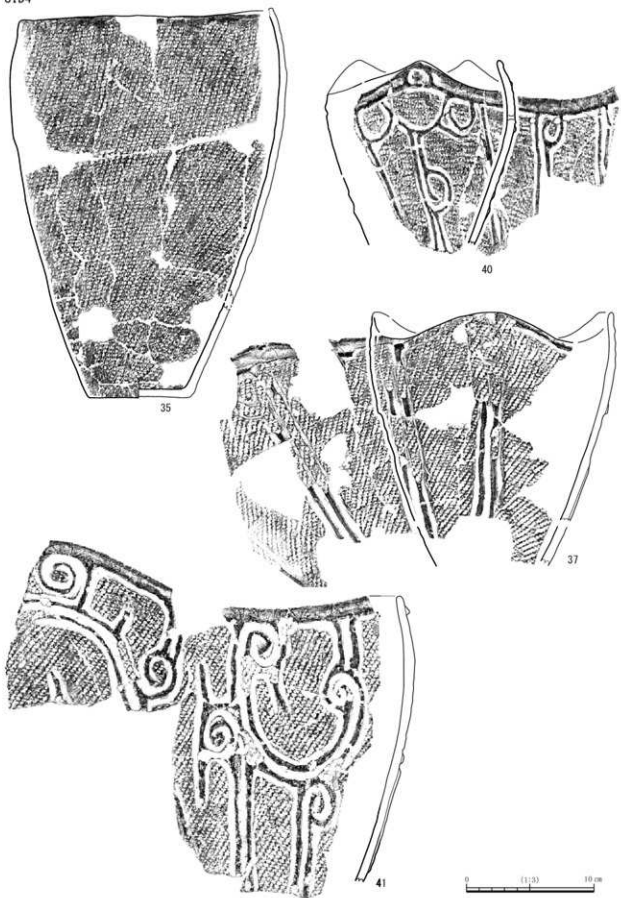
第52図 土器(4)

SID4



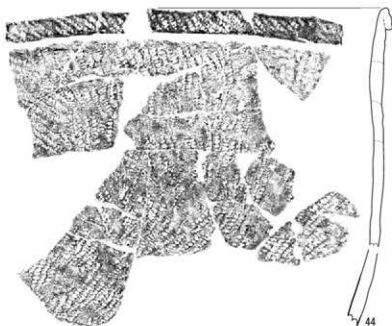
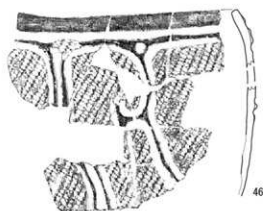
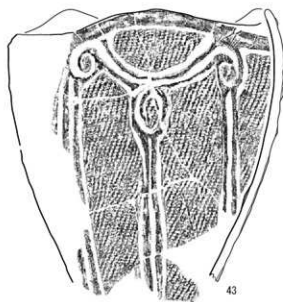
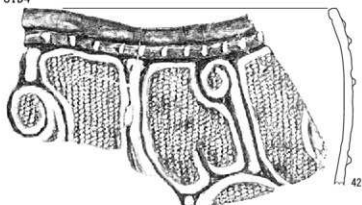
第53図 土器(5)

S104



第54図 土器(6)

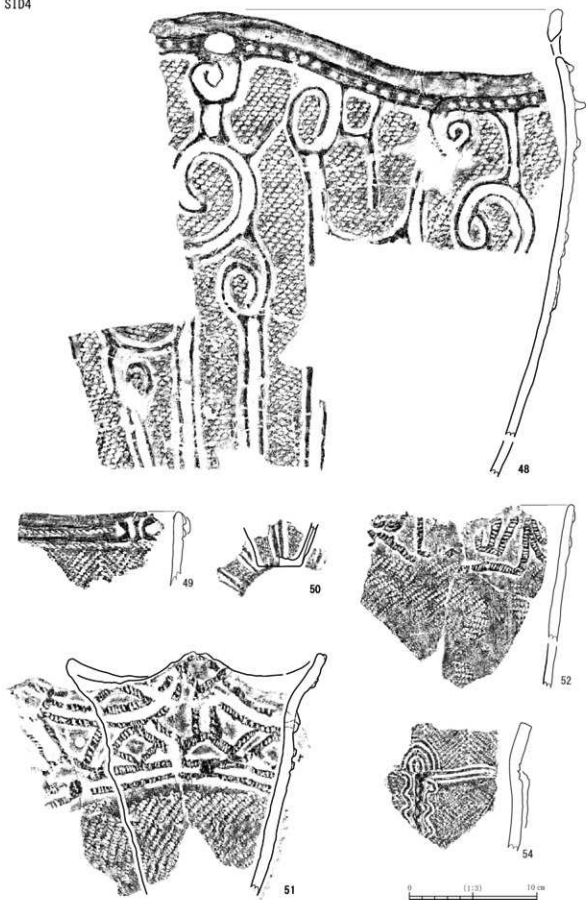
SID4



0 (1:30) 10 cm

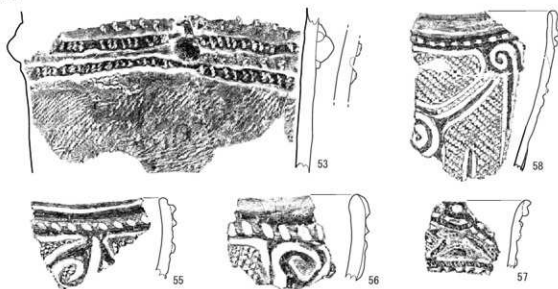
第55図 土器(7)

SID4



第56図 土器(8)

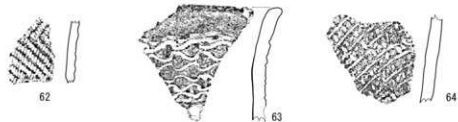
SID4



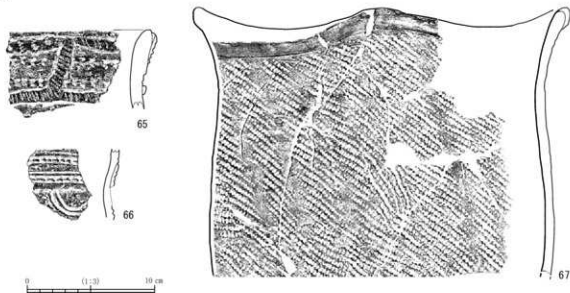
SID5



SID6

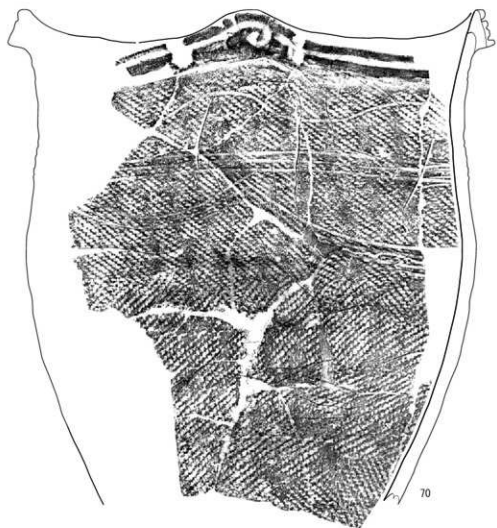
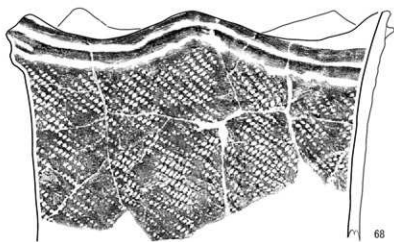


SID7



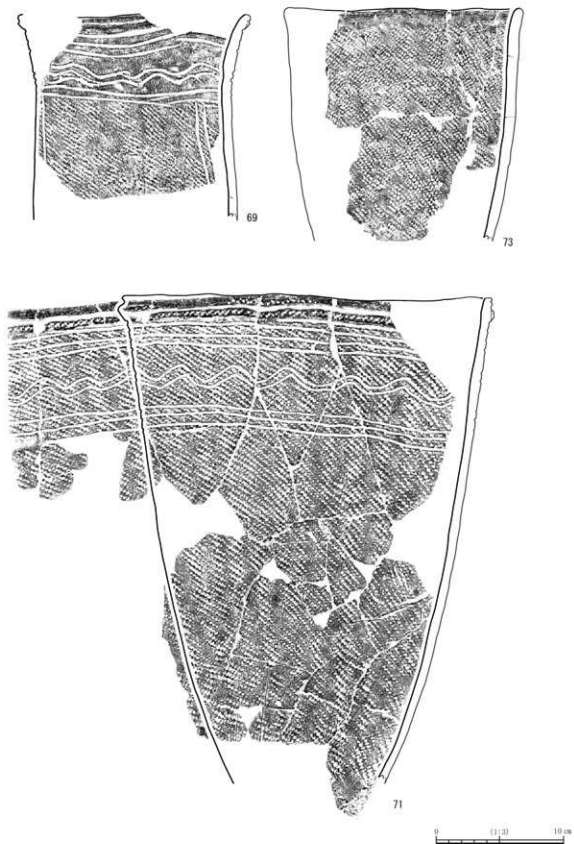
第57図 土器(9)

S107



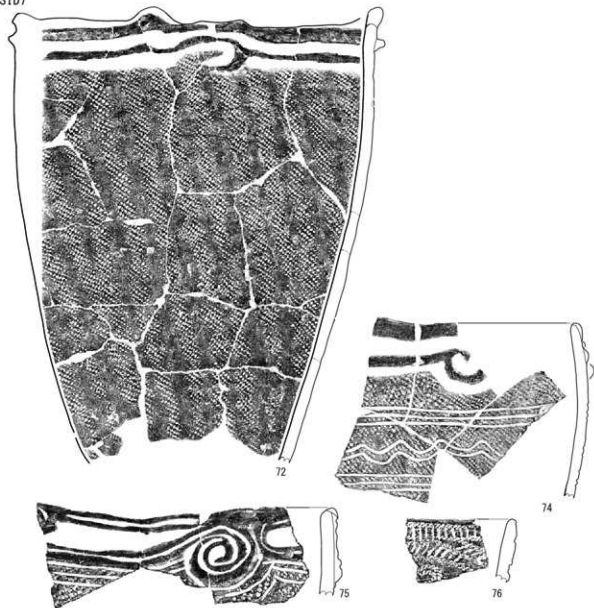
第58図 土器(10)

S107

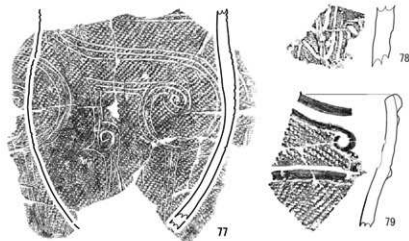


第59図 土器(11)

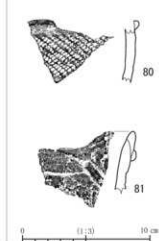
SID7



SID8

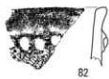


SID10



第60図 土器(12)

SID11・SID12



82



83



84



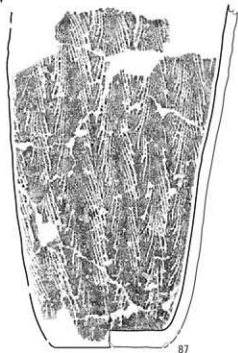
85

SID19



86

SLD4



87

SLD5



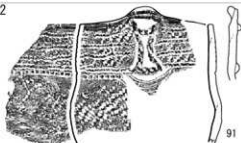
88

SLD7



89

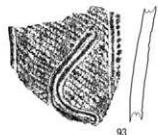
SKD2



91



92



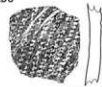
93

SKD1



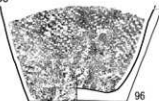
90

SKD3



94

SKD5



96

SKD7



99

SKD4



95



97



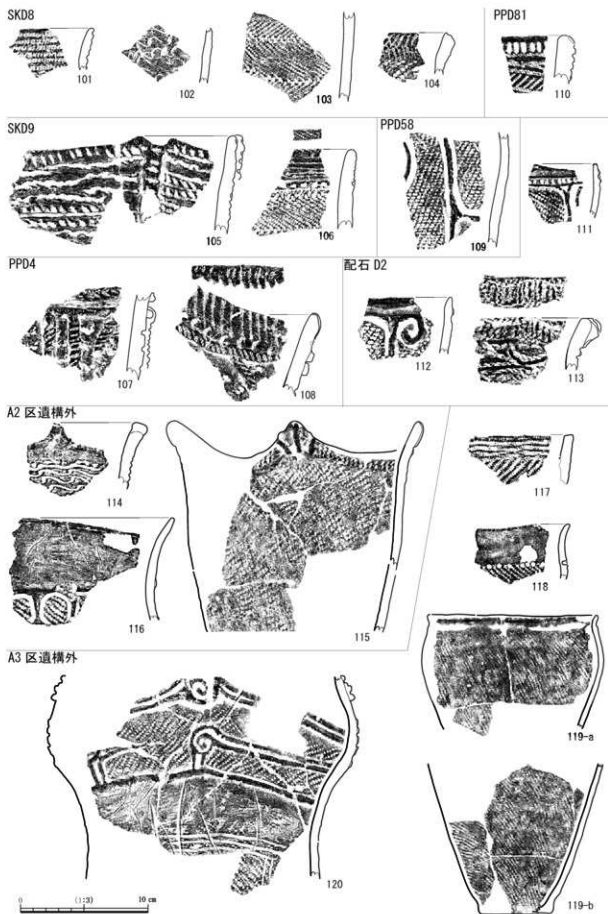
98



100

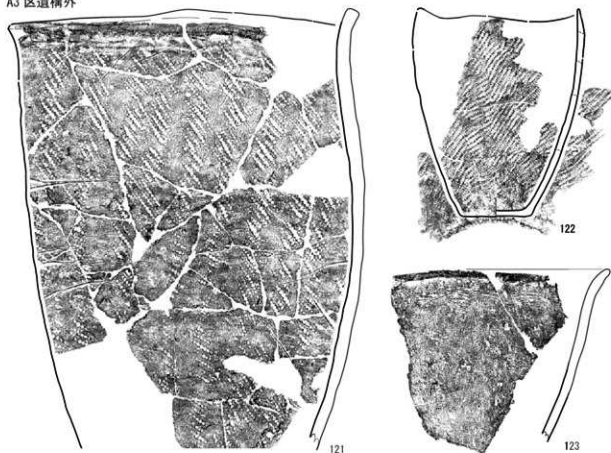
0 (1:3) 10 cm

第61図 土器(13)



第62図 土器(14)

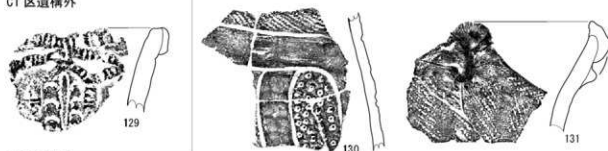
A3 区遺構外



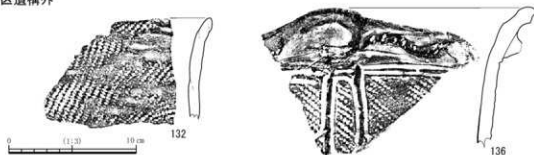
B2 区遺構外



C1 区遺構外

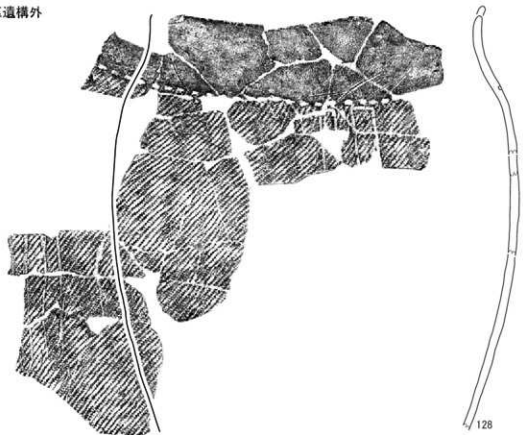


C3 区遺構外

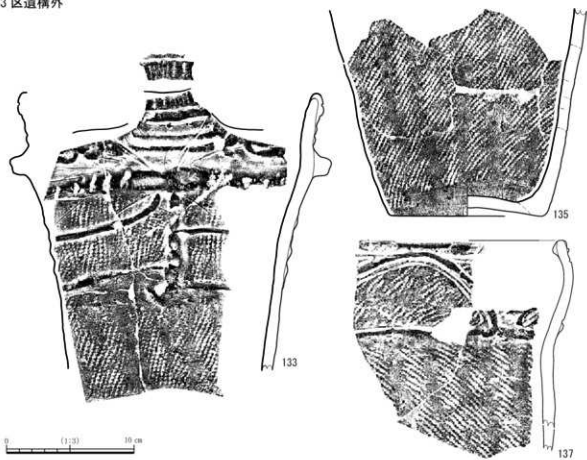


第63図 土器(15)

C1 区遺構外

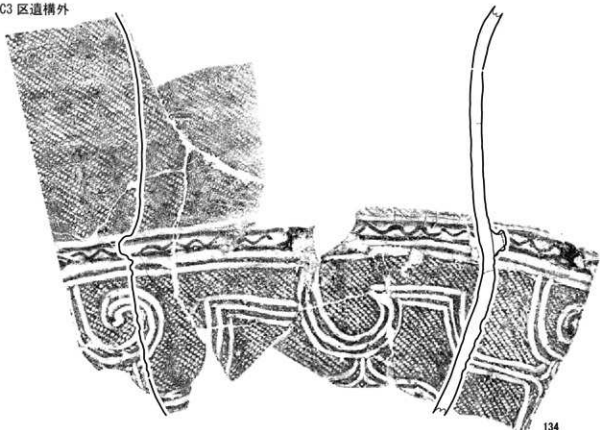


C3 区遺構外



第64図 土器(16)

C3 区遺構外

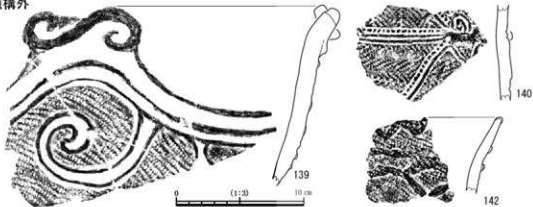


134



138

C4 区遺構外



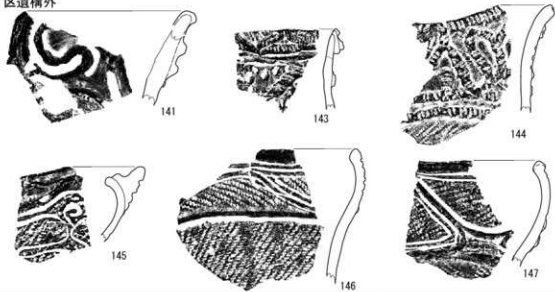
139

140

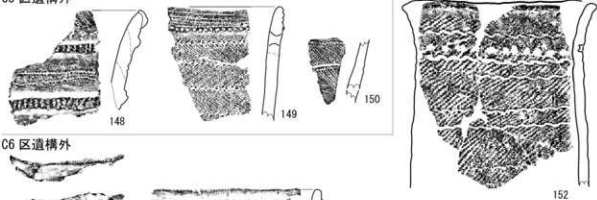
142

第65 土器(17)

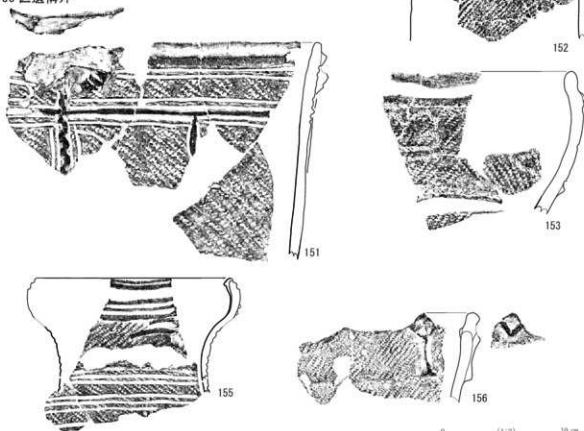
C4区遺構外



C5区遺構外



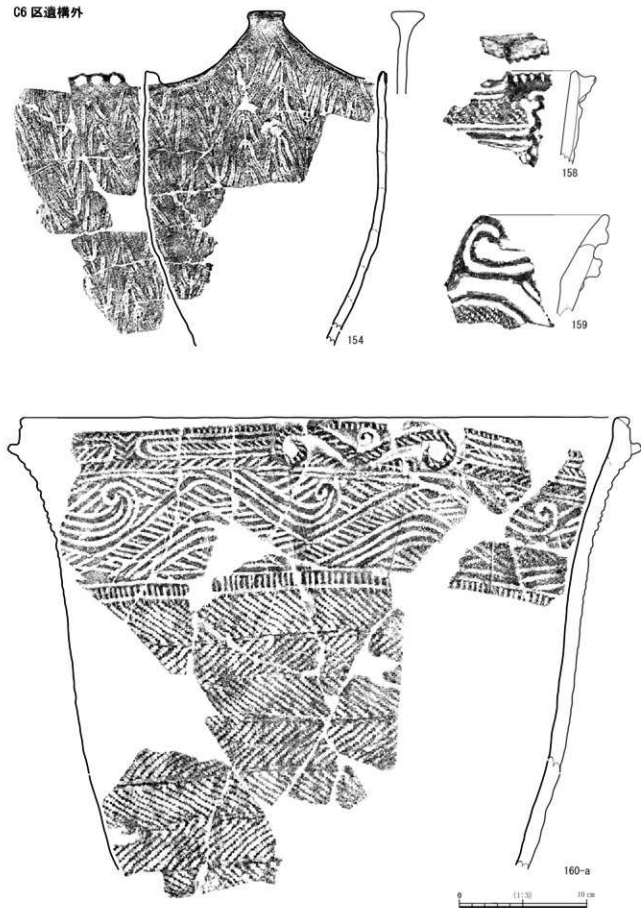
C6区遺構外



0 (1:3) 30 cm

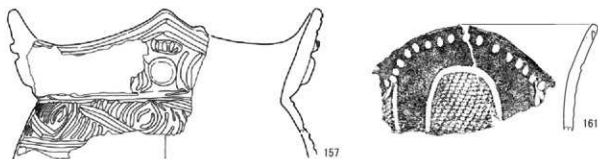
第66図 土器(18)

C6 区遺構外

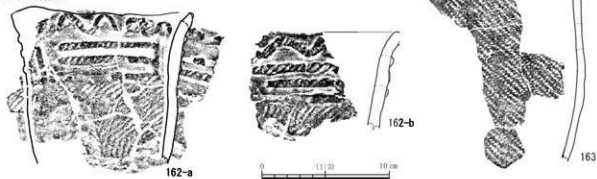


第67図 土器(19)

C6 区遺構外

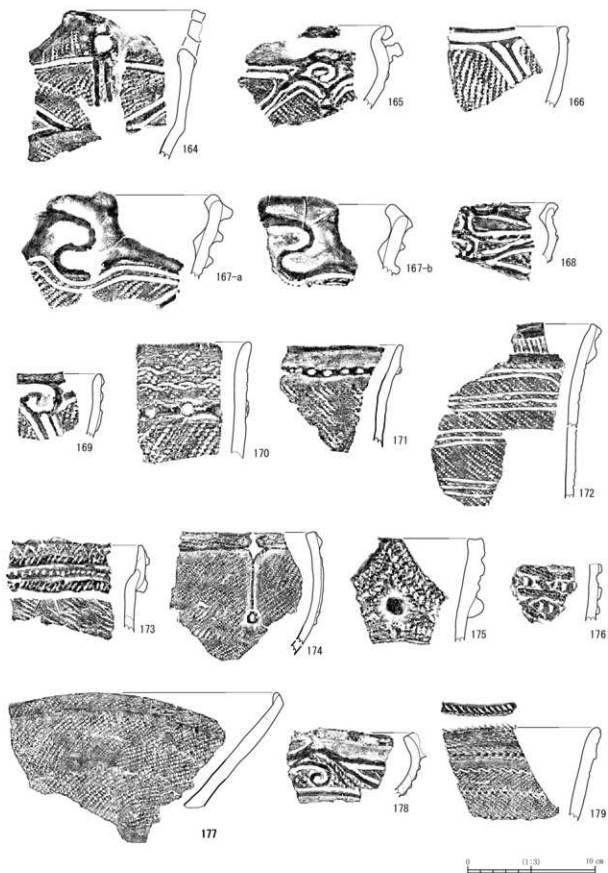


D1 区遺構外



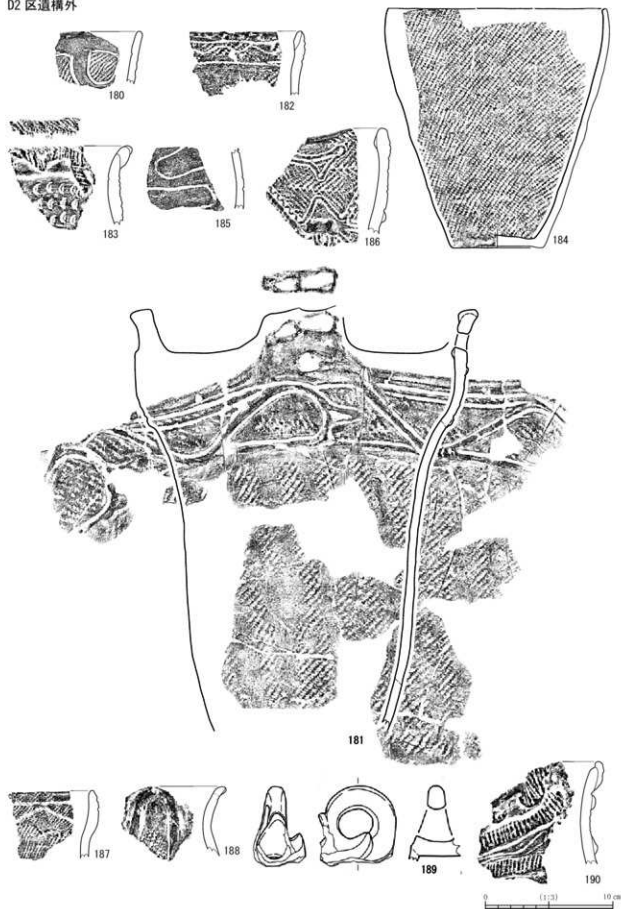
第68図 土器(20)

D1 区遺構外



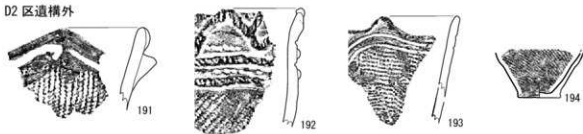
第69図 土器(21)

D2 区遺構外

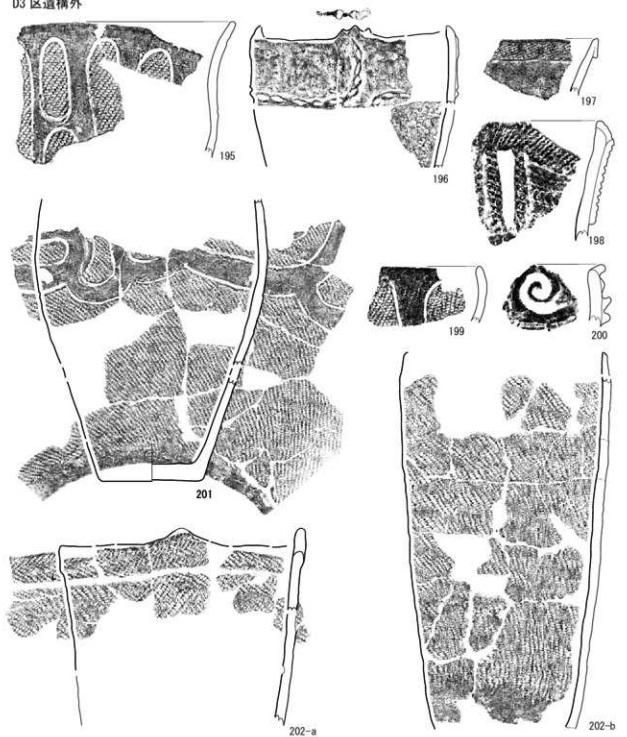


第70図 土器(22)

D2 区遺構外



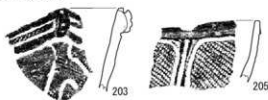
D3 区遺構外



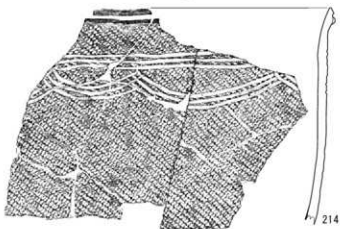
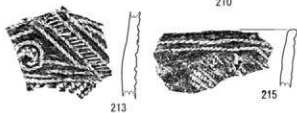
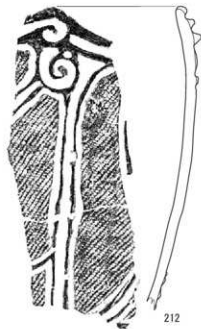
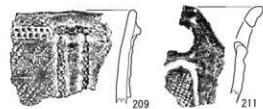
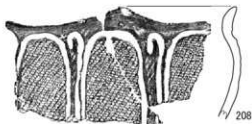
0 (1/3) 10 cm

第71図 土器(23)

D3 区遺構外



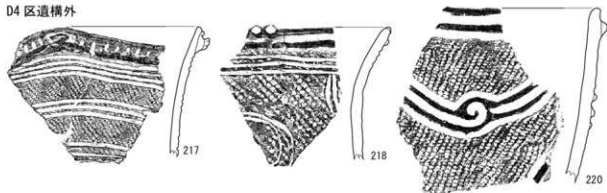
D4 区遺構外



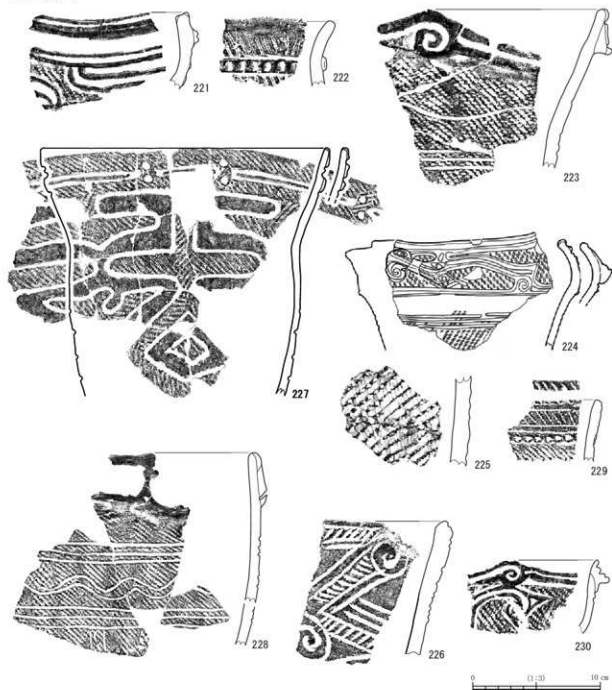
0 (1:3) 10 cm

第72図 土器(24)

D4 区遺構外

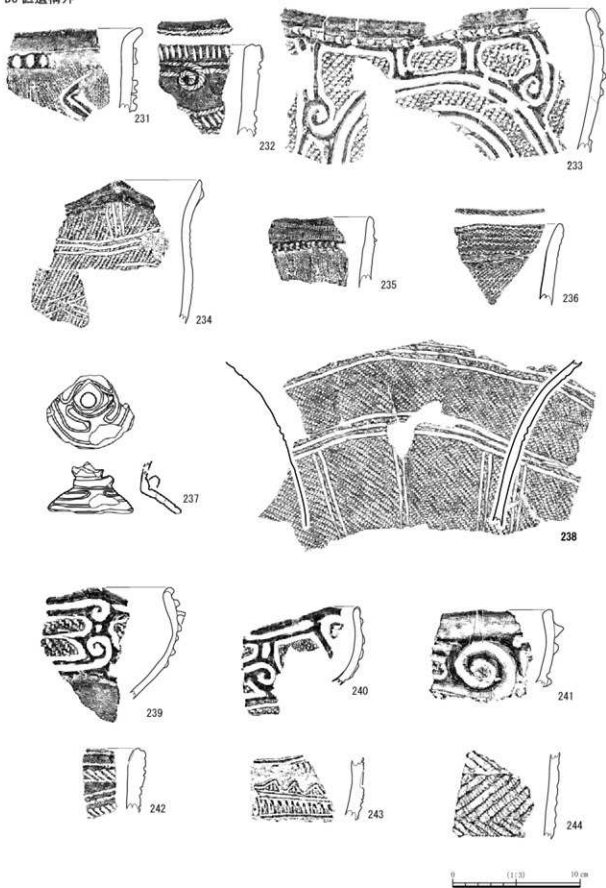


D5 区遺構外



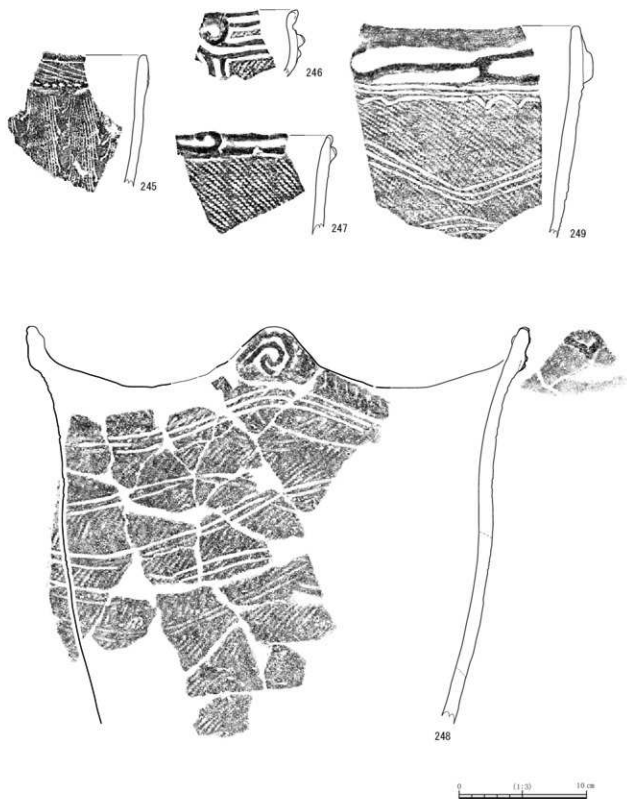
第73図 土器(25)

D6 区遺構外

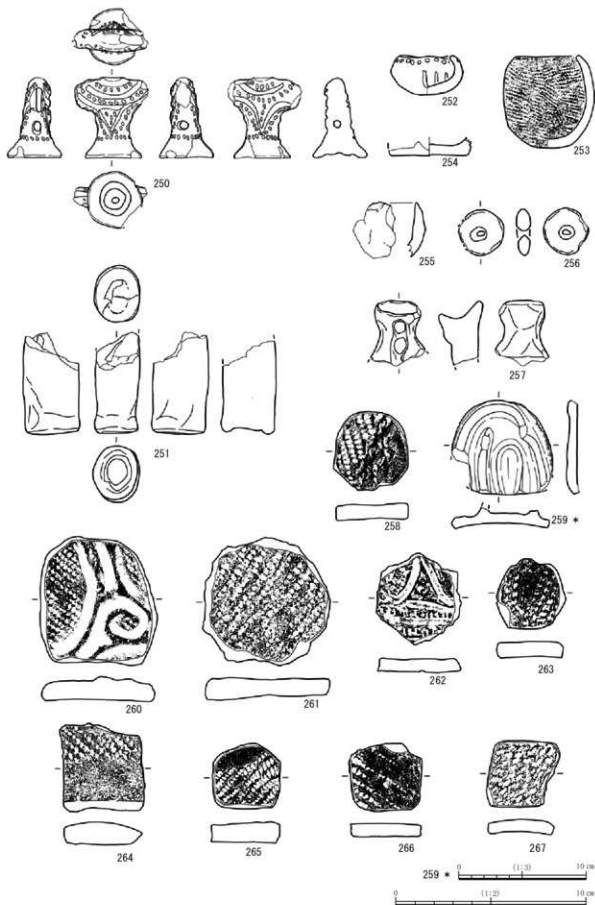


第74図 土器(26)

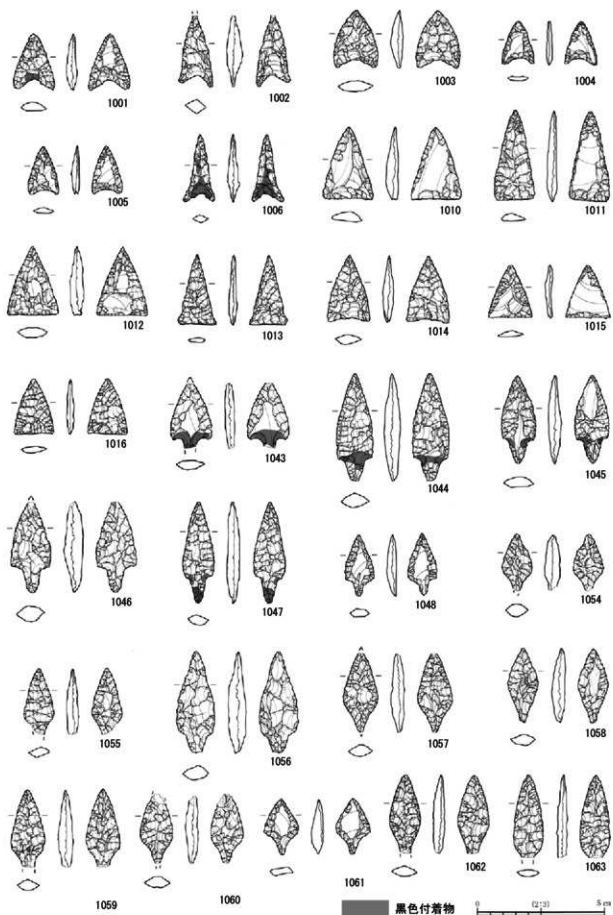
D6区遺構外



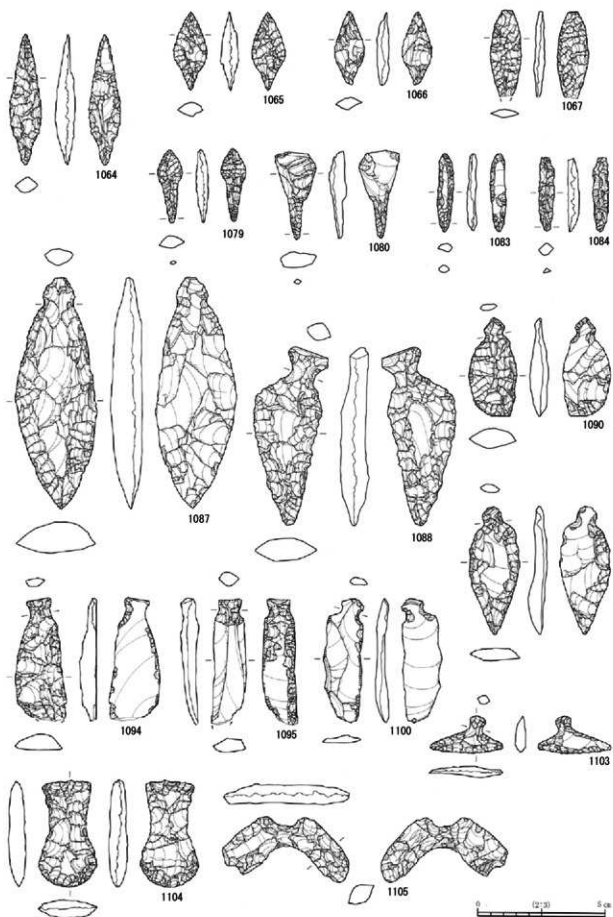
第75図 土器(27)



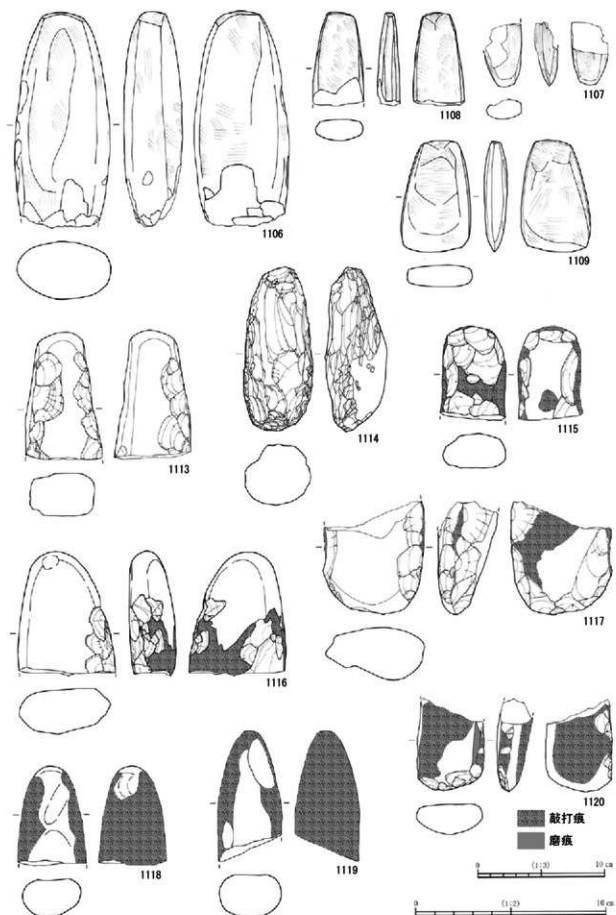
第76図 土製品



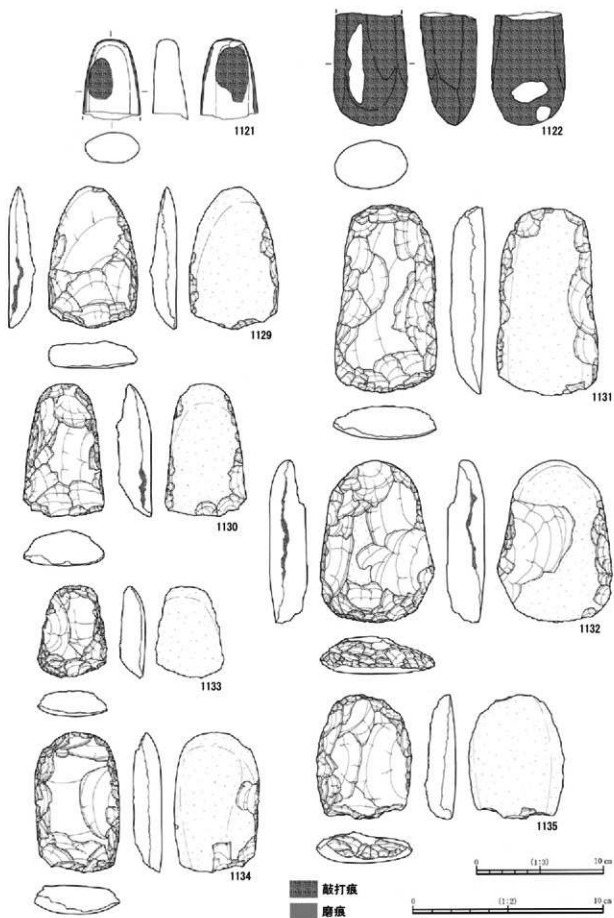
第77図 石器・石製品(1)



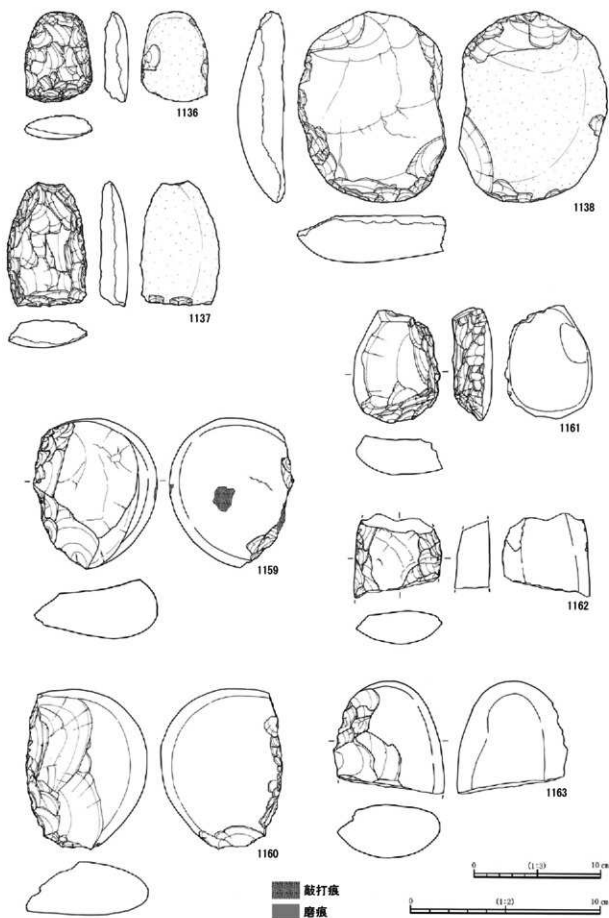
第78図 石器・石製品(2)



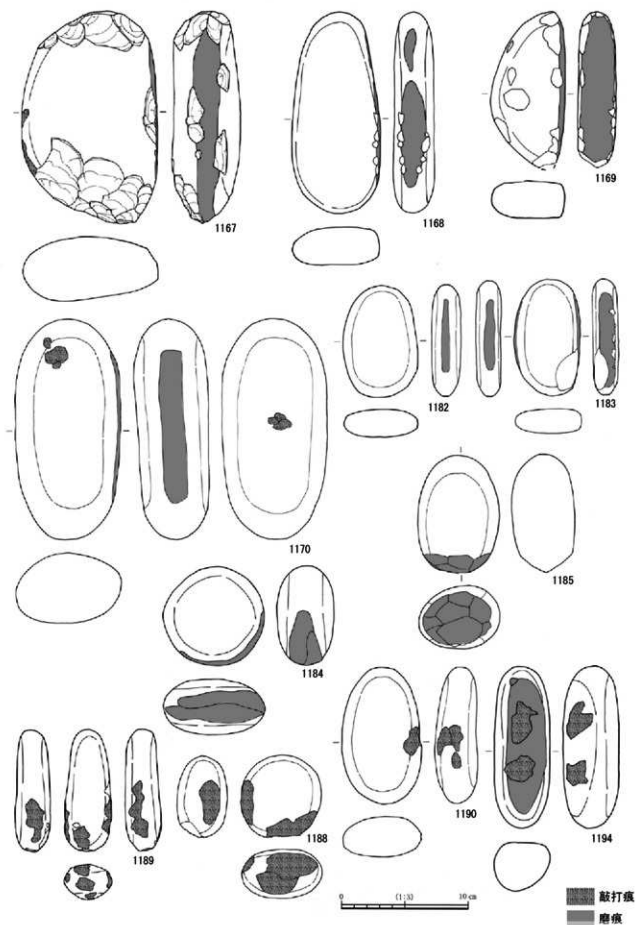
第79図 石器・石製品(3)



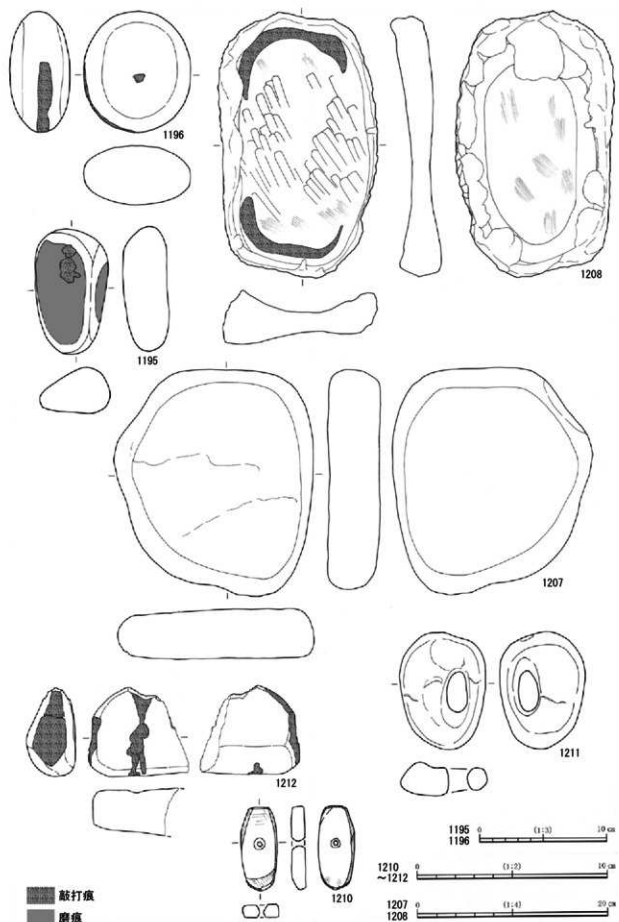
第80図 石器・石製品(4)



第81図 石器・石製品(5)



第82図 石器・石製品(6)



第83図 石器・石製品(7)

V 総 括

既往調査の成果にみられた本遺跡内の高密度ぶりは、今次調査地点においても改めて確認された。遺構は連鎖的かつ重層的に分布し、むしろ空白部の方が限定的だったといえる。遺跡内の堆積層が、時間が下るにつれて遺構埋土へと置き換わっていった結果と考えられる。

この濃密な分布状況において、個々の遺構のプランを識別し、重複遺構との先後関係まで把握しようとする作業は容易ではなかった。濃くかつ狭いという条件下にあって何らかのメリットを見出すようにするならば、それは遺跡内の堆積層を連続的に観察・検討できる一点に限られると良かつた。土層断面には、縄文時代前期から中期末葉に至るまでの遺構が、密に重なり合って確認された。幅の狭い調査区底面を挟んで向かい合う断面の堆積層を対比させながら、遺構を一つずつ分解する作業を進めた。

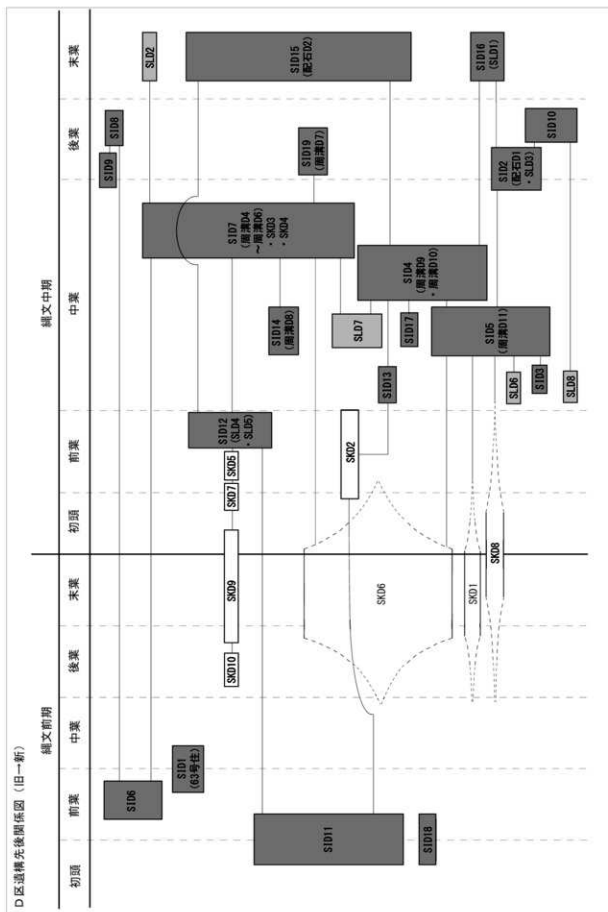
掘削深度の制約が大きかったA・C区では、今回掘削が及んだ面のさらに下位に、遺構・遺物を包含する堆積層が存在することを確認したにとどまった。またB区も後世の攪乱により残存状態が良好でなかったことから、十分な情報を得られなかった。

一方、唯一完掘できたD区においては、個々の遺構の構造と相互の先後関係等、同地点における変遷を一定程度復元することができた。D区の断面で把握された直接的な切り合い関係に、出土遺物の年代観と年代測定値が示す帰属時期を反映させ、先後関係を整理したのが第83～85図である。まず縄文時代前期前葉を前後する時期に位置づけられる住居跡が分布する段階を経て、前期後葉～中期前葉にかけてはフラスコ形土坑が設けられる場へと移行し、その後再び、中期末葉に至るまでの間は居住施設である竪穴住居が集中する地点となったことが把握された。

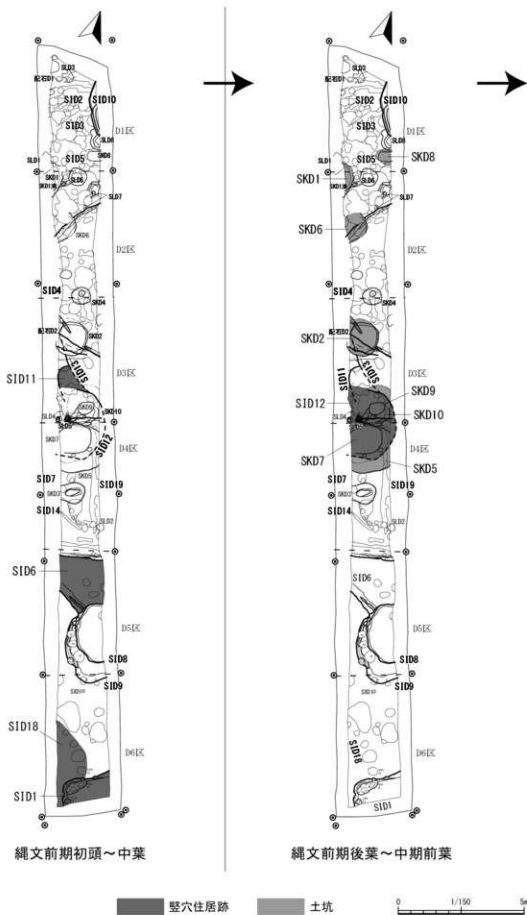
今次調査区と既往調査区の遺構分布を対比してみよう。D区は、北端が平成26年度北側調査区の南東隅、南端が同南側調査区の北東部に接している。報告書に示された北側調査区の遺構の変遷を見ると、前期前葉及び中期中葉～末葉の時期に、住居の集中が認められる(岩手埋文2019:第271・272図)。この傾向は今次調査区における分布状況とよく整合する。また南側調査区では今次調査区に接する北東部付近に住居跡の集中が認められる。この変遷を見てみると、前期初頭及び前葉の住居が設けられた後は、中期中葉まで住居が分布しない空間となるようだ(同:第273図)。今次調査区及び北側調査区と一致する傾向である。以上から今次調査区で把握した土地利用の変遷は、周辺空間においても同様の経過をたどったものと理解できる。

また上記の調査に先行して実施された平成13～15年度調査の遺構の変遷をみると、やはり前期中葉～中期前葉に相当する時期(岩手埋文2008:「力持IV～VII期」)に住居が希薄となる様子が認められる。この段階において顕著な増加がみられるのは土坑類で、緩斜面を階段状に区画する小さな崖状の段差、特に調査区西縁の小崖に沿って密な分布が認められる(同:I-第42図)。今次調査D区は、本書第29図断28 A-A'(D6区南壁断面)に見られるように、西壁側から東壁側に向かってやや急激に急に落ち込む段差に沿った位置にあり、上記の小崖の延長上に相当すると考えられる。よって該期において今次調査付近が土坑の分布域となったことも首肯されるのである。

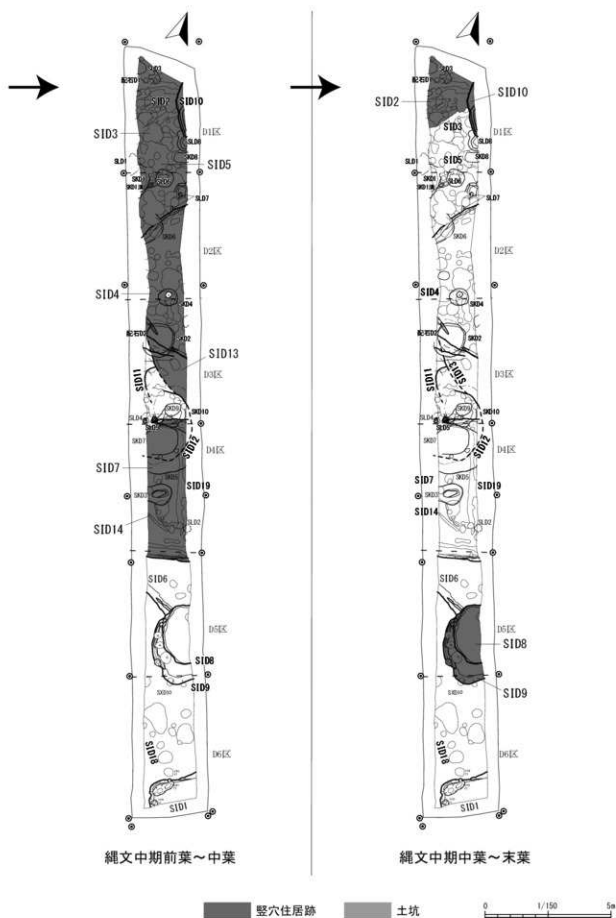
平成13～15年度調査区の遺構分布をさらに見ていくと、小崖沿いに土坑が展開する前期中葉～中期前葉期には、この小崖の下方に広がる緩斜面に住居が分布することが読み取れる(岩手埋文2008:I-第40図)。したがって今次調査区の土坑群を設けた集団の居住域は、調査区の東側を流れる刺畑沢に向かって延びる緩斜面に展開していたものと推測される。



第84図 力持遺跡 D区遺構先後関係図



第85図 D区遺構変遷図(1)



第86図 D区遺構変遷図(2)

以上、狭隘な調査区から得た限定的な情報から遺跡全体に言及しようとする無理を披露してきたが、本遺跡が今なお包蔵する膨大な情報の一端を明らかにできたものと考えたい。後続の調査が行われる機会があったなら、今回の調査成果がわずかな手掛かりとして活かされることを期待して、今次調査の報告を終える。

〈引用・参考文献〉

- 星 雅之・須原 拓 2004「岩手県内の発掘調査事例からみた十和田中掘テフラ」
『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』X X III
(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2008「力持遺跡発掘調査報告書」
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書第510集
(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2019「力持遺跡発掘調査報告書」
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書第694集

附編 自然科学分析

1 放射性炭素年代（AMS 測定）

（株）加速器分析研究所

1 測定対象試料

力持遺跡は、岩手県下閉伊郡普代村第 16 地割天拝坂地内に所在する。測定対象試料は、重複する遺構群（縄文時代前期～後期）を縦断するトレンチ断面から採取された木炭（細片のため木炭かどうか不確実な炭化物を含む）20 点である（表 1）。

2 測定の意義

遺構の帰属時期の推定、堆積過程の復元を行う。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 $1\text{mol}/\ell$ (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と表 1 に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO_2) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした ^{14}C -AMS 専用装置 (NEC 社製) を使用し、 ^{14}C の計数、 ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{14}C 濃度 ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$) の測定を行う。測定では、米国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (%) で表した値である (表 1)。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ^{14}C 年代 (Libby Age: yrBP) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2% であることを意味する。

- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差 ($1\sigma = 68.3\%$) あるいは 2 標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下 1 桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal20 較正曲線 (Reimer et al. 2020) を用い、OxCalv4.4 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定の較正曲線、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表 2 に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

6 測定結果

測定結果を表 1、2 に示す。

試料 20 点のうち、No.1 ~ 19 の ^{14}C 年代は、 $4730 \pm 30\text{yrBP}$ (試料 No.19) から $3940 \pm 30\text{yrBP}$ (試料 No.12) の間にある。暦年較正年代 (1σ) は、最も古い No.19 が $3626 \sim 3383\text{cal BC}$ の間に 5 つの範囲、最も新しい No.12 が $2473 \sim 2349\text{cal BC}$ の間に 2 つの範囲で示され、全体として縄文時代前期末葉から後期初頭頃に相当する (小林編 2008、小林 2017)。

それらより古い試料 No.20 の ^{14}C 年代は $6180 \pm 30\text{yrBP}$ 、暦年較正年代 (1σ) は $5207 \sim 5061\text{cal BC}$ の間に 3 つの範囲で示され、縄文時代早期末葉から前期初頭頃に相当する (小林編 2008、小林 2017)。

試料の炭素含有率は、多くが 50% 程度以上の適正な値であるが、細片のため土の混入、付着を避けられなかったことなどにより炭素含有率が若干低い 40% 台前半となった試料 (No.4、9、18、20) も認められる。後者については測定された炭素の由来に若干注意を要する。

文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51 (1) , 337-360
- 小林謙一 2017 縄文時代の実年代 一土器型式編年と炭素 14 年代一, 同成社
- 小林達雄編 2008 総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション
- Reimer, P.J. et al. 2020 The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP) , *Radiocarbon* 62 (4) , 725-757
- Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19 (3) , 355-363

表1 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-210996	No.1	SKD7 3層下部	木炭	AaA	-27.83 ± 0.18	4,640 ± 30	56.13 ± 0.20
IAAA-210997	No.2	SKD2 1層下部	木炭	AAA	-29.11 ± 0.21	4,570 ± 30	56.64 ± 0.21
IAAA-210998	No.3	C2区 1層下部	木炭	AAA	-28.95 ± 0.24	4,210 ± 30	59.20 ± 0.21
IAAA-210999	No.4	C1区 5層下面 (仰直上)	木炭	AaA	-27.46 ± 0.16	4,260 ± 30	58.82 ± 0.21
IAAA-211000	No.5	SLD7 1層下部	木炭	AaA	-26.24 ± 0.16	4,530 ± 30	56.91 ± 0.20
IAAA-211001	No.6	A2区 3層下部	木炭	AAA	-27.30 ± 0.18	4,120 ± 30	59.87 ± 0.21
IAAA-211002	No.7	A3区 6層下部~7層上部 (遺物集中間)	木炭	AAA	-25.41 ± 0.23	4,410 ± 30	57.77 ± 0.20
IAAA-211003	No.8	A1区 16層下部 (貝殻集中間)	木炭	AAA	-25.48 ± 0.17	4,470 ± 30	57.34 ± 0.21
IAAA-211004	No.9	SKD7 最下部 (底面直上)	木炭	AaA	-27.68 ± 0.19	4,700 ± 30	55.70 ± 0.21
IAAA-211005	No.10	SKD5 最下部	木炭	AAA	-26.42 ± 0.19	4,680 ± 30	55.81 ± 0.21
IAAA-211006	No.11	SID7 最下層 (D4区7層)	木炭	AAA	-25.72 ± 0.22	4,440 ± 30	57.56 ± 0.21
IAAA-211007	No.12	D3区 3b層下部	木炭	AAA	-27.06 ± 0.19	3,940 ± 30	61.26 ± 0.22
IAAA-211008	No.13	D3区 5層下部 (配石内)	木炭	AAA	-26.59 ± 0.17	3,990 ± 30	60.82 ± 0.22
IAAA-211009	No.14	SKD2 最下層 (底面直上)	木炭	AaA	-28.78 ± 0.17	4,560 ± 30	56.72 ± 0.21
IAAA-211010	No.15	SID4 床面直上層 (D2区9層)	木炭	AAA	-26.00 ± 0.17	4,550 ± 30	56.73 ± 0.21
IAAA-211011	No.16	D2区 16層下面	木炭	AaA	-25.02 ± 0.17	4,540 ± 30	56.83 ± 0.20
IAAA-211012	No.17	SID10 底面直上 (D1区東面8層下面)	木炭	AaA	-23.85 ± 0.21	4,160 ± 30	59.55 ± 0.19
IAAA-211013	No.18	SKD8 埋土中部 (D1区東面14層)	木炭	AAA	-24.04 ± 0.19	4,550 ± 30	56.74 ± 0.20
IAAA-211014	No.19	SID8 床面直上 (D5区東面5層下面)	木炭	AAA	-26.98 ± 0.19	4,730 ± 30	55.47 ± 0.20
IAAA-211015	No.20	SID6 埋土 (D5区東面8層)	木炭	AaA	-24.50 ± 0.17	6,180 ± 30	46.35 ± 0.18

[IAA 登録番号: #A920]

表2 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代) (1)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-210996	4,690 ± 30	55.81 ± 0.20	4,638 ± 28	3496calBC - 3439calBC (57.1%) 3378calBC - 3367calBC (11.2%)	3515calBC - 3423calBC (73.7%) 3413calBC - 3393calBC (4.9%) 3385calBC - 3360calBC (16.8%)
IAAA-210997	4,630 ± 30	56.17 ± 0.21	4,565 ± 29	3371calBC - 3332calBC (42.0%) 3216calBC - 3188calBC (18.1%) 3151calBC - 3133calBC (8.2%)	3490calBC - 3467calBC (4.1%) 3375calBC - 3317calBC (47.2%) 3239calBC - 3104calBC (44.2%)
IAAA-210998	4,280 ± 30	58.72 ± 0.21	4,211 ± 28	2890calBC - 2866calBC (25.6%) 2803calBC - 2766calBC (35.7%) 2717calBC - 2706calBC (7.0%)	2900calBC - 2847calBC (33.7%) 2811calBC - 2743calBC (45.9%) 2730calBC - 2693calBC (14.6%) 2687calBC - 2676calBC (1.2%)

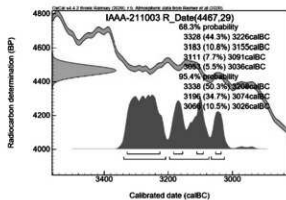
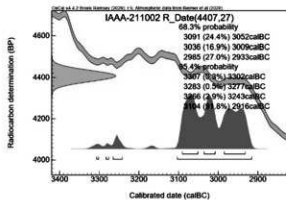
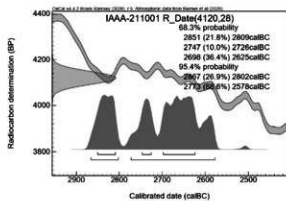
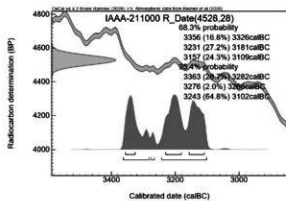
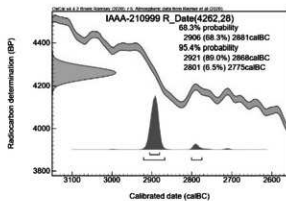
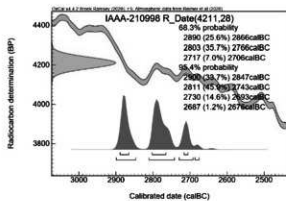
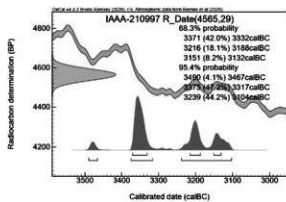
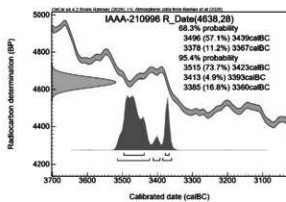
[IAA 登録番号: #A920]

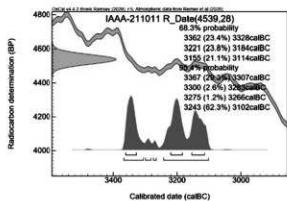
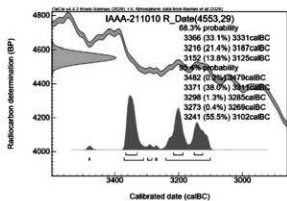
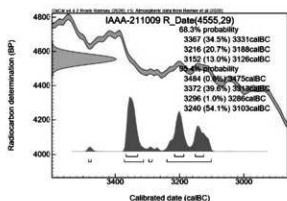
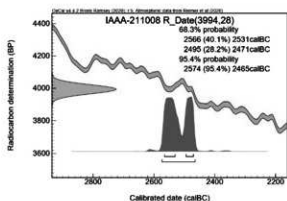
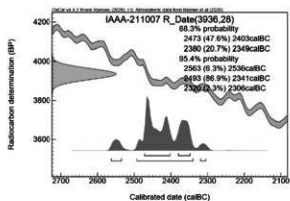
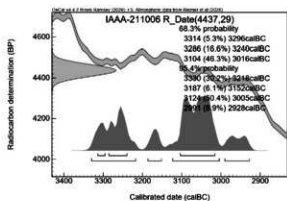
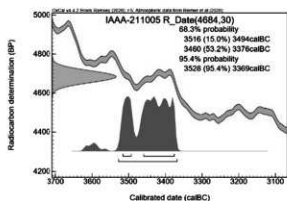
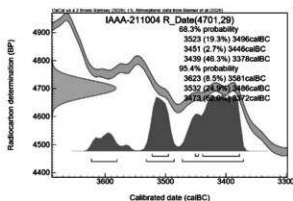
表2 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代) (2)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-21099	4300 \pm 30	58.53 \pm 0.21	4262 \pm 28	2906calBC - 2881calBC (68.3%)	2921calBC - 2868calBC (89.0%) 2801calBC - 2775calBC (6.5%)
IAAA-21100	4550 \pm 30	56.76 \pm 0.20	4528 \pm 28	3356calBC - 3326calBC (16.8%) 3231calBC - 3181calBC (27.2%) 3157calBC - 3109calBC (24.3%)	3363calBC - 3282calBC (28.7%) 3276calBC - 3266calBC (2.0%) 3243calBC - 3102calBC (64.8%)
IAAA-21101	4160 \pm 30	59.59 \pm 0.21	4120 \pm 28	2851calBC - 2809calBC (21.8%) 2747calBC - 2726calBC (10.0%) 2698calBC - 2625calBC (36.4%)	2867calBC - 2802calBC (26.9%) 2773calBC - 2578calBC (68.6%)
IAAA-21102	4410 \pm 30	57.72 \pm 0.20	4407 \pm 27	3091calBC - 3052calBC (24.4%) 3036calBC - 3009calBC (16.9%) 2985calBC - 2933calBC (27.0%)	3007calBC - 3302calBC (0.3%) 3283calBC - 3277calBC (0.5%) 3266calBC - 3243calBC (2.9%) 3104calBC - 2916calBC (91.8%)
IAAA-21103	4480 \pm 30	57.28 \pm 0.21	4467 \pm 29	3328calBC - 3226calBC (44.3%) 3183calBC - 3155calBC (10.8%) 3111calBC - 3091calBC (7.7%) 3053calBC - 3036calBC (5.5%)	3338calBC - 3208calBC (50.3%) 3196calBC - 3074calBC (34.7%) 3066calBC - 3026calBC (10.5%)
IAAA-21104	4750 \pm 30	55.39 \pm 0.20	4701 \pm 29	3523calBC - 3496calBC (19.3%) 3451calBC - 3446calBC (2.7%) 3439calBC - 3378calBC (46.3%)	3623calBC - 3581calBC (8.5%) 3532calBC - 3486calBC (24.9%) 3473calBC - 3372calBC (62.0%)
IAAA-21105	4710 \pm 30	55.65 \pm 0.21	4684 \pm 30	3516calBC - 3494calBC (15.0%) 3460calBC - 3376calBC (53.2%)	3528calBC - 3369calBC (95.4%)
IAAA-21106	4450 \pm 30	57.47 \pm 0.21	4437 \pm 29	3314calBC - 3296calBC (5.3%) 3286calBC - 3240calBC (16.6%) 3104calBC - 3016calBC (46.3%)	3330calBC - 3218calBC (30.2%) 3187calBC - 3152calBC (6.1%) 3124calBC - 3005calBC (50.4%) 2991calBC - 2928calBC (8.9%)
IAAA-21107	3970 \pm 30	61.00 \pm 0.22	3936 \pm 28	2473calBC - 2403calBC (47.6%) 2380calBC - 2349calBC (20.7%)	2563calBC - 2536calBC (6.3%) 2493calBC - 2341calBC (86.9%) 2320calBC - 2306calBC (2.3%)
IAAA-21108	4020 \pm 30	60.62 \pm 0.22	3994 \pm 28	2566calBC - 2531calBC (40.1%) 2495calBC - 2471calBC (28.2%)	2574calBC - 2465calBC (95.4%)
IAAA-21109	4620 \pm 30	56.28 \pm 0.21	4555 \pm 29	3367calBC - 3331calBC (34.5%) 3216calBC - 3188calBC (20.7%) 3152calBC - 3126calBC (13.0%)	3484calBC - 3475calBC (0.8%) 3372calBC - 3313calBC (39.6%) 3296calBC - 3286calBC (1.0%) 3240calBC - 3103calBC (54.1%)

表2 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代) (3)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-211010	4570 \pm 30	56.61 \pm 0.21	4553 \pm 29	3366calBC - 3331calBC (33.1%) 3216calBC - 3187calBC (21.4%) 3153calBC - 3125calBC (13.8%)	3482calBC - 3479calBC (0.2%) 3371calBC - 3311calBC (38.0%) 3298calBC - 3285calBC (1.3%) 3273calBC - 3209calBC (0.4%) 3241calBC - 3102calBC (55.5%)
IAAA-211011	4540 \pm 30	56.83 \pm 0.20	4539 \pm 28	3362calBC - 3328calBC (23.4%) 3221calBC - 3184calBC (23.8%) 3155calBC - 3114calBC (21.1%)	3367calBC - 3307calBC (29.3%) 3300calBC - 3283calBC (2.6%) 3275calBC - 3266calBC (1.2%) 3243calBC - 3102calBC (62.3%)
IAAA-211012	4150 \pm 30	59.69 \pm 0.18	4164 \pm 25	2873calBC - 2847calBC (14.0%) 2812calBC - 2796calBC (8.0%) 2785calBC - 2743calBC (22.9%) 2730calBC - 2693calBC (19.6%) 2686calBC - 2677calBC (3.8%)	2880calBC - 2832calBC (19.8%) 2822calBC - 2663calBC (72.2%) 2651calBC - 2632calBC (3.5%)
IAAA-211013	4540 \pm 30	56.85 \pm 0.20	4551 \pm 28	3366calBC - 3331calBC (32.3%) 3216calBC - 3187calBC (21.7%) 3153calBC - 3125calBC (14.2%)	3371calBC - 3311calBC (37.3%) 3298calBC - 3285calBC (1.3%) 3273calBC - 3209calBC (0.4%) 3241calBC - 3103calBC (56.4%)





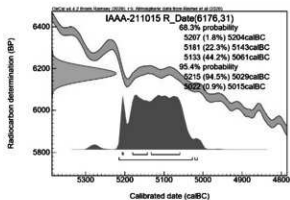
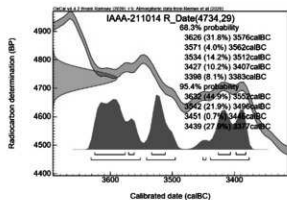
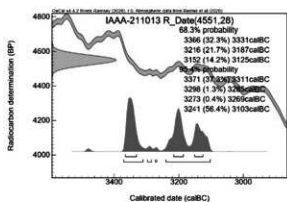
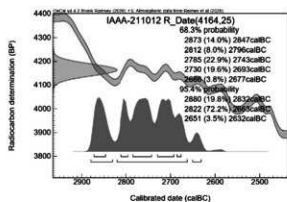


図1 暦年較正年代グラフ (参考)

2 火山灰分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

普代村に所在する力持遺跡は、北上山地北東部内に形成された狭小な沖積低地上に位置する。周辺の北上山地には、中期更新世に形成された緩やかな起伏を持つ海成段丘が分布しており（小池ほか編 2005）、段丘の周囲には開析された丘陵地が広がる。力持遺跡の位置する低地は、こうした丘陵地内を流れる河川である力持川により形成された扇状地性の緩斜面に相当する。

力持遺跡では、これまでの発掘調査により、縄文時代の各時期におよぶ遺構・遺物が確認されているが、調査区内の土層中には、火山灰（テフラ）とされる堆積物の混入が報告されている。本報告では、土層中に認められたテフラとされる堆積物の特性を明らかにし、その給源火山や噴出年代を特定することにより、遺構・遺物の年代に関わる資料を作成する。

1. 試料

試料は、近接・重複する遺構群を縦断するトレンチの土層断面より採取されており、試料の採取された土層のほとんどは遺構埋土とされている。遺構埋土の厚さは、概ね 150cm 前後とされている。発掘調査所見によれば、テフラとされる堆積物は、縄文時代前期相当のものと縄文時代中期後葉～後期前葉相当のもの2種類あると考えられている。

採取された試料は5点であり、No.1～No.5 までの試料名が付されている。各試料の採取位置および所見などを一覧にして表1に示す。

表1 試料一覧

試料	調査区	地点・遺構	層位	地表からの深度	予想される時代時期
No.1	C区	C1区	2層下部	50cm	縄文時代中期～後期
No.2	A区	A2区	14層	90cm	縄文時代(不詳)
No.3	D区	SKD7	埋土下部	270cm	縄文時代前期～中期
No.4	D区	D3区	3b層上部	50cm	縄文時代中期～後期
No.5	D区	D6区	2層	40cm	縄文時代中期～後期

2. 分析方法

(1) テフラの検出同定

試料約 20 g を蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

(2) 重鉱物・火山ガラス比分析・屈折率測定

試料約 40g に水を加え、超音波洗浄装置を用いて粒子を分散し、250 メッシュの分析篩上にて水洗して粒径が 1/16mm より小さい粒子を除去する。乾燥させた後、篩別して、得られた粒径 1/4mm/1/8mm の砂分を、ポリタングステン酸ナトリウム（比重約 2.96 に調整）により重液分離し、得られた重鉱物を偏光顕微鏡下にて 250 粒に達するまで同定する。同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒は「その他」とする。

火山ガラス比分析は、重液分離により得られた軽鉱物中の火山ガラスとそれ以外の粒子を、偏光顕微鏡下にて 250 粒に達するまで計数し、火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは、その形態によりバブル型、中間型、軽石型の 3 つの型に分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状あるいは泡のつぎ目をなす部分である Y 字状の高まりを持つもの、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの、軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

さらに火山ガラスおよび斜方輝石については、その屈折率を測定することにより、テフラを特定するための指標とする。屈折率の測定は、古澤（1996）の MAIOT を使用した温度変化法を用いた。

3. 結果

(1) テフラの検出同定

結果を表 2 に示す。以下に試料ごとに述べる。

No.1 多量の軽石と少量の火山ガラスを含む。軽石は、最大径約 1.7mm、白色で発泡良好なものと白色で発泡やや良好なものが混在する。火山ガラスは、無色透明の軽石型である。

No.2 少量の軽石と多量の火山ガラスを含む。軽石は、最大径約 0.7mm、色調や発泡度などは No.1 と同様である。火山ガラスは、無色透明の軽石型であるが、その多くは発泡が細かく、細粒の軽石と呼ぶべき碎屑物である。

No.3 中量の軽石と少量の火山ガラスおよび微量のスコリアを含む。軽石は、最大径約 1.9mm、色調や発泡度などは No.1 と同様である。火山ガラスは、無色透明の軽石型であるスコリアは、最大径約 1.7mm、褐色で発泡やや不良なものと黒色で発泡不良および赤色で発泡不良のスコリアが混在する。

No.4 中量の火山ガラスを含む。火山ガラスのほとんどは無色透明のバブル型であり、微量の無色透明の軽石型も含まれる。

No.5 多量の軽石と少量の火山ガラスを含む。軽石は、最大径約 1.7mm、白色で発泡良好なものと白色で発泡やや良好なものが混在する。火山ガラスは、無色透明の軽石型である。

(2) 重鉱物・火山ガラス比分析・屈折率測定

結果を表 3、図 1 に示す。重鉱物組成は、No.4 を除く 4 点の試料でほぼ同様の傾向を示す。いずれも斜方輝石が最も多く、50～60% 程度を占め、次いで不透明鉱物が多く、20～30% 程度、単斜輝石が 10～20% 程度含まれる。No.4 は、斜方輝石と不透明鉱物が 30% 程度で主体を占め、少量の単斜輝石を伴う組成であり、極めて微量ではあるが角閃石と緑輝石も含まれる。また、「その他」とした風化変質粒も 20% 程度含まれる。

表2 テフラ分析結果

試料	スコリア			火山ガラス		軽石		
	量	色調・発泡度	最大粒径	量	色調・形態	量	色調・発泡度	最大粒径
No.1	—			++	cl・pm	++++	W・g,W・sg	1.7
No.2	—			++++	cl・pm	++	W・g,W・sg	0.7
No.3	+	Br・sb,B・b,R・b	1.7	++	cl・pm	+++	W・g,W・sg	1.9
No.4	—			+++	cl・bw>>cl・pm	—		
No.5	—			++	cl・pm	++++	W・g,W・sg	1.7

凡例 一:含まれない。(+)きわめて微量。+:微量。++:少量。+++:中量。++++:多量。

Br:褐色。B:黒色。R:赤色。W:白色。

g:良好。sg:やや良好。sb:やや不良。b:不良。最大粒径はmm。

cl:無色透明。bw:バブル型。pm:軽石型。

表3 重鉱物・火山ガラス比分析結果

試料	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	緑閃石	ジルコン	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
No.1	0	121	42	1	0	0	0	83	3	250	4	1	38	207	250
No.2	0	145	50	0	0	0	0	54	1	250	5	0	109	136	250
No.3	0	135	34	0	0	0	0	81	0	250	2	1	36	211	250
No.4	0	88	33	3	0	4	0	73	49	250	117	0	2	131	250
No.5	0	119	55	0	0	0	0	66	10	250	1	0	122	127	250

火山ガラス比では、No.2とNo.5に多量の軽石型が含まれ、No.1とNo.3には少量の軽石型が含まれる。No.4の火山ガラス比では、篩別した1/4-1/8mmの砂分には火山ガラスは極めて微量であったが、1/16-1/8mmの砂分には多量のバブル型が認められたため、No.4の火山ガラス比のみ、同粒径の計数結果を示してある。

火山ガラスの屈折率測定結果は図2、斜方輝石の屈折率測定結果は図3に示す。火山ガラスの屈折率は、No.4を除く4点の試料において、概ね類似した傾向を示す。すなわち、レンジの下限はn1.510またはn1.511であり、レンジの上限はn1.516またはn1.517であり、n1.513～1.516に多く集まる。一方、No.4は、レンジの幅がn1.495-1.513であり、上述の4点に比べて低い値の方に広がっており、また多く集まる範囲も不明瞭である。

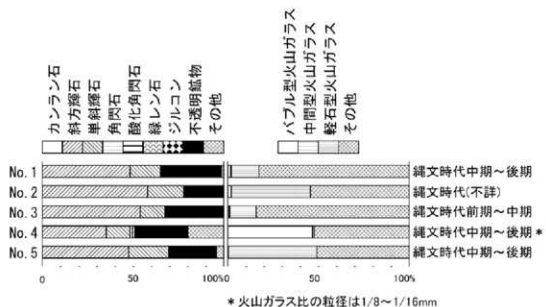


図1 重鉱物組成および火山ガラス比

斜方輝石の屈折率は、No.1とNo.2がほぼ同様の値を示し、No.5もそれに近い傾向を示す。すなわち、レンジの下限は γ 1.707、上限は γ 1.711または1.712、 γ 1.708~1.709に集中する。No.5は、レンジの下限が γ 1.703であり、上述の2点に比べてやや低いが、上限は γ 1.711であり、 γ 1.709~1.710に集中する。No.3の斜方輝石の屈折率は、レンジの上限は γ 1.711と上述の3点の試料とほぼ同様であるが、レンジの下限が γ 1.697と有意に低く、また、 γ 1.703~1.704と γ 1.707~1.708の2つの範囲に多い傾向が窺える。No.4の斜方輝石の屈折率は、 γ 1.703-1.716と γ 1.724-1.730の2つのレンジに分かれている。

4. 考察

力持遺跡は、十和田カルデラからおよそ南東方向へ80kmほどの位置にあることから、例えば町田・新井(2003)によるテフラの分布図などを参照すれば、十和田カルデラを給源とするテフラの降下堆積物の分布している範囲内にある。今回の分析では、5点の試料ともにその重鉱物組成は斜方輝石と単斜輝石の両輝石を主体とする組成であることも考慮すれば、検出された軽石や火山ガラスおよびスコリアは、いずれも十和田カルデラを給源とするテフラに由来する可能性が高いと考えられる。

5点の試料のうち、No.1、No.2、No.5の軽石と火山ガラスは、その屈折率の値と共伴する斜方輝石の屈折率の値とから、十和田中堰テフラ(To-Cu; 早川,1983;Hayakawa,1985)に由来すると考えられる。To-Cuの噴出年代は、暦年で約6200年前とされている(工藤・佐々木,2007)。

No.3も軽石と火山ガラスからなるテフラを主体とするが、微量のスコリアも混在する。この微量のスコリアは、共伴する斜方輝石の中に γ 1.700を下回る低い屈折率のものも含まれることから、十和田二の倉テフラ群(To-Nk; 町田・新井,2003)に由来すると考えられる。To-Nkの噴出年代は暦年で1.0~1.3万年頃とされている(町田・新井,2003)。スコリアがTo-Nkに由来するとすれば、それと混在する可能性のある十和田カルデラのテフラは、暦年で約9,200年前(工藤,2008)に噴出したとされている十和田南部テフラ(To-Nb)であると考えられる。No.3に多く含まれる軽石と火山ガラスは、その屈折率からはNo.1、No.2、No.5のTo-Cuとの区別が難しいが、スコリアの混在を考

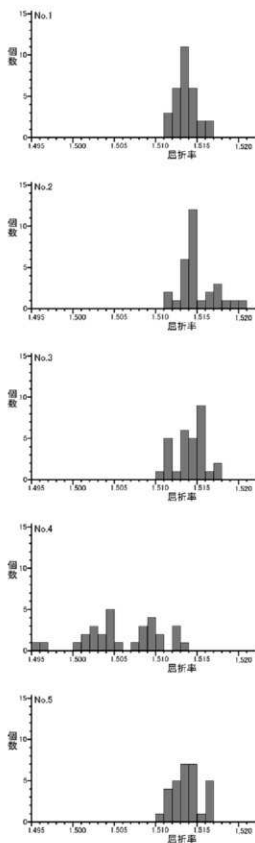


図2 火山ガラスの屈折率

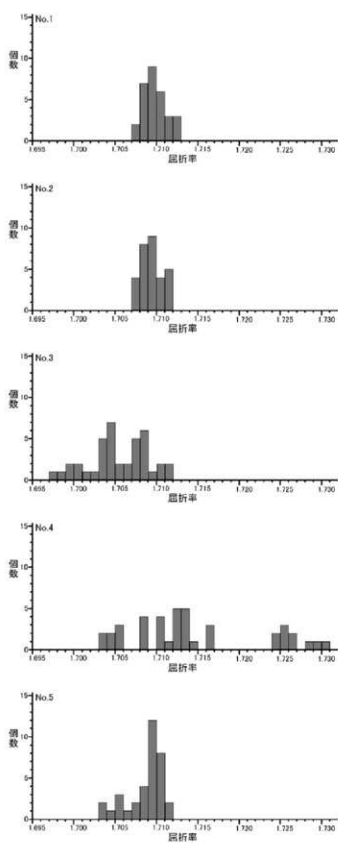


図3 斜方輝石の屈折率

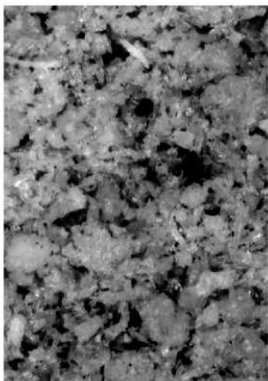
えれば、To-Nb に由来する可能性が高い。

No.4 のテフラは、バブル型火山ガラスを主体とする組成が特徴である。バブル型火山ガラスを含む十和田カルデラのテフラとしては、約 3.2 万年前以前に噴出した十和田大不動テフラ (To-Of:Hayakawa,1985;町田・新井,2003) または約 1.5 万年前に噴出した十和田八戸テフラ (To-H:Hayakawa,1985;町田・新井,2003) があげられる。両テフラの火山ガラスおよび斜方輝石の屈折率のレンジは重複する範囲が広く、両者が混在する場合は識別が難しい。No.4 の重鉱物組成において極めて微量ながらも角閃石が含まれることから、To-H に由来する可能性があるとも考えられる。ただし、ここで注目されるのは、No.4 の火山ガラスと斜方輝石のそれぞれの屈折率である。火山ガラスでは $n_{1.500}$ より低いものが混在し、斜方輝石では γ 1.725 を超える高いものが混在する。これらは、十和田カルデラ以外の火山を給源とする可能性が高いが、岩手県北部に分布する可能性のあるテフラの中で、このような特性を有するテフラとしては、4.0～4.5 万年前に北海道の支笏カルデラから噴出した支笏第 1 テフラ (Spf1:町田・新井,2003) などがあげられる。現時点では、No.4 の中に Spf1 由来の碎屑物が混在することは確かめられないが、いずれにしても No.4 は、To-H と To-Of および Spf1 など更新世後期に噴出した複数のテフラに由来する碎屑物が混在した土壌に由来すると考えられる。

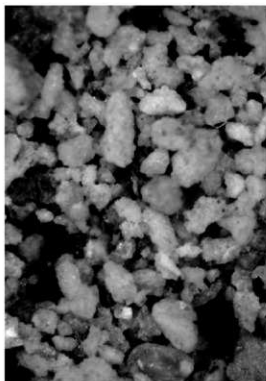
引用文献

- 古澤 明,1995,火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別,地質学雑誌,101,123-133.
早川由紀夫,1983,十和田火山中樞テフラ層の分布、粒度組成、年代,火山第 2 集,28,263-273.
Hayakawa,Y.,1985,Pyroclastic Geology of Towada Volcano, Bulletin of The Earthquake Research Institute University of Tokyo,vol.60,507-592.
小池一之・田村俊和・鎮西清高・宮城豊彦編,2005,日本の地形 3 東北,東京大学出版会,355p.
工藤 崇,2008,十和田火山エピソード E 及び G 噴出物の放射性炭素年代,火山,53,193-199.
工藤 崇・佐々木 寿,2007,十和田火山後カルデラ期噴出物の高精度噴火史編年,地学雑誌,116,653-663.
町田 洋・新井房夫,2003,新編 火山灰アトラス,東京大学出版会,336p.

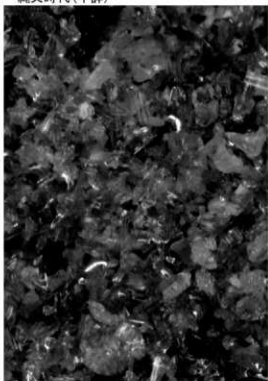
図版1 テフラ・砂分の状況



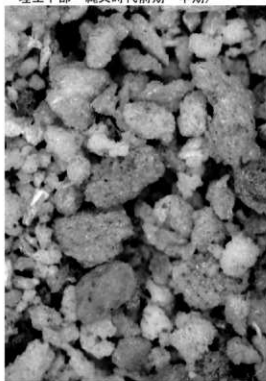
1. 軽石と火山ガラス (No. 2: A区 A2区 14層
縄文時代 (不詳))



2. 軽石と火山ガラス (No. 3: D区 SKD7
埋土下部 縄文時代前期～中期)



3. 砂分の状況 (No. 4: D区 D3区 3b層上部
縄文時代中期～後期)



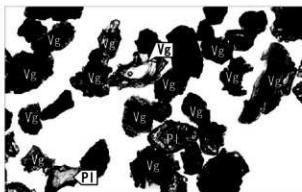
4. 軽石 (No. 5: D区 D6区 2層 縄文時代
中期～後期)



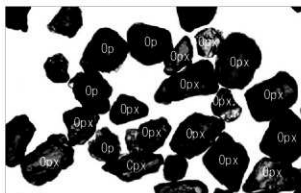
図版2 重鉱物・火山ガラス



1. 重鉱物 (No. 2: A2区 A2区 14層 縄文時代(不詳))



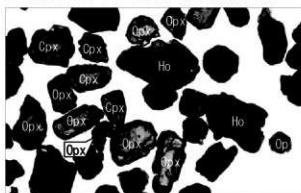
2. 火山ガラス (No. 2: A2区 A2区 14層 縄文時代(不詳))



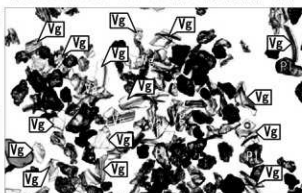
3. 重鉱物 (No. 3: D3区 SKD7 埋土下部 縄文時代前期~中期)



4. 火山ガラス (No. 3: D3区 SKD7 埋土下部 縄文時代前期~中期)



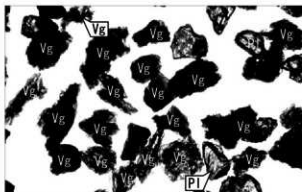
5. 重鉱物 (No. 4: D3区 D3区 3b層上部 縄文時代中期~後期)



6. 火山ガラス (No. 4: D3区 D3区 3b層上部 縄文時代中期~後期)



7. 重鉱物 (No. 5: D3区 D6区 2層 縄文時代中期~後期)



8. 火山ガラス (No. 5: D3区 D6区 2層 縄文時代中期~後期)

Opx: 斜方輝石, Cpx: 単斜輝石, Ho: 角閃石, Op: 不透明鉱物, Vg: 火山ガラス,
Oz: 石英, Pl: 斜長石.

0.5mm

写 真 图 版



調査区とその周辺(東から)



調査区とその周辺(東から)



A区全景(直上から)



B区全景(直上から)



C区全景(直上から)



D区全景(直上から)



D 6～D 5区全景(直上から)



D 5～D 4区全景(直上から)



D4～D3区全景(直上から)



D3～D2区全景(直上から)



D2～D1区全景(直上から)



調査区とその周辺(西から)



調査前現況(北から)



調査前現況(南から)



A区全景(南から)



A区断面(東から)



B区全景(南から)



B区断面(東から)



C区全景(北から)



C区断面(東から)

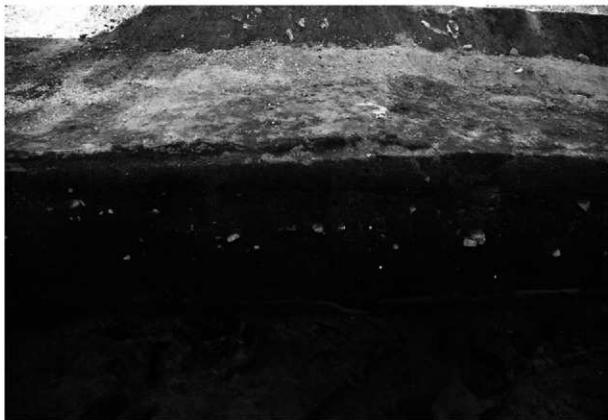


D区全景(北から)



D6区西壁断面<断13南側付近>(東から)

写真図版11 D区(西壁断面1)



D 6～D 5 区西壁断面<断13北側付近>(東から)



D 5～D 4 区西壁断面<断14南側付近>(東から)

写真図版12 D区(西壁断面2)



D4区西壁断面<断14中央付近>(東から)



D4～D3区西壁断面<断14北側付近>(東から)



D 2区西壁断面<断15付近>(東から)



D 2～D 1区西壁断面<断16付近>(東から)



D1～D2区東壁断面<断17付近>(西から)



D2～D3区東壁断面<断18付近>(西から)



D3~D4区東壁断面<断19付近>(西から)



D4区西壁断面<断20付近>(西から)

写真図版16 D区(東壁断面2)



D 5 区東壁断面<断22付近>(西から)



D 5～D 6 区東壁<断23付近>(西から)



D 1 区南壁断面<断24>(北から)



D 2 区南壁断面<断25>(北から)

写真図版18 D区(横断面1)



D4区中央ベルト北面・S1D7断面<断26>(北から)



D5区南壁断面<断27>(北から)



D6区南壁・SID1断面<断28>(北から)



D区作業風景(北から)



D区作業風景(北から)

写真図版20 D区(横断面3)



SIA1 全景(南から)



SLA1 平面(西から)



SIA1 遺物出土状況(東から)



SIC1 全景(東から)



S I D 1 全 景 (南 か ら)



S I D 1 全 景 (北 か ら)



S I D 2 全景(東から)



S I D 2 遺物出土状況(南から)



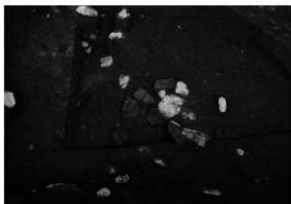
SID3・SID5 全景(東から)



SID3・SID5 作業風景(西から)



SID4・SID17 全景(西から)



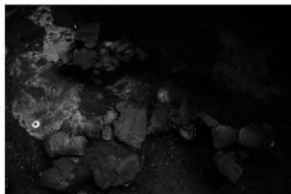
SID4 黄色土下位土器出土状況(東から)



SID4 埋土土器出土状況(北から)



SID4 床面土器出土状況(西から)



SID4 埋土土器出土状況(東から)



S I D 6 全景(東から)



S I D 6 断面(東から)



SID7 全景(東から)



SID7 断面(東から)



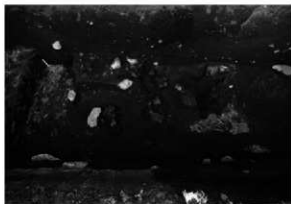
S I D 7 断面<断26>(北から)



S I D 7 作業風景(東から)



S I D 7 作業風景(南から)



S I D 7 遺物出土状況(東から)



S I D 7 遺物出土状況(北から)

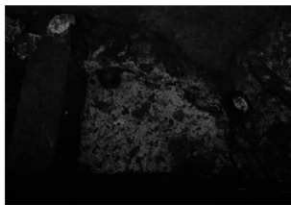
写真図版28 S I D 7 竪穴住居跡(2)



SID8・SID9 全景(東から)



SID8・SID9 断面<断22付近>(西から)



SID8 遺物出土状況(東から)



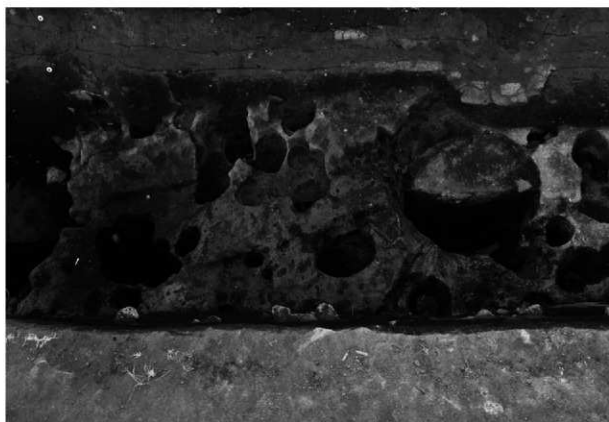
SID8 断面<断30>(北から)



SID9 断面<断27>(北から)



S I D 10 全景(西から)



S I D 11～S I D 13 全景(東から)



S I D 14 全景(東から)



S I D 18 全景(東から)



S I D 15(配石D 2) 全景(東から)



配石D 2 全景(西から)



配石D 2 断面(東から)



S I D 15(配石D 2)とその周辺(南東から)

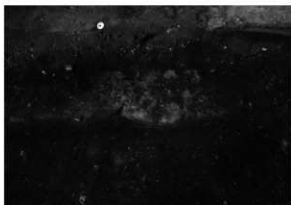


S I D 15(配石D 2)とその周辺(北東から)

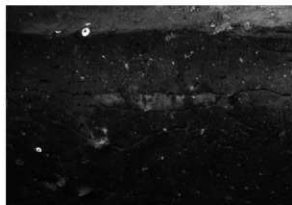
写真図版32 S I D 15竪穴住居跡(配石D 2)



S I D16 全景(東から)



S L D1 全景(東から)



S L D1 断面(東から)



D区 作業風景(南から)



D区 作業風景(北から)



S I D 19 全景(東から)



S I D 19 全景(西から)



S I D 19 断面<断26>(北から)



周溝D7 全景(北から)



周溝D7 断面(北から)



SLD2 全景(西から)



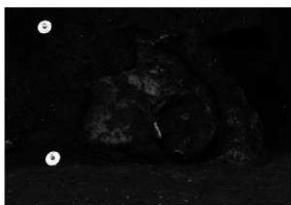
SLD2 断面(西から)



SLD3 全景(南から)



SLD3 断面(東から)



SLD4 全景(西から)



SLD4 断面(東から)



SLD4 断面(東から)



SLD4 土器内部噴出土状況(東から)



SLD5 断面(南から)



SLD5 土器内部確出土状況(南から)



SLD6 全景(南から)



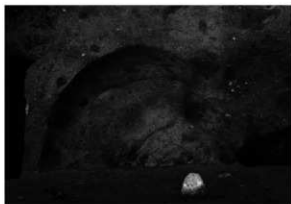
SLD6 断面(南から)



SLD7 全景(東から)



SLD7 断面(西から)



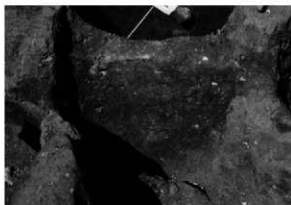
SLD8 全景(東から)



SLD8 断面(西から)



周溝D1～周溝D3とその周辺(東から)



周溝D1断面(東から)



周溝D3断面(東から)



D区作業風景(北から)



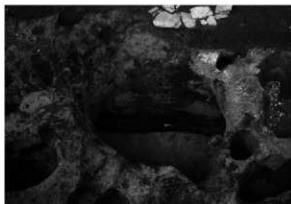
D区作業風景(北から)



SKD1 全景(西から)



SKD1 断面(東から)



SKD2 全景(東から)



SKD2 断面(東から)



SKD3 全景(北から)



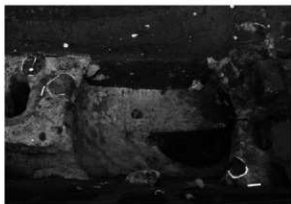
SKD3 断面(北から)



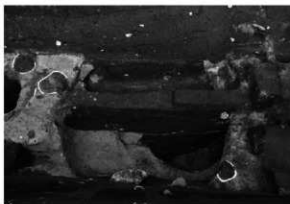
SKD4 全景(東から)



SKD4 断面(北から)



SKD5 全景(東から)



SKD5 断面(東から)



SKD5 火山灰出土状況(南から)



SKD6 全景・断面(東から)



SKD7 全景(東から)



SKD7 断面(東から)



SKD8 全景(東から)



SKD8 断面(西から)



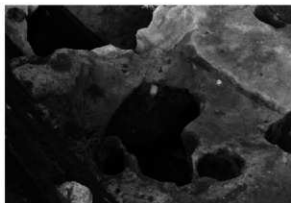
SKD9 全景(東から)



SKD9 断面(北から)



SKD9とその周辺(北から)



SKD10 全景(北から)



配石C1 全景(南から)



配石C1 全景(北から)



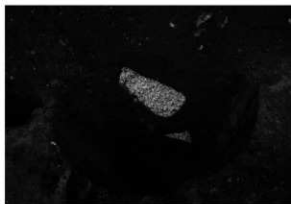
配石D1 全景(東から)



配石D1 全景(西から)



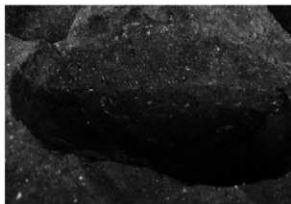
PPD1断面



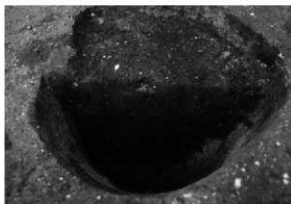
PPD2断面



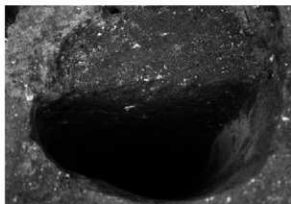
PPD4·PPD3断面



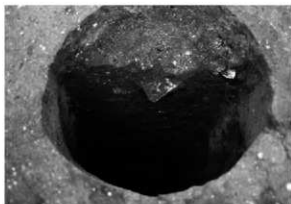
PPD5断面



PPD6断面



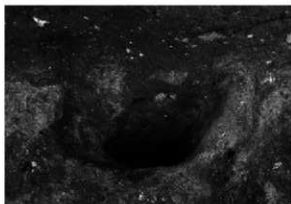
PPD8断面



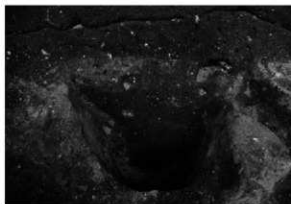
PPD13断面



PPD14断面



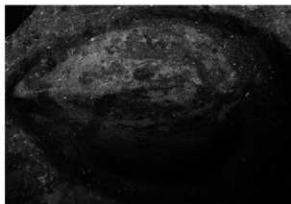
PPD18断面



PPD20断面



PPD21断面



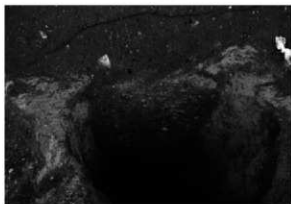
PPD22断面



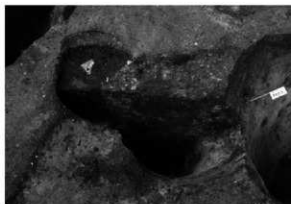
PPD24断面



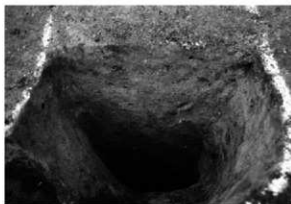
PPD28断面



PPD57断面



PPD63·PPD64断面



PPD70断面



PPD75断面



PPD77断面



PPD81断面



PPD91断面



PPD92断面



PPD99断面



PPD100断面



A 3区土器1 出土状況(東から)



A 3区土器1 作業風景



A 3区土器2 出土状況(東から)



A区作業風景(北から)



B区作業風景(東から)



B区作業風景(南から)



C 1区土器1 出土状況(東から)



C 3区土器1～4 出土状況(東から)



C 6区土器1 出土状況(東から)



C 6区土器1 作業風景(東から)



C区作業風景(南から)



C区作業風景(北から)



D 1区石製品出土状況(東から)



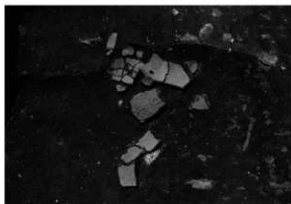
D 1区土器1 出土状況(東から)



D 2区土器1～4 出土状況(西から)



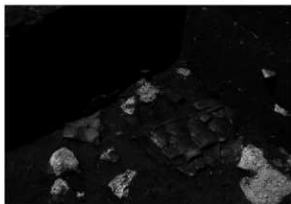
D 2区土器1～4 作業風景(東から)



D2区南壁6層下面土器出土状況(東から)



D3区土器1出土状況(東から)



D4区土器1出土状況(東から)



D4区土器1作業風景(北から)



D3区北土器1~4(S1D4)作業風景



SXD1 貯蔵剥片出土状況(北から)

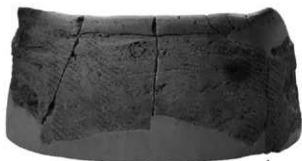


D区作業風景(北から)



D区作業風景(北から)

SIA1



1



2



3



4

SIC1



5



6

SID1



7

SID2



8

SID2

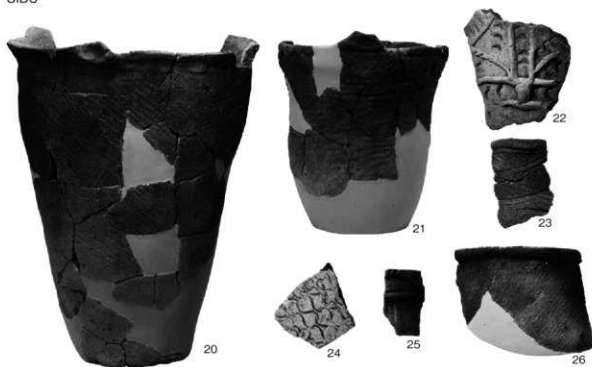


SID3



写真図版48 土器(2)

SID3



SID4



SID4



33



35



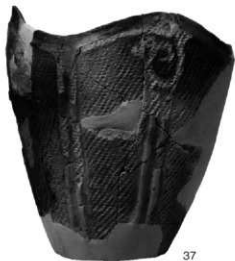
34



36



38



37



39



40

写真図版50 土器(4)

SID4



写真図版51 土器(5)

SID4



48



53



54



56



58



57



55



50



52



51

SID5



59



60



61

SID6



62



63



64

写真図版52 土器(6)

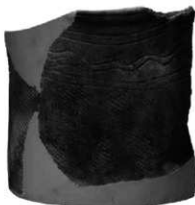
SID7



65



66



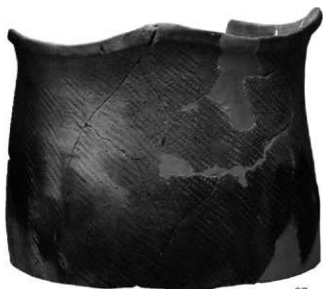
69



73



74



67



68



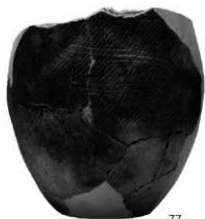
75



76



SID8



77



78



79

SID10



80



81

SID11・SID12



82



83



84



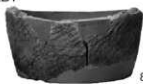
85

SID19



86

SLD7



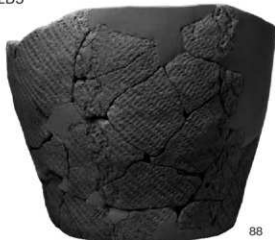
89

SLD4



87

SLD5



88

SKD1



90

SKD2



91



92



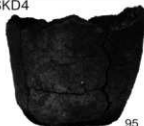
93

SKD3



94

SKD4



95

SKD5



96



97

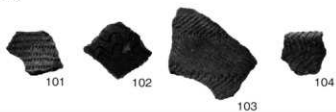


98

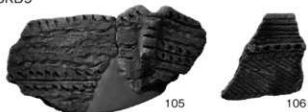
SKD7



SKD8



SKD9



PPD4



PPD58



PPD81



配石 D2



A2区遺構外



A3区遺構外



A3区遺構外



C1区遺構外



B2区遺構外



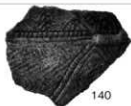
C3区遺構外



C3区遺構外



C4区遺構外



C4区遺構外



C5区遺構外



C6区遺構外



C区遺構外





160-a



160-b

D1 区遺構外



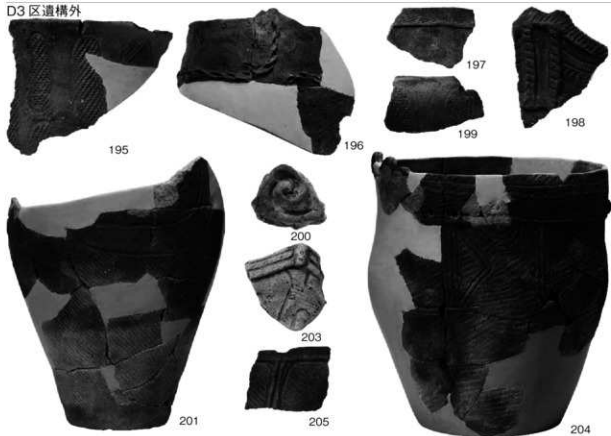
D2 区遺構外



D2 区遺構外

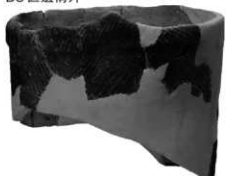


D3 区遺構外



写真図版62 土器(16)

D3区遺構外



202-a



202-b

D4区遺構外



206

207

208



209

210

211



214

213

215

212



216

217

219



218

220

D5区遺構外



221

222



223

224

D5 区遺構外



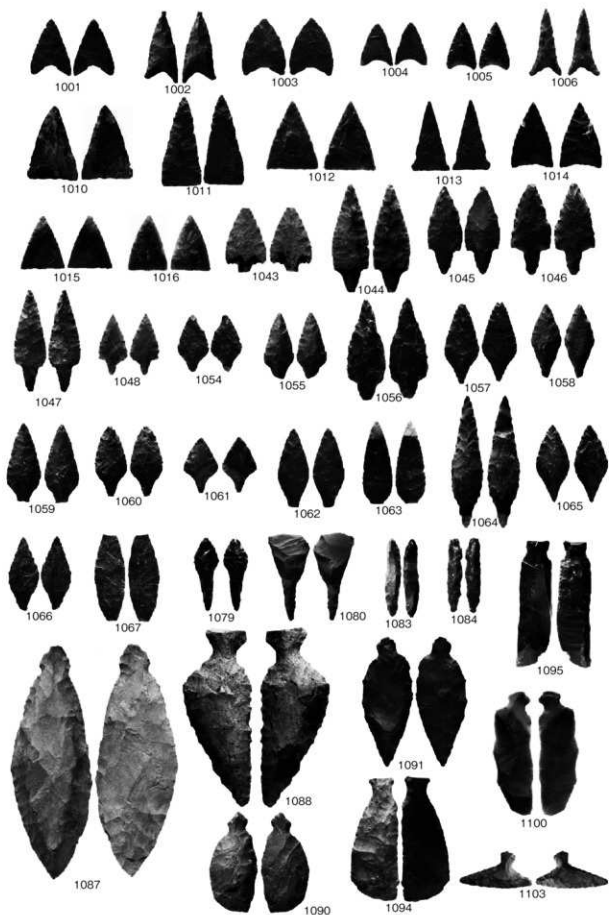
D6 区遺構外



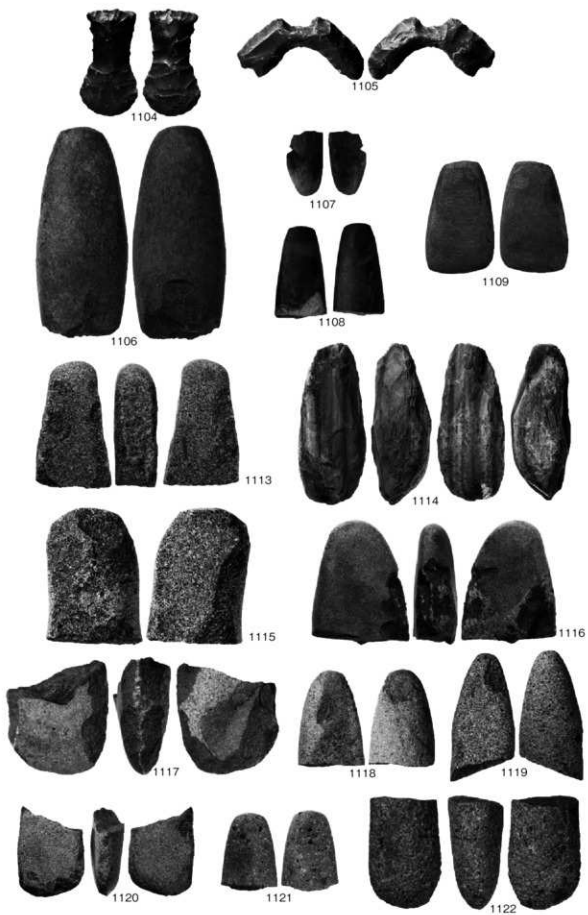
D6区遺構外



写真図版65 土器(19)・土製品



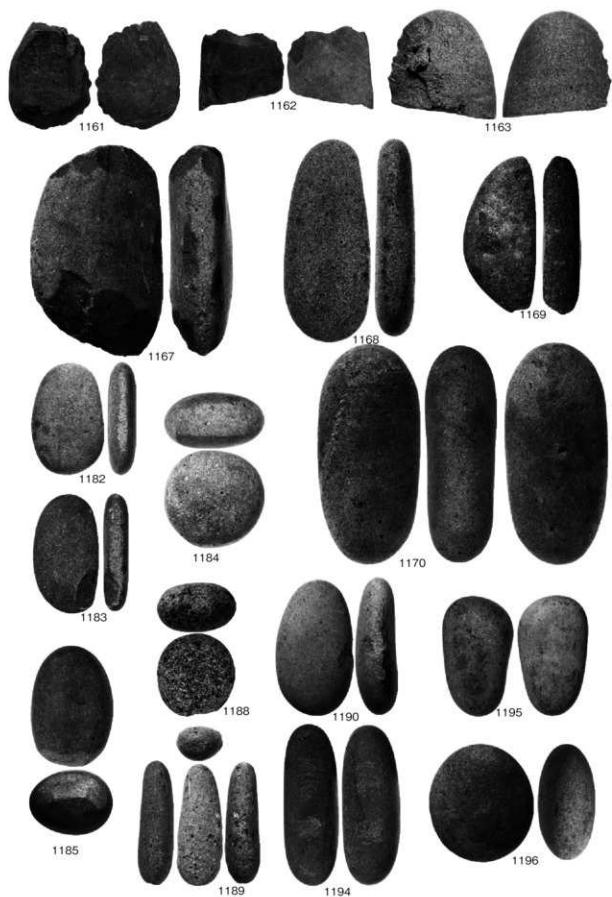
写真图版66 石器(1)



写真図版67 石器(2)



写真図版68 石器(3)



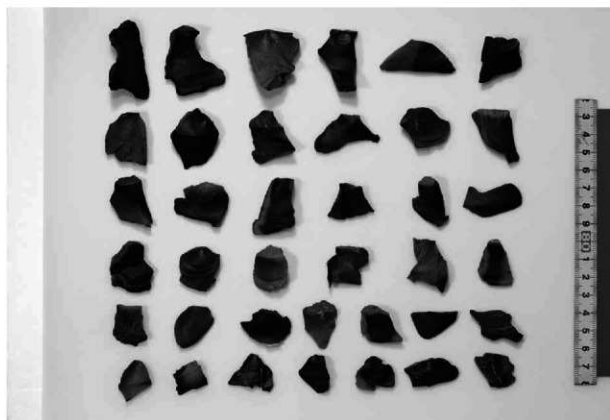
写真図版69 石器(4)



写真図版70 石器(5)・石製品



1216 SX01出土剥片(表面)



1216 SX01出土剥片(裏面)

報告書抄録

ふりがな	ちからもちいせきはつつちようざほうこくしょ							
書名	力持遺跡発掘調査報告書							
副書名	三陸沿岸道路(普代～久慈)建設事業関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第742集							
編著者名	村上拓・川又晋・高木晃							
編集機関	公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	2024年3月8日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所収遺跡	コード		北緯 ・・・	東経 ・・・	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
力持	岩手県下閉伊郡 普代村16地割字 天津坂地内	03485	JG92-0137	40度 01分 22秒	141度 52分 58秒	2021.04.06 ～ 2021.08.03	178㎡	三陸沿岸道路 (普代～久慈) 建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
力持	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡 21棟 土坑 10基 炉跡 9基 配石遺構 3基	土器(前期～後期)、 土偶、石鏃、石匙、 石鏝、石斧、石皿、 敲磨器類、異形石器、 有孔石製品ほか		岩手県沿岸北部の縄文時代 前期～後期の集落跡。三陸沿 岸道路建設事業に係る発掘調 査。遺密な遺構遺物を確認し た既往調査の隣接地点が対象。 極めて狭い調査区に複数の住 居跡と土坑が重層的に重複す る状況を確認した。		
要約	岩手県沿岸北部の縄文時代前期～後期の集落跡。三陸沿岸道路建設事業に係る発掘調査。遺密な遺構遺物が確認された平成26年度の既往調査区(第694集)に隣接する地点を調査。極めて狭い調査区に複数の住居跡と土坑が重層的に重複する状況を確認した。							

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第742集

力持遺跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路（普代～久慈）建設事業関連遺跡発掘調査

印刷 令和6年3月1日

発行 令和6年3月8日

編集 (公財) 岩手県文化振興事業団 埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185

電話 (019) 638-9001

発行 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所

〒027-0029 岩手県宮古市藤の川4番1号

電話 (0193) 62-1711

(公財) 岩手県文化振興事業団

〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号

電話 (019) 654-2235

印刷 (株) 吉田印刷

〒020-0016 岩手県盛岡市名須川町23番地27号

電話 (019) 625-2323
